SD 8502

FRANCE

特集＝フランス

ポスト・モダンのフランス建築

FRANCE: A New Generation of French Architects

パリを中心に高まりつつある建築・家具・インテリアデザインの新しい波.

●

論文:

アニック・エメリ, 松浦寿夫, 進来玄, 三宅理一

作品:

H. シリアニ, F. モンテス, J. ヌーヴェル, ケトフ&プティ, B. ボール, ガルースト&ボネッティ, キャナル, P. スタルク, 他

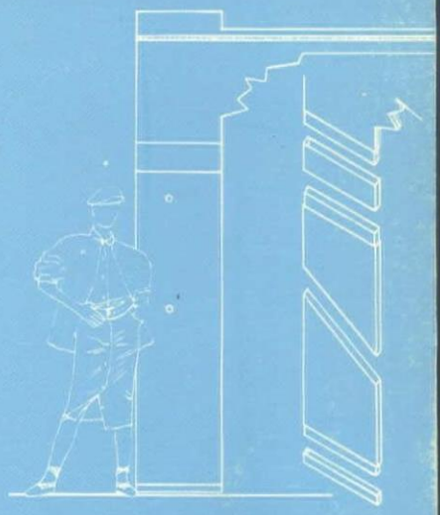
●

NICE SPACE:

カプリ島　長谷川正允

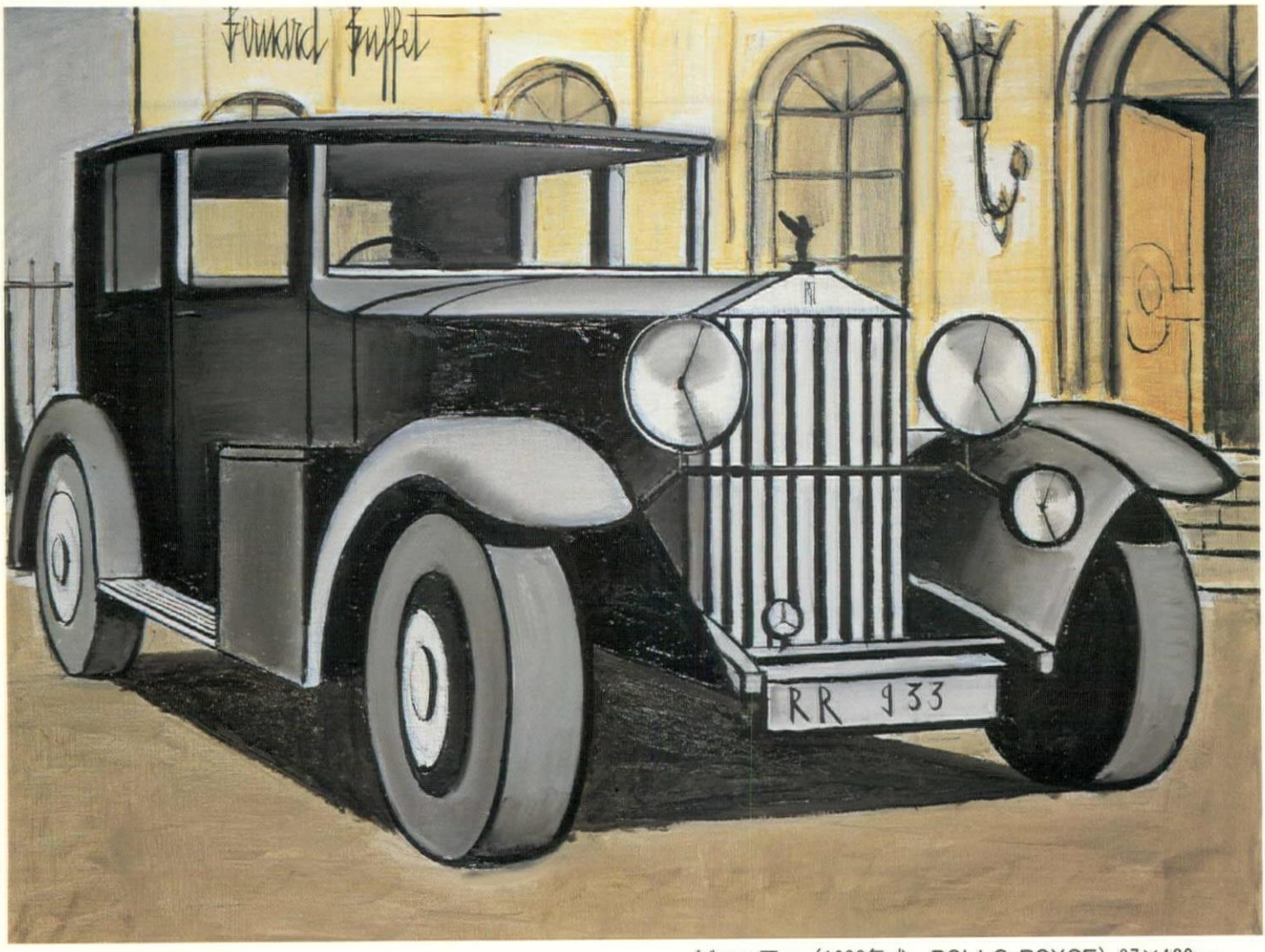
連載＝

フランク・ロイド・ライトの呪術の空間❻



スペースデザイン都市・建築・芸術の総合誌
第245号昭和60年2月1日発行毎月1回1日発行
昭和40年2月5日第3種郵便物認可
昭和59年10月9日国鉄首都特別扱承認雑誌第7825号





ビュッフェ（1933年式　ROLLS-ROYCE）97×130cm

galerie taménaga

日仏画壇の接点となる“ためなが グループ”

印象派，エコール・ド・パリの巨匠を中心に
現在活躍中の多数の作家を取扱っております。

契約作家：

アイズピリ Paul AIZPIRI	ビュッフェ Bernard BUFFET	バブレーヌ Eugene BABOULÈNE
コタボ André COTTAVOZ	フサロ Jean FUSARO	ギアマン Paul GUIRMAND
ロッド Michel RODDE	ワイズバッシュ Claude WEISBUCH	オギス Takanori OGUISS

ギャルリー　ためなが

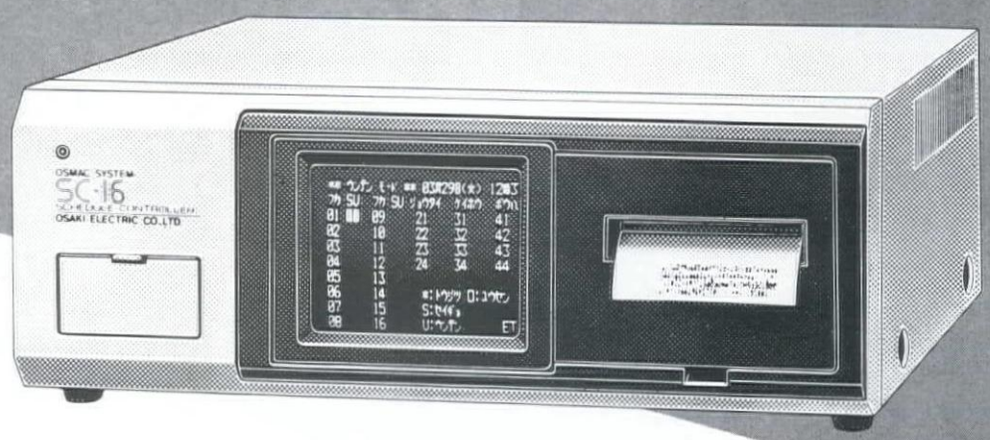
東京　東京都中央区銀座７－５－４　TEL：03-573-5368
大阪　大阪市東区道修町４－７　TEL：06-202-3434
パリ　18，Av. MATIGNON, 75008　PARIS, FRANCE
TEL：266-61-94

tac 東邦アート株式会社

東京　東京都中央区銀座８－９－13　TEL：03-573-5377
大阪　大阪市東区道修町４－７　TEL：06-202-0852

パリでのお買上げの作品はご帰国後日本で円払いの便宜もございます。

低価格、多機能、操作性を重視！
ソフトタッチによる対話を実現した
大崎のスケジュールコントローラ。



実用新案４件出願中
意匠登録１件出願中

OSAKI OSMAC SERIES
SC-16 スケジュール付監視制御ユニット

設備規模の大小にかかわらず、各種ビルや工場における電気設備運転を自動的かつ簡単・効率的に行うことは、必要不可欠となっています。ＳＣ－16は、こうしたニーズにお応えし最新のエレクトロニクス技術を駆使した省エネルギー・省力・安全管理の実現に貢献できる機器です。

特　長

❶この１台でスケジュール運転や監視が容易にできます。
❷本格的対話方式を重視した設計により、専門知識や専任オペレーターは不要です。
❸経済的な予算で導入いただけるよう低価格を実現しております。
❹外形は場所をとらないコンパクトな設計ですから、管理室などの特別なスペースは不要です。デスク上やパネル取付などご自由にお使いいただけます。
❺伝送ユニットにより、新設時だけでなく、後日の設備増設時、簡易中央装置や高級中央装置との対応などのシステムアップも計れます。

●CRT表示　各負荷機器の状態は一画面で表示され、拡大文字により、発停状態あるいは、監視状態が見やすく、全点の管理が簡単に行えます。また、この他に設定に関する画面やテスト画面などの豊富な画面が用意されています。

●タッチスイッチ　本格的マン・マシーンコミュニケーションを計るため、CRT表示面に透明タッチスイッチがセットされており、CRTに表示された文字を直接タッチする方式ですから、どなたにも簡単に扱うことができます。

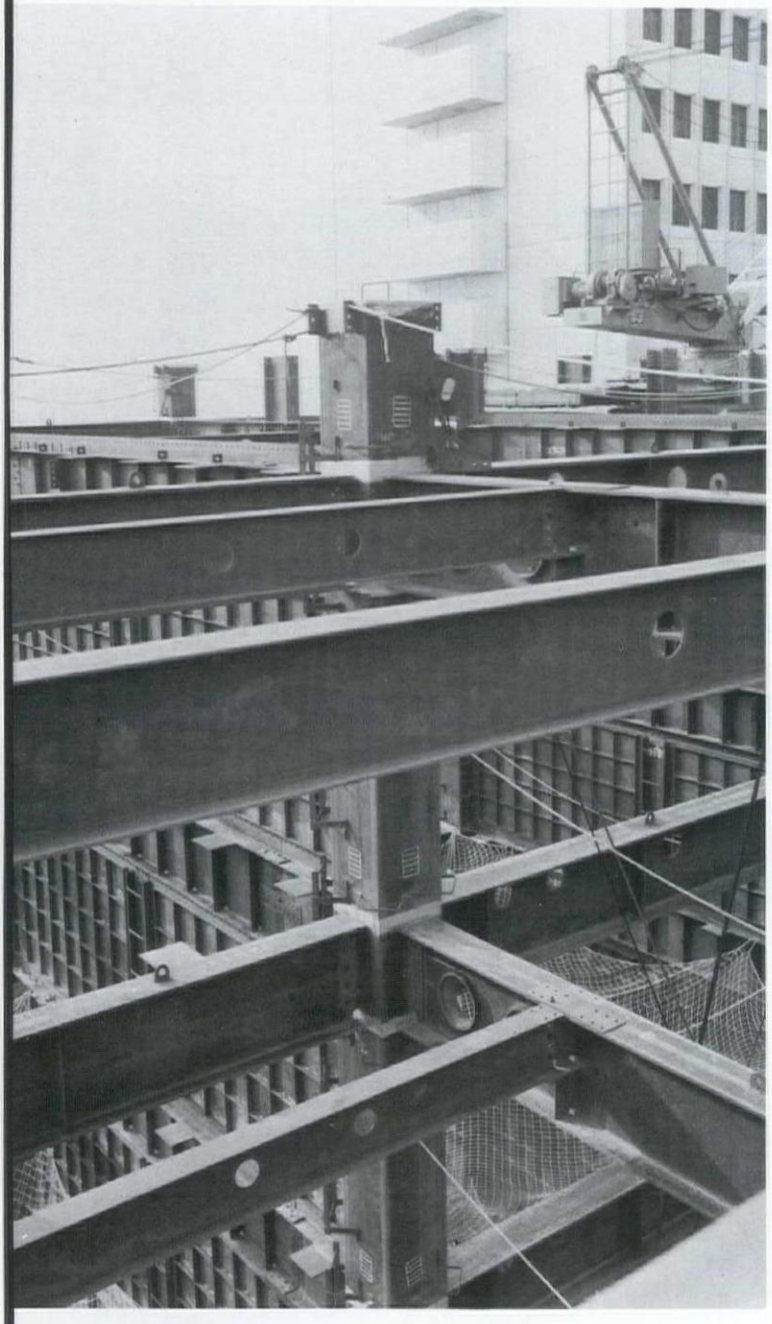
●プリンタ　機器の制御状態、警報発生、停電・復電さらに防犯監視などのメッセージをアドレス・時刻と共に自動印字しますから、管理の引き継ぎメモ、確認データとしてご利用いただける他にモニタメニューやテスト時にもお使いいただけます。

大崎電氣工業株式會社

本　　社　〒141　東京都品川区東五反田２－２－７
☎ 03(443) 7 1 7 1（大代表）
大阪営業所　〒531　大阪市大淀区豊崎3-20-9（三栄ビル）
☎ 06(373) 2 5 5 6（代表）

ウェブ厚2.3ミリ
住友だけの小サイズもあります。

住友の軽量H形鋼



より軽く、より強く、より経済的に。要求される条件を徹底追求し、品質向上を実現してきた住友の軽量H形鋼は、おかげさまで大好評。新しくウェブ厚2.3ミリという、住友だけの超軽量サイズを加えて、応用範囲を飛躍的に拡大させました。

住友の軽量H形鋼は、低層の店舗、事務所、工場、体育館などの骨組に最適ですが、大型部材とのコンビで中高層以上の建築物にも、柱や梁、また補助部材として効果的にご利用いただけます。



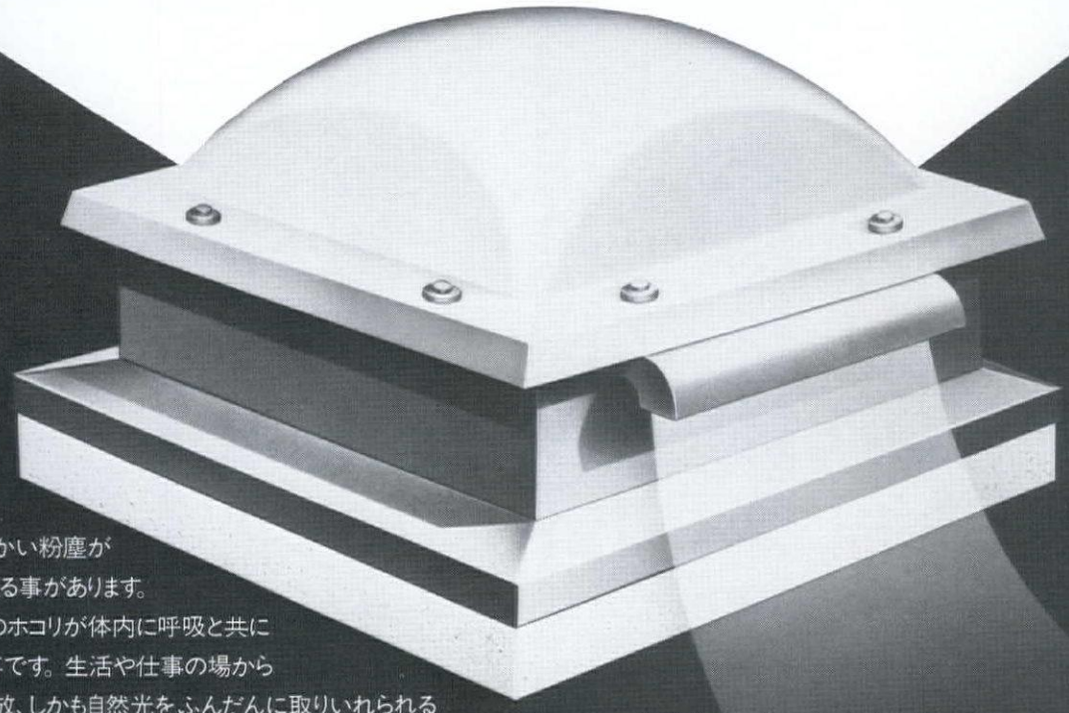
高温多湿環境にはタフジンクLH。防食効果の高いメンテナンスフリーの軽量H形鋼です。

同じ軽量H形鋼でも、高温多湿な腐食環境を克服。大いに実力を発揮するのが、溶融亜鉛めっきで表面処理されたタフジンクLH。温室、鶏舎などの農業用や養鰻ハウスというユニークな分野を引きうけて、好評を博しています。

●製造可能小サイズ例　100×60×2.3×4.5
125×60×2.3×4.5
150×75×2.3×4.5
175×90×2.3×4.5
200×100×2.3×4.5／他

住友金属
住友金属工業株式会社
大　阪＝大阪市東区北浜5－15（住友ビル）〒541　☎(220)5111
東　京＝東京都千代田区大手町1－3（大手センタービル）〒100　☎(282)6111
営業所＝九州・広島・岡山・高松・名古屋・富山・静岡・新潟・水戸・東北・札幌

朝日を通すと空中のホコリが良くみえる



電燈光では
見えない空中の細かい粉塵が
自然光では良く見える事があります。
目に見えない微粒のホコリが体内に呼吸と共に
入るのは恐ろしい事です。生活や仕事の場から
少しでもホコリを追放、しかも自然光をふんだんに取りいれられる
〔カマクラ・ライトファン〕 設計プランにぜひお加えください。

特徴

採光設計がグンと楽
都市における住宅では、周囲が立て込んでくると採光が困難。こんな時、天井採光なら日照は永遠、しかも窓採光の3倍も効率がアップ。

照明電力が節約
ライトファンなら朝から夜迄電燈いらず。明るさに加えて熱伝導率はガラスの1/5で冷暖房代の大幅な節約をお約束。

施工も簡単、コストもダウン
ライトファンは、屋根の形態を選びません。本体、フレーム、取付用部品がセットになっているので、施工も簡単、工事費も安上がりです。

軽さに自信
ライトファンはアルミニウム枠とアクリル樹脂で構成、軽さを要求される屋根にまったく負担をかけません。

強靱さ抜群、危険度ゼロ
ドーム本体はアクリル製、普通ガラスの15倍の対衝撃性。風速60m/secの台風や3m以上の積雪にも充分に耐えられます。





雨じまいは完璧
ドーム本体とフレームのジョイント設計で雨じまいは完璧。内部結露の滴下を防ぐ構造設計です。

取りつけフレームの材質
外枠は、すべてアルミニウム製、対候性に優れ、長期使用に耐える堅牢タイプです。

熱遮断に効果的
アクリルドーム本体のアクリル樹脂は、可視光線を良く通す反面、赤外線のカット性能があり、家具を傷めたりする事がありません。

対候性にご注目
アクリル性のドームは、他のプラスチック材料に比較しても、対候性に優れ長期使用に対し褪色、黄変、劣化が無く酷暑や厳寒に充分耐えます。

紫外線カットも可能
紫外線を大幅にカット出来るグレードを用意しました。繊維品や食品、美術館などに特注品としてご用命ください。

ライトファンの特長
明るさに加えて強制換気をプラス。煙草の煙や目に見えないホコリを屋外に排気します。換気量は2段調節。結露防止の2重構造も用意しました。

ライトファン姉妹品
ファン型(LF) 採光と健康排気の普及型
標準型(LS) 採光のみの一般型
ペア型(LS-W) 熱損失、結露防止型
ベンチレーター型(LV) 自然換気型
連続型(LC) 大型建築物用採光型
排煙型(LH) 非常時排煙開閉型
ホーム型/一般住宅用採光型
5WAYハッチ(GF) 採光、自然換気、強制換気、排煙、遮光の5大機能型
採光型スモークハッチ(SH-G)多目的屋上排煙型

カマクラ
ライトドーム
株式会社 鎌倉製作所

本社：東京都港区北青山2-7-11〒107 ☎03(403)4311
●大阪支店：06(768)0345 ●名古屋支店：052(733)2811
●広島支店：082(291)4771 ●福岡支店：092(441)6460
●仙台支店：0222(57)0319 ●富山支店：0764(91)2231
●小山支店：0285(23)7847 ●電話はすべて代表番号です。

技術の日立



知能は鋭敏
動きは柔軟

先進16ビットマイコン搭載。
知能群管理エレベーター
(CIP-52000)新登場。

待ち時間の少ない経済性・信頼性にすぐれた効率のよいエレベーター……このテーマにチャレンジしつづける日立が自信をもっておすすめする知能群管理エレベーター(CIP-52000)。この知能群管理エレベーターは、従来の群管理制御系に加えて、新たに「学習機能系」と「知能系」として、それぞれ16ビットマイコンを搭載。群管理プログラムの自動修正を可能としたものです。すなわち、ビルの個性(用途・立地条件など)、季節、曜日などによって変わるあらゆる利用状況の変化に、自ら適応していく能力を持っています。いわば、自ら「考え、そして成長する」能力を備えたオフィス、ホテルの機能をグンとアップします。

知能群管理(CIP-52000)の特長

- 変化する利用状況に的確に対応します。
- 混雑も未然に防止できます。
- 特別行事に対してもあらかじめ行事予約ができます。
- 知らず知らずのうちに効率的に節電できます。
- 予約精度を99%以上に高めました。
- 戸の開閉時間を状況に合せ自動調整し無駄をなくします。
- 稼動状況のモニターも可能です。

日立知能群管理エレベーター(CIP-52000)

株式會社 日立製作所

お問い合わせは機電事業本部/営業本部 〒101 東京都千代田区神田駿河台4-6 電話 東京(03)258-1111〈大代〉または最寄りの支店へ
大阪(06)203-5781・福岡(092)741-5831・名古屋(052)251-3111・札幌(011)261-3131・仙台(0222)23-0121・富山(0764)33-8511・広島(082)223-4111・高松(0878)31-2111

National

エネルギーの効率利用と設備工事の合理化には、ビル空調も個別方式をおすすめします

ナショナルのビル個別空調システム

イニシアルコスト13%減※
ランニングコスト22%減※
ともに有利な個別方式

省エネルギー関係法令の公布に見るまでもなく、建築物にとっての省エネ対策――特に空調エネルギーの効率化は、ビル建築計画にとって重要テーマです。

住宅と異なり、ビル空調に個別方式が主流となりえなかったのは、設備費と機能の対比（コスト・パーフォーマンス）や、工事・メインテナンスに問題があったようです。

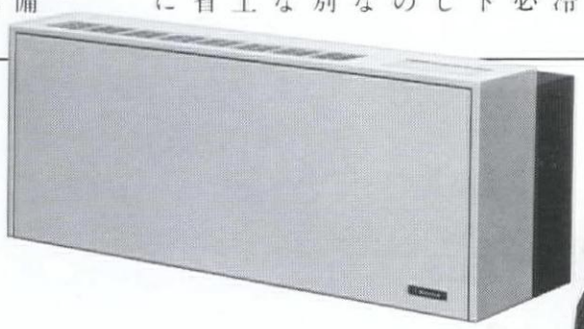
これらの問題を解決したのがナショナル・ビル個別空調機――大幅なコストダウンを可能にした省エネタイプの個別空調システムです。

※弊社計算による

多機能で、しかも簡単な操作
工事の合理化と省スペースにも

冷房・暖房・換気・除塵・外気冷房・熱回収など、ビルの空調に必要なほとんどの機能をコンパクトにまとめていますが、負荷に応じた冷暖切替を自動化していますので、操作はまったく簡単で特殊な技術を必要としません。また個別方式ですから、冷凍機・ボイラーなどの大型機器や、複雑なダクト工事が省略できますので、工事の省力化、ビル本体の省スペース化にも役立ちます。

あらゆる面で有利なナショナル・ビル個別空調システムを、皆様の設備計画・設計に、ぜひご採用ください。



エアーバランサー

室内の汚れた空気の強制排気が可能な、全電気ヒートポンプ方式。

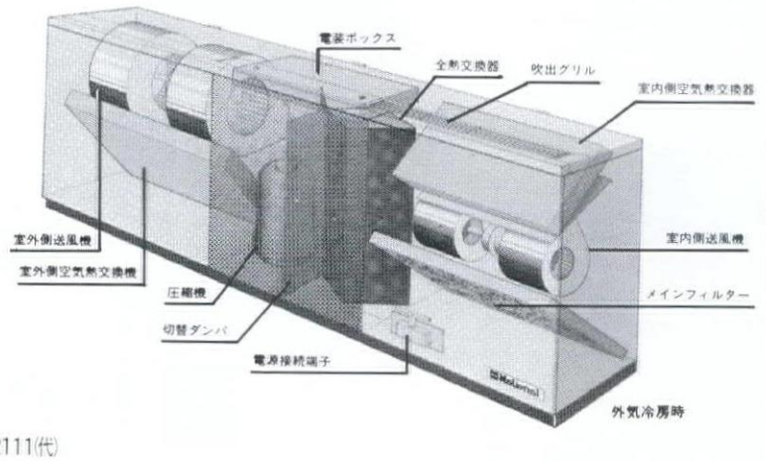
- 大口径シロッコファンにより高静圧を得ています。外風の影響を受けず安定運転が可能。
- 低入力、低騒音を可能にしたインジェクションタイプのロータリーコンプレッサ。
- 高圧圧力調整弁の採用で、高い外気温度での暖房運転が可能。
- 半導体ヒータを補助として採用、暖房の立上り特性がよく、吹出温度を自動的に一定化。
- 2段サーモスタットによる節電運転。
- 白を基調としたシンプルデザイン。



パコスメイク

熱交換により排気熱を回収、エネルギーを有効に利用する全電気ヒートポンプ方式。建築モジュールに合わせた施工により、内・外観ともにシンプルに納まるスルー・ザ・ウォールタイプ。

- 全熱交換器による冷・暖房の排気熱を回収。
- 低入力、低騒音を可能にしたインジェクションタイプのロータリーコンプレッサ。
- 高圧圧力調整弁の採用で、高い外気温度での暖房運転が可能。
- 3段サーモスタットによる冷房・暖房切替の自動化。
- 高性能カートリッジ形フィルター内蔵による高い空気清浄力。
- 白を基調としたシンプルデザイン。



松下電器産業株式会社
松下精工㈱冷暖送風事業部
〒251 藤沢市辻堂元町6丁目4番2号 TEL (0466) 34-2111(代)

ビッグ アトラス サイロ システム

石炭や石油ピッチの大量貯蔵と定量払出が可能なシステム

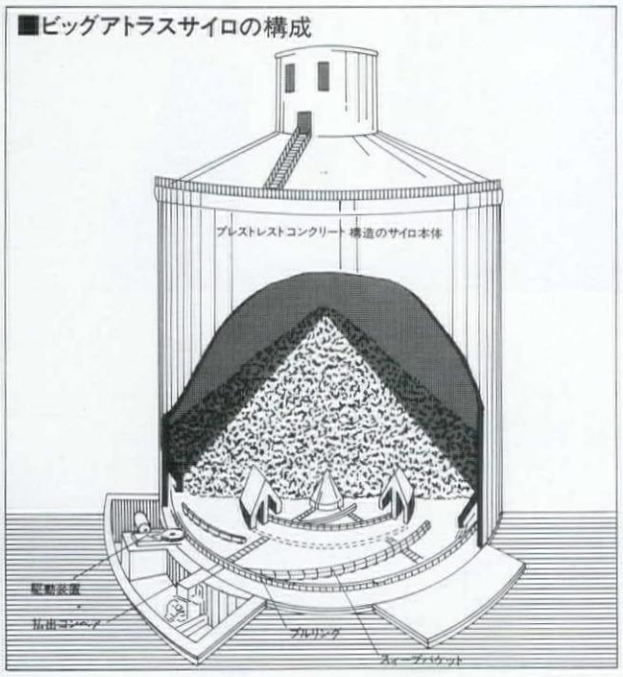
BIG ATLAS SILO SYSTEM

ビッグアトラスサイロシステムは、目詰りを生じやすい粉粒体の貯蔵用に、鹿島建設と日立金属の両社が共同で開発した大型サイロシステムで、1万トンから8万トンまでシリーズ化されています。本システムの採用により、敷地を有効に利用し、周辺環境との調和を図り、運転管理を自動化・省力化することができます。



富士石油㈱袖ケ浦製油所〈石油ピッチ〉

■ビッグアトラスサイロの構成



■特長

〈1〉強制払出装置のアトラスフィーダ採用により、目詰りを防止して連続定量払出ができます。
〈2〉プレストレストコンクリート技術を駆使して、サイロ本体の構造的安全性を確保した経済的なサイロです。
〈3〉騒音や炭塵等の環境対策、自然発火や炭塵爆発等の防災対策も万全です。
〈4〉運転管理の自動化・省力化を図ることができます。
〈5〉積み付け効率がよく、敷地を有効に利用できます。
〈6〉石炭以外の目詰りを生じやすい粉粒体の貯蔵にも適しています。

■適用例

- 富士石油㈱袖ケ浦製油所 ピッチ貯蔵用サイロ2基
- 宇部アンモニア工業 石炭貯蔵用サイロ2基

■適用範囲

- 石炭
- 石油ピッチ
- 石油コークス
- コークス
- ウッドチップ
- 廃材
- 都市ゴミ
- 石灰石
- その他



デミング賞
〈実施賞〉受賞企業

鹿島建設
KAJIMA CORPORATION

本社：〒107 東京都港区元赤坂1-2-7 お問合せ先 建築技術部(03)404-3311

HOTEL KAJIMA NO MORI



鹿島ノ森ホール

軽 井 沢

NEW YEARのくつろぎ

セミナーとスキー・スケートの基地にご利用ください

軽井沢氷まつり　1/26(土)～1/29(火)

《鹿島ノ森ホール》

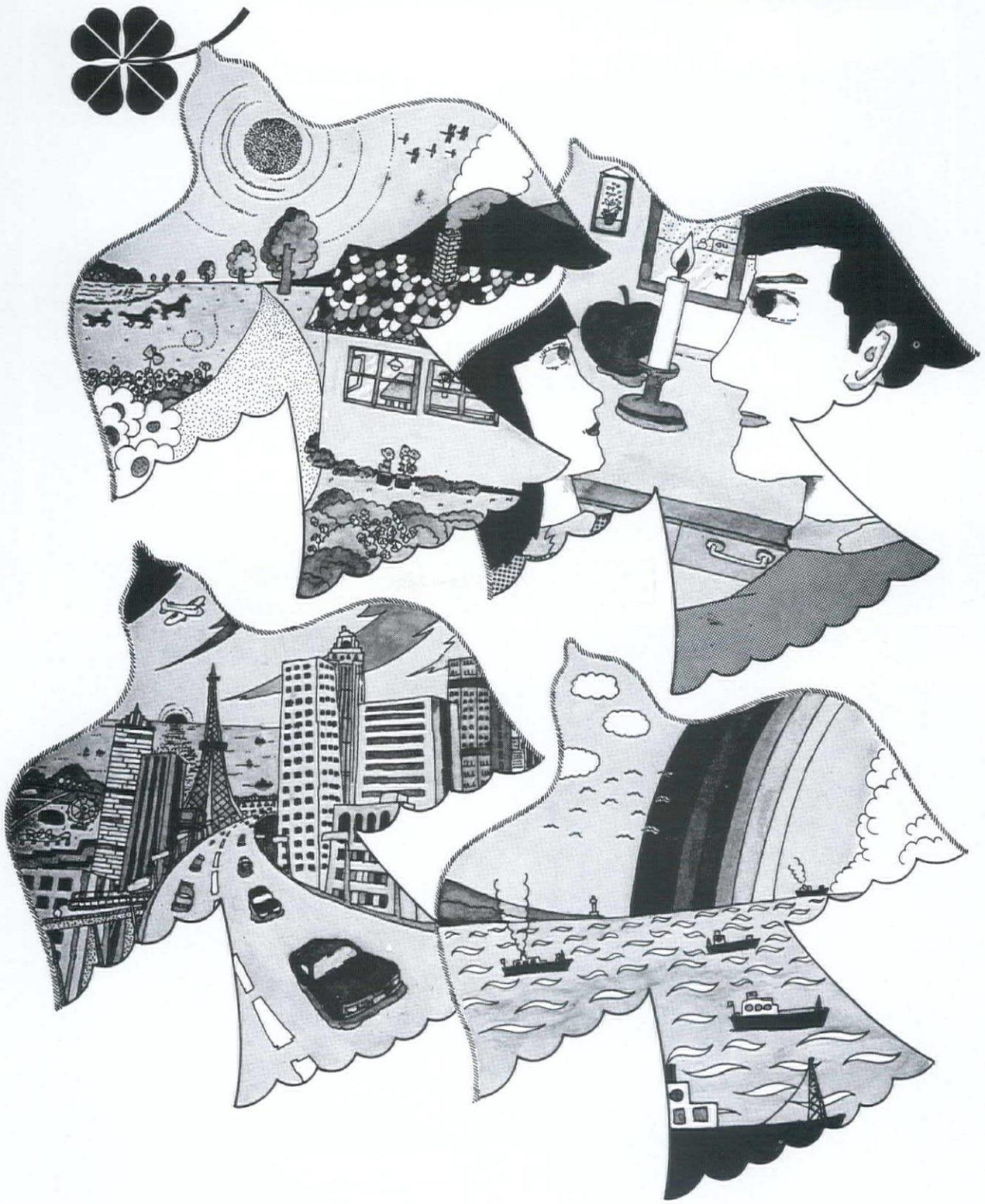
■セミナー：108人、16㎜映画映写装置、2ヶ国語同時通訳
■結婚式：教会・神式、ご披露宴
■展示会場　■パーティー会場

《鹿島建設グループ》

株式会社　ホテル鹿島ノ森
ホテル　オークラ チェーン

●ご予約・お問い合せ：ホテル鹿島ノ森予約係　☎03-478-6220　現地　☎02674-2-3535㈹ TELEX 3328676

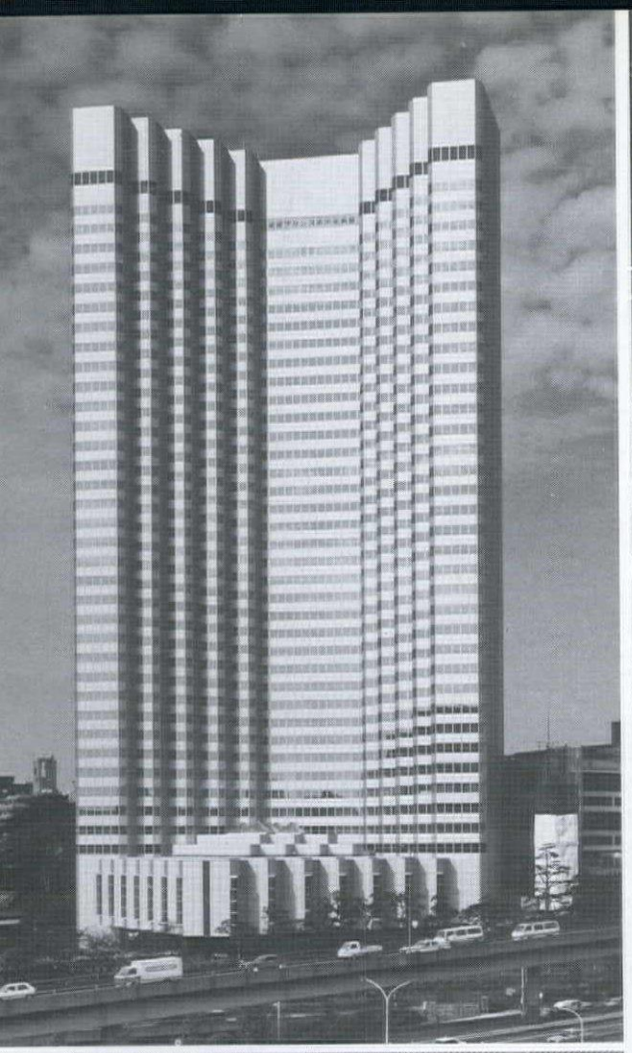
豊かな人間生活と
明かるい光の創造に



中立電気株式会社

取締役社長　斎　藤　　勲

本　　社　〒160 東京都新宿区新宿1丁目13番12号　☎東京(356)2511(代)
山梨支店　〒403 富士吉田市下吉田町2005番地　☎吉田(0555)(2)3258(代)
大月出張所　〒401 大月市大月町2丁目10番地14号　☎大月(05542)(2)1013
笛吹川事務所　〒405 山梨市小原西1118番　☎山梨(05532)(2)6651





新国技館(内装・設備)



赤坂プリンスホテル レストランブルーガーデニア(内装)

営業種目

○建設資材

鉄鋼及び加工製品・鉄鋼仮設材・一般仮設材・セメント・生コン・コンクリート二次製品・防水養生剤・内外装材etcの販売及び賃貸

○建設工事

鋼管杭・H形鋼・シートパイル・PCパイル各種打込工事・現場造成杭工事・ウェルポイント薬液注入工事・内外装仕上工事・サッシ・シャッター工事・パーティション工事・耐火被覆工事・断熱吸音工事・ALC材工事・スパンクリート工事・インターロッキングブロック工事・外壁調査及び改修工事etcの施工

○建設機械・工具

測量機器・ブルドーザー・掘削機械・積込機器・基礎工事用機械・クレーン・リフト・せん孔機械及びトンネル掘進機・締固め機械・骨材生産機械・コンクリート機械・空気圧縮機・送風機・ポンプ・原動機・完成車両及び特殊機械器具etcの販売及び賃貸
スリップ・トルクコンベヤ及びスイングー(米国シャトルワース社提携)の販売

○設備機器・工事

空調設備機器・給排設備機器・電気設備機器・昇降機エスカレーター工事・駐車設備工事・コントラ設備工事・厨房設備工事・ユニットバス、キッチンユニット、洗面化粧台工事・防災設備工事・水処理設備工事etcの販売及び施工

○輸出入業務

大理石・御影石・磁器タイル・合板型枠・機械工具類その他各種建設資機材の輸出入業務の取扱い及び施工

○インテリア

家具・応接セット・スチール棚・保管庫・移動書庫・ロッカー・各種施設用扉etc

○一級建築士事務所

計画・基本設計・実施設計・工事管理・構造物のチェックと対策etc

あらゆるニーズにお応えできる建設の総合商社

大興物産株式会社

会長　渥美健夫　　社長　柴田銀造

本　社　〒107 東京都港区元赤坂1—6—4　安全ビル7・8F ☎(03) 423—2511
札　幌　〒060 札幌市中央区北三条西3-1-4　北三条三井ビル ☎(011)231-6481～2
仙　台　〒980 仙台市二日町1—27　鹿島建設ビル ☎(0222)61-4141～4
東　京　〒107 東京都港区元赤坂1—6—4　安全ビル7F ☎(03) 423—2511
横　浜　〒231 横浜市中区弁天通り6—79　ハリマヤビル ☎(045) 212—3925
北　陸　〒950 新潟市万代1—3—4　鹿島建設ビル ☎(0252)47-2286～7
名古屋　〒450 名古屋市中村区名駅南1-24-21 名古屋三井ビル別館 ☎(052) 551—2131
大　阪　〒540 大阪市東区谷町5—27上町ビル ☎(06) 762—5661
広　島　〒730 広島市中区中町6—13鹿島建設ビル ☎(082)249—9221
高　松　〒760 高松市亀井町1—3鹿島建設ビル ☎(0878) 39—3191
福　岡　〒812 福岡市博多区博多駅前3-12-10 鹿島建設ビル ☎(092)441-2624～5

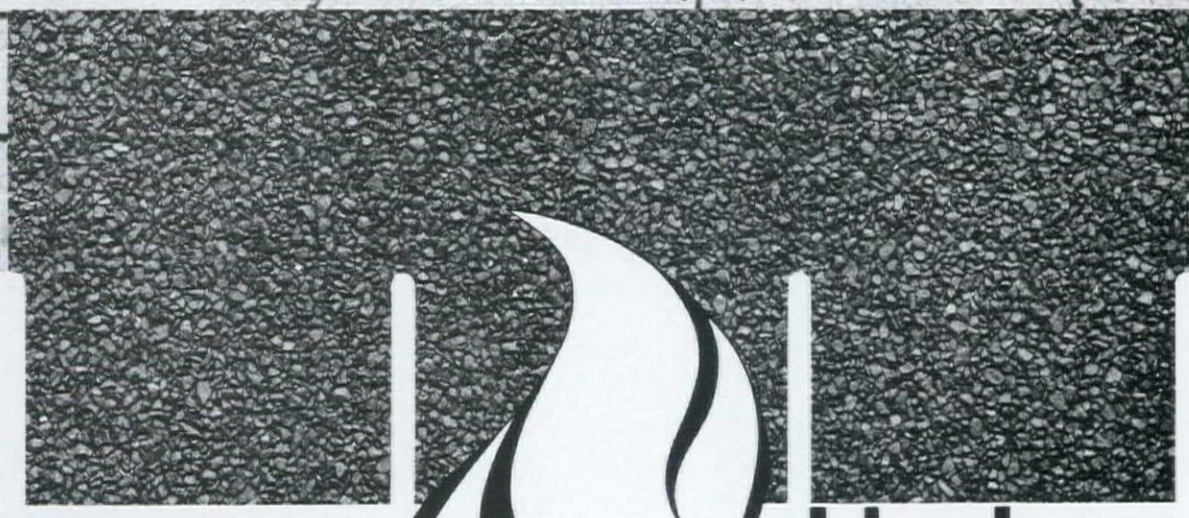
地震に強い屋根材

本造下地でも建築基準法22条の制約を受けません。

マルエス不燃シングルSP

ベストロン

建設大臣認定・不燃(個)第1683号



maruesu shingle sp

1耐震性に強く、軽くて割れないため屋根から落下する心配がありません 2耐変色性にすぐれ 3寸法安定がよい

4凍害に強く寒冷地にも安心して使用でき 5深みのある色調とソフトな感覚は 6自由な曲線をつくれ 7ユニークなデザインが可能です。

マルエス 日新

日新工業株式会社

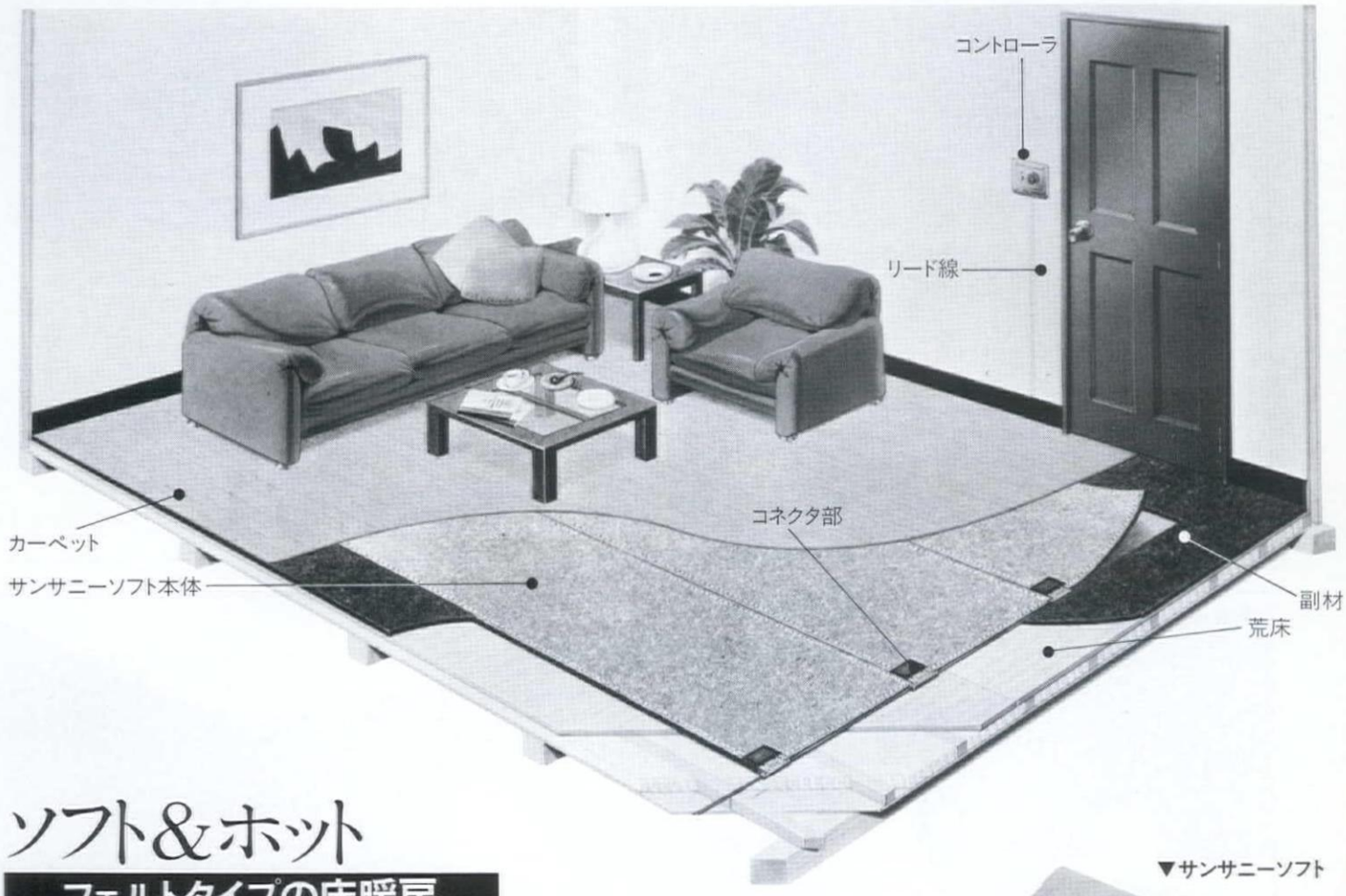
東　京■120/東京都足立区千住東2－23－4☎03(882)2424(大代表)

大　阪■☎ 06(533)3191(代表)　九　州■☎092(451)1095(代表)　名古屋■☎052(741)6257(代表)

札　幌■☎011(281)6328(代表)　広　島■☎082(221)1019(代表)　仙　台■☎0222(63)0315(代表)

広告についてのお問合せの際は≪SDを見て≫と御明記願います

いま、電気床暖房は インテリア感覚。



ソフト&ホット

フェルトタイプの床暖房

サンサニーソフト

▼サンサニーソフト



サッと手軽に敷ける、本格床暖房。

- 快適な暖かさの主暖房として使える本格派。電気カーペットにはない住空間をつくりだします。
- 弾力性あるフェルトタイプですのでクッション性がよく、居心地が抜群です。
- カーペットの色・柄が自由に選べ、調和のとれたインテリアが楽しめます。
- 室内が100%使え、季節ごとに暖房器具を出し入れする面倒もありません。
- コントローラにより、好みの快適温度が自由に選べます。
- すぐに快適な暖かさが得られ、消費電力も少なく、大変経済的。
- 簡単に設置でき、しかも重い物を置いても大丈夫な安全・堅牢設計です。

ご家庭の居間やマンションに最適です。

サンサニーは、電気・温水床暖房で実績をもつ古河電工の新製品です。サンサニーソフトには、古河電工独自の高度な技術が随所にいかされています。

●快適な生活環境づくりにとりくむ

古河電工

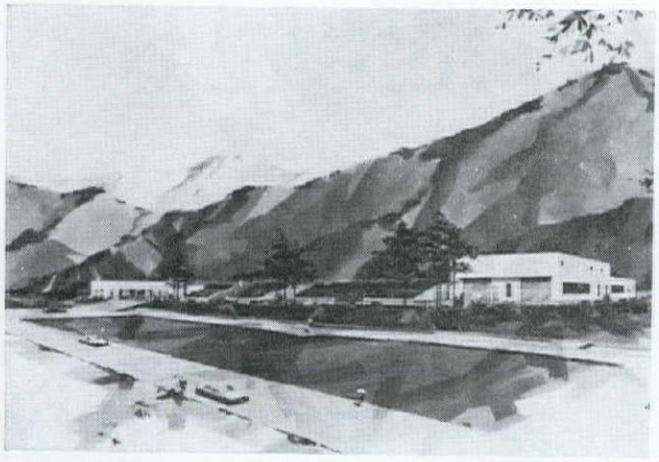
熱システム営業部

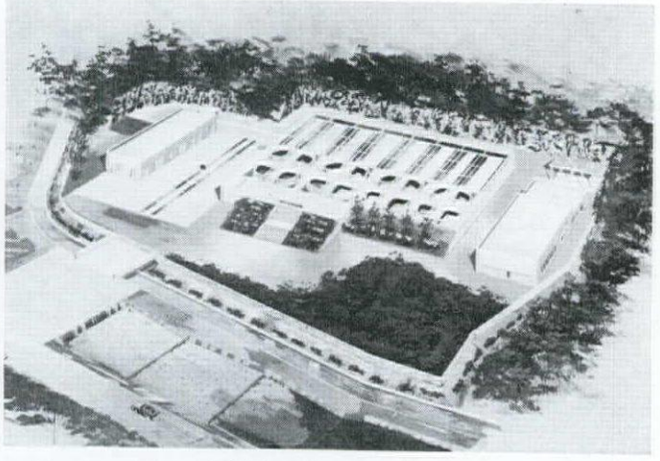
本社　東京都千代田区丸の内2－6－1 〒100
☎(03)286－3479

大阪 ☎(06)344-1765　名古屋 ☎(052)931-8871
福岡 ☎(092)712-0841　広島 ☎(082)246-8521
仙台 ☎(0222)25-4221　札幌 ☎(011)251-7161
高松／富山／浜松／豊田／宇部／長崎／沖縄

資料請求券 SSソフト SD

東武式総合水処理



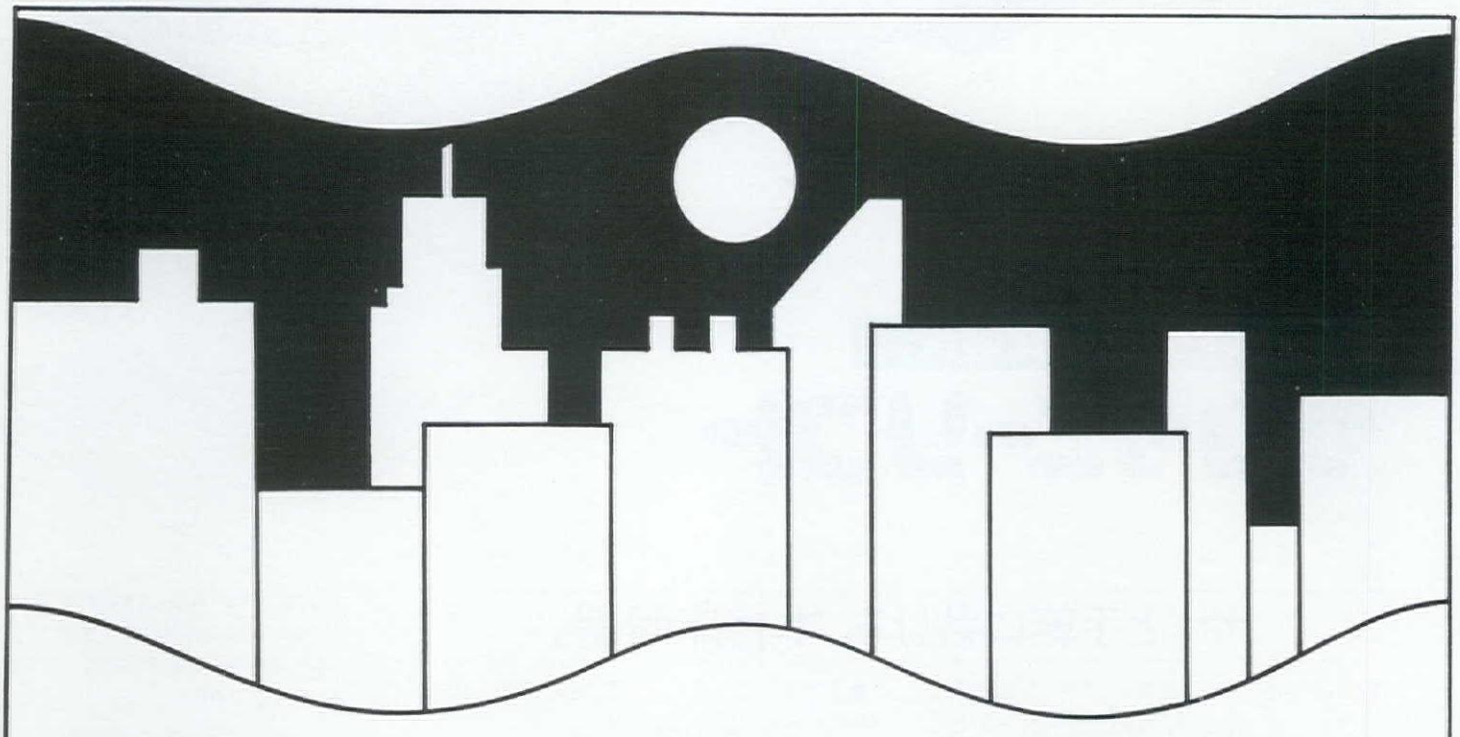


産業廃水処理装置・コミュニティ・プラント
設計・施工・管理

tb 東武産業株式会社

代表取締役　武馬　毅

〒452　名古屋市西区あし原町86　☎〈052〉502-8211(代)



HEATING
REFRIGERATING
VENTILATING &
AIR CONDITIONING

未来をひらく技と心

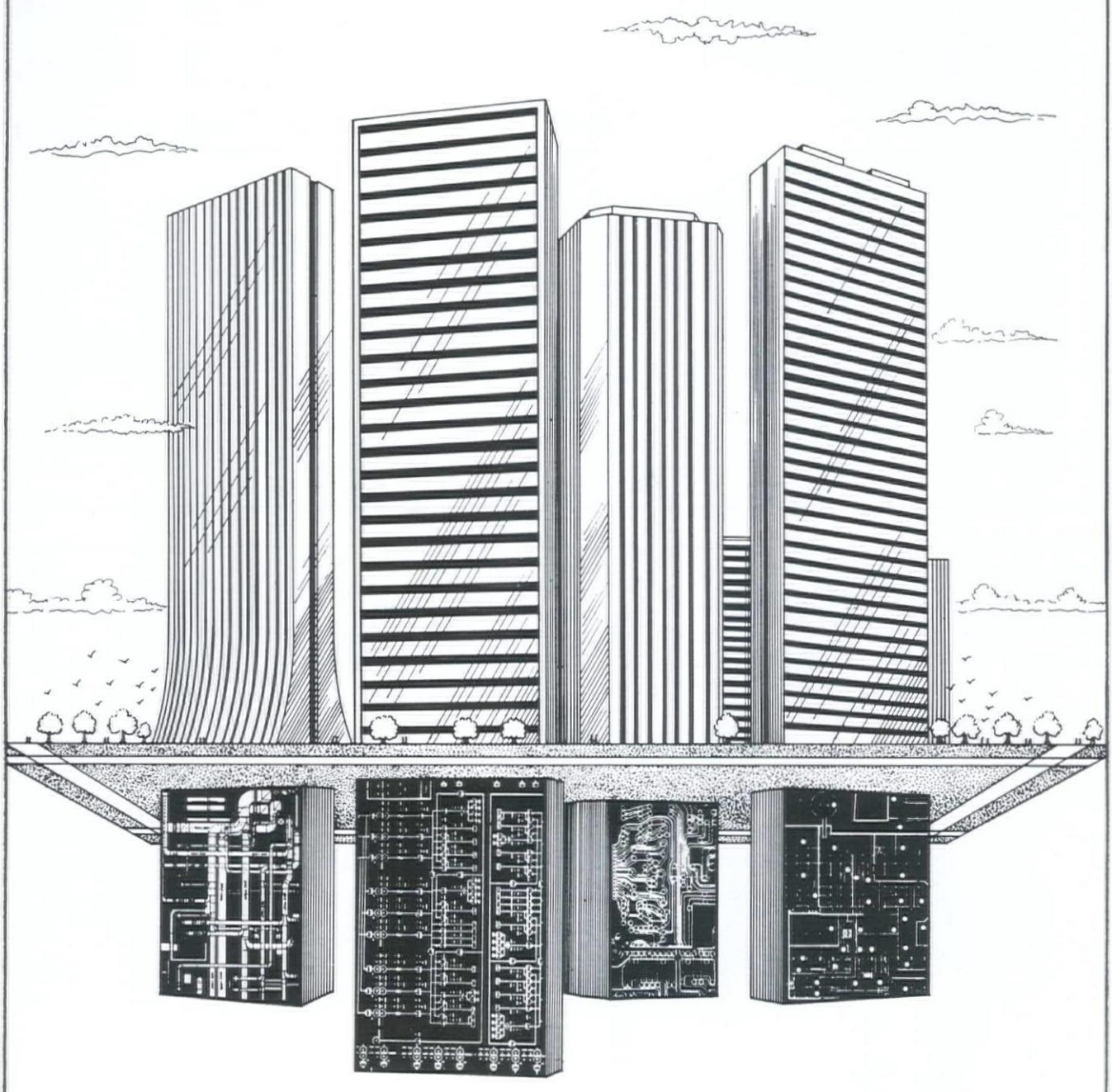
五建工業

東京都千代田区内神田一丁目16－3
電話　東京03(292)3201(代表)

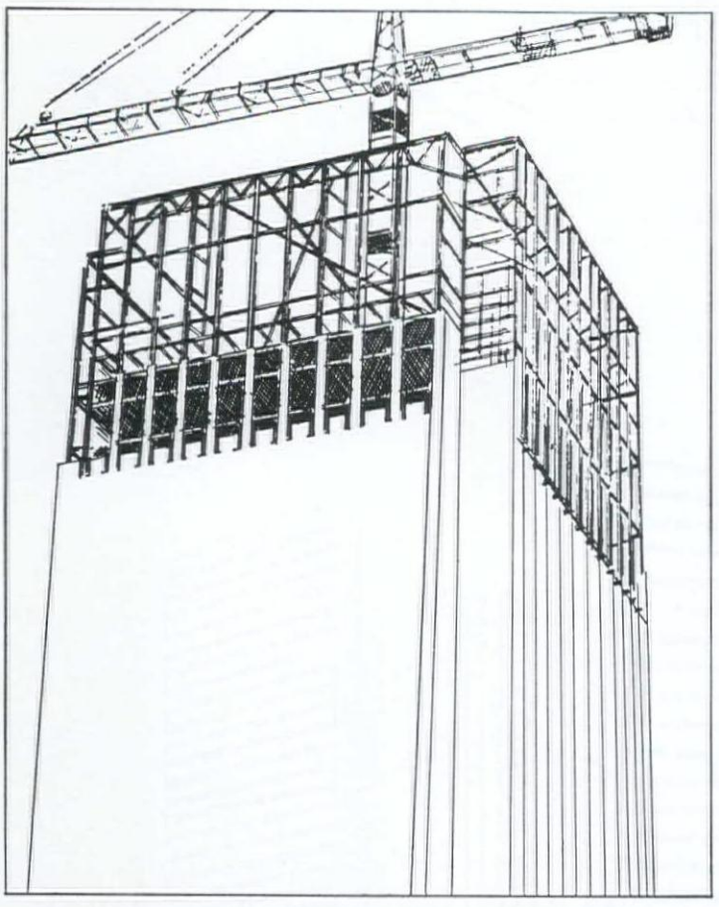
東京・札幌・大阪・仙台・茨城・埼玉・四国・釧路・旭川・帯広・広島・福岡

情報世紀を照準する……
近電工のシステムエンジニアリング

高度情報社会へと展開する都市……
新しい世紀へ　活動し制御する全機能をきびしく構成する
近電工の総合技術と総合施工体制——



電気・計装・空調・管・防災・土木
システムの信頼を高める
近電工
近畿電氣工事株式會社
大阪市大淀区本庄東2丁目3番41号　〒531　☎06(375)6000



耐火・断熱・防音

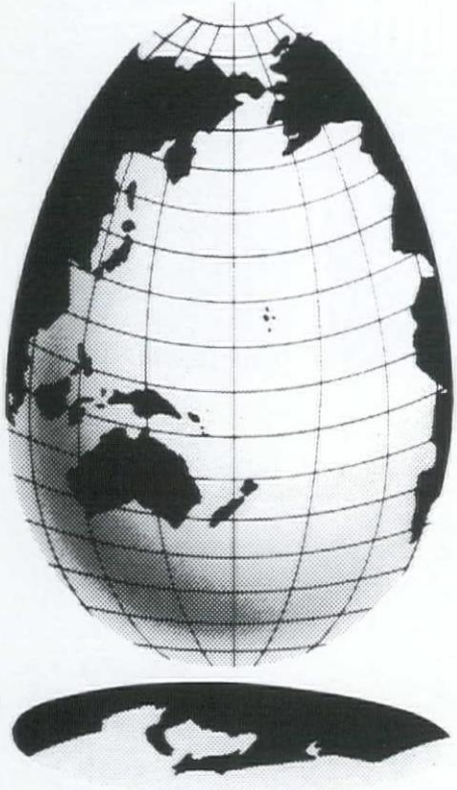
リンペット　石綿吹付
リフライト　石綿板
リフボード　ケイカル板
バルカロック　岩綿吹付
バルカウエット　湿式吹付

VALQUA

日本バルカー工業株式會社

工事部　東京都中央区京橋1－14－5（土屋ビル）　03-563-1991㈹
大阪営業所　大阪市西区江戸堀3－88（旭ケミカルスビル）　06-448-3861㈹
九州出張所　北九州市小倉区米町2-2-1（新小倉ビル別館）　093-531-6088㈹
本社　東京都千代田区丸ノ内3－3－1（新東京ビル）　03-212-8571㈹

明日を生み出す東海電工。



東海電気工事は「安全と責任ある工事」を信条として豊富な経験と高度な技術をもって電気設備工事全般から冷暖房工事、計装防災工事に至るまで総合設備工事業者として社会発展のため貢献いたしております。

東海電気工事株式会社
取締役社長　井上丈太郎

本社／名古屋市中区栄1-20-31 〒460 ☎〈052〉221-1111
支社／名古屋・岡崎・静岡・津・岐阜・長野・飯田・東京・大阪



石の心と樹々の精に，

新たなる生命を語らう，自然の造形

岩城造園株式会社

取締役会長　岩城亘太郎

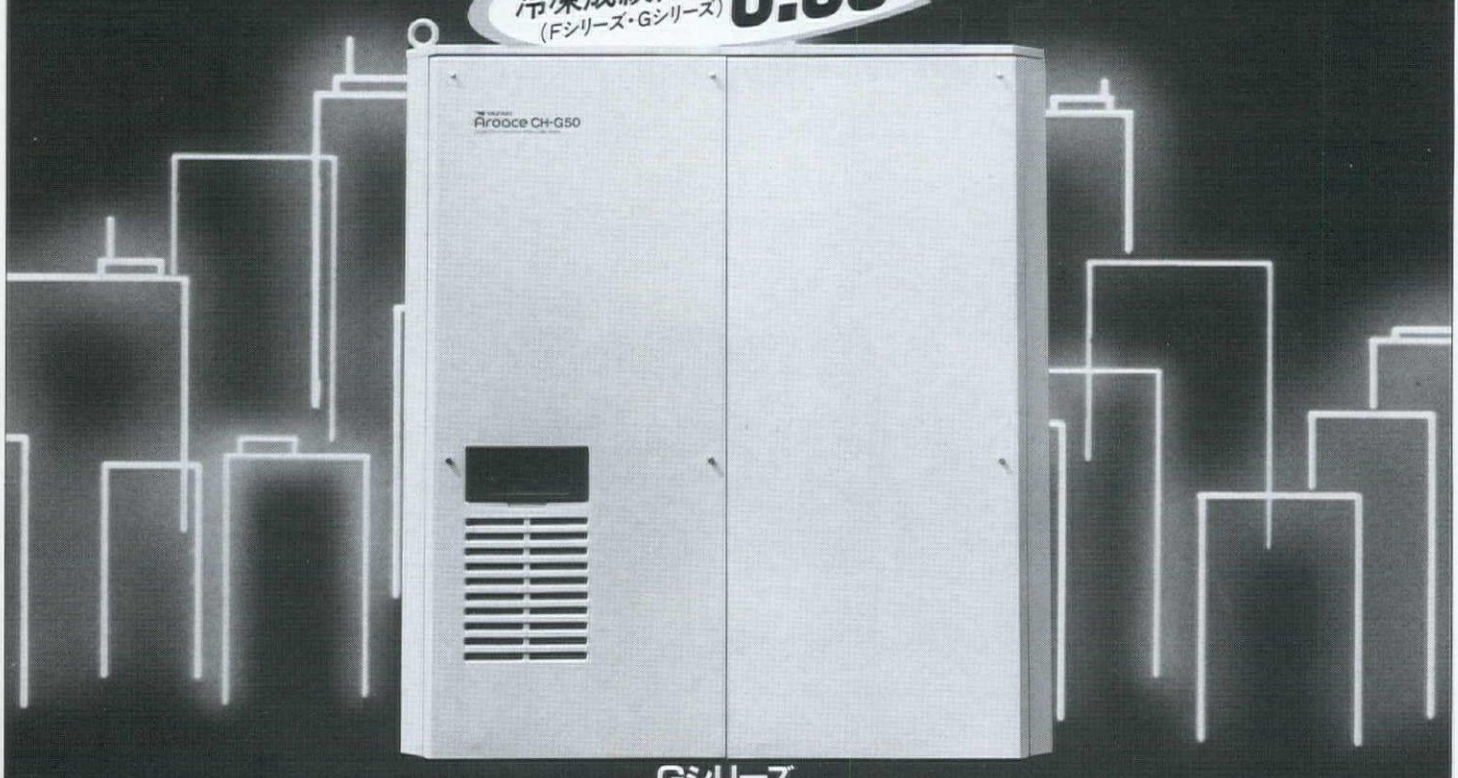
取締役社長　岩城庄次郎

東京都世田谷区深沢8丁目9番12号 TEL(03)703-1311

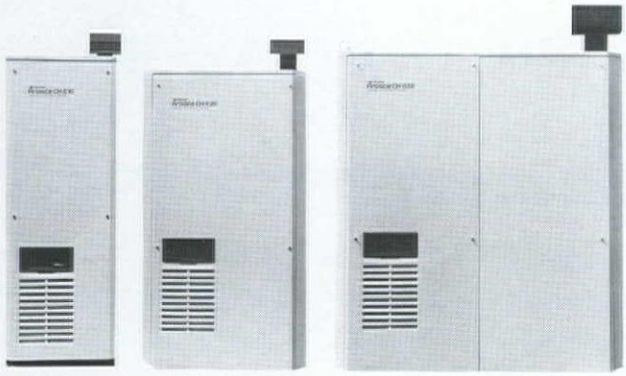
創エネルギー
YAZAKI

ビルの冷暖房は
マイコン空調へ、NEWアロエース。

冷凍成績係数 (Fシリーズ・Gシリーズ) 0.95



Gシリーズ



Eシリーズ (7.5～20RT)　Fシリーズ (15～40RT)　Gシリーズ (30～150RT)

この4つの特長が、話題を呼んでいます。

①吸収冷温水機として、世界で初めてマイコンを採用。②重量で35%、設置面積で35%もスリムに(Fシリーズ)。③矢崎独自の自動冷媒比例制御方式で、さらに省エネ(F・Gシリーズ)。④消費電力を大巾に減少。アロエースは常に先んじています。

二重効用形吸収冷温水機

NEW アロエース

矢崎総業株式会社

本　社：〒108東京都港区三田1-4-28三田国際ビル17F☎03(455)8812
エネルギー機器事業部：〒435静岡県浜松市子安町1370☎0534(61)5111

「NEWアロエース」のお問合わせは

札幌支社 ☎011(852)2914
仙台支社 ☎0222(84)9115
東京支社 ☎03(767)4782
名古屋支社 ☎052(833)8415
大阪支社 ☎06(458)4825
北越支社 ☎0764(41)6516
中国支社 ☎0829(23)2115
四国支社 ☎0878(33)3336
九州支社 ☎092(411)4835

SD 85 02

スペースデザイン
第245号
昭和60年2月号

5 特集＝フランス
ポスト・モダンのフランス建築

8 論文
●

8 建築の実現に向けて
アニック・エメリ

17 現代フランス建築の特色考
進来 玄

49 プリミティヴィズムの台頭
三宅理一

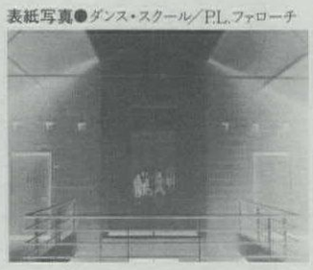


建築家 22
●●●

22
アンリ・シリアニ
ジャン・ピエール・ビュフィ
イヴ・リオン
アルシステュディオ
ロラン・スピッツ
ジャン・ピエール・ワテル
フェルナンド・モンテス
ベルナール・ボール
ケトフ&ブティ
クリスチャン・ドヴィレー
クロード・ヴァスコーニ
エルヴェ・バゴ
ブルュネル&ロボネン
パトリック・ベルジェー
マノロ・ニュネズ-ヤノヴスキー
ジャン・ヌーヴェル
ベショー&ブルジョア
ガルースト&ボネッティ
キャナル
フィリップ・スタルク
サシャ・ケトフ
フランソワ・セニュール
ピエール・ルイ・ファローチ

発行人●河相全次郎
編集人●長谷川愛子
発行所●鹿島出版会
〒107 東京都港区赤坂六丁目5番13号
電話(03)582—2251(代)
振替 東京6—180883番
編集長●伊藤公文
編集スタッフ●有賀秀典
吉田雅彦
相川幸二
浜地三千世
アート・ディレクター●工藤強勝
デザイン・レイアウト●上田宏志
釣巻敏康
デザイン実験室
印刷・製本●凸版印刷株式会社
〒174 東京都板橋区志村1—11—1
電話(03)968—5111(案内)
取次店●東販・日販・大阪屋
栗田出版販売・誠光堂
鈴木書店・西村書店・中央社
定価●1,500円
年間直接講読料●20,000円
(特別定価号＋送料込み)

表紙写真●ダンス・スクール／P.L.ファローチ



65 NICE SPACE
カプリ島，イタリア
長谷川正允

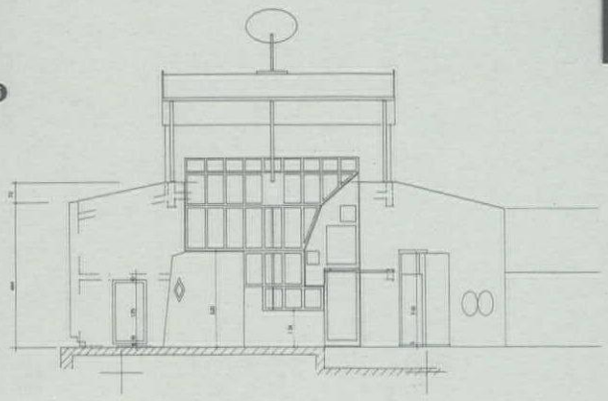
73 連載＝フランク・ロイド・ライトの呪術の空間❻
呪縛の目，呪物としての室外彫刻
草森紳一＋大倉舜二

82 トピックス
「ユーバリーノ」ってナンですか?

84 記事・書評

91 海外建築情報
ブレーク・スルー SFスタイル
DUCTSPACE＝編

99 国内建築ノート 聖吾評
今月の宿題：正しい建築と面白い建築



12 論文
●●

12 ゲームの規則
松浦寿夫

12 ゲームの要請 [ゲームの規則] 1

28 言語ゲーム [ゲームの規則] 2

29 ゲーム規則の要請 [ゲームの規則] 3

46 ポスト・モダンの条件 [ゲームの規則] 4

5 **SPECIAL FEATURE**
FRANCE; A New Generation of French Architects

8 **Article**
●

8 Desire for Building
by Annik Hemery

17 The Characteristics of Modern French Architecture
by Guen Suzuki

49 The New Wave of Primitivism
by Riichi Miyake

62 English Texts

65 **NICE SPACE**
Capri, Italy
by Masanobu Hasegawa

73 **SERIAL PRESENTATION**
〈Frank Lloyd Wright's Enchanted Spaces〉 ❻
Exterior Sculpture that Bewitches
by Shin'ichi Kusamori+Shunji Okura

82 **Topics**
Why the Name 'Eupalino'?

84 **Informations**

91 **Eminent Works Abroad**
SF Style
compiled from foreign architectural magazines
by DUCTSPACE

99 **Domestic Architectural Notes**
Sei-Go-Hyoh:
"Good Architecture and Interesting Architecture"

Architects 22
●●●

22 Henri Ciriani
Jean Pierre Buffi
Yves Lion
ARCHISTUDIO
Roland Spitz
Jean Pierre Watel
Fernando Montes
Bernard Paurd
Ketoff & Petit
Christian Devillers
Claude Vasconi
Herve Bagot
Brunel & Ropponen
Patrick Berger
Manolo Nunez-Yanowsky
Jean Nouvel
Becheau & Bourgeois
Garouste & Bonetti
CANAL
Philippe Starck
Sacha Ketoff
François Seigneur
Pierre Louis Faloci

Article
●●

12 **The Rules of the Game**
by Hisao Matsuura
12 Postulation of the Game — 1
28 Language Games — 2
29 Postulation of the Game Rules — 3
46 Post-Modern Conditions — 4

SD 8502

Space Design
No. 245
February 1985

A Monthly Journal of Art and Architecture

Publisher●
Zenjiro Kawai
Executive Director●
Aiko Hasegawa
Editor●
Kobun Ito
Associate Editors●
Hidenori Aruga
Masahiko Yoshida
Koji Aikawa
Michiyo Hamaji
Art Director●
Tsuyokatsu Kudo
Design, Conposition●
Hiroshi Ueda
Toshiyasu Tsurimaki
Design Laboratory
Published by
Kajima Institute Publishing, Co. Ltd.©
5-13 Akasaka 6-chome, Minato-ku,
Tokyo, 107 Japan
Telephone: (03) 582—2251
Printed in Japan
Overseas●
This copy: ¥2,500
(including seamail postage)
Subscription Price
¥30,000 a year
¥50,000 two year
(including seamail postage)
Order form: pp. 105-106

Cover Photo●
Dancing School／P.L. Faloci, 1983

Desire for Building

by Annik Hemery

The main part of the projects I chose to include in this SD issue reflect a new generation of architects recently growed up in France. Building in the outskirts or inside the town, young architects are strictly dependent on the public commission. Competitions clearly set out the right of access to the public commission. Perfectly specified, competitions are always abruptly announced: a site, a program, competing architects, a verdict. It's a hard but inescapable way for most of the architects, a frustating and costly process to check the planning. Nevertheless competitions system has no chance to change: a society has always to find securities and to take appropriate measures to choose the best project.

Moreover competitions are so deeply rooted in French architectural tradition that it is possible, through the way the request is formulated, to relate the French architectural landscape, to rediscover it's calling into questions or it's major trends through the past.

1 = The System of Competition

◎Competition as a 'laboratory of urban forms'

The overthrow of School of Beaux-Arts shattered the way the State allocated it's building commissions. Until the middle of the 60's the near monopoly of works the State usually commissioned —schools, hospitals, social housings, university equipments— passed as one's right to the winners of Grand Prix de Rome, who were becoming chief architects for civil buildings and state courts. This competition, unrelated to the real needs and clearly antiurban didn't stand up to critics of 1968's generation (1). People broke down this tight structure and, at the same, the only way to access to the commissions.

This 68's generation didn't specify the new rules to distribute the public commission. It stands aloof from the problems of production and decided to test and dispatch it's own critics and new theories through the competitions. The 68's architects took the rights to formulate the program:

La Villette's Competition proposed to search on the morphology and typology of the city. The Marne-la-vallée New Town competition aimed to the town and it's complexity. For the Miramas New Town one, to mark out the town and lay it's new basis. For the Isle d'Abeau New Town Competition, to find the urban limits, and so on...

The present of the city, the typology of it's buildings, it's outskirts were straightly taken in hand by the profession through a serie of competitions. These were the first laboratories of urban

More down-to-earth the Ministry of Equipment launched in 1971 the Plan Construction. It's aim trends to promote new trends for the building market and to bring out a national order.

◎**Competitions, seals of quality**

Competitions became the instruments for this policy. The PAN (New Architecture Program) was welcomed by the young generation. It's goal was to call the architects to design new types of living facilities. The HOT (Housing Original by the Energy) had to question the architects on the energy savings. These competitions rapidly became a limited standard course for people who came out from School.

Besides these competitions, state which is the most important program planner and commissioner for the building market, the Town Council of Paris and the R.I.V.P. (2), launched concrete programs at domestic scale.

A social architecture goes to drawn from this policy. It's not a surprise the architect Paul CHEMETOV whose the main works were social housings, received the architectural Grand Prix in 1980.

The public interest for the quality of construction was from that time well-established and made official by the new Architecture law of 1977.

Nevertheless rules of the Public Commission which specify the right to work for a great part of architects was far to be outlined. Verdict's criterions remained vague and moreover, the prize-winning projects were'nt systematically built. Competitions often reflected the extreme nature of this policy: prize-winning candiates who couldn't get the control of the building, 'awarded' or 'noticed' people who were going to swell with their frustration these laboratories from where the historians of new architecture will draw the history of the French urban landscape. Even when the competition came within the scope of the architectural prestige —Opera, La Villette, Treasury Department—, of urban renovation or of New Towns redeployment; in any rates they reflect the economical and political decisions. For the first time the profession let the political power have the control of what it would be proper to do. After the excesses of the urban growth the theme —'Best housing for a best living'— became a political instrument.

2 = Perverse Effects

◎Albums of the Young Architecture

A great deal of competitions followed one another during these last ten years. Even if the modes of competitions don't ensure the prize-winner to build, there is always lots of competitors. Les Halles counter competition was one of the most astonishing: more than 600 projects and nothing to win, nothing to build! In 1980 the Direction of Architecture decided to hold back the incoming tides of researchs and awarded projects. They gathered together these projects and made up the "Albums of Architecture". They dispatched them among the various commissioners. In the flyleaf the Ministry of Environment reminded that "the search of a better architectural quality in France supposes to use all the talents and abilities of this country. It would be interesting to use the considerable amount of researchs, studies and thoughts the competitions hold these last years."

◎The growing of the program

Due to it's excess of details the program went to an overabundant definition. The more important is the project, the more increasing are the schedule conditions and the needs are specified up to the square meter.

For grands concours of prestige, the internationalisation of the entrants showed an increasing need of cultural information for the foreign participants and carried out real books of programs relating the history of the town itself. This was especially true for the Opera Competition, 1983.

Many architects, who came within the winners took extraordinary freedom with the established program. Besides to bring clear and precise answer for a precise program, they are proposing unrelated and artistic designs.

Due to the lack of cultural background or to the lost of historical awareness, these projects are still more spliting up the town. (3) These internal contradictions lead architects such as Jean NOUVEL to enter a polemical architecture, using opposition, contradiction and provocation as a design tool.

3 = Desire of Building

Far from the diktats of competitions some young architects chose to manage without them, and to get back to the total assignment of the project, which was before partly blowed up through the various professionnals. No obvious system governs this agreement. The way to prospect is always original, distinct, and uses all the methods.

Some of them are rebuilding a private practice, cultured and fashionable as CANAL did with Actuel magazine building, Montana fashion shops and so on. A financial or artistic practice for BERGER, GAROUSTE, STARCK SEIGNEUR, FALOCI, by building an architecture for pleasure places: coffees, restaurants, shops.

Some of them are creating for temporary exhibitions light and strange architectural happenings. Few of them even don't hesitate to make up the commission itself by settling Commissioners, financials and lands

owners as BECHEAU did for it's project for a public fountain.

Far from the institutionalized paths of the public commission, the young architects take back in hand their rights to construction. It's a desire of building, and no more of theory alone which motivates the recently graduated people. The drawings still present are no more the aim of a paper architecture but are now seen as tools according to the CIRIANI's teaching.

The models no more compensate for construction. They are no more a miniaturized projection of the reality, but an anticipation of construction. Within the limits of representation of the project, limits of it's marks, architects now consider the project as a physical fact (4).

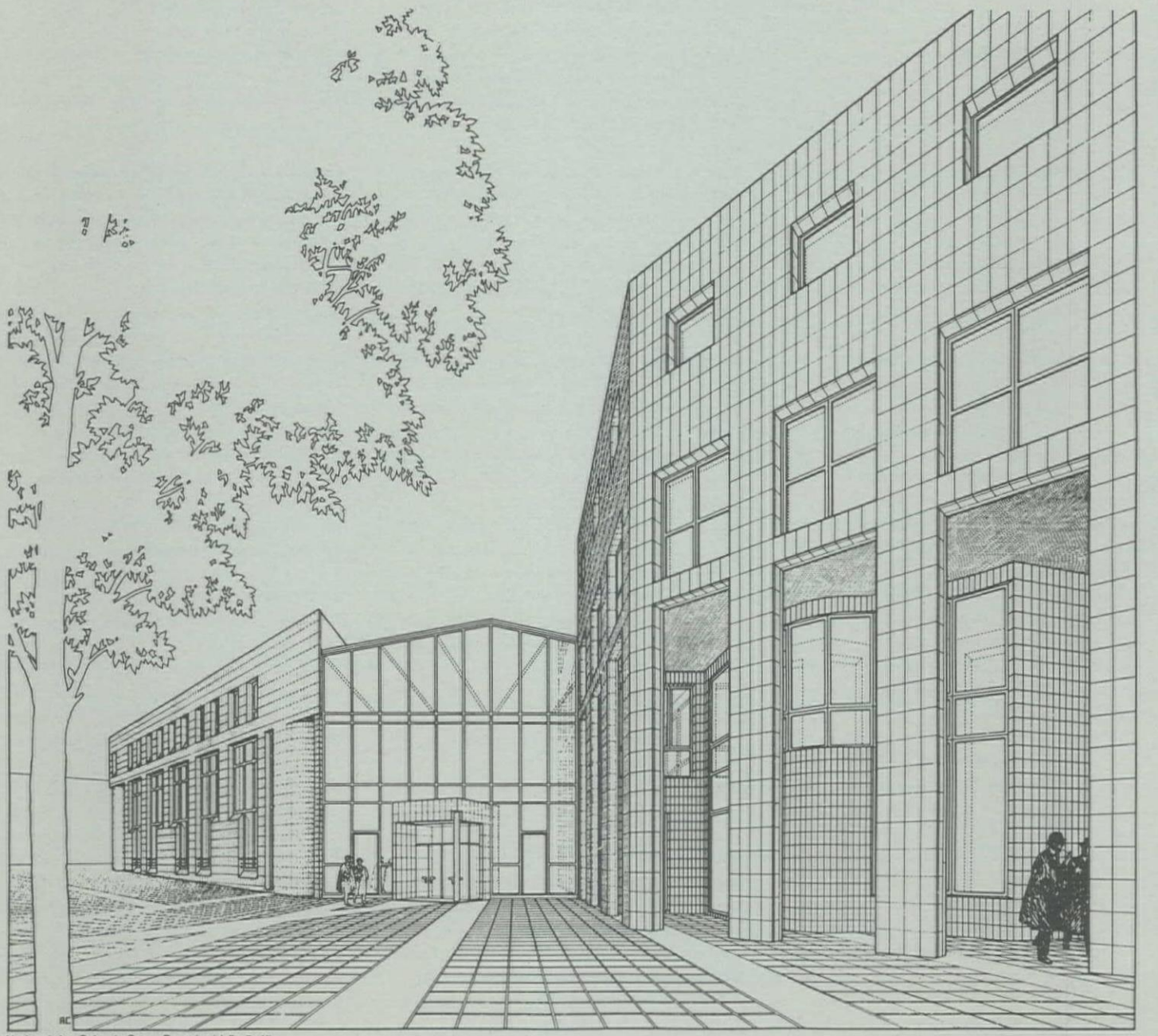
The desire to construction is now so important that young architects invest and investigate without fear or shame every deserted or new born band of architecture.

(1) 1968 was the year of the major revendication movement among students and professionnals of various fields.

(2) RIVP: property state control of Paris Town. Created in 1923 the RIVP was in charge by Paris Town Council to build housings for middle classes inside Paris or in the outskirts. RIVP is controlled the building of most of the municipal belongings.

(3) Françoise Boudon, in an interview —*dialogue between architect and historian*, Artpress no. 2

(4) Maxime Ketoff and Marie Petit in *"L'apprentissage de l'architecture"*, Rome 1982, ed. Francesco Moshini



•National Art School, Cergy-Pontoise/J.P. Buffi

F R A N C E

A New Generation of French Architects

特集＝フランス

ポスト・モダンのフランス建築

Guest editor:Annik Hemery



●レ・ゴデ・クラブ・ハウス、1982　J・ヌーヴェル　Les Godets Club House, Nouvel.

SD8502 6



建築の実現に向けて

アニック・エメリ

今回，この特集のために私が選択したプロジェクトの中核をなすのは，最近フランスで頭角を現わしてきた若い世代の建築家達のものである．　彼ら若手建築家の仕事は，それが郊外に建つものであれ市内に建つものであれ，公共事業体の発注によるものであることが大半である．　そのために競技設計が，公共事業との関連の中で重要な位置を占めるようになったわけである．　しかしそれが行なわれる時には常に敷地，プログラム，参加建築家名，審査等の細かい要項が突然に発表されるため，参加する建築家にとっては，プランニングを十分に検討することは，必須であるとはいえ時間的に困難であり，また費用のかかることでもある．　それでもなお，競技設計というシステムが改善されるという動きはない．社会は最良のプロジェクトを選び出すために，確実でしかも適切な審査の基準を選びとらなければならないのでそうおいそれとは変えられないという事情もあるのである．

ともかくも，競技設計という方式はフランスの建築的伝統に深く根ざしているので，競技設計のあり方を考察することによって，フランスの建築的背景をうかがい知り，またフランス建築の主な傾向や問題点を再発見することにも通じるのである．

1＝競技設計のシステム

◎都市形態の実験室としての競技設計

ボザールの混乱によって，それまでは国家からボザールに与えられていた設計の依頼の道はぷっつりと跡絶えてしまった．　すなわち，60年代の中頃まではボザールのローマ大賞に輝いた人が当然の権利であるかの如くに，国家がいつも依頼する仕事――学校，病院，社交場，大学施設等――を殆んど独占的に手に入れていたし，同時に公共建築や裁判所のチーフ建築家となることができていたのである．　しかし，現実的な必要性とは無関係で，かつ明らかに反社会的性格をもっていたこの大賞獲得競争は，1968年世代[*1]からの批判に耐えうるものではなかった．　そしてそのために，この型にはまった関係は打破され，それまでの公共建築の設計の仕事を得る唯一の窓口は打ちくずされたのであった．

この1968年世代の人々は，公共事業の仕事を複数の建築家に分配させるための新しいルールをうち立てようとはしなかった．彼らは，実際の生産という問題からは一定の距離を保ちつつ，競技設計という形を通して，自らの批評や新しい理論の有効性を試そうと考えたのである．　そして1968年世代の建築家は，競技設計のプログラムを規定する側にまわっていったのだった．

その結果，ラ・ヴィレットの競技設計では，都市における形態学や類型学への探求が提案され，マルヌ・ラ・ヴァレのニュータウンの競技設計では，街と街の複合性が目指され，また，ミラマス・ニュータウンの競技設計では新しい基盤に基づく町作りが，そしてイル・ダボー・ニュータウンの競技設計では都市的な境界を見い出すことが目的とされた，等々という具合になった．

都市のあり方とか，あるいは都市の中の建築や郊外地の様々なタイプの開発が，これら一連の競技設計を通して多くの建築家の手にゆだねられた．　その結果これらの競技設計が都市形態をテーマとした最初の実験となったのである．　実際に1971年には，公共施設建設省は建築界に新しい傾向を推進させ，国家からの要請を具体化させることを目的とする〈プラン・コンストラクション〉を創設したのだ．

◎競技設計――質の確証

こういった政策は競技設計を利用して進められていった．　PAN（ニュー・アーキテクチュア・プログラム）は，建築家に新しい生活様式のデザインの提案を求めたために，若い世代から歓迎をうけ，HOT（ハウジング・オリジナル・バイ・ザ・エナージー）は，建築家に省エネルギー問題を呼びかけた．　そのため，これらの競技設計に参加することが，学校を卒業したての人々にとっての一種の登竜門となったのだった．

しかし一方，これらの競技設計とは別に建築界に対する重要なプログラム製作者でもあり，依頼人でもある国家やパリの市議会，R.I.V.P.[*2]は独自に住居規模の仕事を推進した．　そしてこの政策によっていくつかの建築が生み出され，その下に1980年には公共集合住宅を代表作とする建築家ポール・シュメトフが建築グランプリを得た，ということも至極もっともなことであったのである．

また，施工の質の高低に対する一般的な関心も，この頃から定着し始め，それが1977年には新建築法によって成文化されていった．

しかしながら，大部分の建築家の職務のための権限を決定してしまう公共事業の方針については，その概要を述べることは困難であり，審査規準は依然として茫然としたものでしかなく，さらには受賞作品が計画通りに実施に移されるということもない．　そして競技設計には，しばしばこの政策の特性が反映されてくる．　すなわち，現実には建物に手を下すことのできなかった受賞候補者，建築史家が後世になってフランスの都市景観の歴史を記す源とするであろうこれらの実験に対する欲求不満でいっぱいの〈受賞者〉が現われたのである．たとえ競技設計がオペラ座やラ・ヴィレット，大蔵省のように建築的評価を得て，都市改革的役割を果たし，もしくは新都市の再開発をかなえたとしても，少なくともそれらの建物は経済的・政治的決定のあとを追うものとして位置づけられている．　建築家という職業が，歴史上初めてといっても良いほど，政治権力に何をすべきかという管理権を持たせてしまっているのである．

過度に都市が成長した結果,「最良の生活のための最高の住宅」というテーマは，政治のプロパガンダの道具となってしまっているのだ.

2＝反動

◎若手建築家のアルバム

多くの競技設計がここ10年間に次々と開催されてきた. そしてこれらの競技設計の方針が，たとえ受賞者にその競技設計案で実際に建設するという確証を与えないとしても，多くの人々は競技設計に応募してきた. 例えば，レ・アールのカウンター・コンペでは,600以上もの案が提出されたにもかかわらず，賞に該当するものはなく，どの案も現実化されなかったのである.
そのため1980年に建築管理局は，それまでの研究作品や受賞プロジェクトを集めて〈建築アルバム〉を作製し，それを各方面の関係者に配布した. このアルバムの見返しには，環境庁からの次の言葉が記載されている. 「フランスにおいて，質の高い建築を追求するためには，フランス内にあるあらゆる才能や可能性を駆使する必要があり，そのためにここ何年間かの競技設計で得られた多くの研究，論考，思索をひろいあげることに関心が寄せられている.

◎増大する競技設計の要求事項の問題点

競技設計のプログラムは細部にこだわりすぎたために，限界を越えてしまった. 計画が重要なものであればある程，競技設計の日程は複雑となり，要項は細かい必要面積まで詳しく明記されてゆく.

権威あるグラン・コンクールでは，参加者が国際化したために，外国人に対する文化的情報を数多く与える必要性が高まり，その町自体の歴史に関連した部厚い本までが作成された程である. それらは，1983年に行なわれたオペラ座の競技設計において，特に念入りに実施された.

しかし，受賞に預かった多くの建築家は，競技設計の要項を大変自由にとらえている. つまり，厳格な課題に対して明快で精密な案を提出するだけでなく，建築家たちは要項とは直接の関係を持たない芸術的なデザインをも提案しているのである.

ところが，これらのプロジェクトは依然として文化的背景を欠き，また歴史的認識が不足しているために，町全体をズタズタに切りさいてしまうことにもなる.*3 こういった内部的な対立の結果，ジャン・ヌーヴェルを始めとする建築家は，対立性や多様性や誘発性という手法を，デザイン・ツールとして用いるポレミークな建築の世界へと進んでいっている.

3＝建築の実現に向けて

若い世代の建築家たちの中には，競技設計一辺倒という事態を逃れ，競技設計に頼らずに仕事を進め，プロジェクトを総合的に請負う方式にもどるという道を選択する者も現われてきた. それは他の様々な職業においても，一部の人々の間には以前からそうあるべきだと言われてきたことである. 分野を越えたこういう共通の見解には，明らかな筋道が一貫してあるわけではない. 未来を予見する方法は常に独創的で，特殊であり，あらゆる手段を用いるものなのである.

若手建築家のうち何人かは，キャナルがアクチュアル・マガジン・ビルディングやモンタナ・ショップ等を手がけたように，文化的で当世風な性格を持った個人的な作業に戻ろうとする. コーヒーショップ，レストラン，商店といった娯楽施設を手がけて，芸術的もしくは商業的なデザインの道を進もうとする人もいる. 即ち，ガルースト，スタルク，セニュール，ファローチ. また，彼らのうちには，一回きりの展覧会のための照明や，建築的に面白いイベントのための創作を行なっている者もいる.

ただ，ベショーが公共の噴水のプロジェクトで示したように，公共事業家や資本家，地主を組織してやることによって，事業自体を創り出すという方向に関しては，ほとんどの者がためらいを感じていることも確かである.

若い建築家達は，公共事業に関わるという制度化された道は取らずに，実際に物を建てるという権利を再び手中に収めようとする. それが建設への欲求であり，大学を出た人達も単に理論だけを原動力とすることはないのである. 現在までは，ドローイングという表現手段は，単なる紙上の建築という以上の目的を持たなかったが，シリアニの教える所によれば，それは今やデザインの大切な道具となっている.

模型については，これもまた実際に建てられないことを埋めあわせるためのものではなくて，現実のものを縮小して投影しているものと考えられている. プロジェクトという限界の中にあっても，今日では建築家は，それを物理的な真実（実際に建てられるべきもの）と考えているのだ.

実現する建築を設計したいという欲求は，今や大きな重要性をもち，若い建築家達は，恥じたり，恐れたりすることなく，既成の分野や，新しく生まれた可能性を研究し，それに向けて精力を傾けるのである.

(訳＝榎本弘之)

●Annik Hemery／建築家，在フランス

■注

＊1 1968年という年は，様々な分野において，学生や職業人の間に大きな改革運動がおきた年であった.

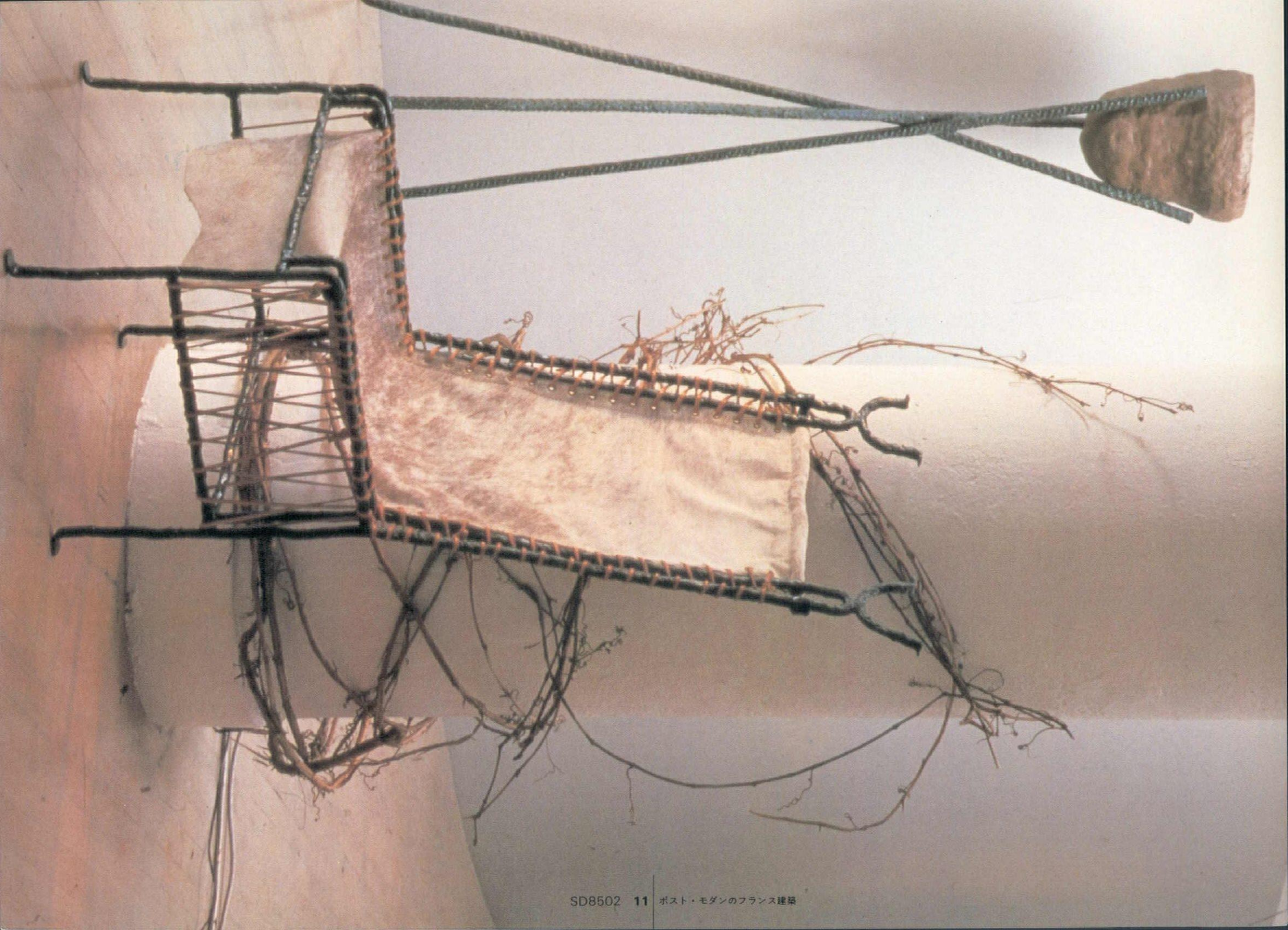
＊2 R.I.V.P.——パリ市街地不動産管理局.
1923年，パリ市内及び周辺部に中流階級のためのハウジング計画をすすめるために，パリ市街地評議会の下に設けられた. 市当局の所有するほとんどの建物を管理している.

＊3 Françoise Boudon, 'dialogue between architect and historian,' 〈Art press〉 No, 2, 1983

＊4 Maxime Ketoff and Marie Petit, "L'apprentissage de l' architecture", Rome, 1982 ed. Francesco Moshini.



●EXPO〈20世紀の家具〉の展示(ドレッシング・テーブル〈メニール〉,ブロンズと皮製の椅子),1983　ニューヨーク／ガルースト&ボネッティ　Dressing table"Menhir"and Chair／Garouste & Bonetti.



ゲームの規則 1.

ゲームの要請

松浦寿夫

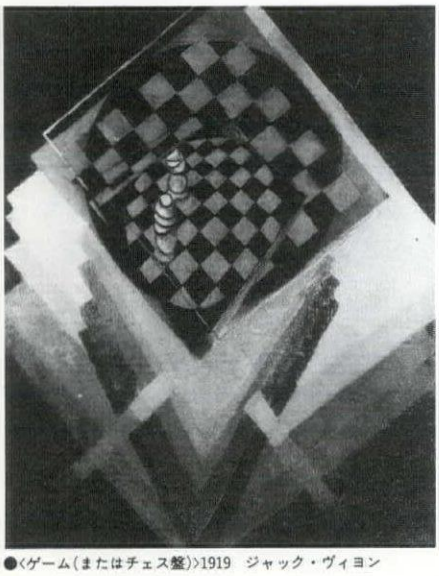


●チェスをするマルセル・デュシャン

チェスゲームの偏愛というぬきさしならぬ事態が生起する，ことのほか表層的な空間を言語をとおして実現したものといえば，おそらく誰もがあのルイス・キャロルによるアリスの物語を想起せずにはおかないだろうけれども，今世紀初頭の知の配置図のなかでたびたびチェス・ゲームへの暗示が繰り返されたということは周知のとおりだ．　それは，たとえば，絵画とチェス・ゲームとの間には多くの類似点があるとして，

> チェスのひとつのゲームは，視覚的・造形的なひとつのものであり，静態的な意味では幾何学的とは言えなくても，動くのですから力学的なものでもあります．　それはひとつのデッサン，メカニックな現実です．　駒はそれ自体としてはたいしてきれいなものではありませんし，ゲームの形式にしても同じことです．　でも，きれいなのは――〈きれい〉などという言葉を使ってよければ――運動です．　だから，それは，たとえばカルダーのモビールのような意味で，まさにひとつのメカニックなのです．　たしかにチェスのゲームには，とくに運動の領域できわめて美しいものが存在します．　しかし視覚的な領域には，まったくありません．　この場合，美をつくり出しているのは，運動の，あるいは身振りの想像力なのです．　それは完全に頭の中でのことです（ピエール・カバンヌ〈マルセル・デュシャンとの対話〉）

と語るマルセル・デュシャンにも顕著にみられることである．　とはいえ，それは絵画制作を放棄し，チェス・ゲームに没入したというようなデュシャンの個人的な逸話を強調するということではないし，1910年に頻繁に描かれたチェスのイコノログラフィー――もちろん，それはルネサンス的な遠近法に立脚した，深さをだまし絵的に喚起する絵画空間に対して，表層的な空間を対置するという意味でたしかにルネサンス的絵画空間との断絶の符号たりえるけれども，それだけならば描かれた壁紙も絨毯もチェス盤も同じく資格たりえるはずだ――に集約されるわけではなく，チェス・ゲームという隠喩の要請をひとつの思考の枠組として考えてみなければなるまい．　この隠喩はデュシャンに限らず，マティスにも，ナボコフにも，ソシュールにも，ヴィトゲンシュタインにも（あるいは〈ケルントナー・バー〉の床に市松模様を配したアドルフ・ロースにも），頻出しているのだが，いずれの場合もこの隠喩の使用の様態はある種の同質性をそなえているようだ．



●〈ゲーム（またはチェス盤）〉1919　ジャック・ヴィヨン



●チェスをするマルセル・デュシャン



●〈チェスをする人たちの肖像〉1911　マルセル・デュシャン



●〈迅速な裸体の群れに囲まれた王と王妃〉1912
マルセル・デュシャン

一例としてソシュールの場合を考えてみれば，すでに丸山圭三郎氏が明晰に分類しているように（〈ソシュールの思想〉），

(1)内的言語学と外的言語学の区別
(2)形相（フォルム）と実質（シュブスタンス）の対立
(3)体系内の差異の対立化から生ずる価値の概念
(4)通時態と共時態との対立

という四つの類型に区分されるようだが，なかでも，

> 駒のそれぞれの価値は盤上でおのおのの位置に依存しているが，言葉（ラング）においても同様に，おのおの辞項の価値はすべての辞項との対立によって定まる

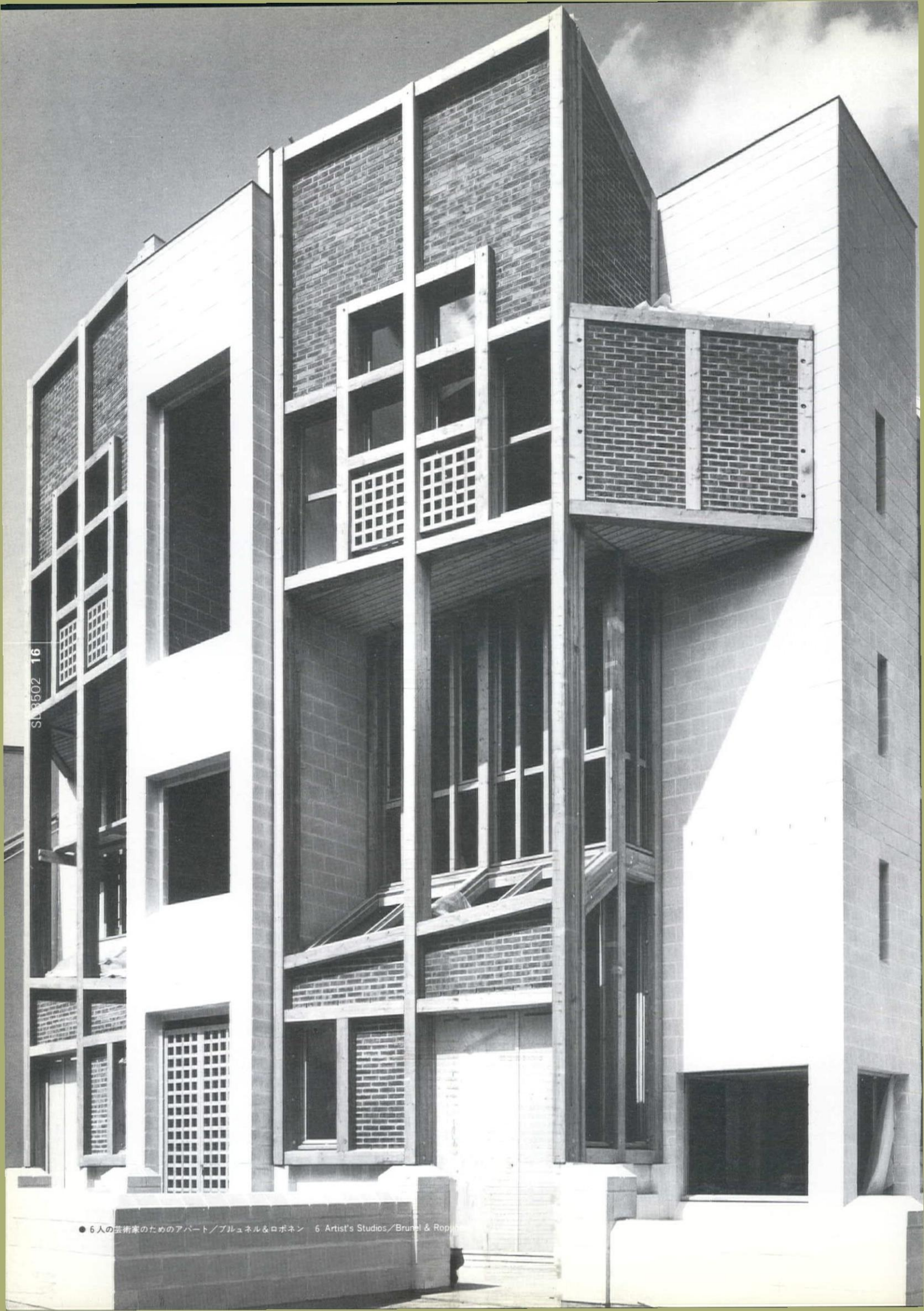
というソシュールの一節にとりあえず注目しておくことにしよう．　というのも，この点にこそ，「対立，それはこれこれの操作を可能にするシステムです．　組合わされた盤の目というものは，対立と同じものです」と語るデュシャンや，「事物間の差異だけを描く」というマティスが，それぞれチェス・ゲームへの暗示を要請する際の枠組との同質性がみられるからなのだ．この場合，チェス・ゲームの起源や由来を問うということではなく，その駒がどのような素材で作られているかはゲームそのものにとっては何ら関与的ではなく，ただ駒と駒とが互いに対立しあいながらチェス盤で占める位置の関係だけが，チェス・ゲームの根幹となっているということであるのだから，このような関数的な思考の様態の一変奏を構造主義的な思考と呼んでみることもできるだろうし，事実，レヴィ＝ストロースの神話分析のなかなどではゲームがたびたび要請されている．　その場合，ゲームの要請とは，絶対的な起源，ないし中心といった把握しがたい問題設定からではなく，とりあえず構造や関係から出発してみるという明白な決断のことである．　しかも，経験的にあらゆる神話を採取するということが事実問題として不可能である以上，神話の総体の記述ではなく，現実の神話が生起する際の一群の規則を素描することがその課題となるのだから，レヴィ＝ストロースはこの非総体化の作業を「経験性につきまとう代償としての有限性という概念のもとにではなく，ゲームという概念のもとに規定する」（ジャック・デリダ，「人間科学の言説における構造，記号，ゲーム」〈エクリチュールと差異〉，傍点原著者）といえるだろう．

レヴィ＝ストロースは，自らの作業を基礎づけるにあたって，感性的／叡知的という形而上学的な対立を記号の次元に身をおくことによって，一挙に克服しようとするのだけれども，しかし，記号とはつねに感性的／叡知的といったような対立によって決定されている形而上学的な概念ではなかったろうか．　だが，彼はここで記号という古典的な概念を，その限界を露呈させつつ有効な範囲で用いているのだけれども，これに対して，もはや記号という概念を媒介とすることのない公理体系に立脚した形式化の作業を押し進めることによって，このゲームの空間を〈数の空間〉として記述しようとしたものが，ジュリア・クリステヴァの《セメイオティケ》という著作であった．　ここで，錯綜した日常言語とはちがって誤謬の入り込む余地のない論理的な言語によって世界を記述しようと試みた，《論理哲学論考》のヴィトゲンシュタインを想起することもできるだろう．　もちろん，クリステヴァの場合，語りえぬものの領域を，語りうるものの範囲を限定することによって内側から限界づけようというヴィトゲンシュタインの課題のように日常言語のあいまいな起伏を無意味として一方的に排除してしまうのではなく，日常言語やさらには詩的言語まで含めて言語の潜在的な無限の可能性をも偏差として基礎づけるような公理体系が構想されているのだから，その苛烈なまでの形式化の徹底は，ゲームの空間を科学言語と同時に詩が生起する葛藤の空間へと変貌させるかのようだ．（→P.28）

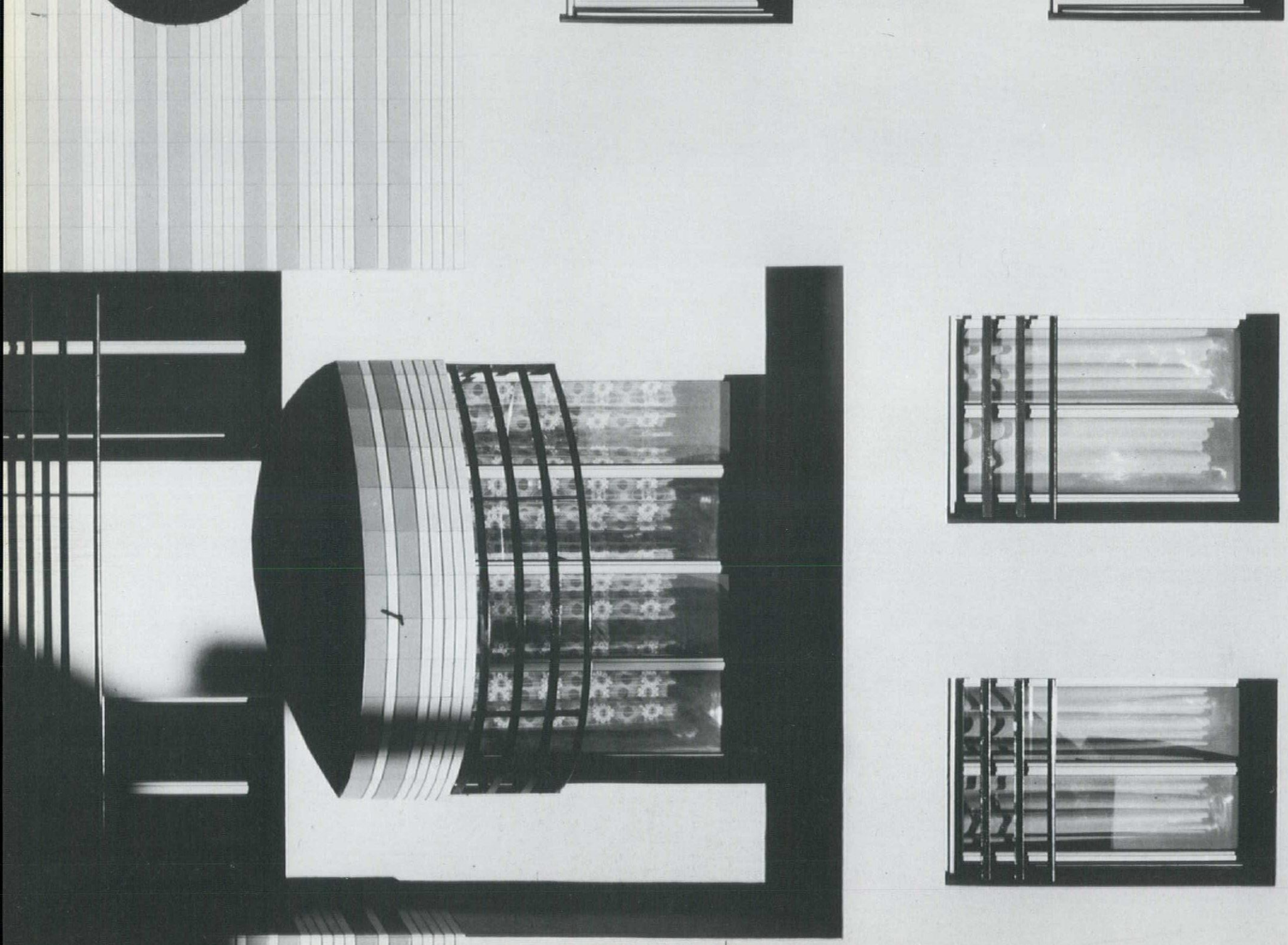


●…ュ通りのアパート｜J.P.ビュフィ｜Housing, rue Mathis／J.P.Buffi

SA 8502 16



● 6人の芸術家のためのアパート／ブルュネル＆ロボネン　6 Artist's Studios／Brunel & Rop



現代フランス建築の特色考

進来 玄

フランス建築の復活を告げる現代作品のひとつとして，シリアニ(p.22-23)のノワジー2がよく取り上げられる．　シリアニが日本の著名な建築写真家にこのノワジー2を案内した時のエピソードとして，彼自身が私に語ってくれたことがある．

「日本には世界一と誇れるような建築会社が幾つもありますから建築をすることは楽です．　フランスには世界最悪と言えるような建築会社が沢山あります．　なのにあなたはこんな素晴らしい建築を手がけられた．　だからあなたは世界一の建築家のひとりだと言えましょう．」彼はこう言ってシリアニを誉めたという．

もっともフランス建築が最近まで世界から忘れられていたとすれば，それはフランスの建設業界の質に問題があったからだけではなく，フランス建築界内にも問題があったからであろう．　ボザール・アカデミズム，アール・ヌーヴォー，モダニズムを通じて世界に波紋を投げかけた作品が誕生した時代は，ディテールにまで及ぶ，作者達のデザインの質に対する要求が反映し，建設会社側の施工精度に対する気配りとなった．

そして今，フランス建築の質が再び高まりつつある．　ニュネズ-ヤノウスキーが，ピカソのアリーナ(p.44)を建てる時に採算がとれなくなりかけたことがある．　この時は，世界を前にしても恥ずかしくない作品を残そうという強い意志が，建設会社とPCメーカーにあったから，彼の思想が作品として誕生したのである．　逆に，彼の熱意のこもったデザインがあったからこそ，メーカー側も頑張る気を起こしたとも言えよう．　また，パリのコンセルヴァトワール計画では，ポルザンパルクが計算不可能と言われたマザラン・ヴォルト作りを使った螺旋階段を設置した．　この時も，過去にいくらマザラン・ヴォルトが立証されていても，手抜き工事をされては，この構法採用の決断に踏みきれなかったであろう．

第二次大戦後，デザイン面からだけでなく施工面でも，フランス建築の質が低下したのは，建築家の建築デザインに対する追求が皆無であったからに他ならない．　モダニズムがフランスで普及した時期でもあることから，建築家はインスピレーションだけで傑作が生まれると思い込んでいた．それに，戦後の建物不足の折でもあり，注文は確実に待機していたから，建築家は自分の手法を見直す必要性を感じなかった．この頃の建築界は1968年の5月革命以降とは正反対で，社会学等の他の学問とは孤立していた．　また，彫刻として扱われていた建築は，ディテールまでのデザインをしなかった．　建築は建築業界以外のパートナーとは無縁の世界だったのである．

◎5月革命以降の建築の懺悔

ボザール・アカデミズムへの批判からアール・ヌーヴォーが誕生し，アール・ヌーヴォーへの批判からモダニズムが誕生した．だからモダニズムへの批判から，ある新しい派がフランスに誕生しても不思議ではなかった．

モダニズムは，道徳的精神から美を通じて社会に貢献しようとした．　また，調和からなる美なしには社会に貢献できなかったとした．　従ってホラインのように，道徳的精神を捨て，フランスでも美だけを目的とする建築を目指す建築家の誕生があっても良かった．　または逆にヴェンチューリのように道徳的な姿勢を捨てずに，美に対する執着のみを捨て，醜さも社会に貢献し得るものとする建築家が誕生しても良かった．　しかし，先に述べたようにフランスではモダニズムの大衆化があまりにも悲惨な建築に繋がったこともあって，単にモダニズムのみを批判する新派の誕生にはならなかったのである．

他の国でもそうであったように，フランスでも5月革命を境として，建築にも，他の分野である社会学，言語学等が進出した．　これはフランスの場合は，建築を明らかなものとして，より確かな専門とせず，逆に建築の無力な面を強く意識させる結果となった．

戦後の建築ブームが残した都市環境の大混乱(カオス)に対し，その繰り返しを避ける為に建築家に残された道は政治を覆すべく学生運動に参加するしかない，とまで極論するボザールの学生達も5月革命以後出現した．ホラインは芸術家としての建築家の自立性を主張し，ヴェンチューリは総てのものから美を見つけ出し，双方ともかなりオプティミスティックな態度を示していた．　しかし，これとは裏腹にフランス建築の過去が尾を引いているせいかフランス建築家の思想は，先輩達の犯した罪を未だ背負っているらしく，虚無主義的ではないが，時にペシミスティックがかっていたりする．
また逆に，未来に希望を持てる作品を作る建築家は，建築と葛藤している．

いずれにしても，家具はともかくとして，フランスでユーモアの美学，ジョークの美学からなる建築が見られるようになるのは，まだずっと先のことであろう．　例えば2本のゴールデン・ゲート・ブリッジの掛けられた住宅のような．　5月革命以降のフランス建築は，ジャン・ヌーヴェル(p.45)を筆頭として，どことなくひねくれている．　しかし，もし，今日のフランス建築に面白味があるとすれば，それはこの悲観性にあるのかもしれない．　アンドレ・ジイドは「好意だけでは良い文学にはならない」と言ったが，フランスの建築家の一部は正(まさ)しくジイドの考えを受け継いでいると言える．　物事をどの位，好意的に見ているかどうかでフランスの建築家を分類することもできよう．

◎正直派

建築及び建築家が自己主張することなく，プログラムや環境と，出来るだけ良い関係を保つ．　環境への溶け込みが要求されない場合は，与えられた条件を無理なく満たすことで建築をこぎれいに収める．　矛盾なき多様性というべきか，それとも近代都市は充分矛盾に満ち満ちているのだから，建築が今更矛盾を演じなくても良い，ということであろう．

彼等にとっては，イデオロギーとしての建築を扱う時代は終わったのである．

(→P.19)



●カンカンポア通りのアパート／P.ベルジェー　4 Apartments, rue Quincampoix／P.Berger

モダニスト思想の裏に道徳的イデオロギーがあったように，18世紀を原型とするユートピア都市を惜しみつつ，何が何でも都市のヒーローである広場・塔・アーケードをプロジェクトに必ず付けたがるベルナール・ユエに代表される歴史主義派にも同意できない．

サン・ローのグエリー地区開発の際，ヴィンセント・バレー，チャールズ・ベイル，パトリック・ベルジェー (p.43) の３人は，厳格すぎるグリッドは都会的すぎて不自然であると判断した．　また，牧歌的な村を装っても，それは周囲から孤立してしまい，仮空のオアシスと同じになってしまうと考えた．　そこで総ての論を捨て，サン・ロー付近の建物を連想させながら，丘を含む敷地条件に一番上手く利用し得る都市空間，建物の形状の選択から出発することにした．　正直派の手法はソフトからでなく，ハードからの出発となったわけである．

〈広場の家〉は，この地方特有の二重切妻壁を引用している．　しかし，裏にある付属部分にも二重切妻壁を用いるとしたら，それは形態的に無理が生じる．　それに多分予算的にも苦しくなるに違いないので単なる箱に仕上げる．　そして異なった二つを結ぶ為，彼等が称するところの〈抽象的亀裂〉にバルコニーを挟む．　この建物は広場に対してはしつこくない単調性を持ちながら，自らはモニュメントとしての立場を果たしている．

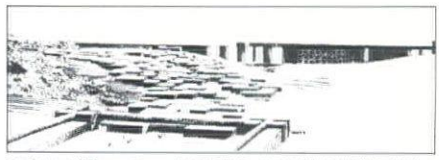
この派に属すると言えるビュフィ (p.24-25)，リオン (p.26)，ワテル (p.31)，アルシステュディオ (p.27)，ドヴィレー (p.38) 等の共通点は，彼等が，人間を都市や建築のヒーローとしていることであろう．　その人間は，美しいプロポーションを持つでもなく，時間が許すときに体を鍛えるモデュロールでもなく，打ち放しコンクリート壁の間で簡素で知的な生活を過ごす近代の僧侶でもないのだ．　ワインを好む普通のフランス人であり，建築にはさして興味がないが，暖い環境を与えてやれば，それを大切に使ってくれるだろうし，建築に少し興味を示すかもしれない．

いずれにしても，建築が上手く機能するかどうかは，完全に使い手に委ねられている．　ビュフィが，セルジー・ポントワーズの国立芸術学校 (p.24) を設計する時に，同じ言語を内部のホールと外部の２本の道に用いた．　これは，室外空間としての居心地良さを外部に伝達し，また外部空間としての厳粛さを内部に伝達している．　それは両方が上手く交わっている時に，人間の空間に対する最も良い反応が現れるからであろう．　建物と人間の調和の為にフランク・ロイド・ライトは自然と建築の人工的領域の境を失くそうとした．　そして同じ人間の精神的調和の為にビュフィは，都市空間の形式的領域である外部空間と日常的領域である内部空間の境界を，この計画で失くそうとしている．

アルシステュディオがモンモリヨン病院 (p.27) を設計するときに，「医療に人間性を取り戻す」という言葉を使っている．　リオンはドラギニャン裁判所について私に，こう語ってくれた．「裁判所は住民にとって身近な制度を象徴する建物でなくてはならない．　ホールはドラマの場である．　時には殺人のような悲劇の主人公も通るが，日常的な小さなドラマが話し合われる場でもある．　敷地境界線についての揉め事のような．」

つまり，彼等の建築は絶えずモニュメンタリティーと日常性との間を往き来しているのである．　モニュメンタリティーの意味が〈記念性〉であるのなら，それは文字通り，彼等がヒーローとしている普通の人間の，平等社会では極くありふれた日常的環境を記念するものとして，建築があるのであろう．

パリのマティス通りに面した敷地の奥の境界線が斜めであっても，オスマンが手をつけたパリにそんな例は幾つもある筈だ．ビュフィはこの敷地の日常的（ドメスティック）な面を，公的ファサードのオスマン建築を原型として，冷たすぎるシンメトリーからの脱出に利用した (p.25)．　リオンはドラギニャン裁判所のモニュメンタリティーを，木とＰＣで作られたレースで蓋った．　かと思うとタウン・ハウスのドメスティックな雰囲気に欠けているモニュメンタリティーを与えるために，ロシュフォール・ハウジング計画 (p.26) では道路側の外壁に２世帯でシンメトリーを作り，裏側の外壁とスキップをさせた．



●イル・ダボー・ニュータウン計画，1975／H.シリアニ，AUA

ジョン・サマーソンは1941年，建築の危機は建築家が自分の役目を忘れてしまったことにある，と発言した．　建築家は建物そのものより，建物とその社会的背景やテクノロジーの進展具合との関係ばかりを気にするから自分の役目を忘れたのである．正直派達は，まず作る建物とその近辺の環境を重視する．　そして民主的社会の建築は，必然的に平凡化する運命にあるが，シュメルゾーン同様，G.W.ライプニッツ使うところの意味から建物の個別化をはかるのである．

◎建築界の十字軍

シリアニが〈モダニズム建築〉，ニュネズ・ヤノヴスキーが〈パリ建築〉，モンテス (p.32-33) が〈18世紀地方建築〉，ボーフィルが〈古典建築〉や〈バロック建築〉を用いる時，彼等は共通してユートピア都市を目指し，建築を闘いの為の武器としている．　彼等は闘士として，あらかじめ整理され厳選された要素を規則とし，それらの規則を犠牲を払ってでも守り抜く．

実現を見ることのなかった1972年のエヴリー・コンペや1975年のイル・ダボー計画に引き続いて，ノワジー２，３をもってシリアニが設定した目的はどのようなものであるか？

・只々広がっていく新都市を食い止める．
・あまりにも鋸歯状態にある，その水平線を少し整理する．
・人間や車の通り道の両側に建築群を集めて，その道を密度ある空間にする．

クール・ダングル計画 (p.22-23) ではシリアニの二つの公準が実行されようとされた．ひとつは〈透明感〉，〈フリー・プラン〉，〈水平方向の広がり〉の三つの概念を支える20世紀の〈近代空間論〉である．　もうひとつは，〈スケールの跳躍〉と〈幾何学の組織網〉に支えられる建築による，都市空間の支配である．

クール・ダングル集合住宅と，サン・ドニの保育園は，双方の矛盾し合う手法を見せることで，この戦略の弱点を見せてい

(→P.21)



SD8502 20

●セルジー・ポントワーズ国立芸術学校／JPビュフィ　National Art School, Cergy Pontoise／J.P Buffi

る．　保育園では〈近代空間〉が見事に実現化されているが，それは建物が小規模であり，平屋であったからである．　従って，到底，都市には貢献し得ない存在となる．一方，集合住宅は，シリアニが良く使う〈アーバン・ユニット〉という言葉にふさわしく，充分に固められた物体として周囲を支配する力を持つ．　しかし，〈近代空間〉は住居内に見られないばかりか，普通の住宅としては開口率もかなり悪い．　そして共有スペースで試みられている〈近代空間〉は，残酷にも防火扉によって水平方向の広がりを何ヵ所にもわたって傷つけられてしまっている．

これらの無理を解消する意図からとでも言うべき建築をしているのが，ボーフィル，モンテス，ニュネズ-ヤノヴスキーであろう．　彼等は，室空間に対する野心を極力抑え，その代わりに外壁が伝達するメッセージと，建築群が構成する都市空間にデザインの全力を向ける．

モンテスは，フーリエのファランステール・コミュニティーを思わせるセルジー・ポントワーズのピュイズー集合住宅で，古典主義建築の見直しをしている．　伝達されるメッセージは，ラショナリズムに支えられる民主社会とヨーロッパ文化が永遠であることを唱えている．　彼は，クラシシズムのないヨーロッパ文化は在り得ないと指摘する．　そればかりか，コルビュジエ自身も近代の古典主義建築家であったように，今後もヨーロッパ建築に於いて，古典主義建築の見直しが行なわれても不思議ではない，と言う．

U型の建築群が向かい合わせに設置されているピュイズー集合住宅は，孤立した広場を作り出している．　集合住宅というよりは町役場を思わせるこの建物が囲んでいる空間は，秩序や調和からなるオアシスである．　建物は，シリアニの建築のように周囲を支配するためではなく，オアシスが犯されないためにあるようなものだ．

彼等を，都市環境が進んでいく大混乱と戦う十字軍だとしたら，シリアニは前線に立って戦う兵士であり，ボーフィル，モンテス，ニュネズ・ヤノヴスキー達は，砦を築く兵士達であると言えよう．

◎ラディカリスト達

もしかすると虚無主義建築と言うべきなのかもしれないが，彼等の美学は崩壊の美学である．　それ故に彼等は建築から美を追放しているとも言えよう．

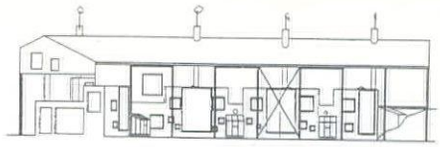
それは勿論，モダニズム批判から来ているのだが，彼等が指摘するモダニズムの過ちは，モダニズムが批判していたアール・ヌーヴォーやクラシシズムの中にも潜んでいる．

彼等の崩壊作用は，建築から手法を追放した．　そして建築の置かれている環境からだけでなく，テクノロジーや流行漫画等あらゆる分野，さまざまの次元からの題材を使い，ぶつけ合わせた．　手法のない手法からの建築は，従って理想を基本的に持たない．　社会がどうあるべきかというような問題には沈黙を守り続け，一方では話題性に富んだ環境を作り上げようとする．

バゴがランス山岳自然保護地域本部ビル(p.40-41)を設計した時は，ある抽象画を出発点として，屋根，壁，開口部，階段等の家の基本要素を手がけたという．　そして構造体の断面をできるだけ小量化し，非構造体をオーヴァー気味にした．　ついでに田園に良く見られる牧歌的雰囲気の漂う農家と同類に思われないように，バラック建築のブレース，H鋼，トタン屋根を用いた．結果はスキゾ的になり，建築を解読するための糸口を我々に与えてくれない．

このように推論に基く解釈に従わない建築は，合理性を否定しないどころか，彼等の建築ほど理に適ったものはないと言える．　単に，多様なのではなく，建物の建つ広い意味での環境との関係を極限までに分析し，分析の結果出た矛盾し合う要素内での選択を避け，　解答を探すのである．適切な解答を見つけるためには手段を選ばないが，建築活動の総てには明確な理由付けが要求されている．　更に理由はひとつでは足りない．　ベルナール・ポールがアフリカのお面を集合住宅(p.34-35)に用いるのにも三つの理由がある．　空間体験の豊かさ，単調な曲面による穏やかすぎるモニュメンタリーを湧きたたせる，建築の絶対的な個性化，の3点である．

状況の分析が建築デザインの最大の出発点であるなら，建築が到達すべきところ



● ランス山岳自然保護地域本部ビル，1980-81／H.バゴ

は極論の世界である．　近代社会の特徴は，何でもかんでもが正当化されてしまうことであるから，何をしたら良いか，何をしたらいけないかの判断もつけ難い．　状況の分析後に建築家が見つける解答の絶対的な裏付けも不可能である以上，その解答価値は，解答そのものの説得力にかかっている．そして，建築に説得力を持たせるためには，その言語が少々野暮ったくても，少々失礼にあたっても，とにかく印象深ければ良いのだ．　丁度，ジャン・ヌーヴェルの建築がラディカルであるように．

◎もうひとつの分類

以上の分類は現代フランス建築の全貌を取り込む事を目的としたのではなく，フランス建築の最もオリジナルな姿勢を紹介したにすぎない．　更に，現代フランス建築の全貌を理解してもらうために，もうひとつの分類でも識別される四つの方向について，付け加えてみたい．

歴史主義派は，クラシシズムやオスマン時代の都市の構成パターンに学び，道路，建築群，広場，の組み合わせから伝統的街並を甦らせようとする．　アントワーヌ・グリュンバック，ベルナール・ユエ，モンテス等がそれにあたる．

ポピュラー派はヴァナキュラー建築と，カタログ建築を混ぜながら，敷地環境の特徴，住人の生活習慣に合った建築を求めようとする．　アラン・サルファティーに代表される．

正統派は，モダニズムの過ちを認めながらも，近代社会に適合し得る唯一の建築言語をモダニズムとする．　シュメトフ，シリアニ，リオンが，それぞれ異なった度合いではあるが，モダニズムを更生させようとしている．

そして建築の詩的な面を強調しながら，上記3派の考えを状況によって使い分け，決してひとつの派にはまろうとしない建築家達がいる．　ヌーヴェル，ポルザンパルクである．　**●すずき・げん／建築家，東京大学大学院博士課程**

CIRIANI ,Henri



●アンリ・シリアニ　Henri Ciriani
Born in 1936, Lima (Perou).
Studied architecture at the Universidad Nacional de Ingeniera, Facultad de Arquitectura, Instituto Nacional de Urbanismo. Diploma 1960.
Worked in Perou, from 1961 to 1964.
He has taught at Facultad de Arquitectura of Lima.
In France, worked with Andre Gomis, 1965—68.
Worked with AUA (Atelier d'Urbanisme et d'Architecture), with Corajoud, 1968—70 then with Huidobro, 1970—75.
Self-established, 1976.
He has taught at UP 7, 1977 then UP 8.

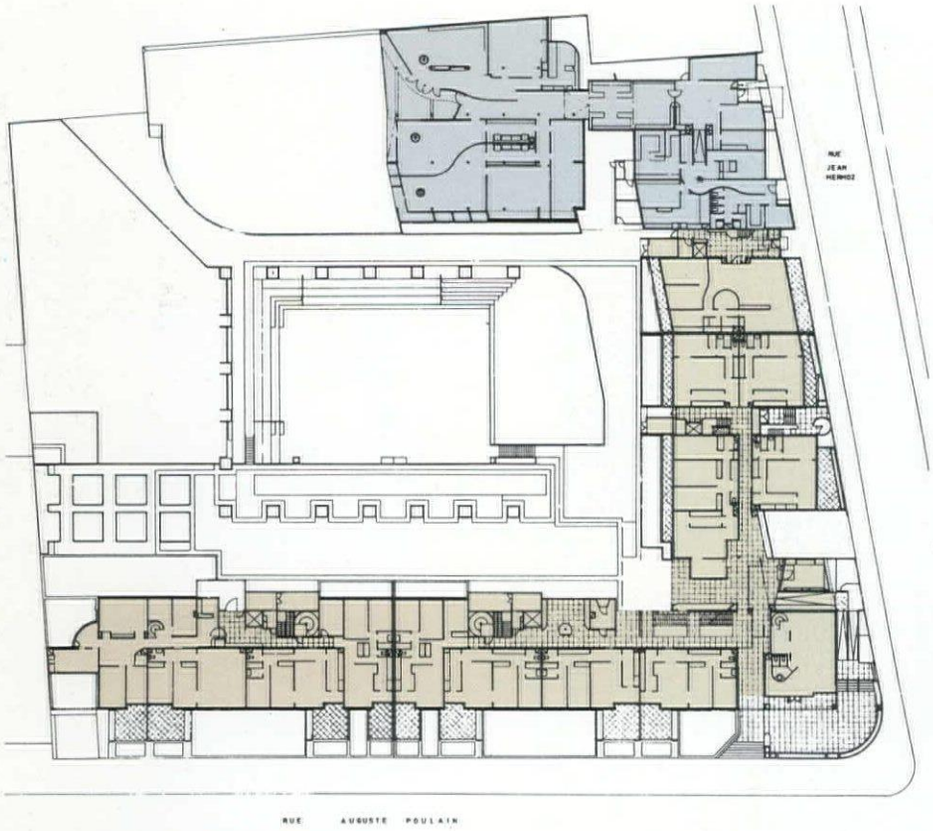
■ラ・クール・ダングル集合住宅　❶❷❸❹❻

その名の通り，ここでの課題は，広場(cour)とコーナー(angle)の納め方であった．　直角という単純な角度を守るこの計画は，ランダムに建つ周囲の建物群に対し，整理された空間が広場になったという印象を与える．7階建てにしては少々オーヴァー・スケール気味の建築言語は，かえって広場を特徴づけている．　道路側は，交差点にオブジェをもってくるようなことをせず，ストライプと格子模様が合流し，競い合う流動的な場としている．

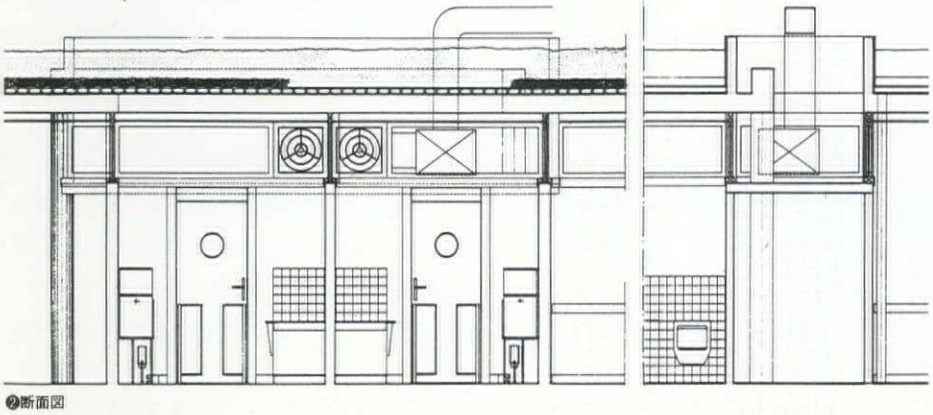
■サンドニの保育園　❺❼

クール・ダングル計画内の二つの公共施設のひとつである．　保育園の受付と職員室は纏まった形で住宅棟の一階に置かれており，子供室はもうひとつの纏まりとなって庭に突出している．　使う部分と使われる部分を繋ぐサーキュレーションのおかげで道路側から庭まで視線は遮られない．　途中の空間は〈フリー・プラン〉としての解放感を持つが，逆にJ.L.コーエンが指摘したように，玄関脇の園長室から一目で監視できるようになっているところが気にかかる．(進来玄)

"La Cour d'Angle" Housing at Saint-Denis,1978-82
Angle de la rue A. Poullain et de la rue J. Mermoz, Saint-Denis, Seine Saint-Denis, France
Client:Sem le Logement Dionysien
Architect:H. Ciriani, Assistants:D. Mangin, V. Sabatier
Nursery at Saint-Denis,1978-83
23 rue J. Mermoz, Saint-Denis,Seine Saint-Denis, France
Client:Ville de Saint-Denis
Architect:H. Ciriani, Assistant:J. Nicolas



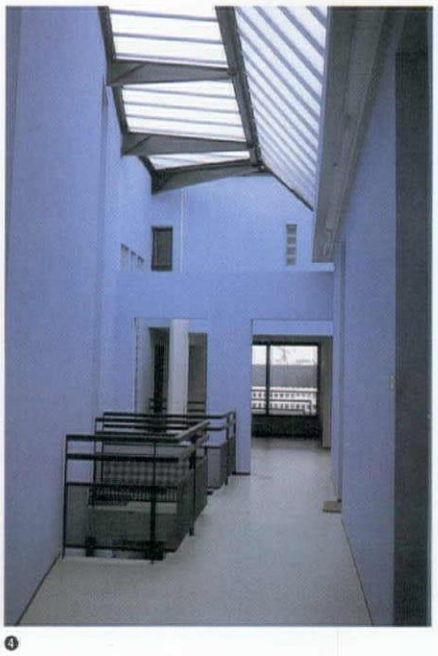
❶平面図．ベージュ色の部分は集合住宅，灰色の部分は保育園



❷断面図



❸



❹



❺

⑥

⑦

BUFFI ,Jean Pierre

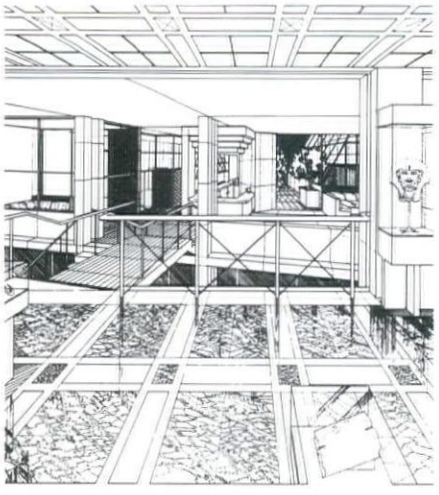


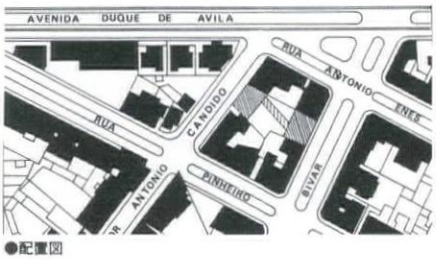
●ジャン・ピエール・ビュフィ　Jean Pierre Buffi
Born in 1939,Florence.
Diploma in architecture from the University of Florence,1962.
Worked with Jean Prouve,1963-70.
Has participated in many competitions in France and Italy.
Since 1967 teachs at UP6, Paris.

■リスボン・フランス文化センター

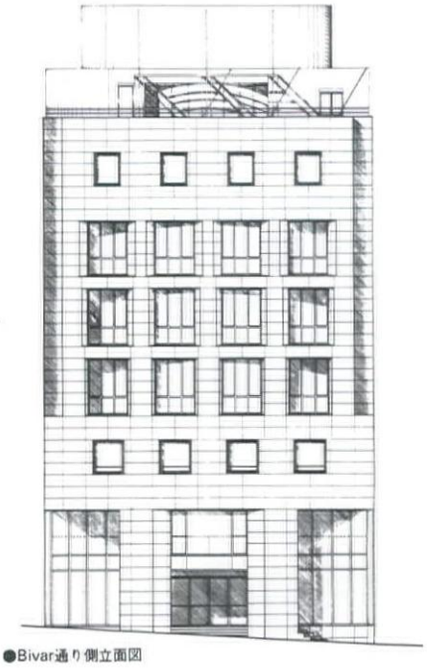
前後に道路を持つこの建物は，前部分と後部分で一階分の段差があるが，それによって公共空間に連続性と透明感を持たせている．　Bivar通り側は教室棟，Candido通り側は事務棟となっているが，これらは展示室やホール等の公共部分による台座の上に乗っている．　中庭側と道路側の外壁の対比は開口率の差で強調されている．　また，道路側の壁の厚みはガラス面の曲線によって暗示されており，この優しい曲面は外国でのフランスの窓口に相応しい暖かみを投げかけていると言えよう．(GS)

French Institute of Lisbonne, 1979-82
91 av. Luis Bivar et rue du d. Candido
Client : Ministère des Relations Extérieures
Architects : J.P.Buffi with J.Lamude, J.Perdigao, P.Chombart, G.Byrne (operation arch.)





●配置図



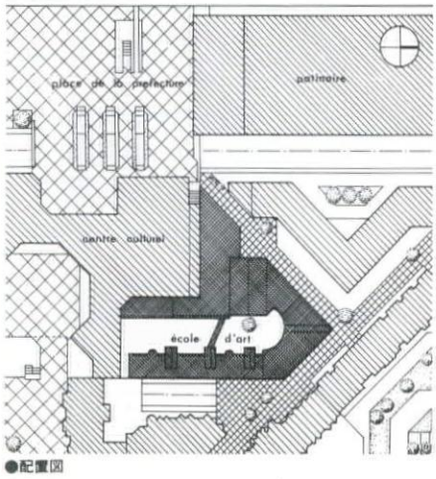
●Bivar通り側立面図

■セルジー・ポントワーズ国立芸術学校

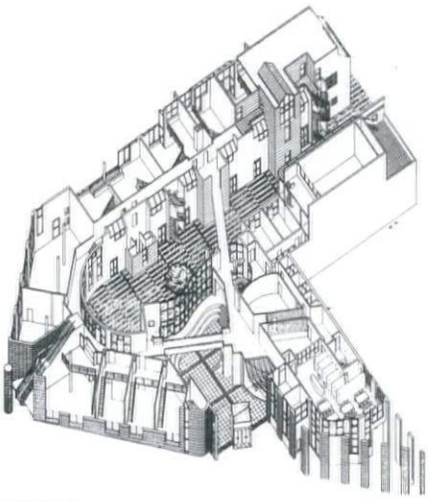
新都市の中心地を完成させる意味からも，この建物には極めてアーバン的な扱いが施されている．　敷地の境界線ぎりぎりのところまで3階建ての建物を連ねた結果，市役所と駐車場の間に，本当の意味での通りを設けることが可能になった．　大規模な開口部，広場，ホール，中庭，等のシークエンスの中で，如何に，建物内と通りの活気をからめていくかの点に，この建物のデザインは集約される．(GS)

National Art School,Cergy-Pontoise 1980-82
2 rue des Italiens, Cergy-Pontoise, France
Client : Ministére de la Culture
(delegated E.P.A. de la Ville Nouvelle de Cergy)
Architects : J.P.Buffi with J. Lamude, B.Lenoramand, R. Schlumberger

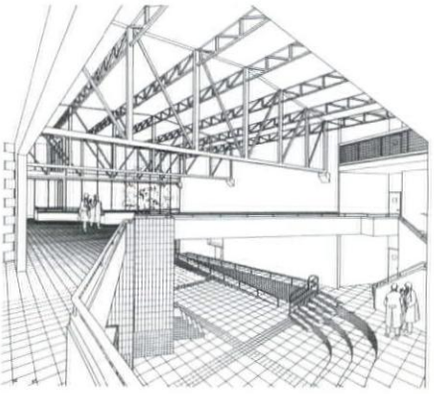




●配置図



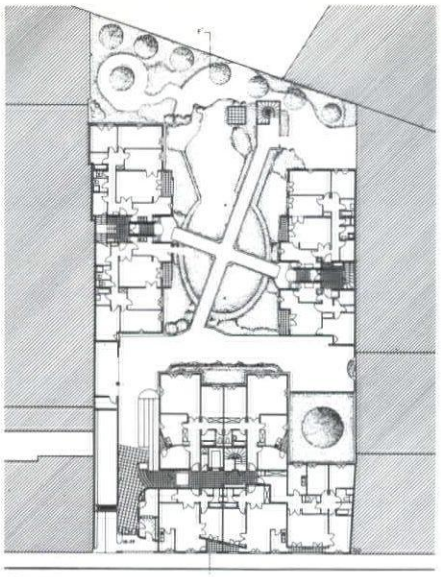
●アイソメ



■マティス通りのアパート

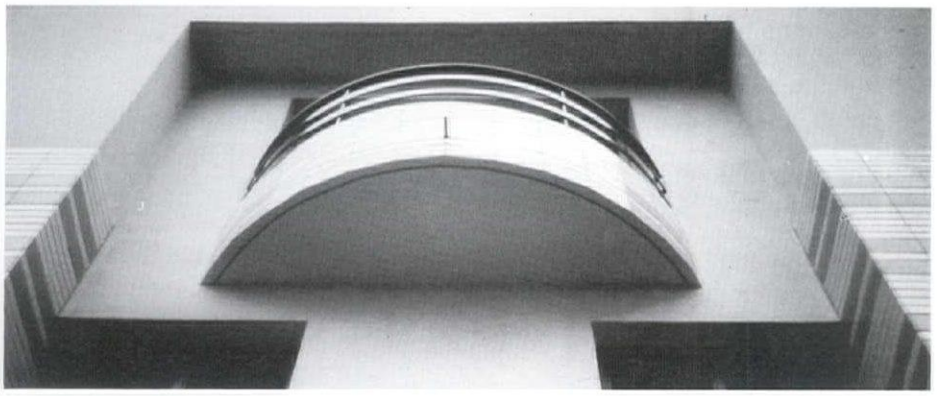
以前この付近は総てフランドル通りに対して直角又は平行になっていた。　パリ19区再開発によってマティス通りがひらかれたが，この道は他に対して斜めになってしまった。　よってこの敷地は北側が斜めにカットされたようになっている。　土地が南北を向いていることから彩光の点で3棟に分けて建てられた。　北側に向いてしまった住居はメゾネット式住宅にすることで少し快適さが加えられている。マティス通り側のファサードはオスマン建築の再現と敷地の過去を語る傾斜を見せている。(GS)

Housing, rue Mathis, 1982
18-20 rue Matis, Paris XIXe, France
Client : Régie Immobilière de la Ville de Paris
Architects : J.P.Buffi with J.Lamude, B.Lenormand, B. Minster



●平面図







■〈果樹園〉集合住宅

この設計競技を主催したセルジー市開発委員会は，建築群の輪郭を守るために細部にまで及ぶ要請を出していた。　ピュフィの案はタウン・ハウスを原型としている。　公共部分にはポーフィル風の支柱を持ってきて，ある程度のモニュメンタリティーを効かせている。　また，果樹園との繋がりを得るように，窓等の細かい部分になるにつれて，デザインのスケール感を小さくしている。　敷地の過去を物語る果樹園の配置は造園計画を支配している。(GS)

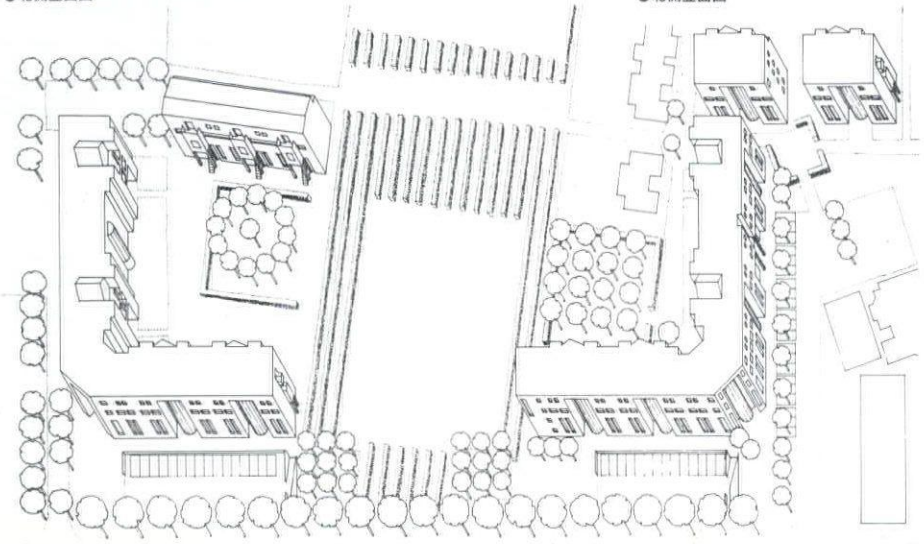
Housing, Cergy-Pontoise, 1980-82
Ilot n°6"Le Verger" Cergy Puiseux, Cergy-Pontiose, France
Client : SCIC Sarcelles, Travail et propriété
Architects : J.P.Buffi with B. Lenormand, B.Minster, J.C. Lointier



●北側立面図



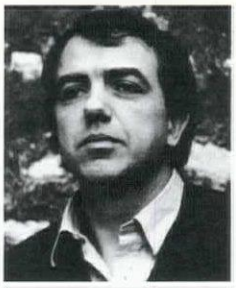
●北側立面図



●配置図



LION ,Yves

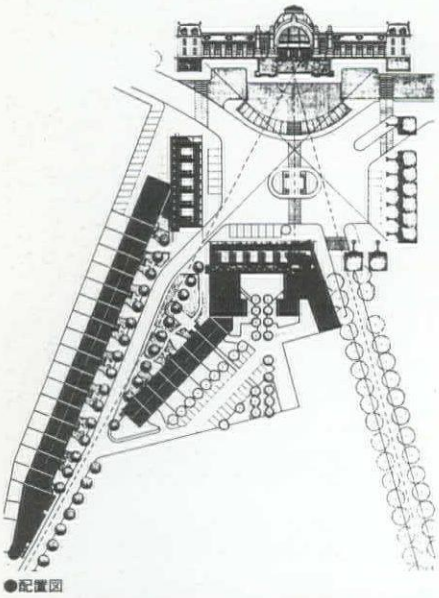


●イヴ・リオン　Yves Lion
Born in 1945.
Government Certificated Architect.
Promoter of the Atelier Lion (1974), in charge of all projects until today.
Teacher of Architecture at the Ecole Nationale des Ponts et Chaussées of Paris (French Civil Department of Bridges and Highways)
Member of the Editorial staff of the architectural magazine A.M.C.
Consultant for the Interministerial Mission for the Quality of Public Buildings.

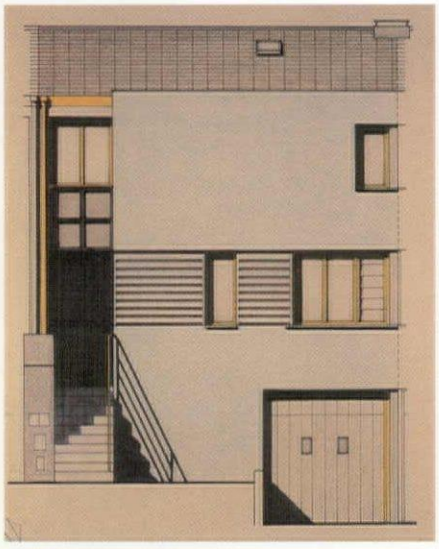
■ロシュフォールの集合住宅

ロシュフォール駅に隣接した敷地におけるこの計画は，市当局の仕事である．　この計画には，駅前の空間の設計，および新しい住宅と既存の街との連続性という課題が与えられた．
リオンは，駅前広場を既存のロシュフォール市のコルベール広場の形に似せ，そしてまた新たに対角線状の道路を配し，この道路の両側に郊外型の連続住宅を設計した．　彼はここで都市の主題の中に，都市性と郊外性という二つのヴォキャブラリーを重ねあわせることを狙ったのだ．

Housing at Rochefort
Rochefort, France
Commissioned by the Rochefort Town
Architects:Y. Lion, with D. Tajan



●配置図







ARCHISTUDIO

●マルタン・ロバン　Martin Robain
Born in 1943, Paris.　Graduated from the National School of Architecture, 1969
●ジャン・フランソワ・ギャルミッシュ　Jean Francois Galmiche
Born in 1943, Belfort.　Graduated from the National School of Architecture, Paris 1970
●ロド・ティナード　Rodo Tisnado
Born in 1940, Cajamarca (Perou).　Graduated from the Faculty of Architecture, Perou 1964
●フランソワ-グザヴィエ・デゼール　Francois-Xavier Desert
Born in 1952, Poitiers.　Graduated from the Special School of Architecture, Paris 1977
●ジャン・フランソワ・ボンヌ　Jean François Bonne
Born in 1949, Paris.　Graduated from the National School of Architecture 1975 and the Institute of Town Planning, Paris 1978



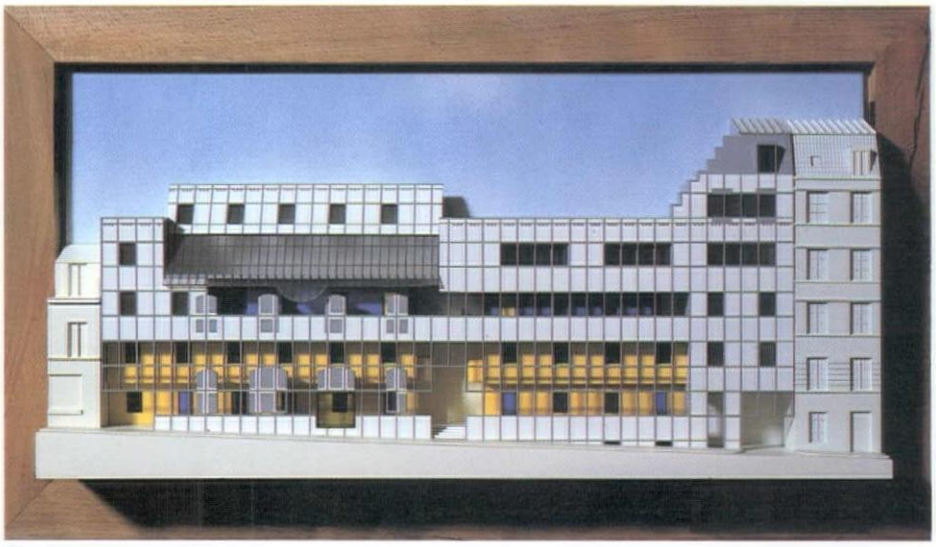
■ドンレミー通りの集合住宅　❸❹❺

ドンレミー通りは，パリの南に位置する急勾配の小さな通りである．　建築家は，二つの既存の建築物の間に25戸の集合住宅を建てなければならなかった．彼らは，通りの狭さと，通り沿いに並ぶ建物の連続性を考慮した．　通りに面した南側のファサードは，白タイルとグレータイルにより構成されたグリッドで特徴づけられている．　グリッドの内側には内通路が設けられていて，その壁面は原色の赤と青に塗られたレンガとなっている．　屋上階の一部はこの地区の建築規制に準じた傾斜を有している．

■モンモリヨン病院　❶❷❻

既存の病院の30室の増築．
既存の建物は，街を見おろす丘の上にある．　建築家は，増築にあたって独立柱をたて建物を99mにも延長し，屋根は非常に勾配のきついものとした．　棟と樋のレベル差は９ｍもある．　遠方から見上げると，延長された建物は，17世紀の建築と同じようなたたずまいを呈して見える．　独立柱を通して，街を一望に見渡すことが可能である．

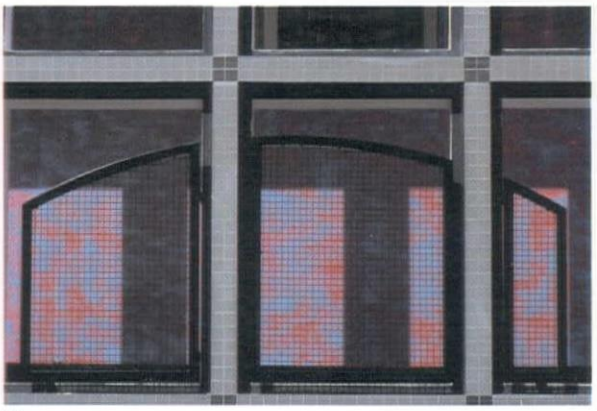
Housing, rue Domremy, 1983
16 rue de Domremy, Paris 13, France
Commissioned by the French Social Housing Committee
Architects:Archistudio (M. Robain, J. F. Galmiche, R. Tisnado, F.-X. Desert, J. F. Bonne)
Montmorillon Hospital, 1981
2 rue Henri Dunan Montmorillon, France
Commissioned by the Montmorillon Hospital
Architects:Archistudio (M. Robain, J. F. Galmiche, R. Tisnado, F.-X. Desert, J. F. Bonne)



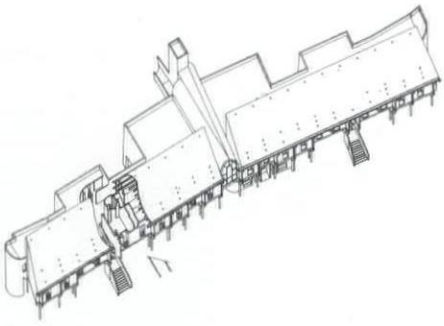
❸



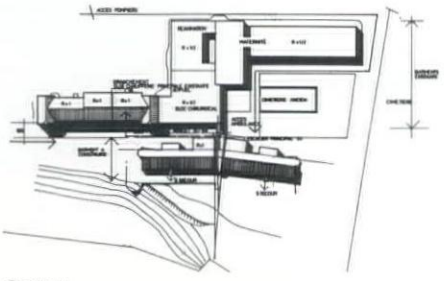
❹



❺



❶



❷配置図



❻

ゲームの規則

言語ゲーム

松浦寿夫

2.

ところで，ヴィトゲンシュタインは，《論理哲学論考》での「論理の透明な純粋性は，私にとって，結果として生じたものではなくひとつの要請であった」と後の《哲学探求》（傍点原著者）で述べているが，この《哲学探求》で浮上してきたきわめて重要な概念が，ほかならぬ〈言語ゲーム〉であった。　ただ，ここで注意しておかねばならぬことは，ヴィトゲンシュタインの思考の流れは，従来，《論理哲学論考》に代表される前期と《哲学探求》に代表される後期と，しばしばまるで異質のものであるかのように画然と区分されることが多かったようだけれども，ゲームの空間で運用される規則の所在を浮きぼりにしてゆくという意味で少なからぬ連関を保持しているということだ。　たしかに，《論理哲学論考》での，「純粋に透明な論理の要請という企てが，現実の場面で発話される言語との間に解消しがたい葛藤を呼び起こし，あらゆるものを形式化しえる論理体系の完遂が同時にこの葛藤を最大限の規模で増大させつつ，この論理体系の無根拠性を露出してしまうがゆえに，したがって，このような体系のなかでは「諸条件はある意味で理想的なものだが，しかし，まさにそのためにわれわれは一歩も先へ進むことができない」（《哲学探求》）ことになってしまうがゆえに，ヴィトゲンシュタインは改めて日常言語の不断の運用のさなかで，ちょうど寄せては還る波の恒常的な運動をすかして浮上する砂の上の模様をかいまみるかのように，明確な境界線を欠きつつ波動する規則の所在を描き始めることになったということは指摘しておかなければなるまい。　とすれば，この不断に波動し続ける場とは，あらゆる具体的な発話を先験的に拘束する規則にも，あるいはそのようなルールを相互に了解しあう発話者たちの共同主観的な地平にも決して還元されるものではないのだから決して主体化されることのないゲームの力学的な散乱が先験的な規則を横溢してしまうということのほか倒錯的な事態がそこでは素描されているのであって，それは無限に重なりあう仮面の下にいかなる素顔の相貌があるわけでもなく，むしろこの仮面の方が素顔らしさを装ってしまうというニーチェ的な仮面像を想起させずにはおかぬものではないだろうか。　そしてもはや改めて言うまでもないことだが，いかなる中心にも収束することなく分散化した言説の網の目のなかから，言説を編成する諸条件を評定しようとするミッシェル・フーコーが着目していたのもこの波動の場であったのだし，《意味の論理学》のジル・ドゥルーズが表層と呼んだのもこのことではなかったろうか。　しかも，この表層的な波動の戯れとは，何か素性の正しい起源の反映像などではなくて，この表層のもとに錯綜と交差する無数の系列が葛藤しあう場のことであるのだから，このような異質な系列の不意の遭遇にともなう出来事を肯定すること，つまり，

異質で多岐的な各系列を同時に肯定しえる力は，ある積極的な権能の存在を立証しえるが，それは言語の権能であると同時に幻想（ファンタスム）の権能でもある。　フロイトはいかにして幻想がふたつの系列の間で確立されるかを示した。というよりも，彼はひとつは幼児期の，もうひとつは発情期後のふたつの系列の共存のなかに幻想の条件を見出した。　幻想と言語とはこの点からして，共通の構造をそなえているのかもしれない。　すなわち，いかなる語，いかなる幻想もこのような異質な系列のうえに構築され，これらの系列の間に一種の連結を組み立てるのであり，それによって体系内での内的共鳴，連動が生じ，その振幅は基礎となる系列そのものを凌駕するということかもしれない。　異なるものどうしの交渉，共鳴，連動は，したがって言語＝幻想，すなわちシミュラークルの特質ともなりえるだろう。

（ドゥルーズ〈プラトニスムの転倒〉）

というドゥルーズの一節は，反＝プラトニスム的なイメージ論として注目すべきものであるばかりでなく，今日，ポスト・モダンという問題圏のうちで語られつつある事態にとってもきわめて示唆的なものではないだろうか。

仮面、または表層の擬態

■

フランソワ・ルーアン（1943年生れ）の
〈編み込み〉（tressage）という手法の
反復からなる画面は，
不断に差異化されてゆく
断片の反復によって，
全体の統一性を凌駕するような
凝集力を引き起こしている。
終りなき反復としての表層。

ゲームの規則

ゲーム規則の要請

松浦寿夫

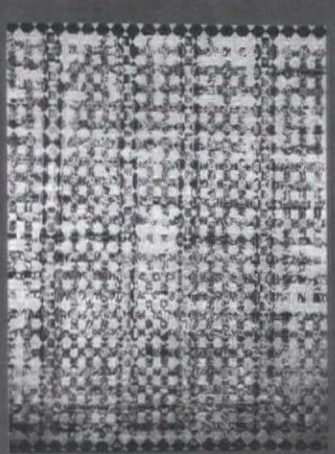
3.

いずれにせよ，現代のフランスの思想のさまざまな局面と連結する回路をそなえているかにみえる，ヴィトゲンシュタインの〈言語ゲーム〉に立ち戻ってみることにしよう．　彼は《哲学探求》のなかで，通常ゲームと呼ばれている種々のものの共通性とまではいわないが，種々のゲームの間の類似性ないし類縁性を見出し，「互いに重なりあったり，交差したりしている複雑な類似性の網」を特徴づけるに際して，〈家族的類似性〉という用語を創案している．　しかし，この名称は，言語ゲームに参与する人々の家族的共同体としての共同主観的な地平を喚起し，たとえばフロイト的な精神分析が人間の無意識的な葛藤をエディップス・コンプレックスとして家族関係という閉じた場面に帰着させかねないように，言語の波動する場を主体化可能なものとして単なるファミリー・ロマンスに還元し尽しかねないものではないだろうか．　事実，社会学の領域でのハバーマスとルーマンの論争に顕著に示されたように，起伏を欠いた生活世界という抽象性のもとに，この波動の場は還元されようとしている．　つまり，言語ゲームを可能にする規則を超越論的な次元でア・プリオリに設定するルーマンのシステム論にせよ，このような超越論的な規則を問うハバーマスが提出するような，理性的な主体の討議活動にもとづく普遍的な合意の形成という視点にせよ，いずれもこの表層的な波動に対してはあまりにも無自覚ではないかということだ．　だがむしろ，なぜ現在，ゲームの規則の可能な条件を探る作業が何か緊急の課題であるかのように着手され始めたのだろうかと問うべきであって，そこに知の領域における〈ポスト・モダンの条件〉をかいまみることができるだろう．　そして，他の社会的な諸実践にくらべていち早くポスト・モダンという符牒を用い始めた建築の領域の特殊な事態，すなわち，ポスト・モダンという符牒を多くの場合，折衷主義的な様式概念ないしゲーム規則とみなしている事態――たとえ，磯崎新氏のように折衷主義に分裂症的（スキゾフレニック）という語が結びつけられている場合でもいささかもこの事態は変化しない――を問うこともできるだろう．　そこで，とりあえず，ジャン＝フランソワ・リオタールの《ポスト・モダンの条件》と題された著作にふれつつ，知の領域におけるポスト・モダンの条件を考えてみることにしよう．

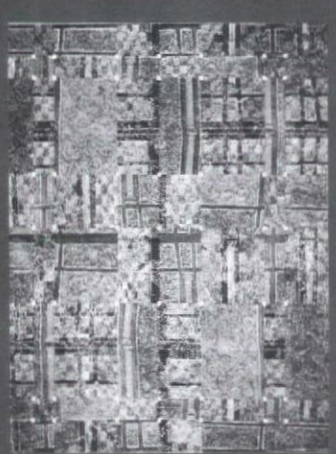
(→P.46)



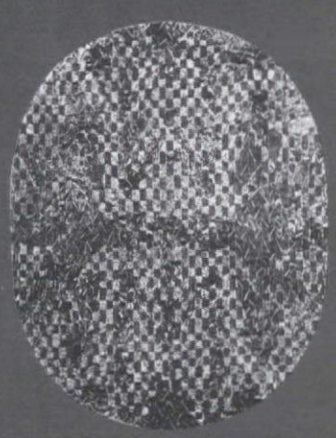
●〈編み込み(トレッサージュ)〉1967
紙　175×132



●〈庭園/大理石/青〉1979―80
画布に油彩　215×185



●〈大理石/人物/風景〉1975―76
画布に油彩　198×170



●〈季節Ⅳ〉1976―78　画布に油彩　195×160

SPITZ ,Roland

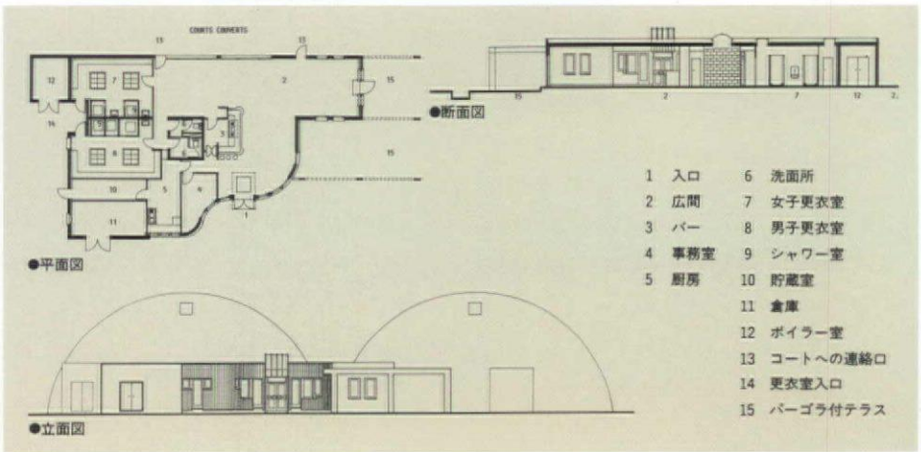


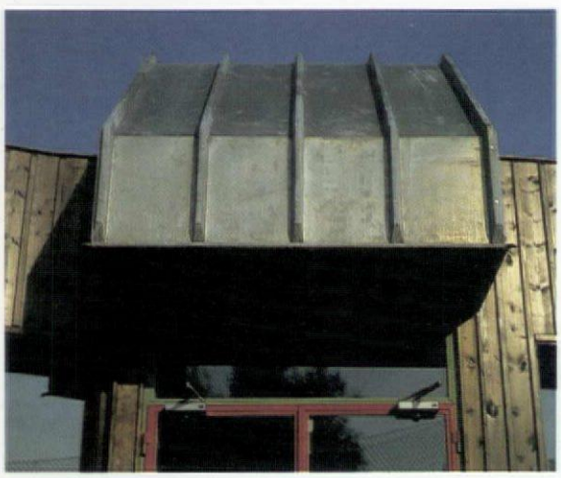
●ロラン・スピッツ　Roland Spitz
Born in 1941, Mulhouse.
Graduated from the Institut d'Urbanisme de l'Université de Paris 1966.
Architect DPLG, 1969.
Worked with Maneval, Bossart, Le Corbusier, then with Jose Oubrerie for the completion of Firminy.
Self establlished in 1975, Mulhouse.
From 1974 to 1977 he teached at Promoca.
Since 1976 he is teacher at the Ecole Nationale Supèrieure des Arts et Industries de Strasbourg (ENSAIS).

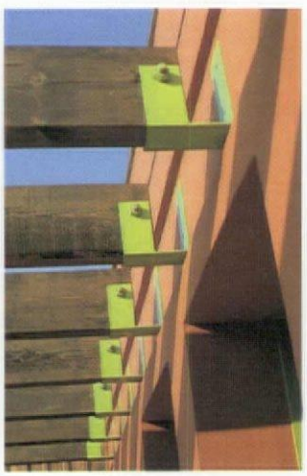
■テニス・クラブ・ハウス

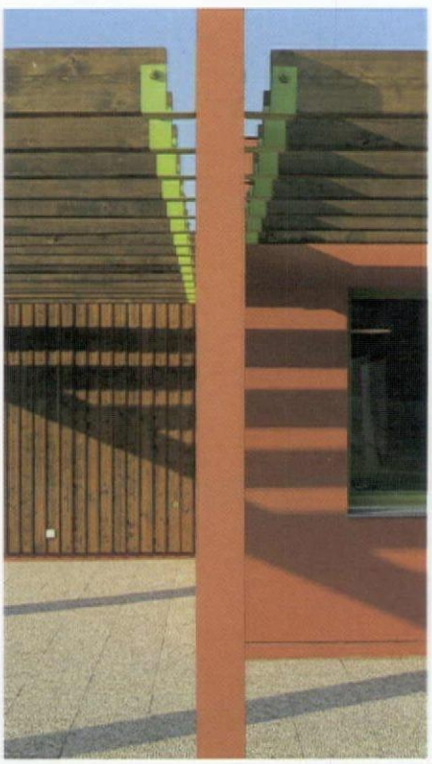
ここでの課題は，既存のプレハブ屋根のついたテニスコート2面に大きな部屋とバー，更衣室，トイレ，オフィスおよび機械室を備えたクラブハウスの増築を，狭い敷地内にいかにおさめるかというものであった．　結局，大きく曲げた棟木に一部透明なコーティング布をかけた屋根でコートを覆う手法がとられた．　クラブハウスのカーブした壁面は，コートを覆う曲屋根の形に対応したものである．　ホール部分の組積構造は，彎曲部が松材と小割板を張っているのを除いて，ペンキ仕上げとなっている．

Tennis Club House
Commissioned by F.C.M.,Tennis Section
Architects:R.Spitz with J.M.Martini

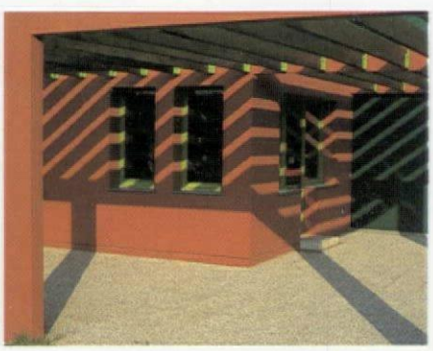












MONTES ,Fernando



●フェルナンド・モンテス　Fernand Montes
Born in 1941,Quinteros,Chile.
Architect D.P.L.G.Studied architecture at Université de Santiago,Chile ; Technische Hochschule de Karlsruhe ; Technische Universität de Munich ; the Ecole des Beaux Arts de Paris ; UP5,Paris.
Worked in Paris and Berlin with Sh.Woods and G.Candilis.
Professor of architecture at the Ecole d'Architecture de Strasbourg 1973—75 ; at UP6,Paris,1976—83 ; at the Ecole d'Architecture de La Cambre à Bruxelles1978 ; the Royal College of Arts in London 1979—80 ; at the Ecole d'Architecture de l'Université de Los Andes in Colombia 1982.

■カフェ・ヴィデオ〈デュシャン〉(3.21.13.4)

バビロン街にあるこの建物は，ごくふつうの建物(ただしその車寄せは2階分の高さがある非常に目立つもので，同じ大きさのポーチが室内にも設けられている）の裏手にある広大な庭に位置している．

この庭は非常に興味深い経歴の持主で，これまでにも数多くのプロジェクトが実施されてきた．

たとえばずっと以前にさかのぼって1919年には，戦争から復員してきた数名の抽象派アーチストたちが，ここに前代未聞の博物館を計画した．　そこで基準となったのは，〈アイロニーを完全に欠落したオーダーの〉オブジェや，キャンペーン中にアーチストたちが拾ってきた遺物や遺品などを展示しようというものであった．　その結果，飛行機のプロペラの一部や戦車のキャタピラ，祈とう書，種々な汚れた空缶，薬袋などといった，3000もの種々雑多な品物が陳列されることになった．　こういったコレクションをおさめておくために，軍の払い下げ品を使って軽量建造物を建てるよう，若いベルリンの建築家が任命された．　しかしこの冒険的な企画は文化審議会当局から非常に悪い評価をうけ，建物に必要な計画許可のかなりの部分が拒否されてしまった．

また1928年にはアメリカ人の夫婦がハネムーンでヨーロッパを訪れ，その妻の方がKazumier Pawlosky（当時の地主)の所有地にやってきた．　Kazumier Pawloskyは，オハイオ州クリーブランドでPawlosky式連続積層プロセスを発明したその人である．　彼女はここにツァラツーストラに捧げた聖堂を建てようとしたが，隣接する修道院の修道女たちがそのような作業に強く反対し，結局この計画は実現しなかった．

次いで1930年には，破産したサーカスの一座が巡業の途中で無断でこの庭に居ついてしまった．　大きなテントが張られ，正面のメイン・エントランスと切符売場には〈実験コミュニティPiste de Étoile(運命の道)〉と大書したプラカードがたてられた．　1930年6月30日，このコミュニティ創立1周年の日に，大人28名子供13名が集まって今しも盛大なパーティが始まろうとしていた．　このパフォーマンスには近隣の人々が皆招待されていたが，ちょうどその時，警官隊がやってきてここを包囲し，中にいた人々は全員外に追い出されてしまった．

1943年にはこの庭は占領軍の検閲にひっかかった書籍の倉庫として使われていた．

1959年には，ダイナマイトによる政治的要人（この人物は実際はこの家に住んだことはなく，ただここに住む若い女性を訪ねて時々やってきていたにすぎない）の殺人未遂があった．　爆発によって1階部分はかなりの被害をうけ，住人たちはここを立ちのき，こわれた窓はレンガでふさがれてしまった．

1968年6月，囲い込まれた1階部分には政治関係の専門誌の出版部が入っていた．

そして1972年になってようやく，新しい所有者が再建作業にとりくみ始めた時にこの庭が再び見出されたのである．

1984年4月，マルセル・デュシャン・フレンズ・アソシエーションはこの庭に〈カフェ・ヴィデオ・デュシャン〉をつくることを提案し，困難な取引の末，建物の共同所有者たちの合意をようやくとりつけた．建築家フェルナンド・モンテスがこのプロジェクトの責任者として要請された．　全体のコーディネーションはアソシエーション自身の手によって行なわれ，ガラス・レンガ製の平らなアーチの下におさめられた14のエレメントは以下のとおりである．（平面図参照）

1：コーヒーショップと建物本体とで共用のエントランス・ポーチ部分．　この空間は全部ピンクに塗られており，数字の〈3—21—13—4〉を描いた青いネオンサインが壁にかかっている．

2：反時計回りにまわる回転ドア．

3：ツートンカラーのアイボリー色の砂岩をタイル張りした〈レッジア〉風階段．

4：オークの床材を敷いた通路．

5：白と黒の大理石をチェス盤状に張った広い部屋．ここには最高64のテーブルと附随の黒とアイボリー色にラッカー仕上げされた木製アームチェアを置くことができる．　ふだんはこの部屋には4から32のテーブルが，ある本*のとおりに置かれている．

6：エレクトロニック・コントロール・システムを装備した女性キャッシャー席．

7：2機種のコンピュータ・ゲームが20台おかれている．　2人用のゲーム機は北と東の壁面に，また1人用の機械は南と西の壁面にそっておかれている．4つの壁には大きなスクリーンがかけられ，コンピュータが製作した，あるいはメインルームから送られてくるより抜きのイメージ画像が次々と映し出される．

8：その日その日のテーブルの配置によって余ったイスやテーブルなどの保管場所．

9：メインルームへ入る前のウェイティング・バー．

10：クロークルーム，コンピュータ端末機および電話室．

11：厨房および休憩室．

12：トイレ．

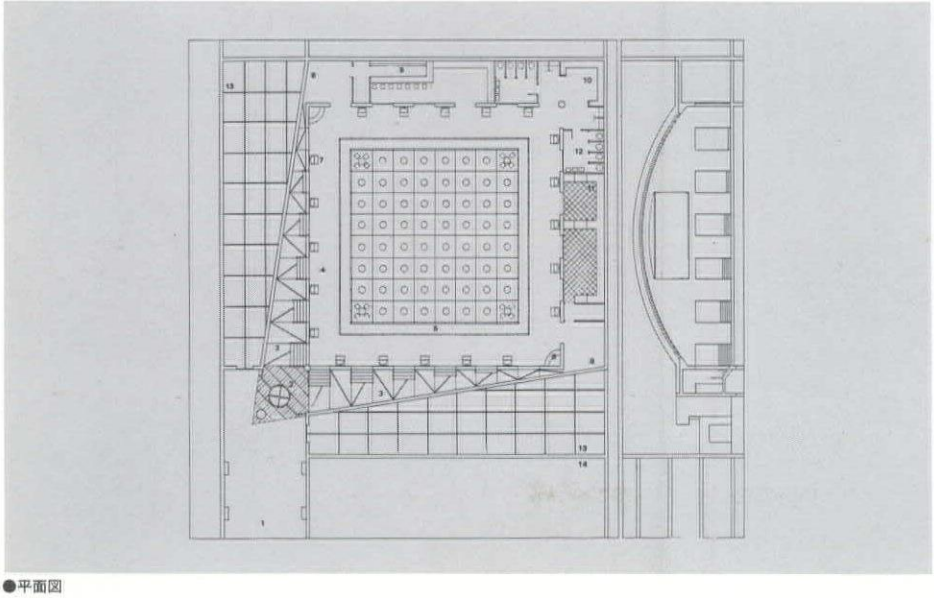
13：もとの形に再建した庭部分．

14：アソシエーション・オブ・フレンズ・オブ・マルセル・デュシャンの本局と，今後の記録保管所として使用される1階部分．

このコーヒーショップは町内で唯一，終日営業の店である．　ドリンク類の値段は午後3時で変わることが厳しく義務づけられている．　従業員たちはセントラル・カウンシル博物館の従業員と同額のサラリーをもらっている．　彼らは必然的に3ヶ国語が話せなければならない．(Fernando Montes)

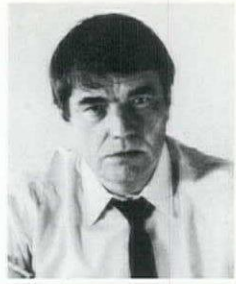
＊ "Les Parties de Ma Vie" by the international Grand Maitre Capabianca.

Cafe-Video "Duchamp" or the "3-21-13-4", 1984
rue de Babylone,Paris,France
Architect : F.Montes



●平面図

WATEL ,Jean Pierre

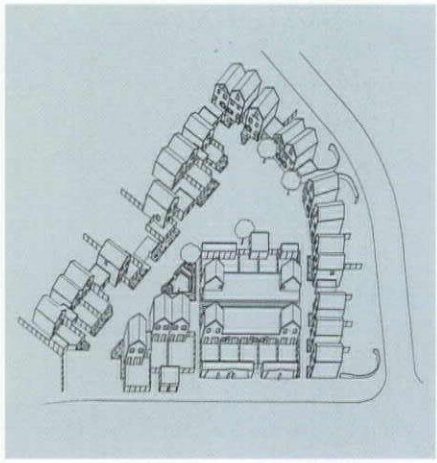


●ジャン・ピエール・ワテル　Jean Pierre Watel
Born in 1933, Mouvaux.
Studied architecture at the School of Beaux Arts then at Saint Luc School, Tournai.
Won the Competition of European Institut for the house, 1963.
Self established, 1963, Villeneuve d'Ascq.
Since 1964 his main activity is the private house and the individual grouped settlement.
He did a prototype of housing using wood structure at Linselles, 1977.
He won the silver medal of the Academy of Architecture, 1977.
Since 1981 he teachs at School of Architecture Saint Luc, Tournai.

■ヴィルヌーヴ・ダスク住宅計画

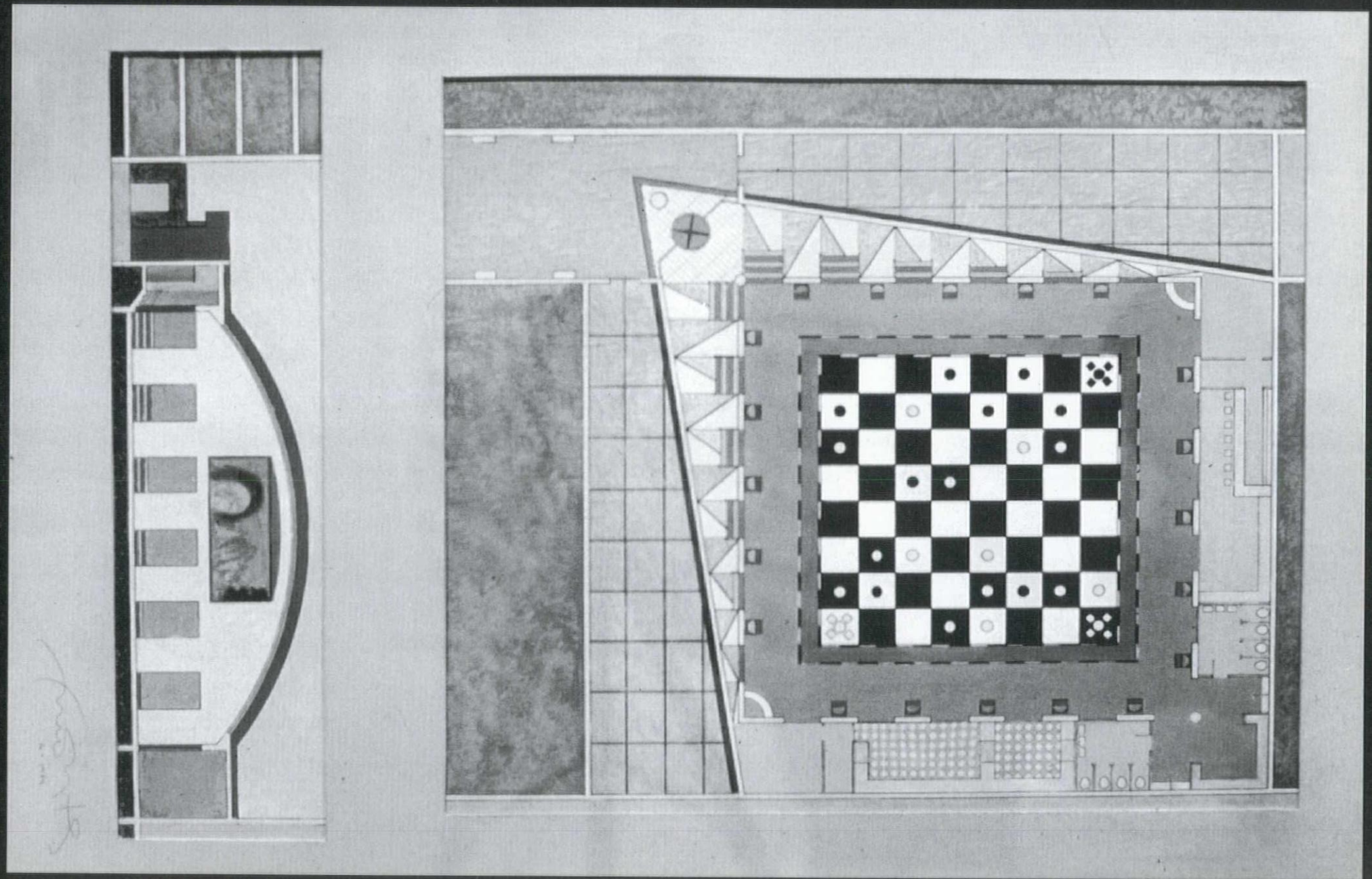
3タイプの間取り，2タイプの形，床組みから屋根組みまで，最も単純な木質プレハブ構造である．外壁は，アスベストセメント板の塗装仕上げで，赤・青・黄の3色がある．一つずつ異なる米松(べいまつ)製のフリーズと石膏質の模様が付け加えられると一丁上がりという次第．"Decorated Shed（飾られた箱）"以外の何ものでもないが，無理のない手法は，素朴さの中に共感を抱かせる．（GS）

Housings,Villeneuve d'Ascq New Town,1980-82
Villeneuve d' Ascq New Town,France
Commissioned by the Public HLM Office of Lille Urban Community
Architects:J.P.Watel





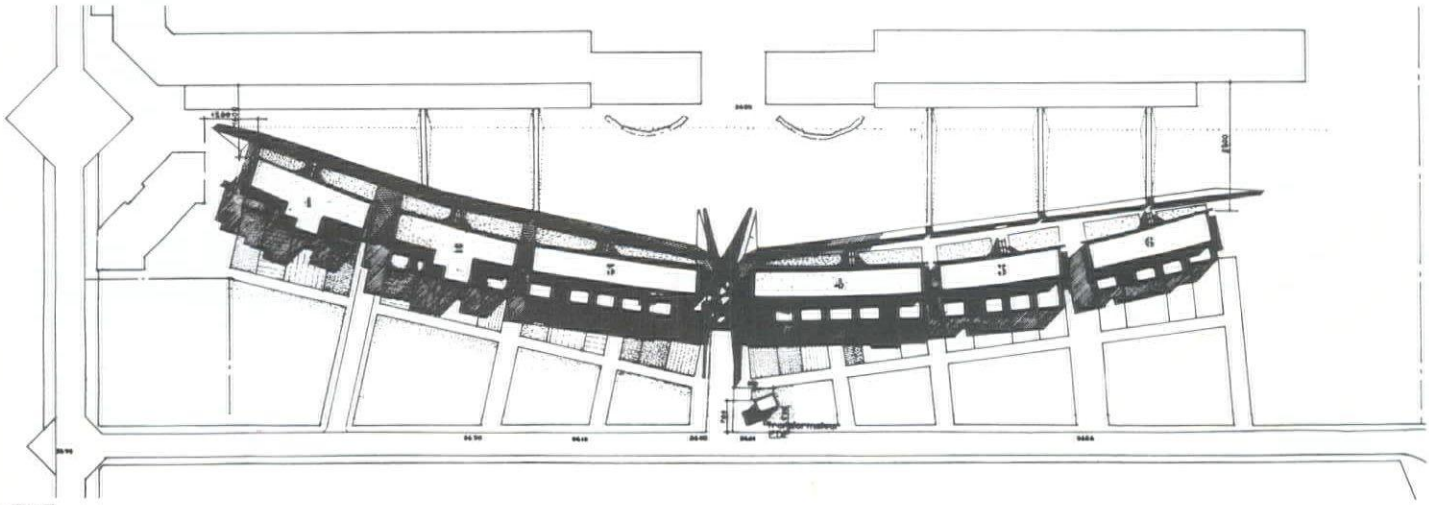




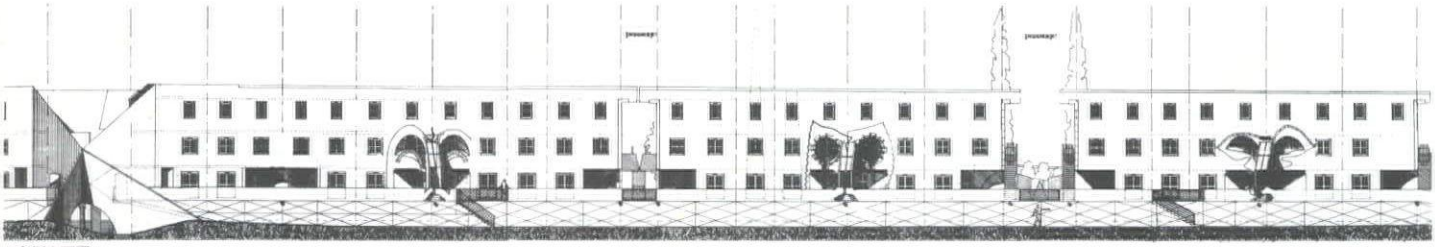
PAURD ,Bernard



●ベルナール・ポール　Bernard Paurd
Born in 4—1—1945.
Graduated from UP8.
PAN award, 1975.
Teacher of architecture, UP8, Paris.
Self established in 1978, Paris.



●配置図



●東側立面図





■集合住宅〈マスク〉

この計画案による集合住宅は，ランスの高速道路エペルネ方向出口に平行して建っている．

これは小さな谷間であったところに建設されたものであり，住棟はかつての小川の川筋にそって曲線を描いている．

この3キロにわたる〈窪地〉は，そのもとの川の土手に囲まれ，丘陵が一面に広がるシャンパーニュ地方ならではの風景に面している．　そのため，高速道路をスピードをあげて走りぬけるドライバーの目は，丘陵と共に，この住棟の曲線の外郭をも〈楽しむ〉ことになる．

建物の中央を走るパブリックな通路は，同時に駐車場の出入路にもなっているもので，×形十字の形をとっている．　このおかげで，建物は，斜線制限をよく守ることができ，またランスに入るやすぐに目につくこのモニュメンタルな入口のテーマで統一をはかることができた．

東側には，この集合住宅との釣合いで構成されるはずの一戸建て住宅が周辺に広がりつつあるが，そちらに向かっては，弓形のアクアテリオンをもった住棟曲線の内弧部分が，人の顔をかたどったマスクを六つ浮かびあがらせて建っている．　このつくりは，一戸建て住宅の増加に歯止めをかけ，またその建設



に指標を与えるものとなるだろう。　これらのマスクは，ピカソの彫刻にならって，凹凸のどちら側からもみられるように研究されている。
住棟への入口であり各々の建物の目印となっているこれらの顔の部分は，また同時に居住空間ともなっている。　この部分は，裏側の見慣れた距離に人が位置する場合には，顔の造作によって居心地のよい普遍的な雰囲気を醸し出すものとなる。

ここでは，建物の入口や部屋の窓がそのまま基本的なファサードを成している。
中央部では，対角線によって規定された立方体による図形的転換が中心的テーマとなっている。
この計画案の56戸の住宅は，斜線を交差させたメゾネット・タイプであり，土の庭ないしはリビング・ルームの上に重ねた入りやすいテラスのいずれかを備えている。　テラスをこのようにおいたため，リビング・ルームには，2倍の高さの地下駐車場に面した窓によって後ろから光が入る。　浴室は構造が許すかぎり採光されている。(Bernard Paurd)

"Les Masques", Housing
Zac de Murigny II, Reims, France
Architect:B. Paurd

KETOFF & PETIT



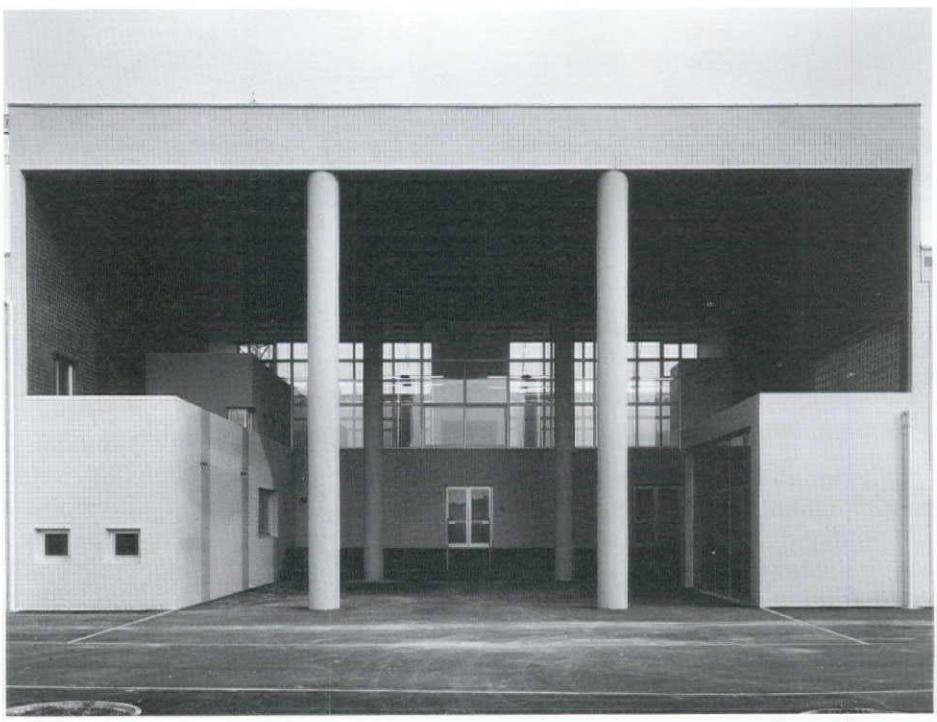
●マキシム・ケトフ　Maxime Ketoff
Born in 1954.
Diploma in 1981.
●マリー・プティ　Marie Petit
Born in 1955.
Diploma in 1980.
Won laurels of Albums de la Jeune Architecture, in 1980.

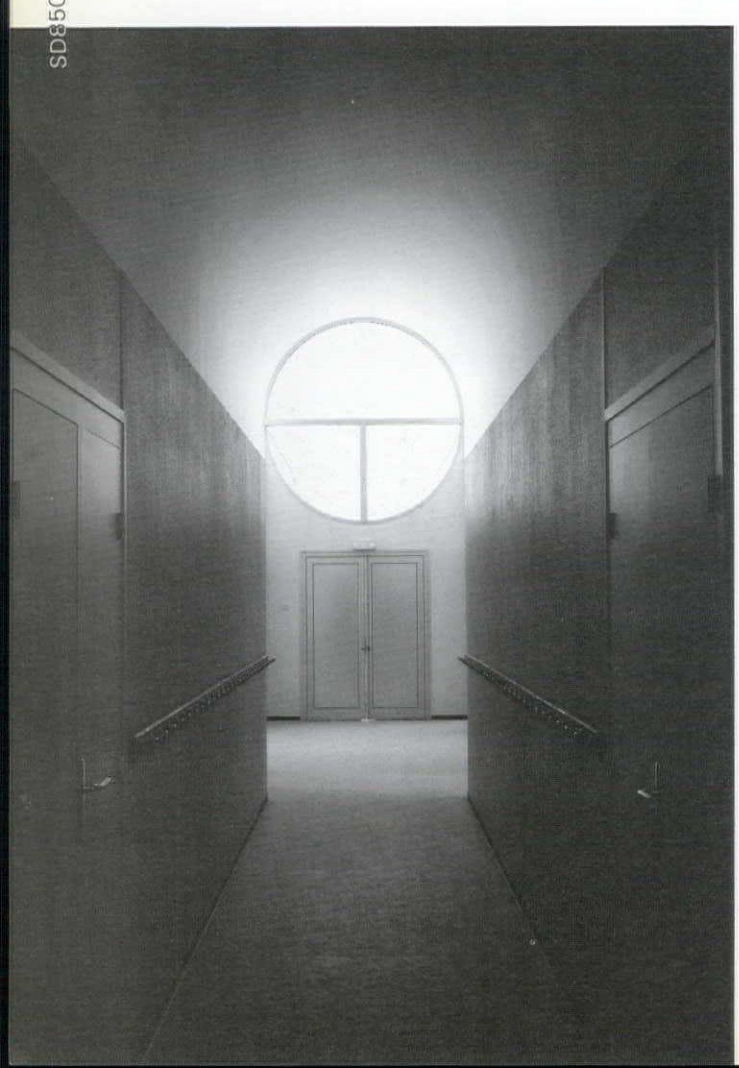
■エヴリ・ニュータウンの小学校

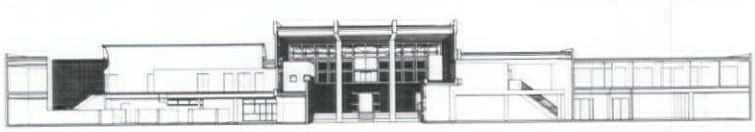
新しい町の複雑さと都市的な制限の不確実さに対抗するために，この託児所と小学校の建物は堅固なものでなくてはならない．

ここには小学校の10クラスと託児所の６クラスが収容されている．　建物のメインとなる部分は左右対称のマッシブなもので，街路の形に忠実にそっている．　小学校のクラスへの入口は高さ９ｍの特大のポーチとなっており，託児所へは狭い通路を通って行くようになっているが，どちらも厳格に守られたファサードの形により目立たないようになっている．サーキュレーションは中央集中型で，上階の廊下はヴォールト屋根がかけられ，裏側に面した大きな窓から採光が得られている．

School Complex, Evry New Town, 1983
quartier des Loges Evry New Town, France
Client: Public Establishment of Evry New Town
Architects : M. Ketoff, M. Petit, J. Leonard



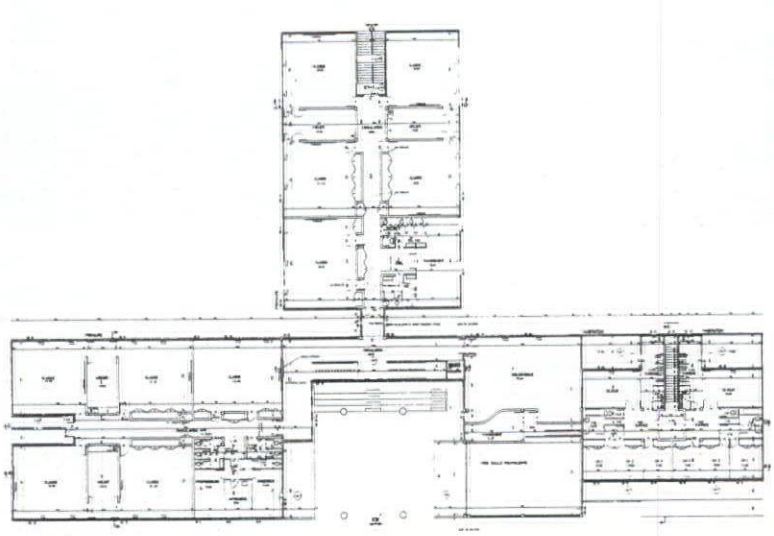




●断面図



●立面図



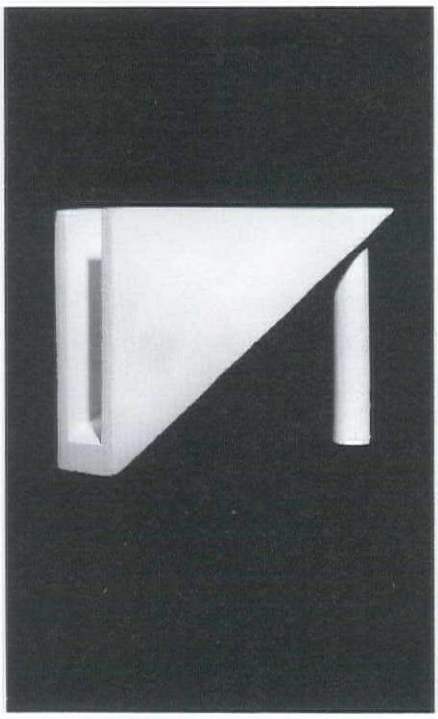
●平面図

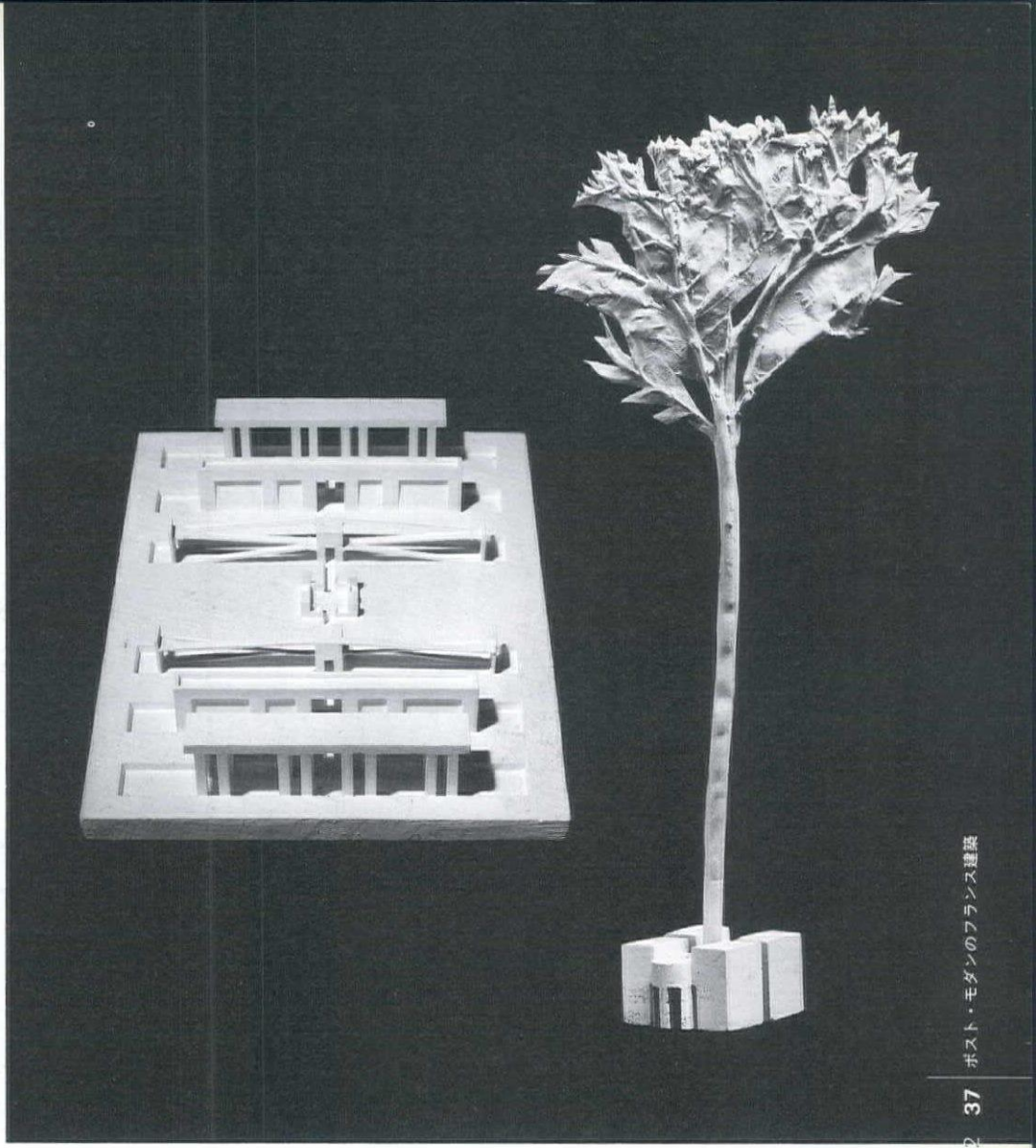
■プラスター・ワーク

これらのプラスター・ワークは短期間だけの構造物で，立体の形状を即座にチェックし，3次元空間でもって実験するためのものである．　魅力的なディテールにまどわされることのないこれらのモデルは，2次元の図面に比べてはるかに線やプロポーションの欠点を明確に浮き出させてくれる．

Plaster Works

Design : M. Ketoff , M. Petit

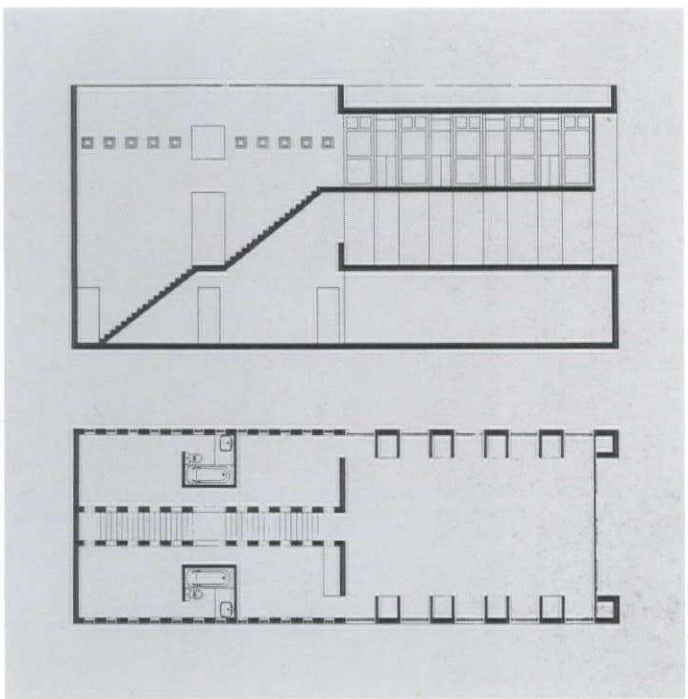




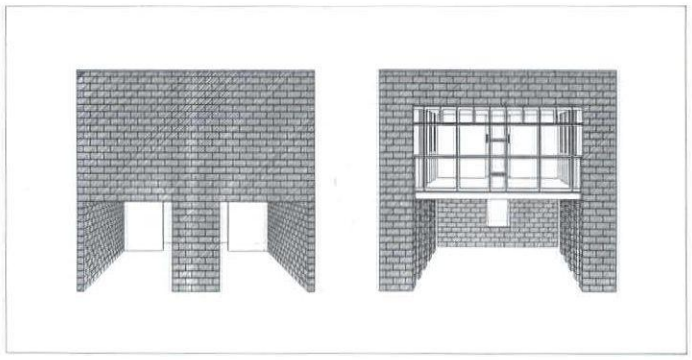
■住宅プロジェクト

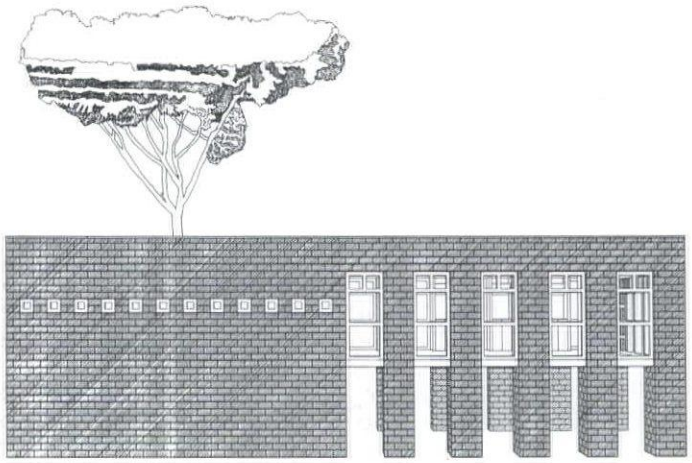
Project for a House

Architects : M. Ketoff, M. Petit

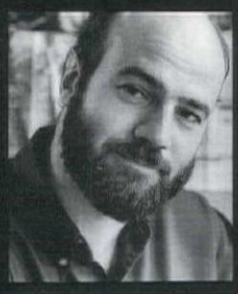


●断面図，平面図



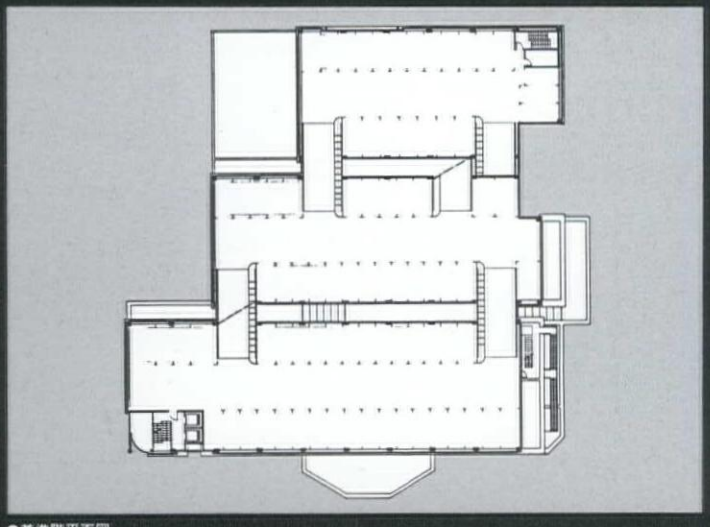


DEVILLERS ,Christian

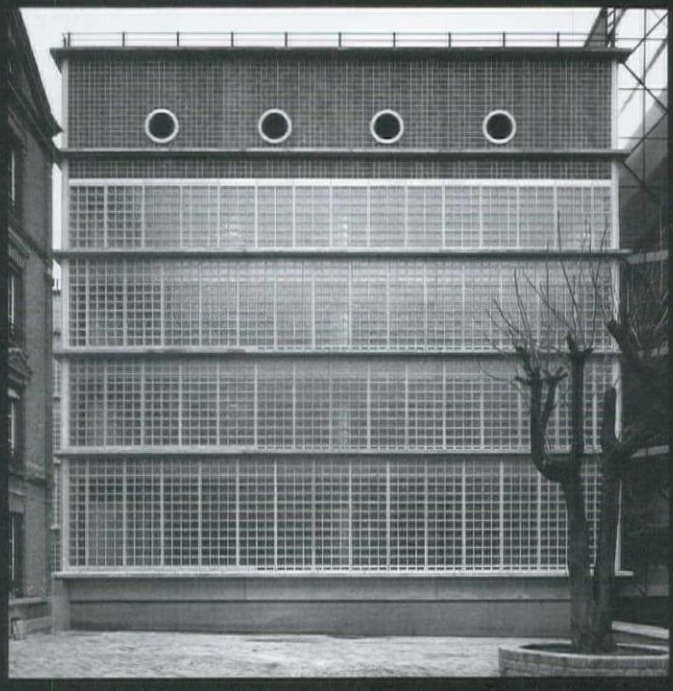


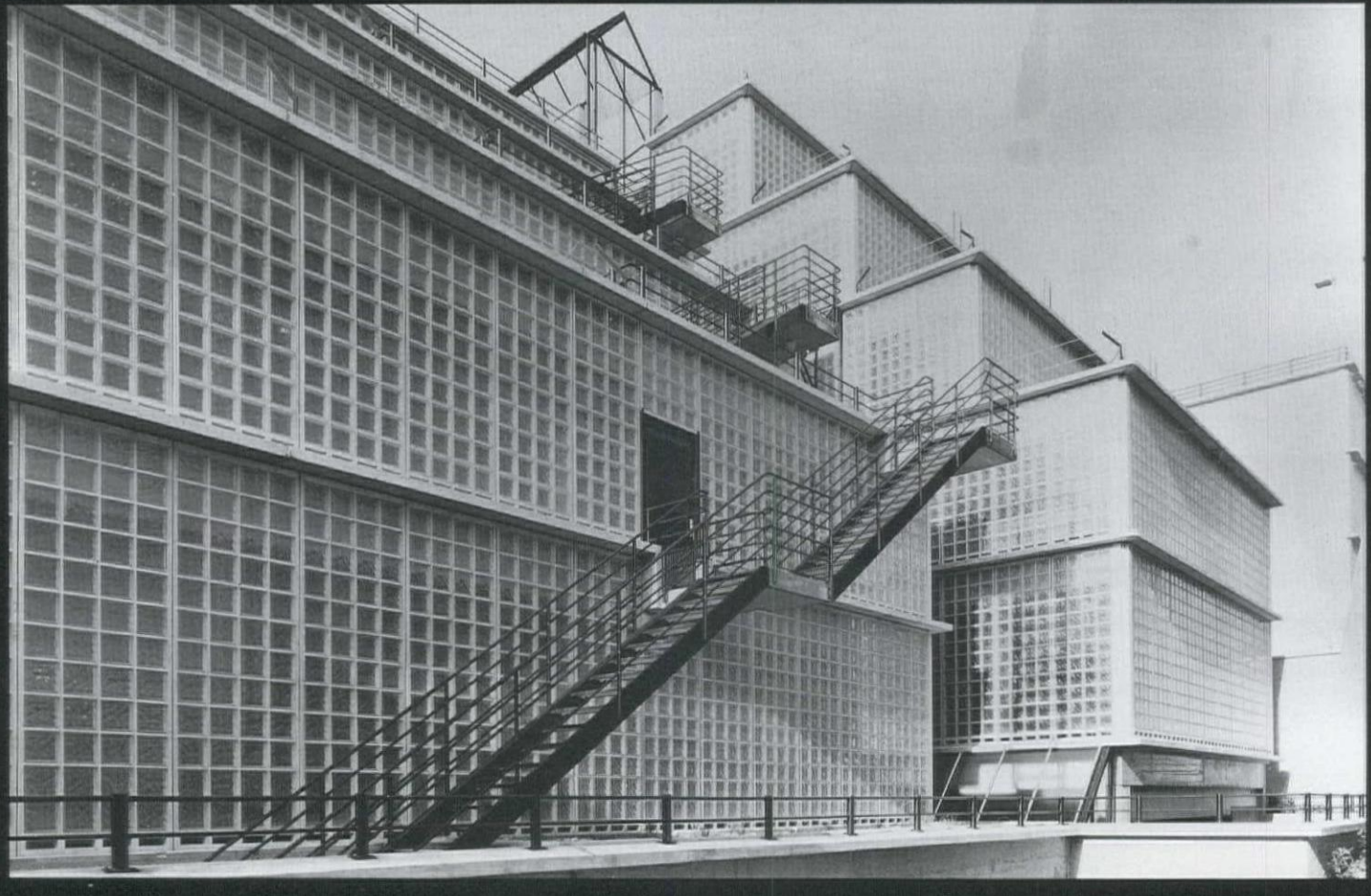
●クリスチャン・ドヴィレー　Chistian Devillers.
Born in 1946, Paris.
Studied architecture at the Ecole des Beaux Arts, then UP8 and then at the University of Pennsylvania under Louis Kahn.
Worked at the Institut d'Etudes et de Recherches Architecturales et urbaines with Bernard Huet, 1973—74.
Lecturer at Ecole des Ponts et Chaussees, 1978—80
Worked with Paul Chemetov at AUA, 1979—83.
Self-established, 1983.
Presently teachs at UP Nancy.

■ショメット通りの駐車場
Parking, rue des Chaumettes at St.Denis, 1983
rue des Chaumettes, St.Denis, France
Architect : C.Devillers(AUA Chemetov-Devillers)
Assistants : M.Halter, J.C.Tougeron

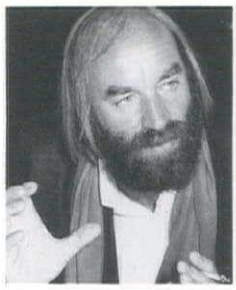


●基準階平面図





VASCONI ,Claude



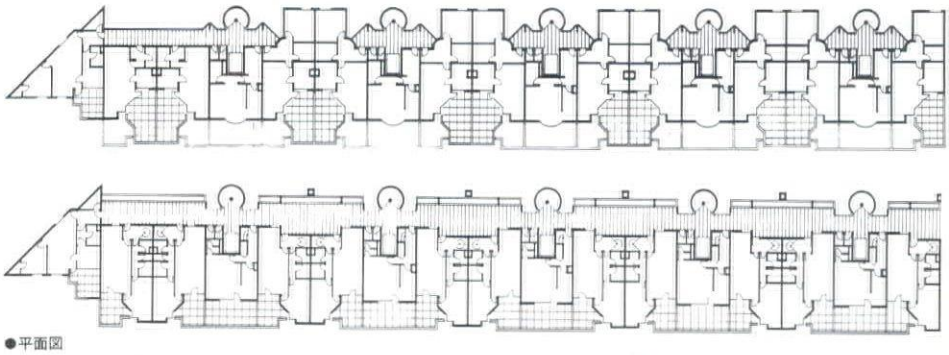
●クロード・ヴァスコーニ　Claude　Vasconi
Born in 1940, France.
Graduated from the Ecole Nationale Superieures des Art et Industries of Strasbourg (ENSAIS), 1964.
Worked in Stuttgart (office: Rolf Gutbrod), from 1965, 1966.
For the Etablissement public d'Amenagement de la Ville-Nouvelle, Cergy Pontoise, worked as town planner, from 1966-69.
Self—established, 1969.

■エヴリ・ニュータウンの集合住宅

112戸の賃貸住宅と駐車場を，東西方向に細長く延びた敷地におさめるという計画．　ヴァスコーニは，長さ120m，幅18mの平面をもった1棟の建物を提案した．　1階は駐車場，2～9階が住戸で，すべての住戸は南北両方向に面している．　南側ファサードは，曲面状に突出した張り出し窓や張り出しのある白いタイルの壁面と，やや引っ込んで角ばったコンクリートのテラスの面とが交互に配されていて，独特のリズムを生んでいる．　北側ファサードも，窓のある平らな白いタイルの壁面と，丸く細い円筒状の階段室が交互に配されている．



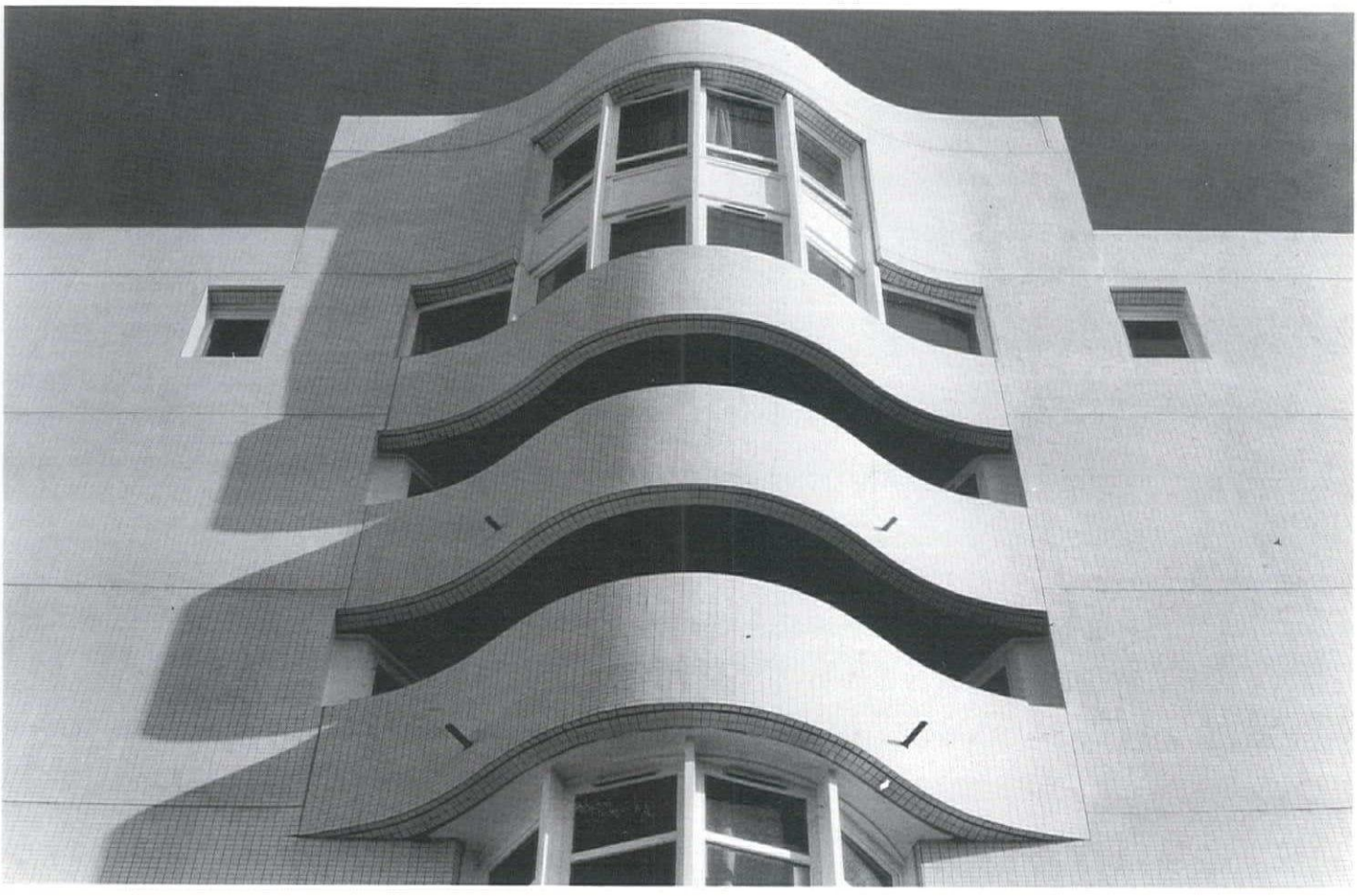
Housing, Evry New Town, 1981-82
Evry New Town, France
Commissioned by SGMI
Architect : C.Vasconi
Assistant : A.Peritore



●平面図



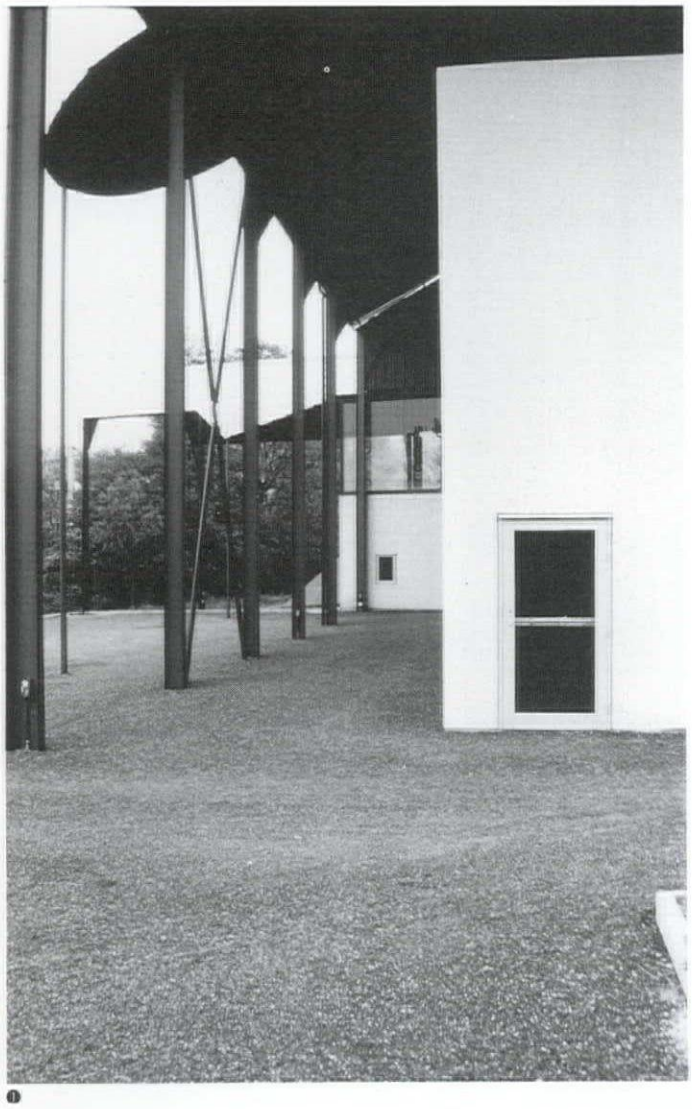
●立面図



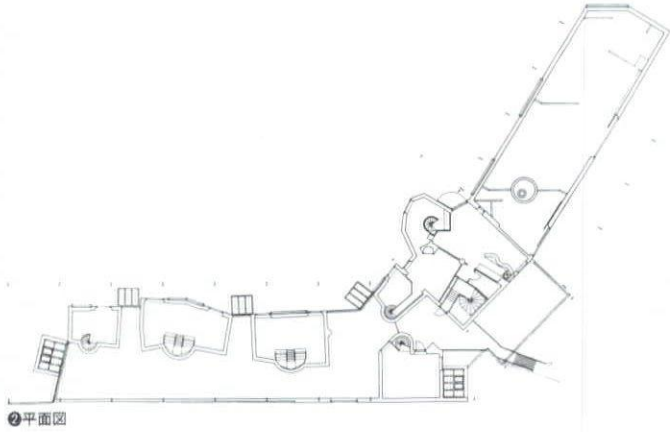
BAGOT ,Herve

●エルヴェ・バゴ　Herve Bagot
Born in 1940, France.
Government certificated architect in 1969, Paris.
Self-established, 1980, Reims.

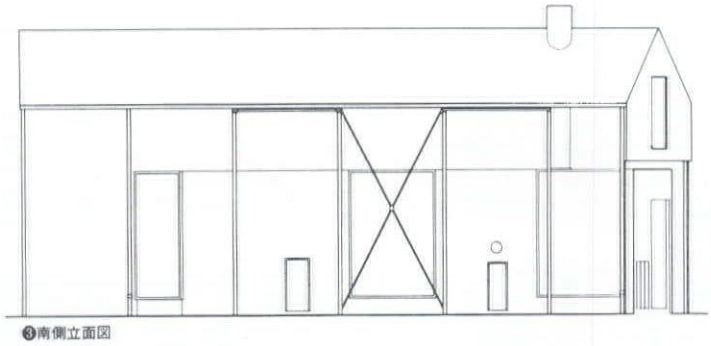




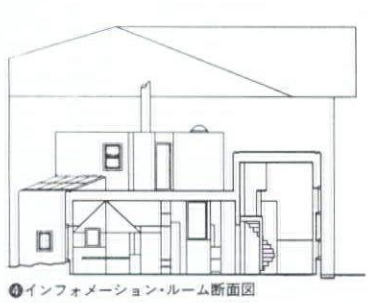
❶



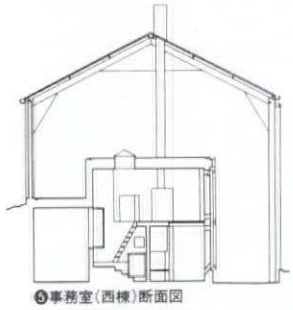
❷平面図



❸南側立面図



❹インフォメーション・ルーム断面図



❺事務室(西棟)断面図

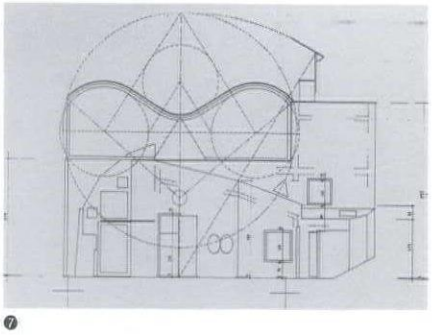


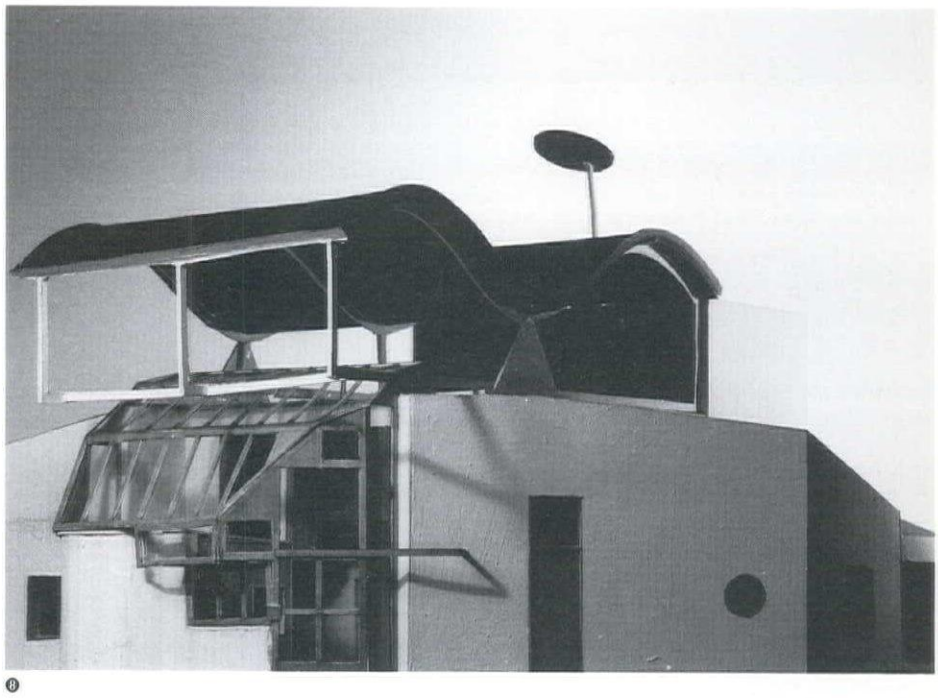
■ランス山岳自然保護地域本部ビル ❶❷❸❹❺❻
■ヴェルジーの住宅 ❼❽❾❿⓫⓬

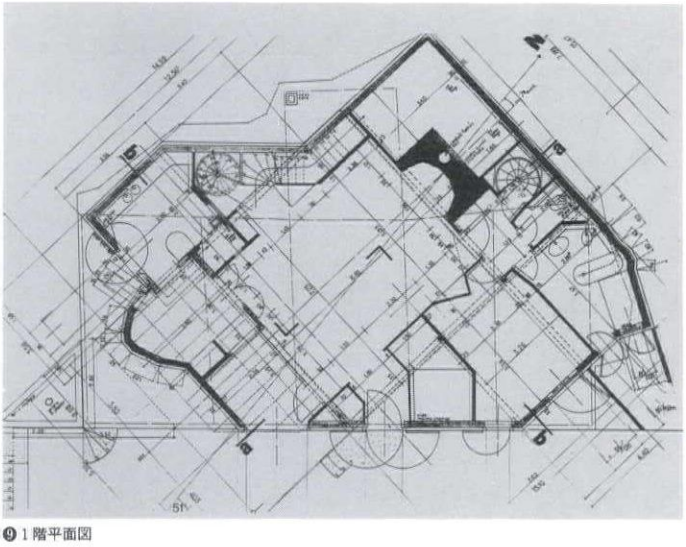
ランス山岳地帯にあるヴェルジーの住宅と地域自然保護のオフィスビルはどちらも田園風景に囲まれ，ソーラー・エネルギー利用のいわゆる〈生活気候型〉建築である．　どちらも屋根はフリー・ストラクチャーで，この近辺によく見られる工場生産による農場建築のような形をしている．　オフィスビルは，ランス地方のいわば〈生態博物館（エコミュージアム）〉として利用されており，建物とそれに続く敷地にはこの地方の伝統や習慣に加えて農業，ブドウ栽培とブドウ酒醸造，および林業などの生活生態環境の様子が紹介されている．

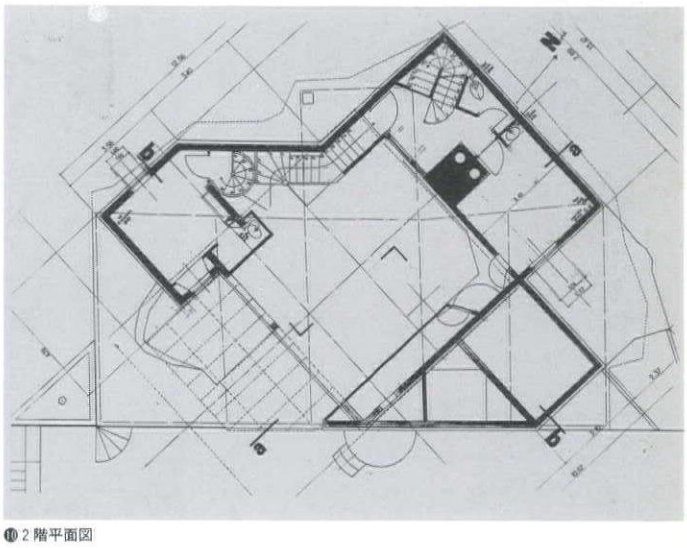
軽量の金属屋根とその下の平屋根の間の空間は，展示用のオープンスペースとして，展示パネルやショーケースなどが屋根のいろいろなレベルにそって設置されることになっている．

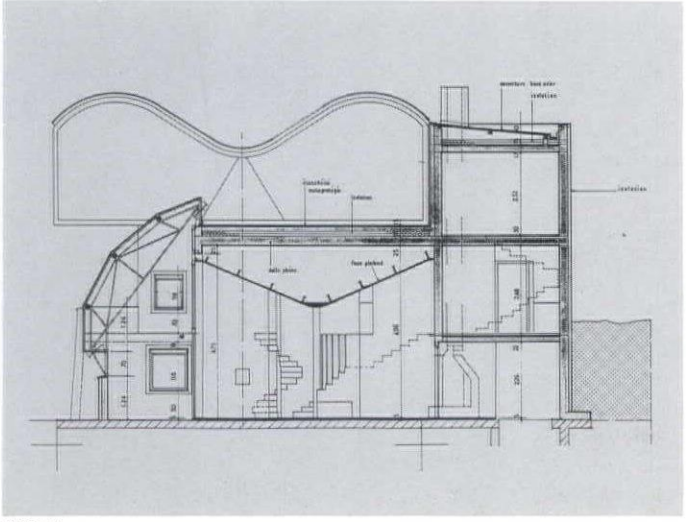
Office Building of the Regional Nature Reserve 1980-81
Montagne de Reims, Pourcy, France
Architect:H. Bagot
House in Verzy, 1978
Montagne de Reims, Verzy, France
Architect:H. Bagot

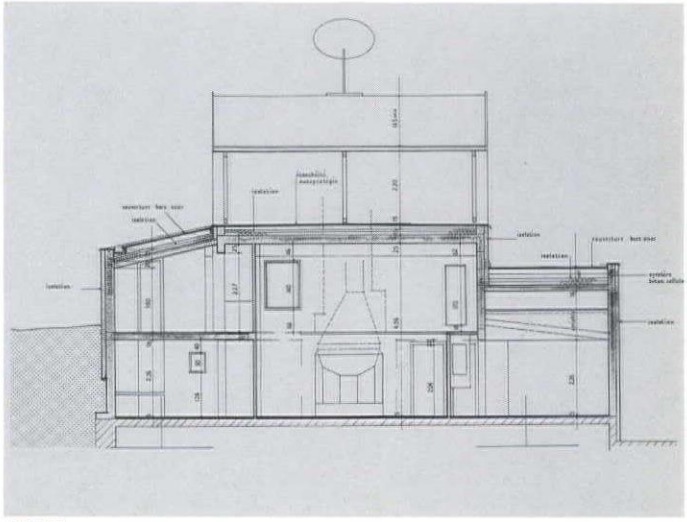

❼


❽


❾1階平面図


❿2階平面図


⓫断面図


⓬断面図

BRUNEL & ROPPONEN

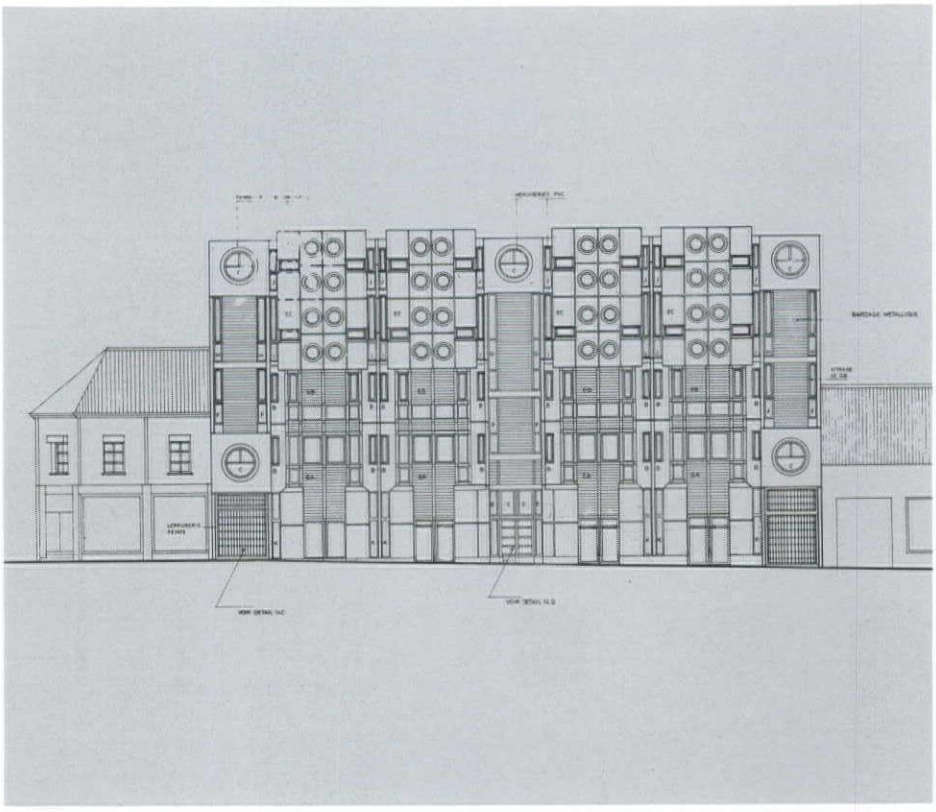


●ヤン・ブルュネル　Yann Brunel
Born in 1950, Saumur.
Graduated from Angers School of Beaux Arts (painting and sculpture), for plastic arts teaching, 1970.
Graduated from the Technical School of Architecture of Otaniemei, Finland, 1975.
Architect DPLG, graduated from the Ecole des Beaux Arts (UPI), Paris, 1976.
Self-established in Paris, 1979.
●シニカ・ロポネン　Sinikka Ropponen
Born in 1956, Ivalo (Finland). Graduated from the decorative arts School "Vapaa Taidekoulu, ", Helsinki.
Architect DPLG, graduated from UPI, Paris, 1983. Since 1980, worked in Atelier Brunel.

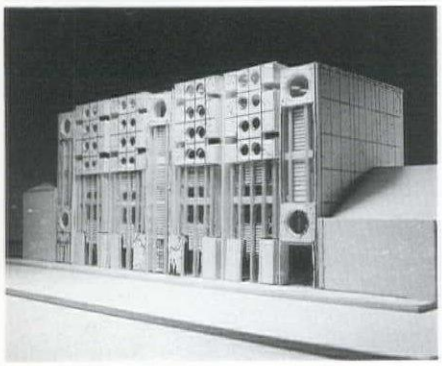
■音楽家のための24戸のアパート

音楽家の為のアパートなのに，この脇には皮肉にも鉄道が走っている．　それは言われなくても，外壁のデザインを見れば，どちら側であるかすぐ解る．この24戸のワン・ルーム式住居は，管楽器奏者と弦楽器奏者のためであると言う．　さて，小鳥用の巣箱の方には，どちらの奏者が住むのであろうか．　(GS)

24 Studios for Musicians, 1984
rue des Pyrenees, 75020 Paris, France.
Commissioned by the Regie Immobiliere de la ville de Paris.
Architects : Y.Brunel, S.Ropponen



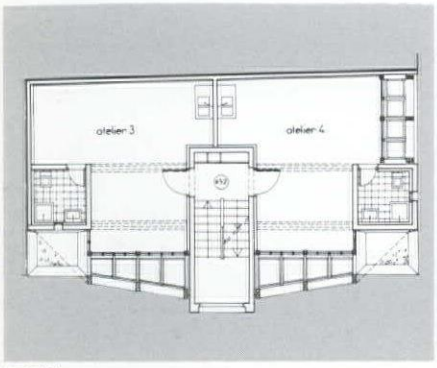
●立面図



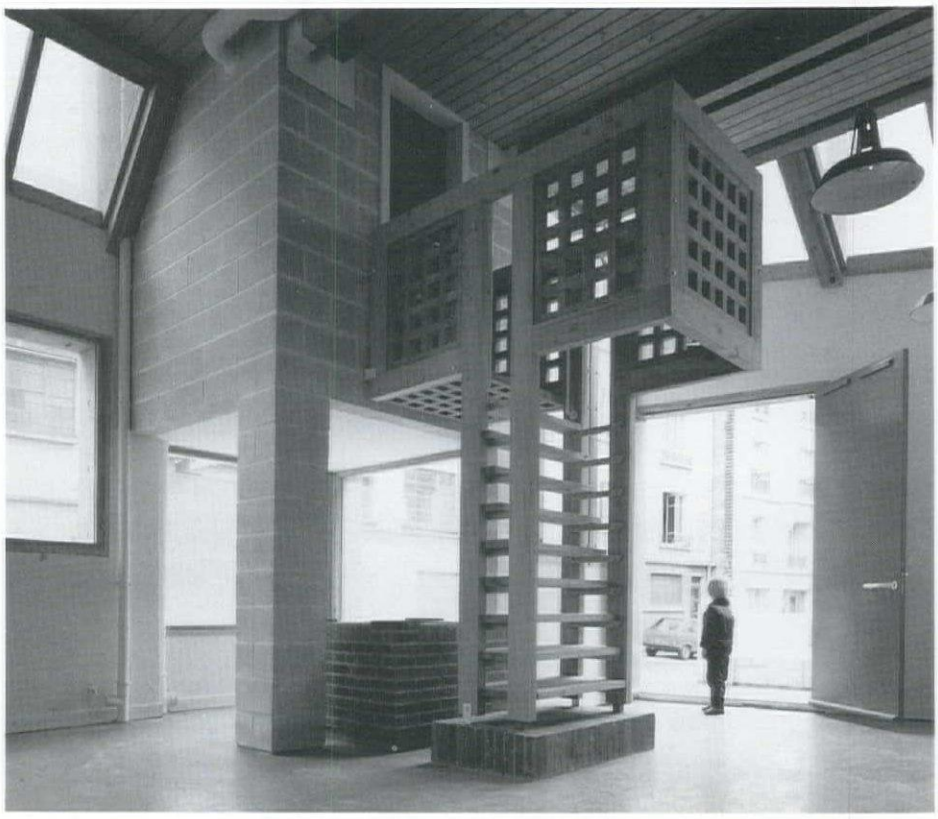
■6人の芸術家のためのアパート

人間味のある建物である．　それは煉瓦や木という伝統的な材質を上手に表現したからだけではない．浴室と階段の納められている三つの塔と開口部との関係が，外壁全体に表情を与えているからなのである．　ここでは建築における人相学について論じる必要ない．　何故ならこの顔は，採光，構造，間取りを考慮した後に，ほんのちょっとマスカラをつけ，パフをはたいたのにすぎないから．　(GS)

6 Artist's Studios
1 rue du Chemin-du-Parc-de-Charonne, 75020 Paris, France
Commissioned by the Regie Immobiliere de la Ville de Paris
Architects : Y.Brunel, S.Ropponen



●平面図



BERGER ,Patrick



●パトリック・ベルジェー　Patrick Berger
Born in 1947, Paris.
Architect, graduated from UP1, Paris, 1972.
Worked in the office of Frei Otto, 1970.
Worked in the Architectual Advisory Service, Vancouver (Canada), 1974.
Self-established in Paris with Vincent Barre and Christophe Bayle, 1975.
Teacher of architecture at St Etienne, 1982.
Lecturer at the International College of Philosophy,
supervised by Jacques Derrida, 1984.

■カンカンポア通りの四つのアパート

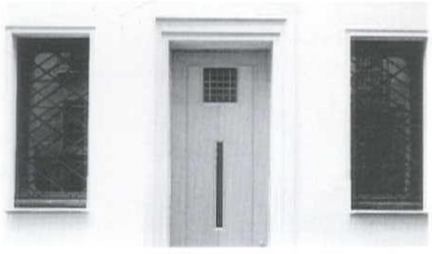
カンカンポア通りは，ポンピドー・センターとレ・アレの間にある大変歴史のある通りである．　建築家は設計するにあたり周りの建物の類型とこの地区の歴史を参照した．　この建物のデザインは明らかにある著書によりヒントを与えられた．　それはシャステル，ブードンらの著書《都市建築のシステム》である．

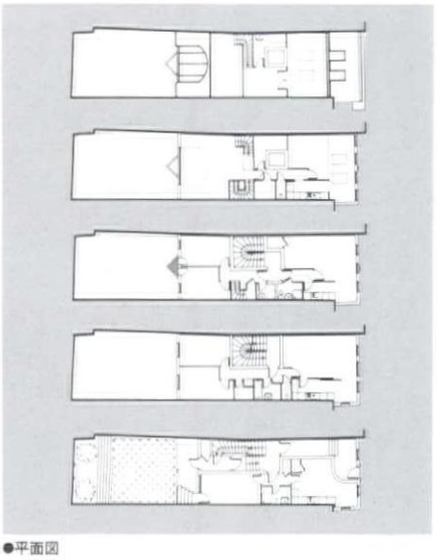
レ・アレ地区では，窓の構成は，一区画の幅（広さ）と関係している．　カンカンポア通りでは，一区画の幅は5.5mである．

建築家は，この道に面したファサードに窓を３列に配する伝統的な構成法を採用している．　ファサードにはまた道を見下ろすように頭部の彫刻が取り付けられている．　それは，カンカンポア通りの娼婦を呼び起こすものである．

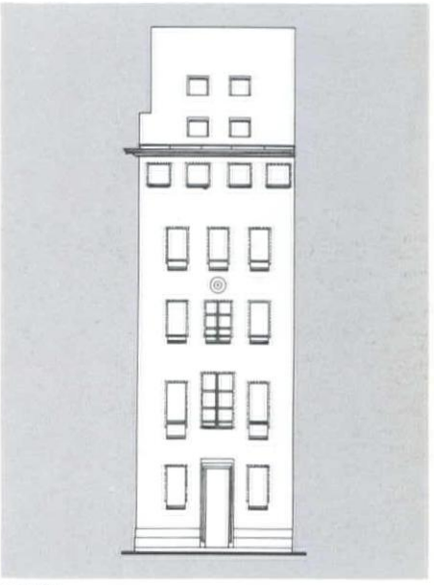
4 **Apartments, rue Quincampoix**
53 rue Quincampoix, Paris, France
Commissioned by the Public Office of the Paris Town Council
Architects : P.Berger with V.Barre, V.Borensztajn(sculptor)







●平面図

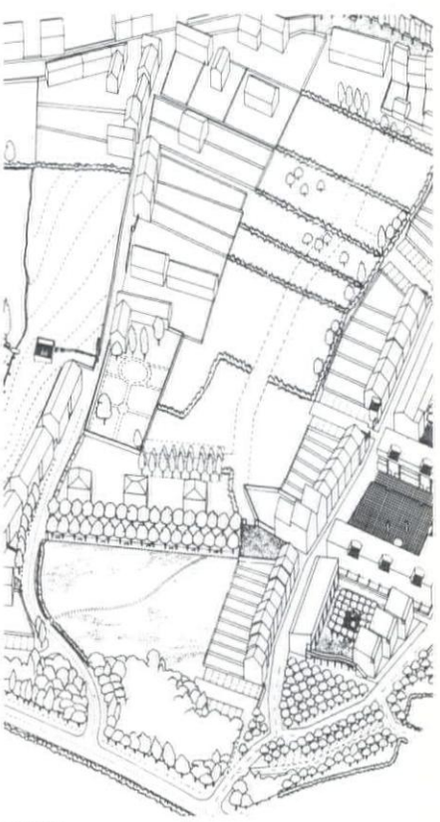


●立面図

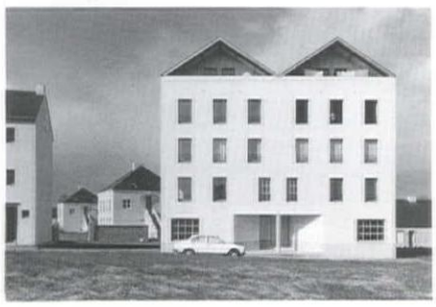
■サン・ローの個人住宅および集合住宅計画

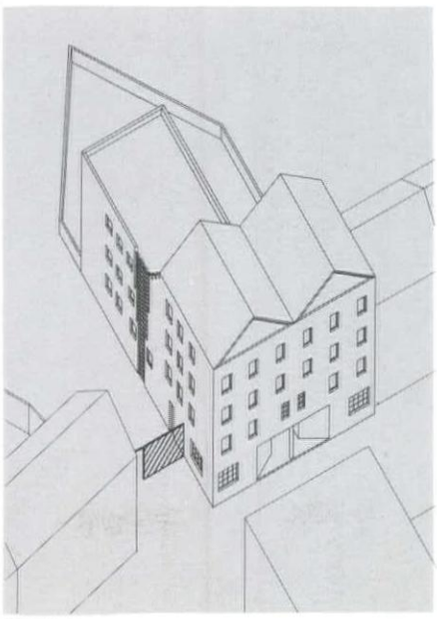
この敷地は，サン・ローの街の外縁にあって，街の道路と郊外住宅地にはさまれた土地である．　全体計画は三つの主要な建物により強調される．　即ち，コロネードにより構成される建物，３人の老人のための住宅，そして広場に面した住宅．　最後のものは，九つの住戸と共同室とからなる．　その一対の破風をもつファサードは，第２次世界大戦のさいに破壊されてしまったサン・ローではよく知られていた木造建築に照らし合わせたものである．　横側のファサードには，二つの異なった様式が用いられている．　それは，スレートぶきの屋根と陸屋根である．　その間にある割れ目は，組格子の背後にあるベランダ式廊下を保護している．

Housing, La Gouerie distrit, St-Lo
La Gouerie district, St-Lo, France
Commissioned by the OPDHLM and CREPAH
Architects : P.Berger with V.Barre, C.Bayle, G.Cuertas (painter), V.Borensztajn(sculptor)



●配置図

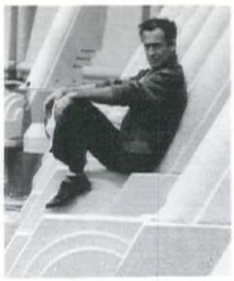




●アイソメ

NUNEZ-YANOWSKY ,Manolo

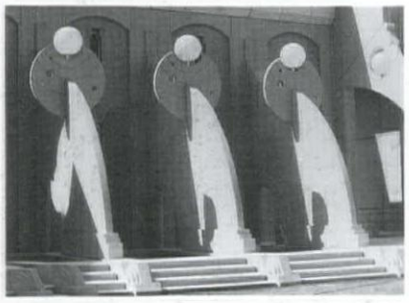
●マノロ・ニュネズーヤノヴスキー Manolo Nunez-Yanowsky.
Born in 1942, Samarkand, U.S.S.R.
Studied at the Ecole A.D.A.G., Barcelona, 1960-67.
Join the foundation of Taller de Arquitectura, working with R.Bofill, etc, 1962-78.
Directed an atelier at the Ecole Speciale d'Architecture de Paris, 1977—78.
Established Ateliers du Grand-Hornu in Belgium, 1978—79.
Established his atelier in Paris, 1980—84.
Directed an atelier at the Ecole des Beaux Arts de Paris 1981.

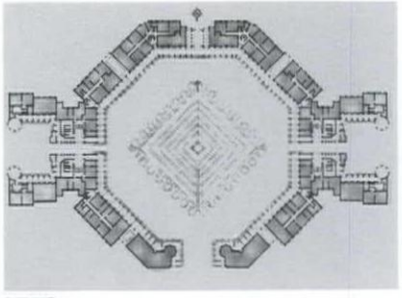


■ピカソのアリーナ

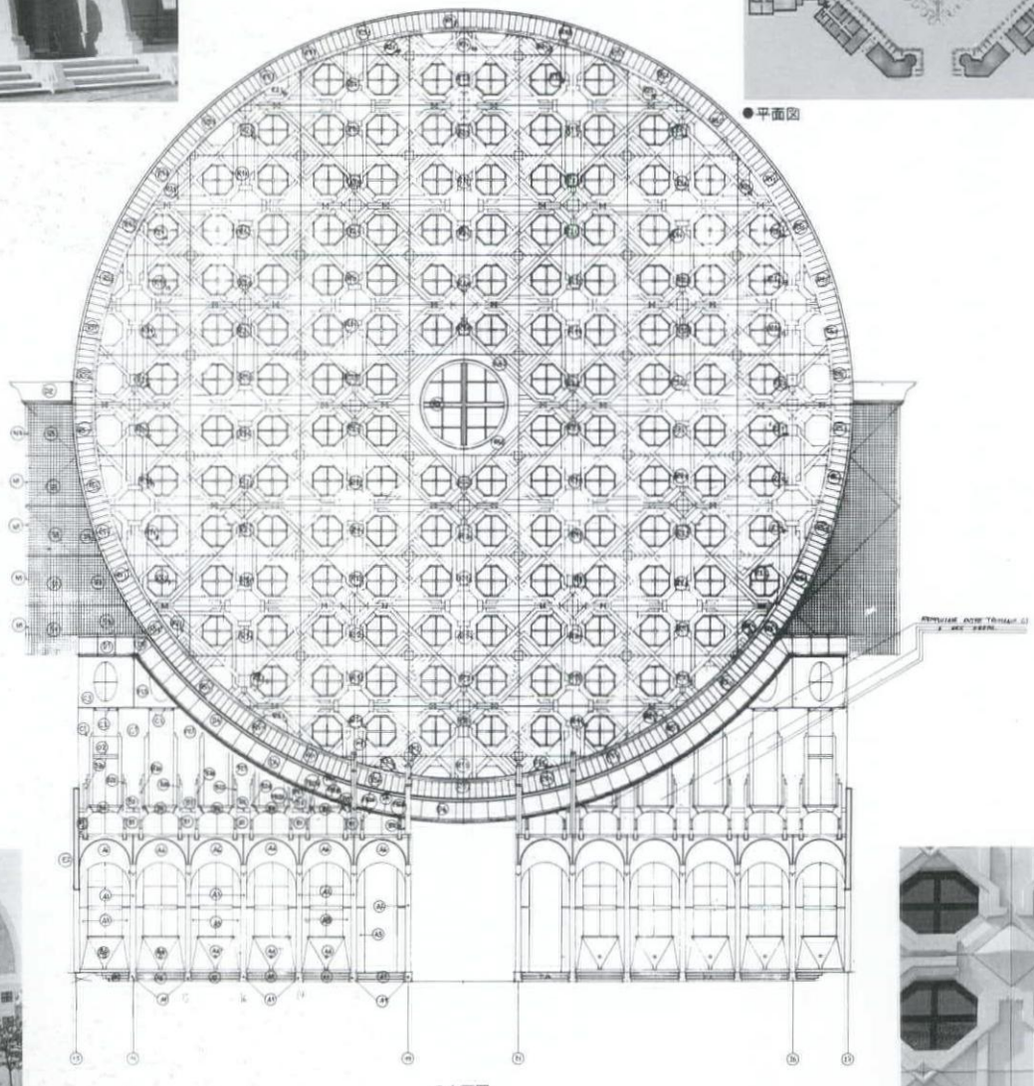
この二つの円盤とも言うべき形は，作者にとってノートルダム寺院の薔薇窓等，パリの建物からの連想なのである．今，この建物は二つのカマンベール・チーズと呼ばれているし，建築学生達は，ガウディやインカ建築とこの建築との関連性について激論を交している．フランスを代表する自動車産業会社のひとつであるルノー社は，新型車のCMの舞台に，このSF的建物を選んだ．この建物を初めて見て公団住宅だと解る人が果たして居るであろうか．（GS）

Picasso's Amphitheater , 1980-84
Place Pablo Picasso, Noisy le Grand, Marne la Vallée New Town , France
Commissioned by Epamarne and FFF(Foyer du fonctionnaire et de la famille).
Architect : M.Nunez-Yanowsky
Assistants : J.M.Gomez , F.Guardia , R.Guardia



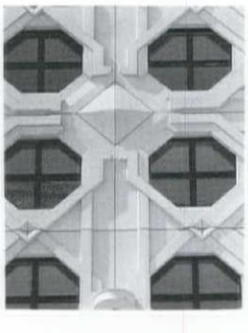


●平面図



●立面図





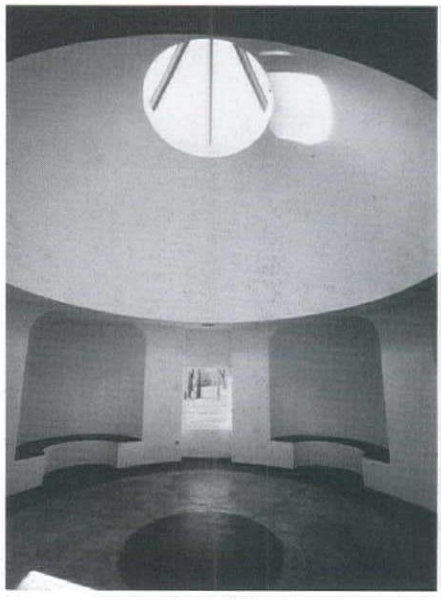
NOUVEL ,Jean

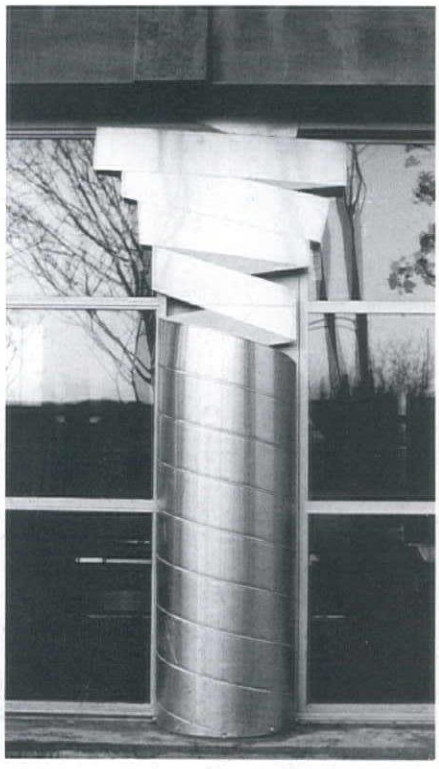
●ジャン・ヌーヴェル　Jean Nouvel
Born in 1945, Fumel. Graduated from ENSBA, Paris 1971.
Worked with Claude Parent.
Self-established with François Seigneur., 1970. Association with G. Lezenes 1972, and in 1981 with Soria.
●ピエール・ソリア　Pierre Soria
Born in 1947, Noisy-le-Sec. Architect D.P.L.G., 1972.
●ジルベール・レゼンヌ Gilbert Lezenes
Born in 1944, Carhaix (Finistere). Graduated from ENSBA, Paris 1971.

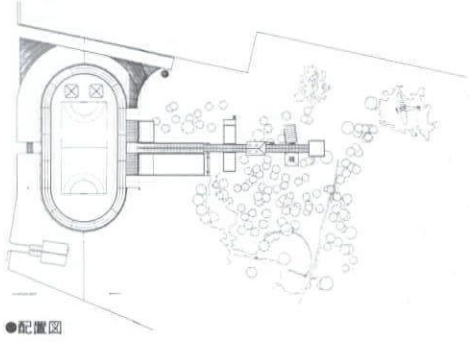
■〈レ・ゴデ〉クラブ・ハウス

漫画がそうであるように、子供のためのこの施設は輪郭線が強調されている。　バシュラールが子供の空間体験を語るように、家を構成する代表的な部屋が用いられており、広い敷地の上にころがっている。煉瓦造りの小さな窓を持つ建物は地下室を連想させ、アルコーヴを持つ居間にあたる棟は4方から光を受け入れる。　屋根裏にあたる棟へは階段を必要とするし、光は天井窓からしかこない。　その他、林の中の、この施設の軸とも言うべきガラス張りの廊下は、木の幹である。　ここでの多様な建築は、林が風景を刻んでいることに答えるかのように断片の集まりの建築である。　(GS)

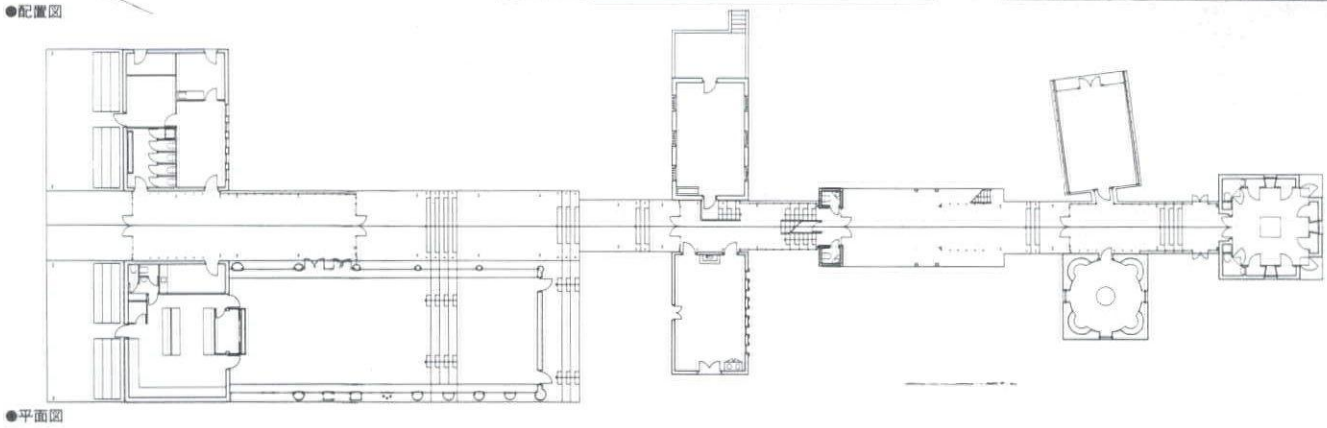
"Les Godets" Club House, 1982
Antony, France
Client: Ville d'Antony
Architects : J. Nouvel,G. Lezenes.
Assistart: M.Vitart,G.Glaser



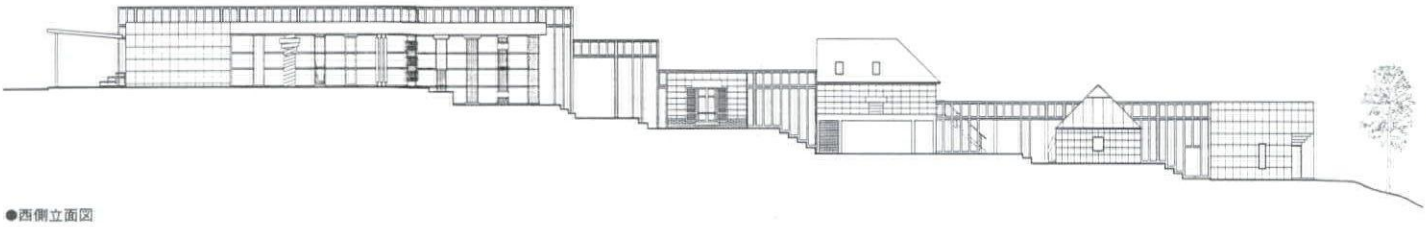




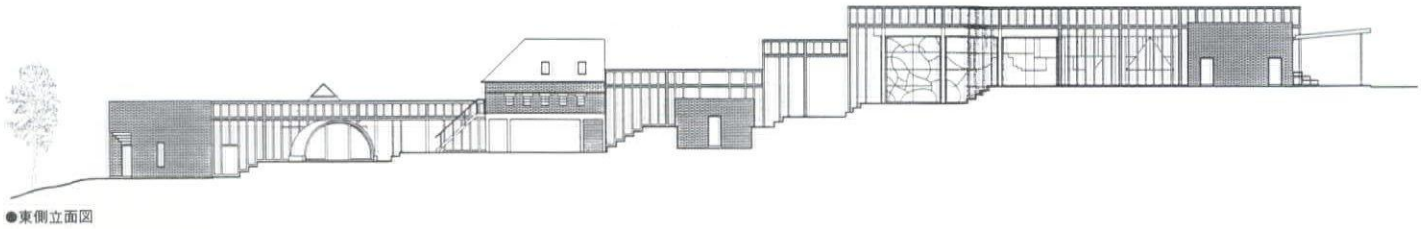
●配置図



●平面図



●西側立面図



●東側立面図

ゲームの規則

4. ポスト・モダンの条件

松浦寿夫

リオタールによればポスト・モダンとは，「19世紀末以後，科学，文学，芸術を支配していたゲームの規則に影響を与えたさまざまな変化の後で，文化が到達した状態」のことを指している．ではモダンとは何か．　たとえば科学を例にとってみれば，科学という実践の領域が立脚するゲームの規則を，真なるものの探求として継続するために正当化する必要が生じてくるが，

> 科学は，その固有のあり方のうえに，その正当化のため言説をもつものであって，この言説が哲学と呼ばれたのである．　こうしたメタ言説が，精神の弁証法，意味の解釈学，合理的主体または労働の主体の解放，富の発展等々の大きな物語にあきらかに依存している場合，われわれは，自己正当化のためにそれを手がかりとする科学を〈モダン〉と呼ぶ

とされている．　すなわち，科学，文学，芸術等々の個々の領域内で作動するゲーム規則を正当化するための規則いわば，ゲーム規則の規則としての統一的なメタ規則を要請するという点にモダンの特質があるということだが，ポスト・モダンとは，このようなメタ規則ないし，大きな物語への不信のことであり，

> いまやわれわれは，誰もが数多くの価値と交差する地点で生きている．　われわれは，まちがいなく安定した言葉の組み合わせをつくりだしはしないし，またわれわれの組み合わせの特性は，必ずしも伝達可能ではない（リオタール，〈ポスト・モダンの条件〉）

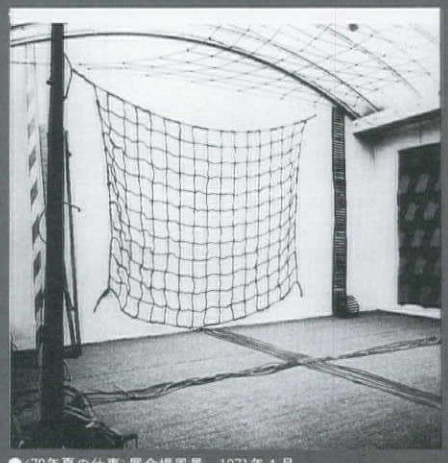
というような事態のことなのだ．

そして，このような統一的な価値としてのメタ規則が有効に機能しなくなったことへの対応策が他ならぬ，世界の複雑性の縮減をめざすルーマンのシステム論であり，ハバーマスの合

絵画の脱構築

■

クロード・ヴィアラ（1936年生れ）は
シュポール／シュルファス（表面／支持体）
というグループの画家として，
60年代末から絵画の脱構築の作業を
押し進めてきた．
絵画の脱構築とは
単に絵画をその構成要素（布，木枠，絵具）
に解体するばかりでなく，
これらの要素に附与されている
象徴的な意味内容を露出させ，
その限界を記しづけることであった．



●〈70年夏の仕事〉展会場風景　1971年4月

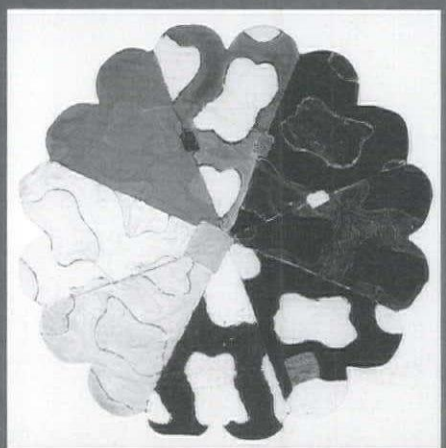
意形成の試みであったわけで，それらはいずれも，新たな公共性の模索という様相を示すことになる．　あるいはまた，20世紀の前衛主義の臨床的な診断を意図した《資本主義の文化的諸矛盾》のダニエル・ベルのように，メタ規則の崩壊を資本主義の危機と考え，その源泉を近代の実験主義とみなしたうえで，近代の企図そのものの破産を宣告するとき，〈公共家族〉という概念とともに浮上してくるのは新保守的なイデオロギーに他ならない．　このようなイデオロギーの反動的な回帰への苛立ちから，ハバーマスは近代の企図のなかから，実験主義をしりぞけつつ啓蒙の理念を引き出し，これをポスト・モダンを自称する反動的なイデオロギーに対置させるのだが，それが先に述べた討議活動による合意形成の試みである．　しかし，合意とは討議の過程の一状態にすぎず，その最終的な結論でありえない以上，普遍的で透明な主体を想定せずには，いかなる合意形成も考えられないし，討議活動の徹底は逆に異質な言語の葛藤を引き起こすことになるだろう．　ではどうすればよいのか．　そこで，リオタールが提案するものは，パラロジー（Paralogie）による正当化である．　それは，言語ゲームの異型性の承認と，規則に関する合意があるとすれば，この合意は局所的（ローカル）なものではならないというふたつの局面から考えられている．　とすれば，近代の統一的なメタ規則が失効したとき，何かそれとはまったく別のポスト・モダンのメタ規則が到来したということではなくて――したがって，ポスト・モダンとは決して様式概念ではない――，ポスト・モダンとは統一的な規則が後退することによって，個々の要素がそれぞれ固有のプラグマティックな価値を発揮し，互いの差異を露呈し，際立たせあう環境のことであって，そして，このような差異の生起する空間での合意を形成するのが，ミクロでローカルな政治なのだ．　だから，

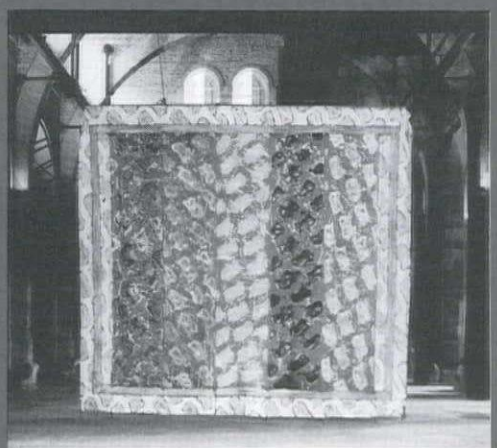
> ポスト・モダンの知は，あれこれの権力のための単なる道具ではない．　それは，さまざまな差異に対するわれわれの感性を洗練させる知，すべてを単一の基準に還元しようとする力に抵抗するわれわれの能力を強化する知なのだ．（リオタール，前掲書）

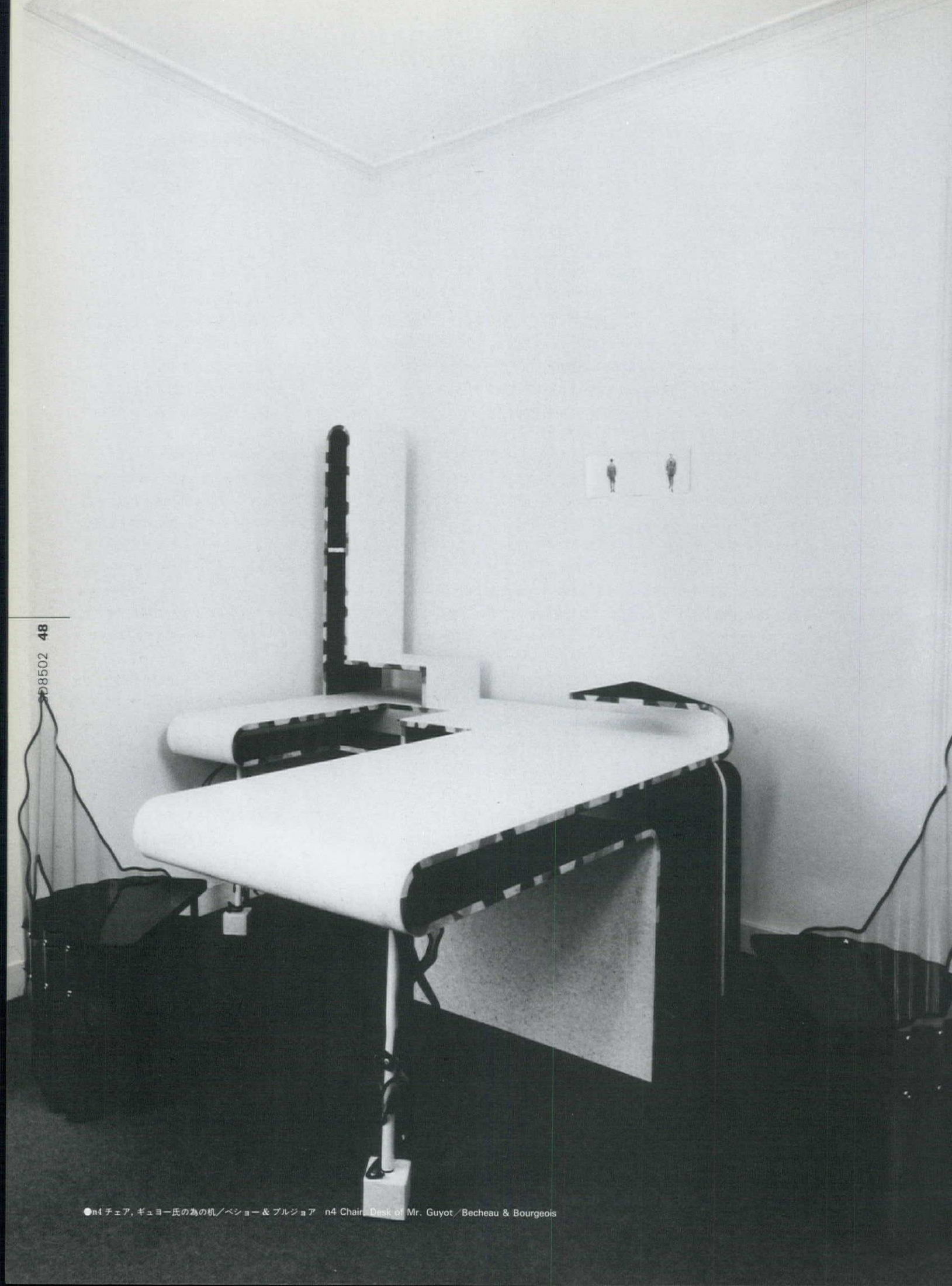
それでは，芸術における，あるいは建築におけるポスト・モダンの条件とは何か．　それはもちろん，チャールズ・ジェンクスが語るような差異の隠蔽にのみ貢献する歴史主義的＝折衷主義的な欺瞞とはまったく無縁である．　では，《建築における複合性と対立性》のロバート・ヴェンチューリはどうか．　おそらくヴェンチューリの限界は彼が冒頭から引用した，「伝統と個人の才能」のT.S.エリオットの反動的な限界を反映しているのではないだろうか．　ここでエリオットがそれが宗教的であれ，文学的であれ，伝統と呼ばれる擬似共同体を要請することによって，異質な要素の遭遇という事態をそのア・プリオリな枠組のなかに馴致してしまっているように，ヴェンチューリは種々の対立性を意図的に捏造したうえで，それを全体に帰与する一効果とみなしているのではないだろうか．　だが，対立性とは異質な要素の遭遇という出来事のさなかに差異の解消不可能な露出として生起するものであるはずだ．　あるいは，今では一種の方法として要請されているかにみえる脱構築の作業のことだろうか．　だが，脱構築とは方法ではないし，まして近代建築が排除してきたものを復権させたり，両者をだきあわせたりすることなどではいささかもない．　それでは，ポスト・モダンの条件とは何か．　それは先に引いたドゥルーズが語るように，「異質で多岐的な各系列を同時に肯定しえる力」のことであって，この異質で不均衡な系列の間で，閃光のように走り，その距離を廃棄するような遭遇の力学を肯定することであり，しかも，この遭遇の力学を，折衷主義のような我有化の対象としてではなく，決して我有化しえない絶対的な対立性の運動として肯定することであるはずだ．
だから，それは，あらぬる差異や対立性を産出する絶対的な運動性，デリダならばディフェランス（différance）と呼ぶであろう運動性である．それ自身として充足しきってしまう現在ではなく，すでに過ぎ去ってしまったものの痕跡や，やがて生じるかもしれぬ未来の刻印とが交錯しあう場としての現在という起伏を，いま，ここで肯定せざるをえないような事態として生起するだろうし，そのとき，過去や未来とは主体の現前性のうちに内面化＝我有化しえるような現在の変奏ではなくて，絶えず振動し続ける非単一的で多層的な場のなかで，時間の錯誤として出現することになるだろう．

●まつうら・ひさお／西洋美術史


●カーテンの縁かがり，色留薬とアルコールで彩色
1976　220×200


●パラソル，アクリル絵画　1978　φ185


●カーキ色のテント，アクリル絵画　1980　610×540



●n4 チェア, ギュヨー氏のあの机／ベショー & ブルジョア　n4 Chair, Desk of Mr. Guyot／Becheau & Bourgeois

プリミティヴィズムの台頭

三宅理一

ここ最近のフランスの家具，インテリアの動向は，建築の動きとあいまってすこぶる活発な様相を見せている．　長い間，ヨーロッパの家具の代名詞のように語られてきた北欧の家具はいうなればモダニズムのもっとも洗練された部分として考えられるものであるが，それと対極にあったイタリアの家具も，たとえば《ドムス》といった雑誌を通して世界中の人々の関心を惹き続けてきた．　その中で，フランスの家具は，人々の伝統的室内空間への好みもあってか，国際的にはほとんど注目されず，かつてのシャルロット・ペリアンらの活躍の後，長い空白の時期にあったように思われる．

そうした状況に対して，フランスの現代家具を再興し，新しいクリエーションの機会を増すための奨励策がとられるようになったのは，前ジスカールデスタン大統領の頃からである．　なかでも，1979年に工業大臣の諮問を受けて〈家具刷新活用〉委員会（VIA）なる組織ができ上り，デザイナーやメーカーに新しい家具デザインの機会が大幅に与えられるようになったことが特筆される．　ジャン＝クロード・モージラールらが中心となって組織されるこのVIAは，すぐれたデザインとみなされたものにVIAラベルを与え，デザインの質を保証する仕組みとなっている．

1980年代の若手デザイナーたちは，そのような新たな気運の中で家具デザイン，インテリア・デザインの可能性を探っている．　若手の中では最もポピュラーな地位を得ているフィリップ・スタルク（P.56—57）は，それまでのモダンな家具の意匠からあらゆる重みを抜き去ってしまったかのような印象を受ける．　事実，彼らにとって，それまでの家具デザインはモダンなものにしても，伝統的（たとえばルイXV世様式）なものにしても，いわばもののもつ実体的な側面を強く表現していったようなものに思われた．　だからこそ，そうした重みとか存在感を一度敢えて消去し，そこにどこかイマジネールなオブジェを浮び上らせていくことこそ主眼となるわけだ．　そこには彼らが頭の中で描くライフスタイルも大きく影を落としている．　ちなみに，スタルクは自身の履歴書をこのように記している．

「家具作家，《アルシテクチュール・アンテリエール》誌編集者
34歳
既婚，子供がひとり
長身，太め
汚い格好
きわめて優しい
あまり丁寧ではない
飛行機の中で生活
1日を製図，シャンパーニュの痛飲，睡眠にあてる
Tシャツ2枚，ジーンズ1着しかもたない，靴下ははかず
ラカンとヴェンチューリの子供たちのための新機能主義」

ちょうどアメリカ西海岸のスニーカー世代が話題となってきた頃に登場したこのデザイナーは，明らかに新しい時代感覚を意識した世代を代表している．　勿体ぶったもの，重厚なるもの，正統派ぶるものをすべて斥け，いわば最小限の素材で最大限の夢と想像力をかきたてるものを創り出すわけだ．　話題を呼んだソファ〈ドクター・ブラッドマニー〉はキャンバス製で折り畳むことができ，いとも手軽に持ち運びができるものである．　VIAの補助金〈カルト・ブランシュ〉を用いて製作された〈ミス・ドルン〉椅子もその範疇で，ベビーチェア的な発想で座るという行為を規定していったところに機智が感じられる．

このスタルクが，ある意味でそれまでのモダンな家具を消去する方向に走っているとすれば，他の一群の若手デザイナーたちは，よりアモルフで人間の夢の奥底にまで立ち入ったような形態へと突き進んでいる．　これまでの家具というものが抱いていたシンプルで肌ざわりのよいものではなく，そこに敢えて荒々しいもの，不整合なものを導き入れていくわけである．　こうした傾向をプリミティヴなものの浮上という意味でプリミティヴィズムと規定するとすれば，あるいはそれは今日の人間の衝動的な願望に対応しているかもしれない．

その中でも筆頭格に挙げられるガルーストとボネッティ（P.52—53）のチームの制作する家具は，従来の意味ではとても家具の部類には入らない．　そこに生まれるのは，むしろ室内に現われたオブジェの数々であり，ヨーロッパの長い歴史の中で沈澱してきた家具とかインテリアのいわば夢の化身である．　彼らのインテリアのもつ構図は，ある点ではキリコやダリを想わせる人間の深層心理，心象風景に近いものと感じさせる．　〈11本の脚をもったテーブル〉などは思い思いの方向に傾いた脚がかろうじて上のガラス板を支えるという，力学法則とか整合性をまったく無視したところに家具が発生する．　かつて鍛鉄が世紀末の時代のマズコテリらを通して夢の世界を現出せしめたように，彼らの素材もそれを眼にし触れるだけで，その物質の背後にある何か知ってはいけないものに到ってしまうかのような印象を与えるのだ．　そこでは転倒，囲撓，緊縛といった主題が密かに展開し，従来の室内空間が隠してきたタブーの世界を表に出しているかのようである．

同様の点はヴァンサン・ベショー（P.50—51）の家具についても言える．　アクリル製の背もたれが焔のようなかたちに持ち上がり，椅子それ自体とても人々に安らぎを与えるものには見えない．　しかし，そうしたものが，一定の秩序で分解とか生成を繰り返し，別の造形へと到っている点は，形態の非合理性とシステムの合理性とがそこにおいて奇妙に合体している証拠となろう．ベショーはこの考えを敷衍して，〈テートル・ア・クワ〉と呼ばれる噴水を計画している．これは，いうなれば水にまつわる逸話を展開したもので，螺旋の噴水，水道管，水盤といったものが，コンクリート，ポリエステル，メタルといった素材によってかたちづくられる．　そうした素材の発するラフな感覚と，そこから生み出される現代の逸話は，これらの要素が単なる家具とか建築を通り越して，よりシュールリアリズム的な効果をそこに含み込んでいると考えられるのだ．

このように，現代家具の若手デザイナーたちは，家具とかインテリアの既存の価値観を大きく覆し，新しいグループを生み出そうとしている．　この先しばらくは，フランスの現代インテリアが人々の話題を呼びそうである．

●みやけ・りいち／芝浦工業大学助教授

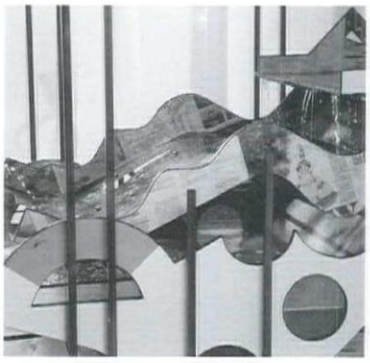
BECHEAU & BOURGEOIS

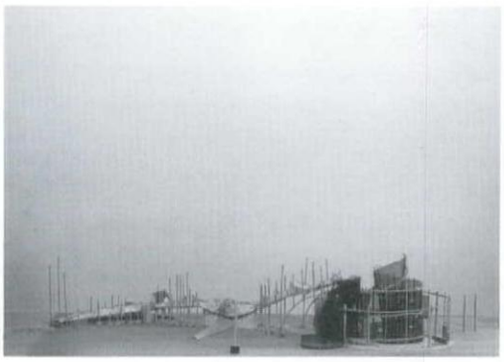
●ヴァンサン・ベショー　Vincent Becheau
Born in 1955, Perigueux.
Architect D.P.L.G. (graduated from UP6, Paris), 1981
First furniture prototype, 1982
●マリー・ロール・ブルジョア　Marie Laure Bourgeois
Born in 1955, Paris.
Architect D.P.L.G. (graduated from UP6, Paris), 1981

■ペリグーの噴水計画

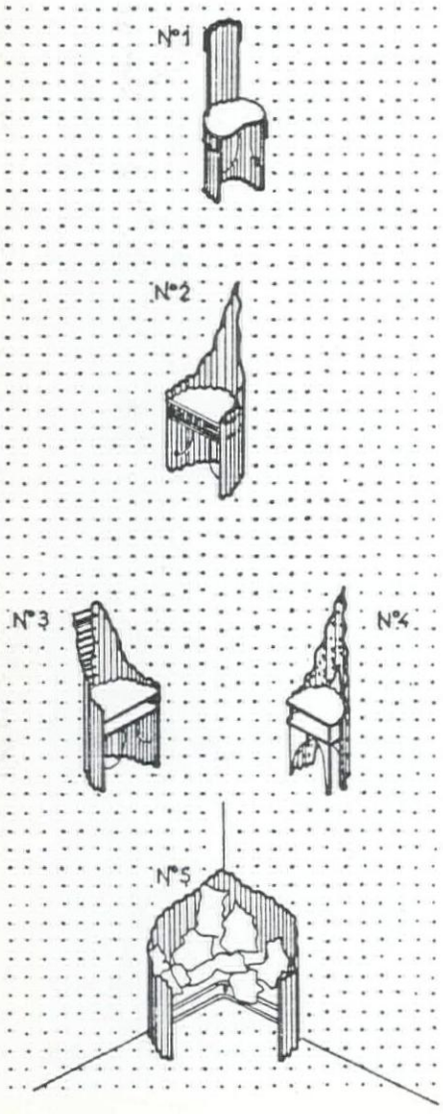
この噴水は，水の物語である．　水は螺旋状の口から流れおち，水路やプールを経て，最後には噴水に至る．　螺旋と噴水とは鉄筋コンクリートとスチールで作られており，波型ポリエステル板や平らな薄い鋼板で覆われている．　水路はポリエステル樹脂をしみ込ませた新聞紙とポリエステルの受け皿で作られている．　それらは，いろんな形の壁や柱列で支えられている．　プールはコンクリート製．

Project for a Fountain in Perigueux
Design : V.Becheau with J.Marausse



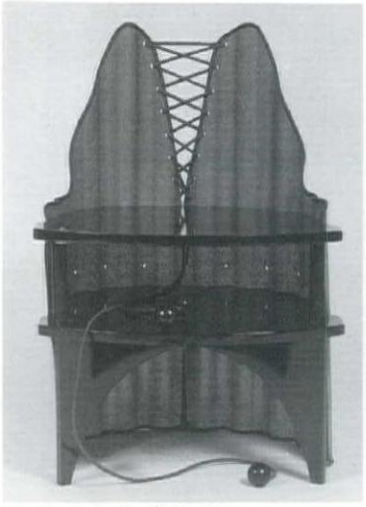


■ベショーとブルジョアのデザインは波型ポリエステル板などの工業材料を使用して新たな形を再発見しようとするものである．

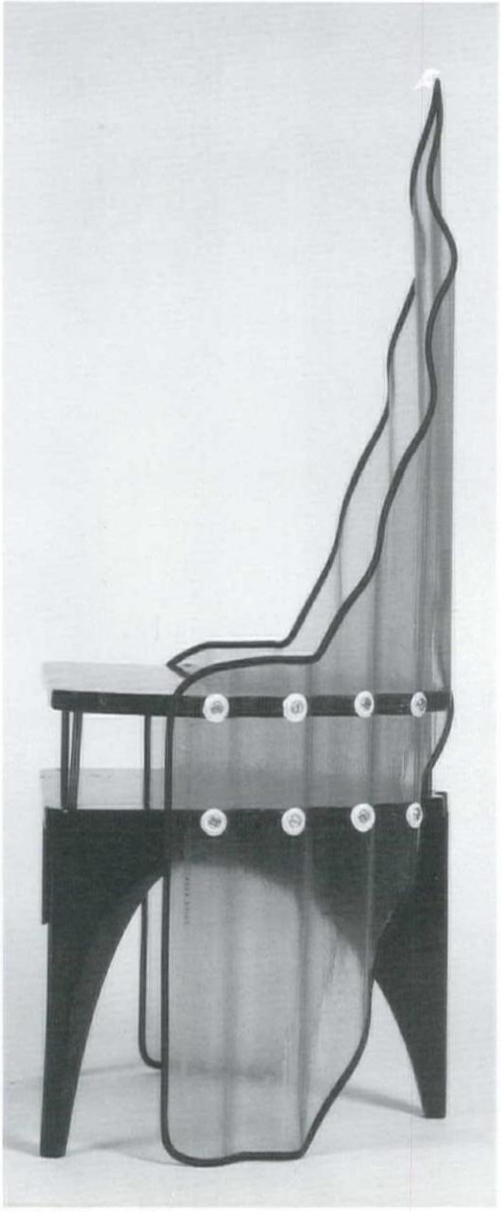




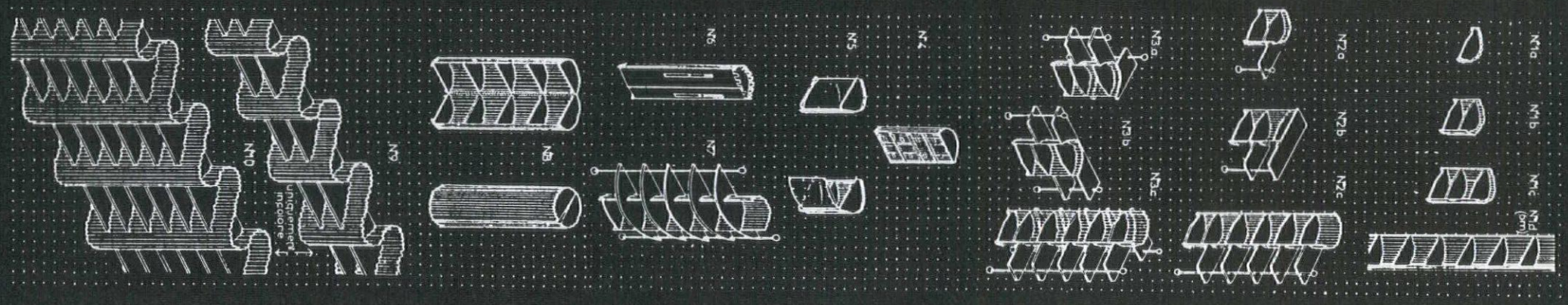
●n 4 チェア　n4 Chair



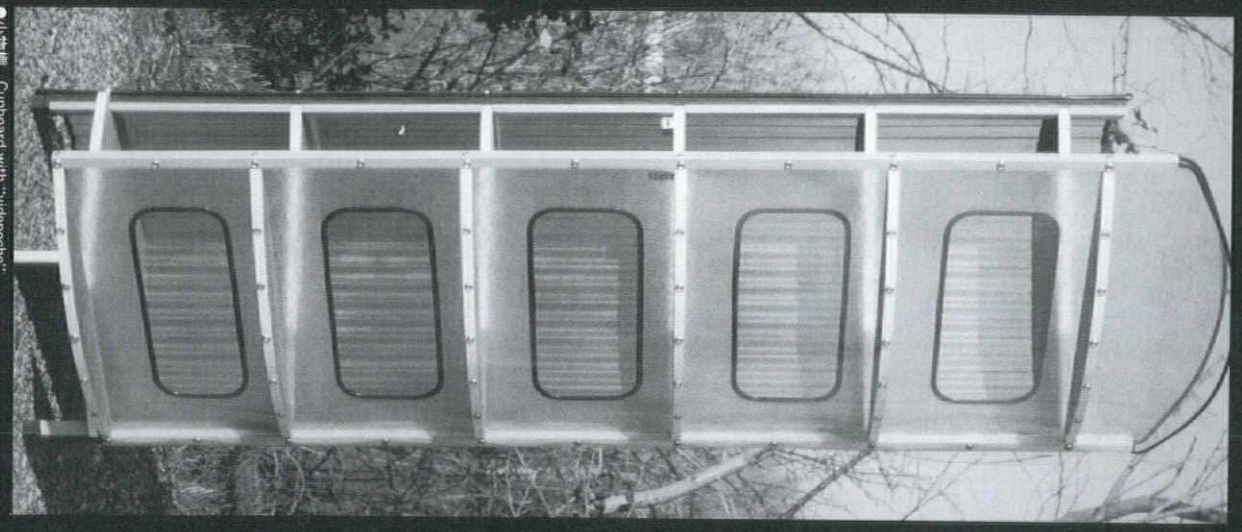
●〈ゴシック〉チェア　Gothic Chair



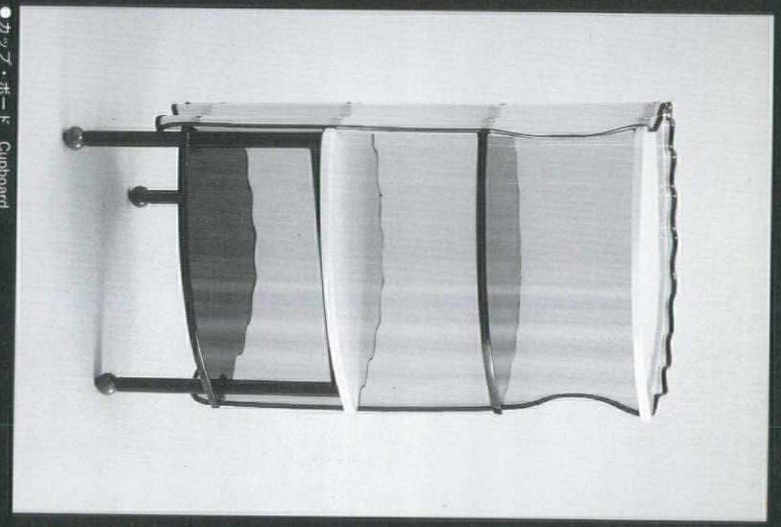
●n 4 チェア　n4 Chair



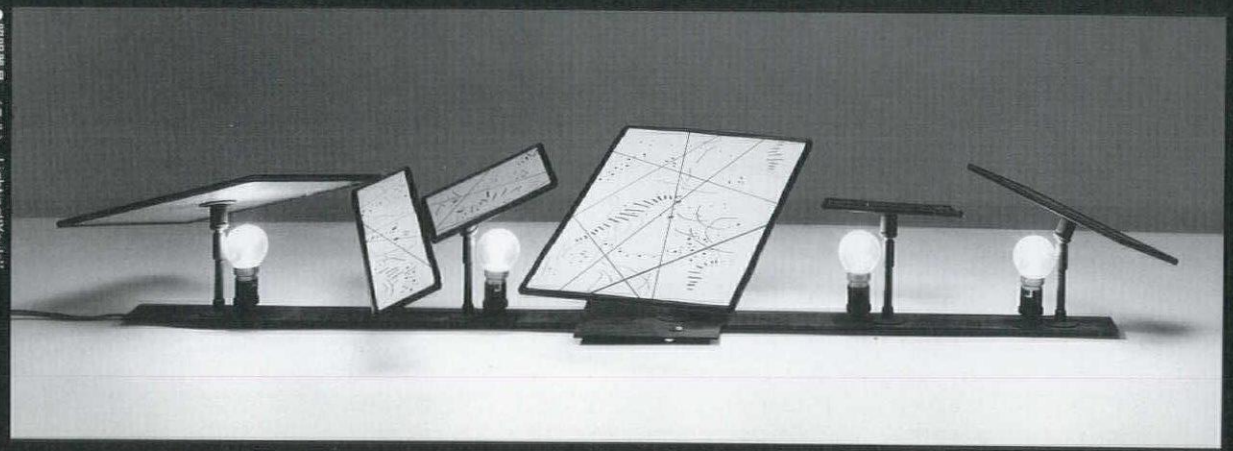
●小物棚 Cupboard with "videpoche"



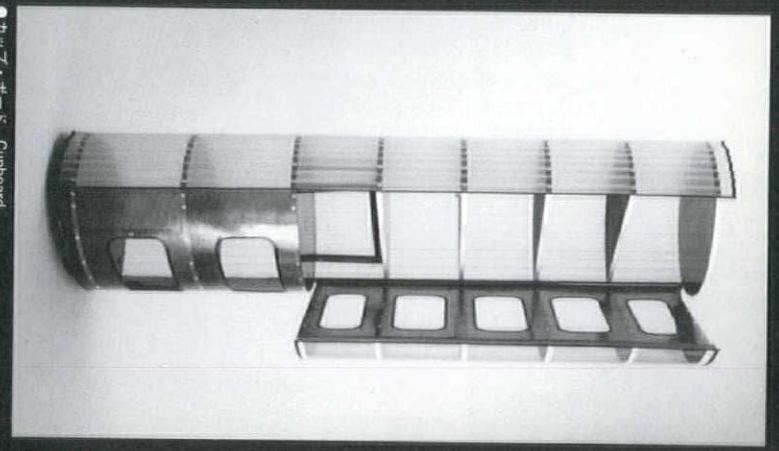
●カップ・ボード Cupboard



●照明器具〈ユル〉 Lighting "Youle"



●カップ・ボード Cupboard

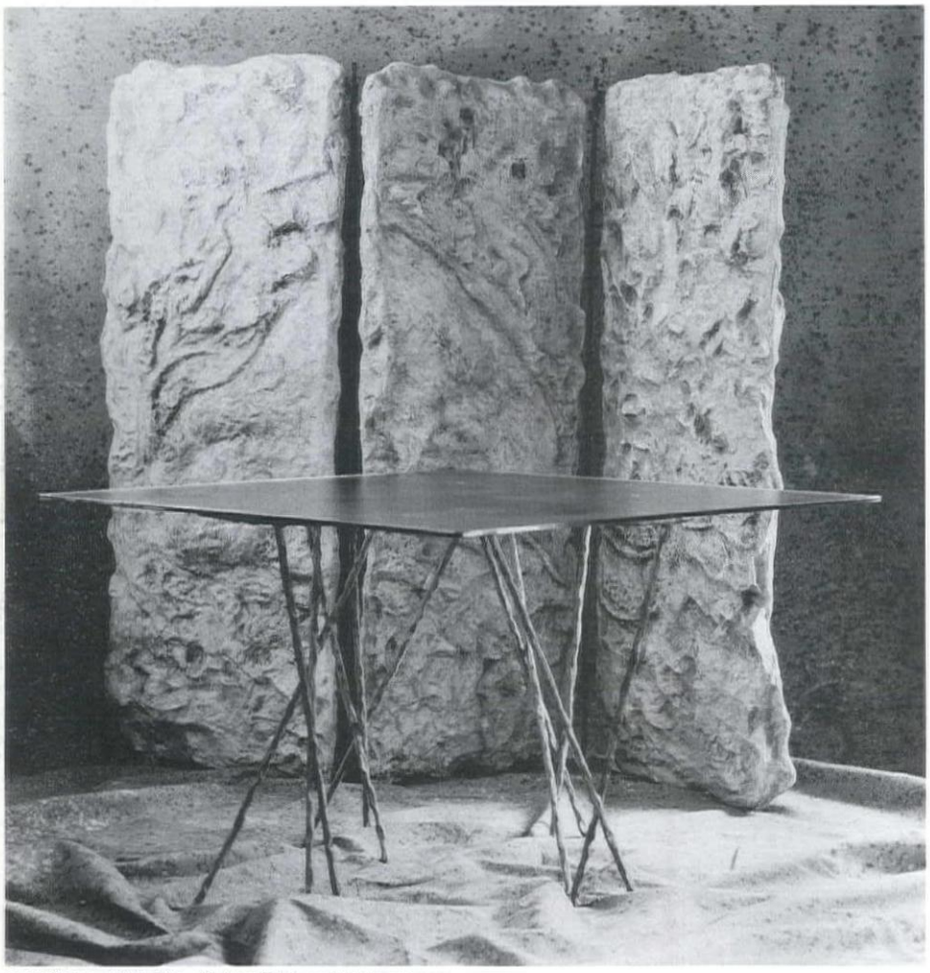


GAROUSTE & BONETTI



●エリザベート・ガルースト　Elizabeth Garouste
Born in Paris.
Graduated from Camondo.
Since 1980 works with Mattia Bonetti.
●マティア・ボネッティ　Mattia Bonetti
Born in Switzerland.　Studies at the Industrial Arts and Crafts.
Works in Italy and in France.
Since 1980 works with Elizabeth Garouste. Also makes sculpture and photos.

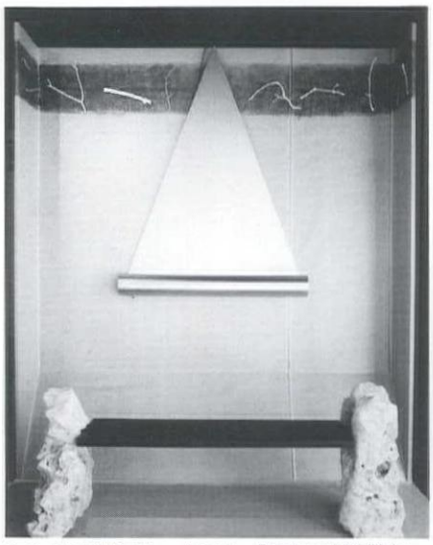
■ガルーストとボネッティの家具はプリミティヴでバーバリックともいえるもので，アルカイックな家具のスタイルを物語っている．



●11本脚のテーブルと屏風　11 Legs Table and Folding Screen
テーブルのプレートはガラス，脚はつやのあるブロンズ．　屏風は紙製．



●ソファーと椅子　Sofa and Chairs

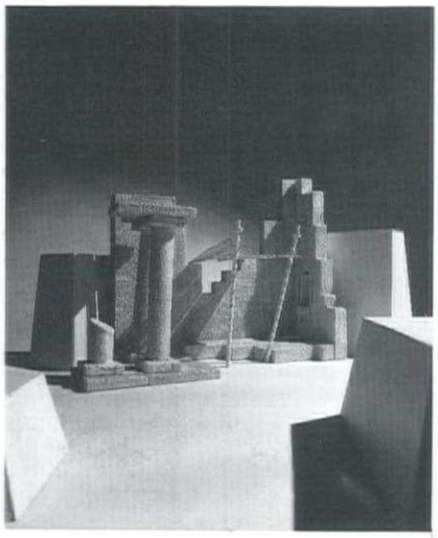


●ベンチと三角形のウォールライト　Bench and Walllight
フランスのヨーン地方の岩とエナメル・プレートで創られたベンチ．　ウォールライトは金のラッカー仕上げのスチール．

■マティア・ボネッティのイメージ

ここに見られるのは，手作りの建築的なオブジェによる金属性組立ておもちゃのようなものと言えようか．　それは，想像上の荒廃した街や通りを再建し，そして集めたものである．　オブジェは自らを生成している，とボネッティは言う．　オブジェは，自ら失望し，回復し，そして破滅する．　重要なことは，オブジェが蘇生した時に見せてくれる形なのである．　それを読み取るには注意深さが必要だが，策略にひっかかってはいけない．　なぜならば，街，もしくは想像とは，築きあげられるのと同じ速さで破壊されるものなのだから．　真と見えるものは虚であり，虚に見えるものは真である，とボネッティは言う．

Images
Design : M.Bonetti







●三つの照明器具　穴のあいた金属板製、トルコ・ブルーのラッカー仕上げ。 3 Lightings

CANAL

●パトリック・ルバン　Patrick Rubin
Born in 1950, Paris.
Graduated from Camondo, 1974　Teacher at Camondo since 1974.　Established CANAL in 1972.
●ダニエル・ルバン　Daniel Rubin
Born in 1953, Paris.　Graduated architect DPLG from UP5, 1980.
●アニー・ル・ボ　Annie Le Bot
Born in 1959.　Works with CANAL since 1979.





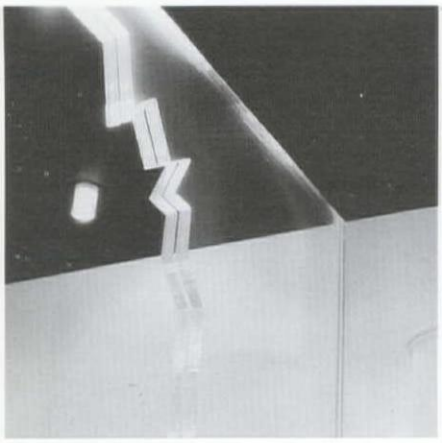


■クロード・モンタナ・ショップ

［婦人店❶❷❸，紳士店❹❺］

ファッション・デザイナー，クロード・モンタナの二つの店．　互いに50m離れている．　婦人店の方はプレキシガラスをレーザーで切断したものを何重にも使っているのが特徴．　紳士店の方は細長い廊下状で，黒みかげはめ込みのステンレス．　中央にはおもしろい格好のガラス製のテーブル．

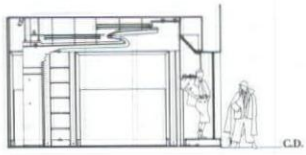
Claude Montana Shop, 1982, 1983
31 et 37 rue de Grenelle, Paris, France
Interior Design : Canal



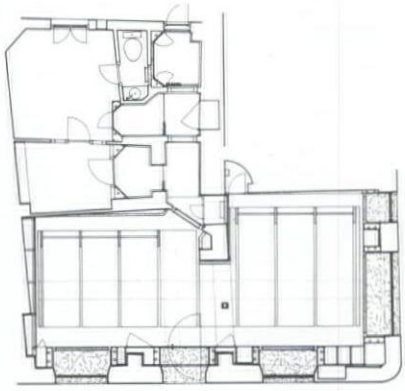
❶



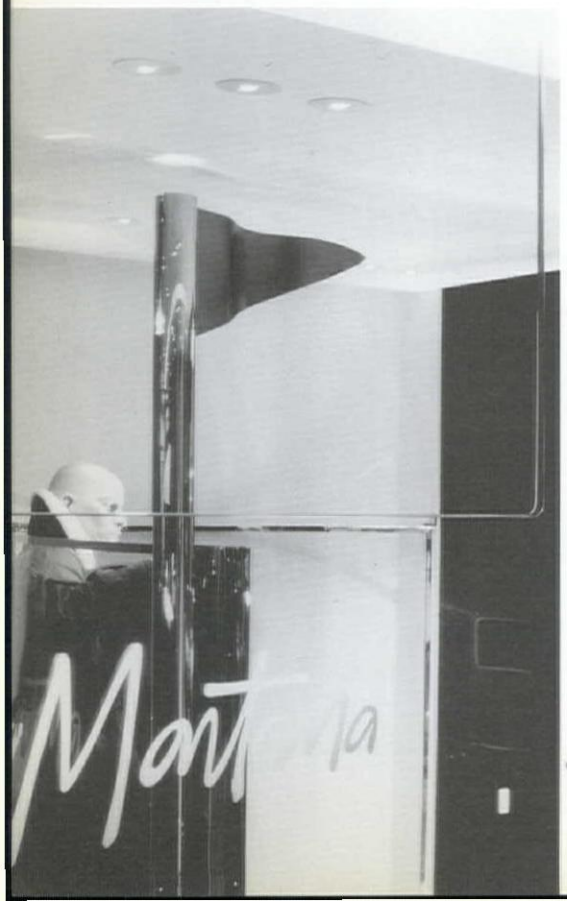
❷



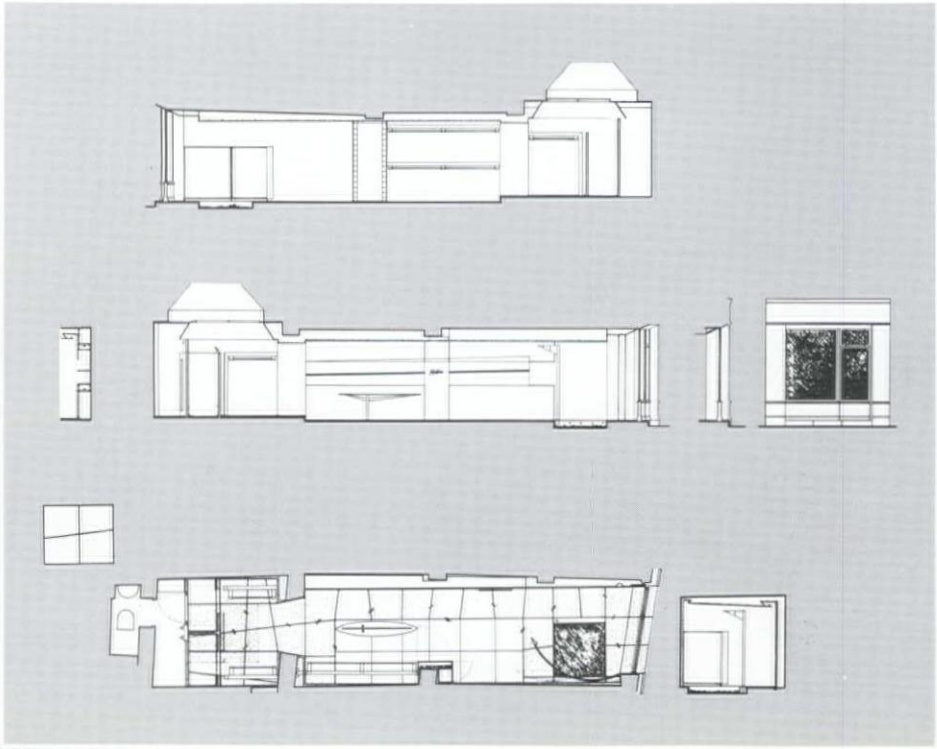




❸断面図，平面図



❹

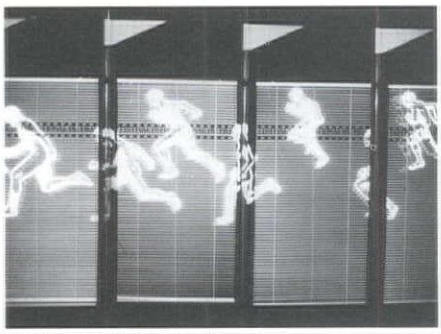


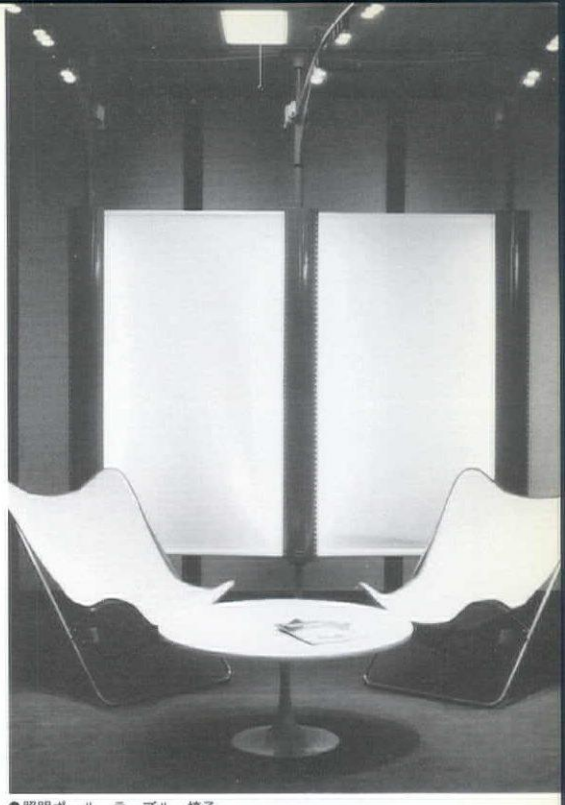
❺断面図，平面図

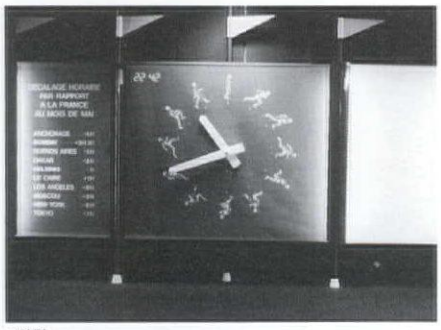
■カンヌ映画祭のための家具デザイン

会議場の1階の部分を，カンヌ映画祭の案内場にするために，幾つかの家具類がデザインされた。ブラインド，時計，ベンチ，テーブル，案内用ヴィデオのためのトーテム，展示棚，など。

The International Film Festival, Cannes, 1984
Palais des Congres, Cannes, France
Design : Canal

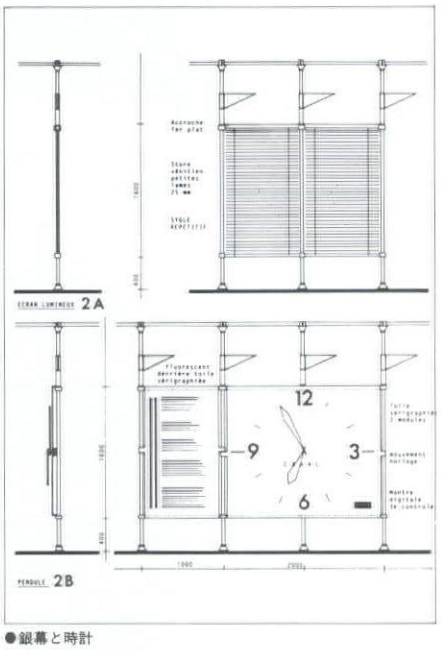

●スクリーンになるブラインド


●照明ポール，テーブル，椅子

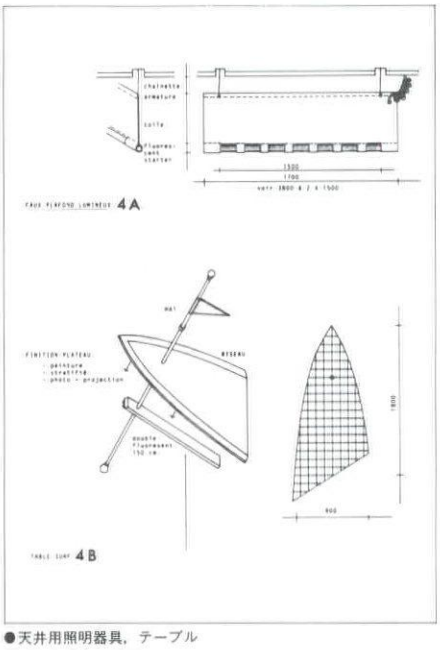

●時計



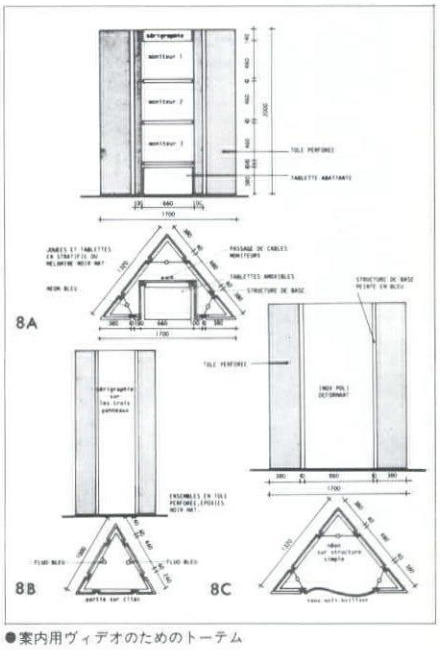
●メモ用カウンター



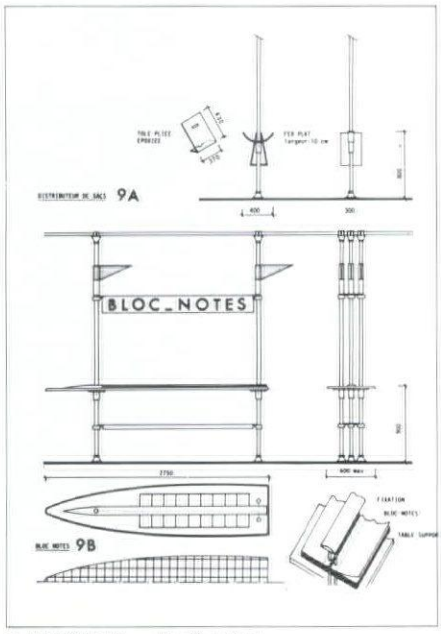
●銀幕と時計



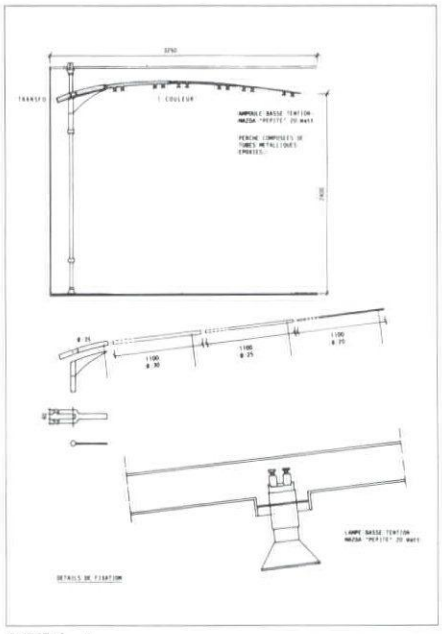
●天井用照明器具，テーブル

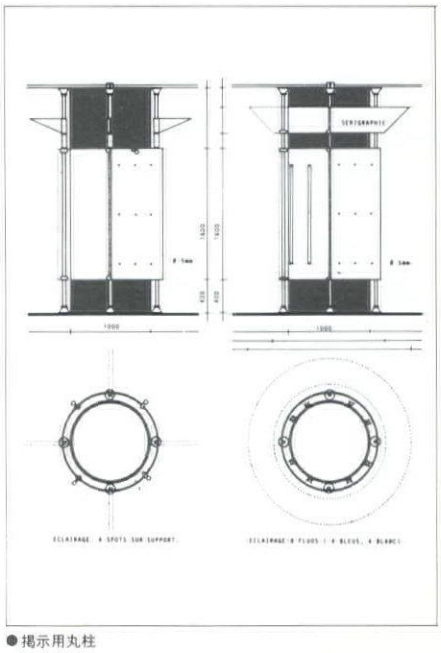


●案内用ヴィデオのためのトーテム



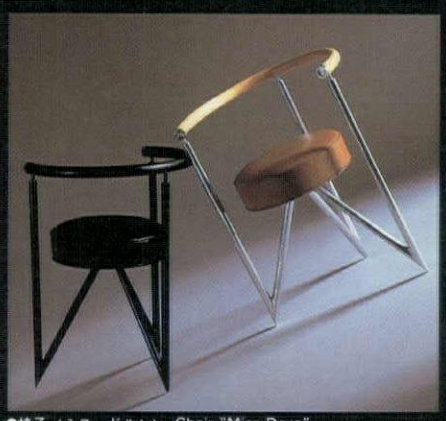
●メモ用カウンター，バッグ・マシン


●照明ポール

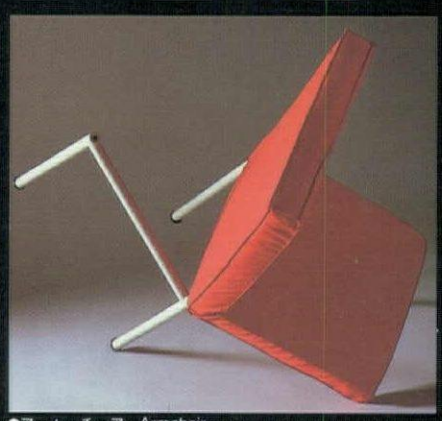

●掲示用丸柱

STARCK ,Philippe

●フィリップ・スタルク　Philippe Starck
Born in 1950.
Creator of furniture, editor of Architecte d'Intérieur.



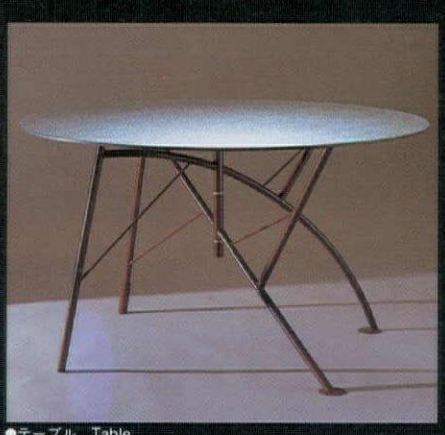
●椅子〈ミス・ドルン〉　Chair "Miss Dorn"



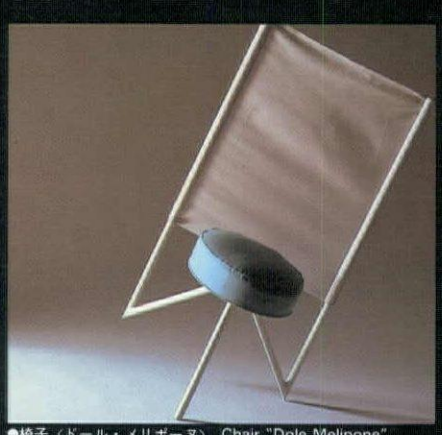
●アーム・チェア　Armchair



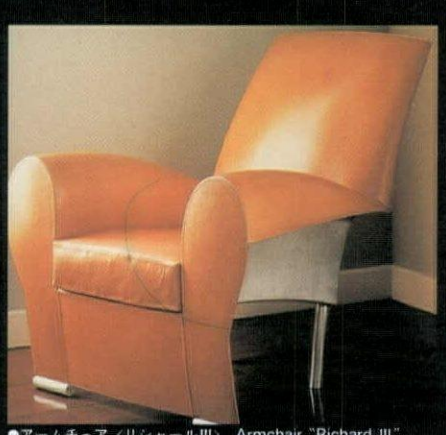
●ソファ〈ドクター・ブラッドマニー〉　Sofa "Dr. Bloodmoney"



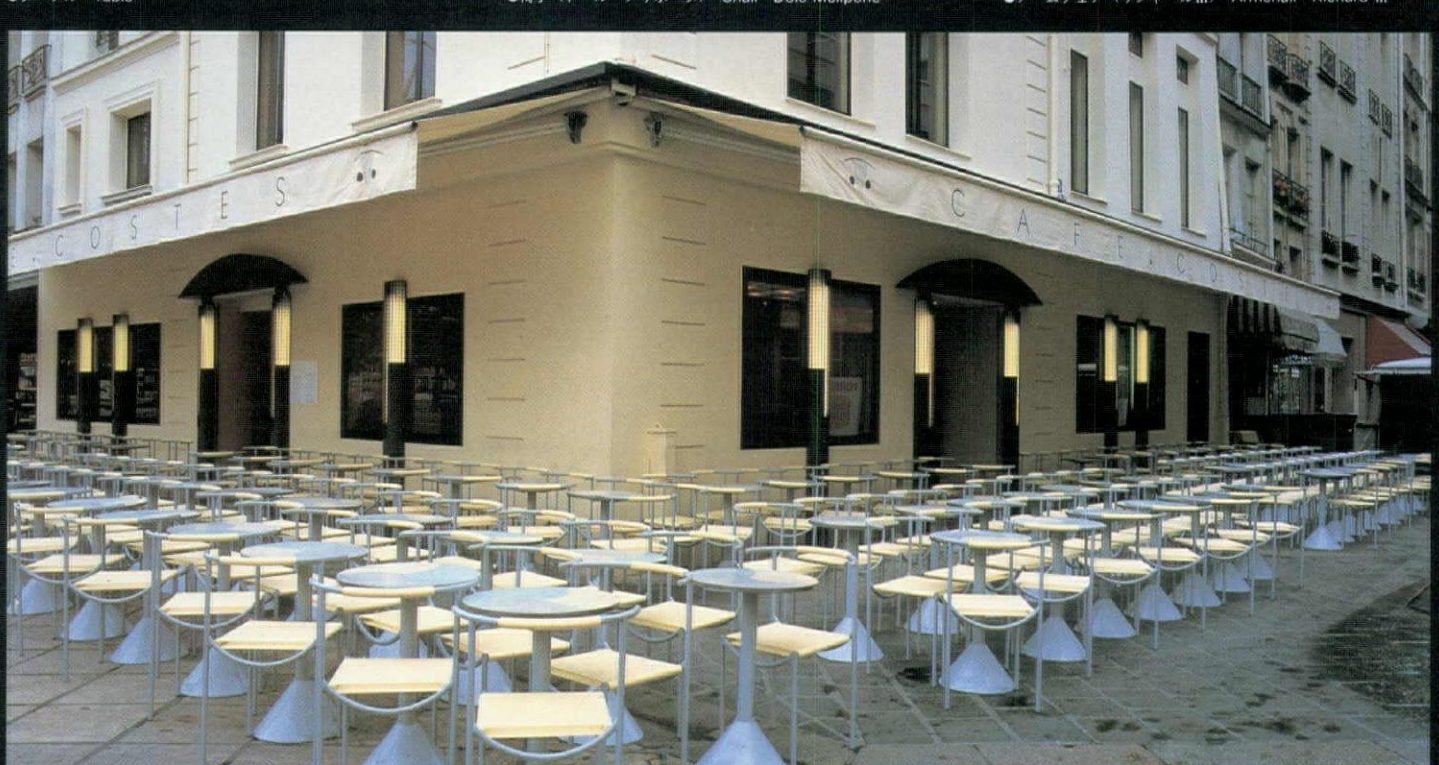
●テーブル　Table



●椅子〈ドール・メリポーヌ〉　Chair "Dole Melipone"



●アームチェア〈リシャールIII〉　Armchair "Richard III"



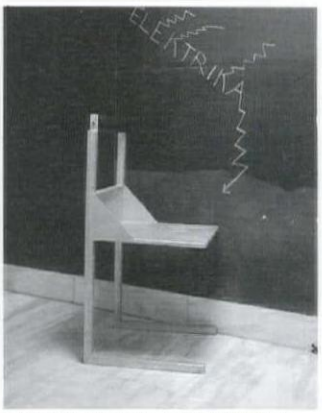
●カフェ・コスト，パリ，1984（p. 56　カフェ外観，p. 57　インテリア）　Café Costes, Paris, 1984

KETOFF ,Sacha

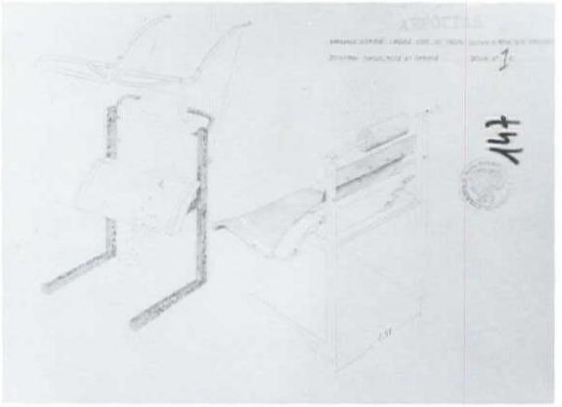


●サシャ・ケトフ　Sacha　Ketoff
Born in 1949. St Die.
Studied at the Academie des Beaux Arts, Milano.
Studied architecture at UP5, Paris, then fine arts at UP6, Paris.
Tryptique Ejection seat, 1973.
"Experimetal seats", first personal exhibition at Space Gallery, 1974—75.
Series"aircrash", works on scraps of military aircrafts and crashs, 1975—78.
Stopped sculpting, 1979.
Begins various activities as furniture designer, interior designer and writer, 1980.

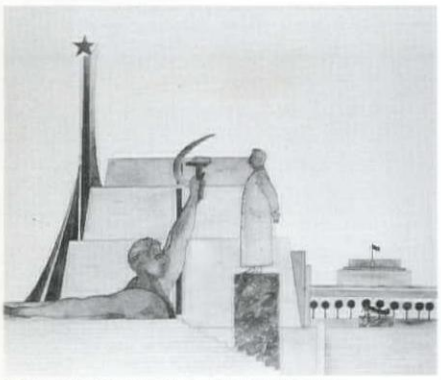
■サシャ・ケトフは同世代の(30代半ば)のデザイナーの中では，表現主義的な傾向を著しく感じさせる点で異彩を放つ存在である。　表現主義的と言っても，自らの感性の放逸な流出に耽るのでもなければ，独創性を追い求めるのでもない。　自身の好みに合うものを収集し，分解し，それらを何らかの題材の下にアッセンブリーするのである。　ここに紹介する作品の中には，〈戦闘〉のイメージにまつわるものが実に多い。　例えば，アームチェア〈橋〉，〈歴史上の人物7人のためのドローイング〉の中のハンニバル，ダヌンツィオ，オルフェオ，スターリン，……。



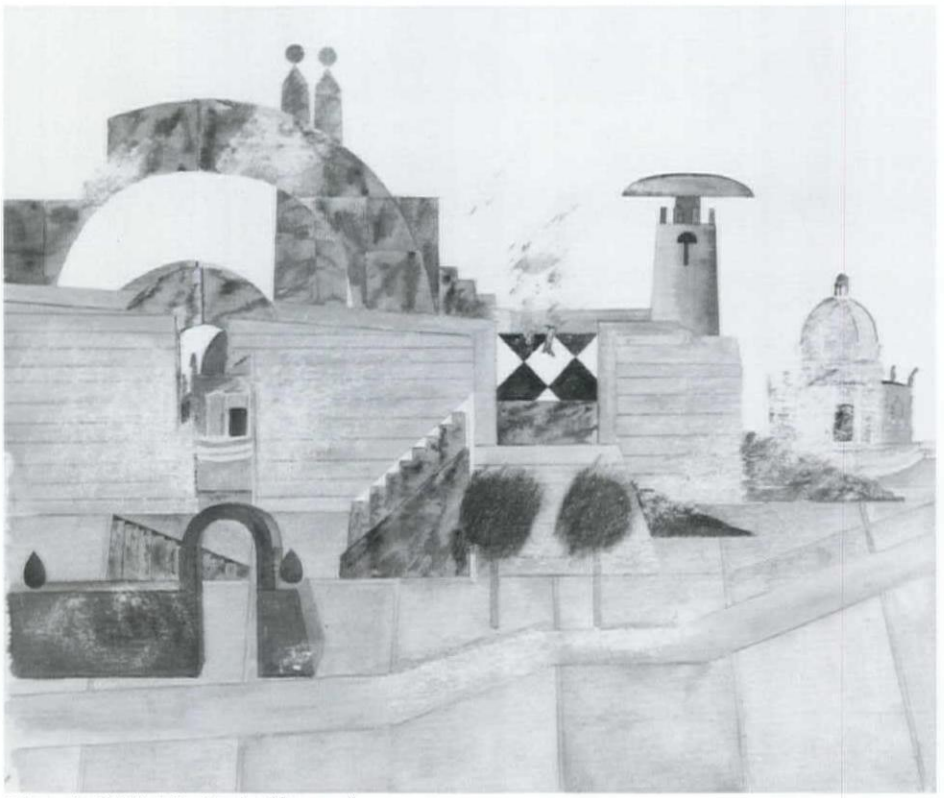
●椅子〈エレクトリカ〉　Chair "Elektrika"



●アームチェア〈橋〉　Armchair "The Bridge"



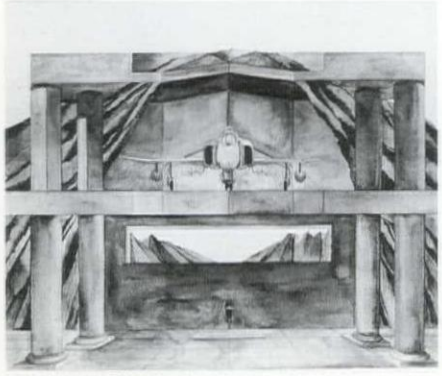
●ドローイング〈スターリン〉　Drawing "Stalin"



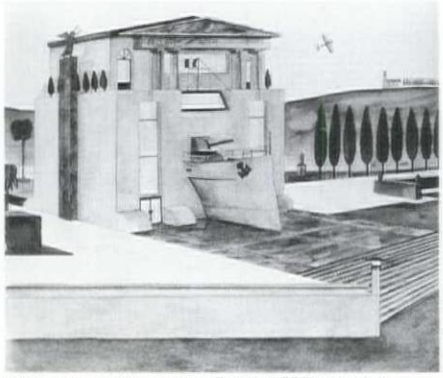
●ドローイング〈カサノバ〉　Drawing "Casanova"



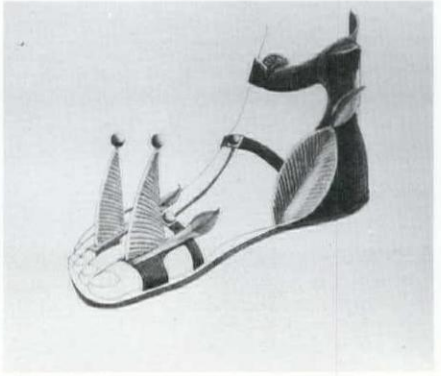
●ドローイング〈モンク〉　Drawing "Monk"



●ドローイング〈オルフェオ〉　Drawing "Orphee"



●ドローイング〈ダヌンツオ〉　Drawing "D'Annunzio"



●ドローイング〈ハンニバル〉　Drawing "Hannibal"

SEIGNEUR ,François

●フランソワ・セニュール　François Seigneur
Born in 1942.
Cabinet maker (graduated from the Ecole Boulle)
Interior designer (the Ecole Nationale Superieure des Arts Decoratifs, ENSAD)
Worked in the office of Claude Parent, 1967–68.
Self-established with Jean Nouvel, 1969.
Left the office and started painting, 1975.
Consultant for Jean Nouvel, 1979.

■ファースト・フード〈チキン・ショップ〉

パリのサン・ドニ街にあるこの〈チキン・ショップ〉は，全国的なハンバーガー・チェーン店のひとつであり，完成は1980年である．　ポンピドー・センターとフォーラム・デ・アールにはさまれた流行に敏感な一画にあり，また文化区域と商業的消費区域の間にあるという敷地的な条件から，私はここに〈ハンバーガー〉現象への嘲笑と昇華の相反する感情を感じた．

小さな酒場やカフェのカウンターで手早く簡単な食事をとるというのが長い間のパリジャンたちの基本的な生活の一風景となっており，それは建築や日常生活の習慣にも深く刻み込まれていた．　しかし今やアメリカン・スタイルのファースト・フードの店の工業化された非個性的なイメージがそれにとってかわりつつある．　ただしそれは，その方が食事内容が良いからというのではなく，流行として受け入れられやすい魅力，後ろ楯となっているビッグ・ビジネスと近代技術の存在，そして近代社会におけるスピードの増進と，全般的に伝統を放棄する傾向のおかげである．

私はここで，食事を用意しそれを食べるという芸術的な行為における近年の不毛さに，嘲笑的なアクセントをおこうと考えた．　その結果デザインされた冷たく非物質化されたスペースには，刑務所のような非個性的な存在感がある．　たとえば白タイル，亜鉛メッキまたはクロームメタル仕上げのグリル，素地仕上げの集成材，灰色のペンキ，型板を使ったナンバリング・システムなど，また植木などはいっさい置かず，壁紙は一部未完成のままにしておくなどといった，要するに破壊のイメージである．

メイン・スペースの中央には白タイル張りの台座があり，大きなガラスケース入りの彫刻が置かれている．　この像の正面は灰色で裏側には日没が描かれており，手足のかわりにハーピー（顔と上半身が醜い女で，翼・尾・つめなどが鳥．　死者の霊を運んだ）のような鳥の足がついている．　模造ダイヤで飾られ，ピンクっぽい真珠色をしたおもちゃのゴム製のニワトリ"star"もまた皮肉たっぷりである．　この生きた〈死〉の風景に，青味がかった電球が沈黙の通夜の光を冷たく投げかけている．　反対側の壁にはそれより小さな台座に別の彫刻――白タイルの上に，昇華された紙くずのようにくしゃくしゃに丸めておかれたアセテートの断片（ひとつはグレー，その他はピンクや青に薄く着色されている）――がおかれ，同じように青い光に照らされている．

奥へと進むにつれ，壁の仕上げ材は分解してゆき，最後には壁がこわれてはるか遠くの青空が見える壁画が描かれている．　集成材を使った天井は大きく割れて乳白色ぽいピンク色のプレキシグラスの層が露出し，暖かい光を投げかけている．

昇華は妥協なしのモダニティと厳格さ，具体的には細部に至る寸法と附属品にグリッドをシステマチックに導入するという手法を通じて表現されている．たとえば白タイルのグリッドはすべてのディテールに尊重されており，またクロームヘッドのねじくぎの位置で示された架空のグリッドが壁から壁へかけ渡されている．　フロアプランの軸線上のセンターラインは天井に黄色いネオンで示され，さらにクローム鋼やステンレススチールの幾何学的な形の家具類は抽象的な表現となっている．

また，一連の建築要素や置きかえられたシンボルなどが相まって，全体として一種の〈ハンバーガー神殿〉のようなものをつくり出している．　たとえば儀式ばって格調高い雰囲気の白タイル張りの入口，光り輝く金色でふちどりしたドア，オレンジ色の斑点のあるラベンダー色の外柱，記章をとり囲むように青いネオンで描かれた頭文字，食事スペースの上にステンレス製のブリッジを架け渡したカウンターのアクセス，鏡を使って空間を無限大に見せるやり方，そして天井にトレードマークを金色で刷り込み，それをピンクのネオンのグリッドでふちどるなど．

このプロジェクトは，計画の細部に至るまで完全実施できたこと，またアーチストたちの活気に満ちた相互干渉――彫刻および一部装飾効果に関してはGary Glaser，また壁画についてはPierre Henautの活躍――，そして施主でありチェーン店のディレクターでもあるFrançois Goulet氏の理解と協力のおかげで，緊張感と刺激に満ちた空間を創り出すことができた．

しかし完成の4年後には，店の名前も経営も変わり，それに伴って行なわれた改造のおかげで，オリジナルのデザインはあとかたもなくなってしまった．

つまりは流行の趨勢がその方向に発展しなかったということである．　今やハンバーガー・ビジネスは，独断的な建築や芸術の仲間入りをするのにかなり苦労しているようである．（F. Seigneur）

Fast Food Chicken Shop, 1980
rue St. Denis, Paris, France
Interior Design : F. Seigneur



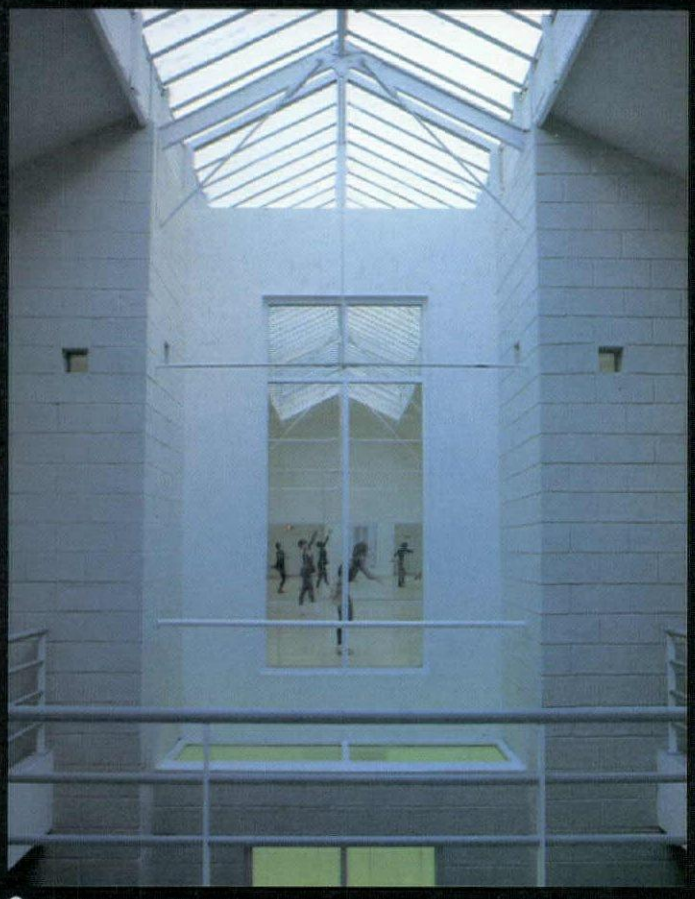




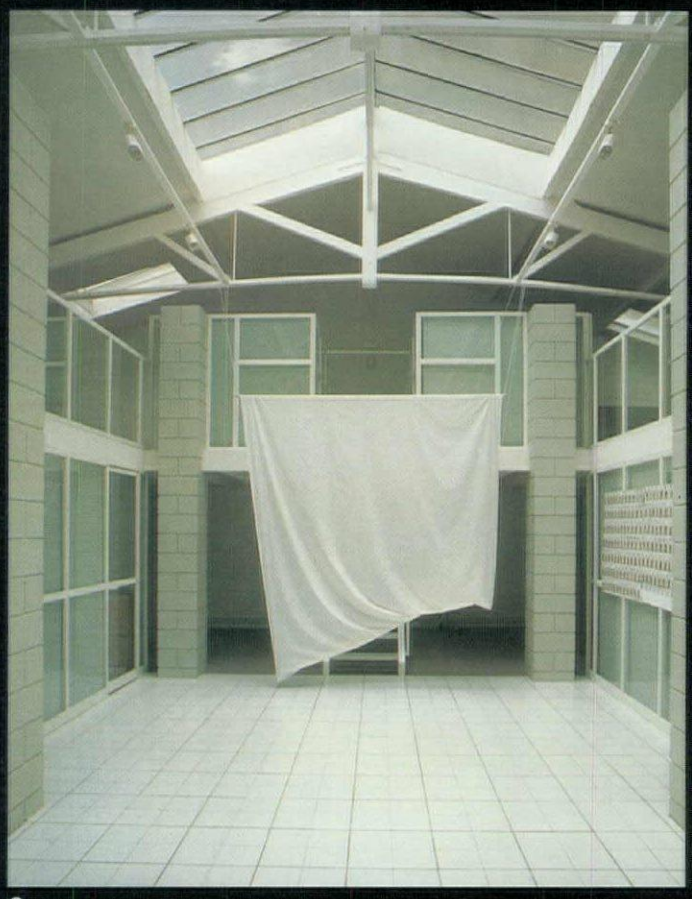
FALOCI ,Pierre Louis



●ピエール・ルイ・ファローチ　Pierre Louis Faloci
Born in 1949, Nice.
Graduated architect DPLG 1974, Paris.
PAN 1975 award.　PAN 1982 award.
1985 Biennale of Paris.



❶



❷



❸

■ダンス・スクール ❶❸❹
■イッセイ・ミヤケのオフィスとショールーム ❷❺
■オーステルリッツ・ビル ❻

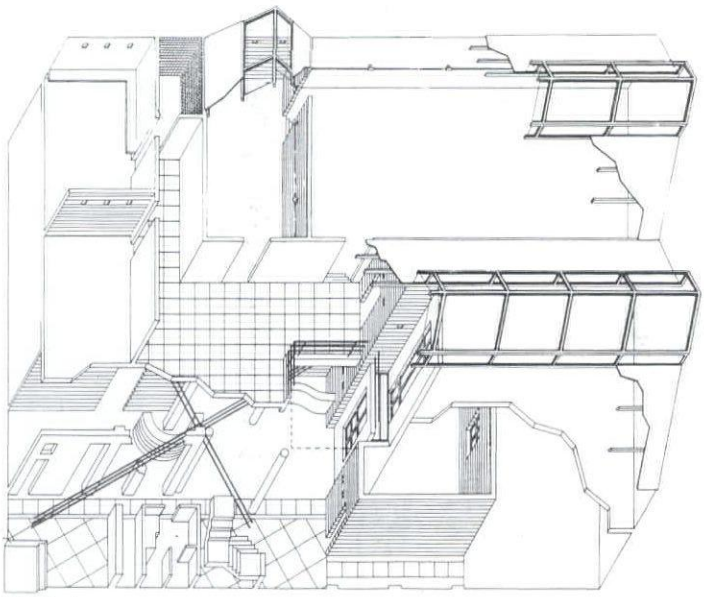
ここに紹介されているP. L. ファローチの中の2作品は，ともにパリの中心部にあって，一方がイッセイのオフィスとショールーム，もう一方がダンス・スクールと全く異なった内容でありながら，色彩，素材（木，ガラス，スチール，シンダー・ブロック），デザイン・ヴォキャブラリーが共通し，同一のインテリアではないかと思わせるほど似かよった結果になっている。イッセイの計画は300m²の室内運動場，ダンス・スクールは1700m²の製紙工場を改装したものであり，屋根組みを際立たす手法など，ともに元の空間のドラマチックな雰囲気を活かし，できるかぎり軽いデザイン要素を追加するにとどめている。

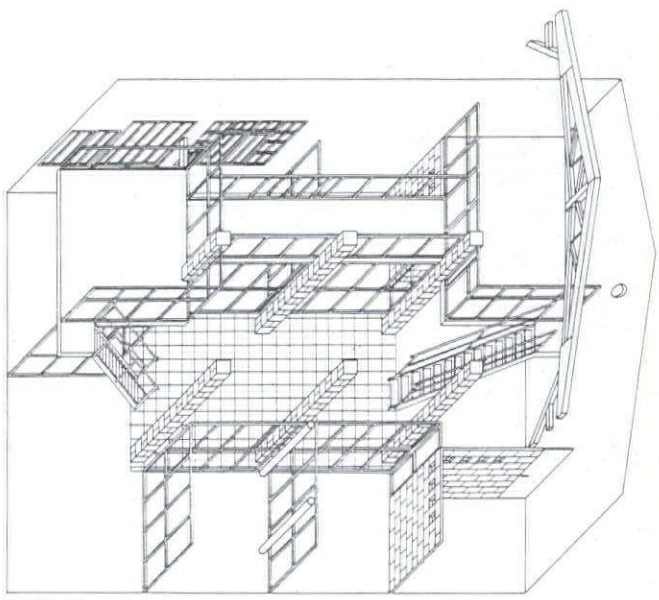
まず既存の内部造作をすべて取り払い，外壁に加えて第2の皮膜ともいうべき軽快なパーティションによって生みだされた白い空間は，文字通りパブリック・スペース的な，街路的な性質を獲得していて，ファローチの卓抜な改造手腕（ペルピーニャンの1920年代に建てられた映画館の改装にもうかがうことができる）を十分に知ることができる。

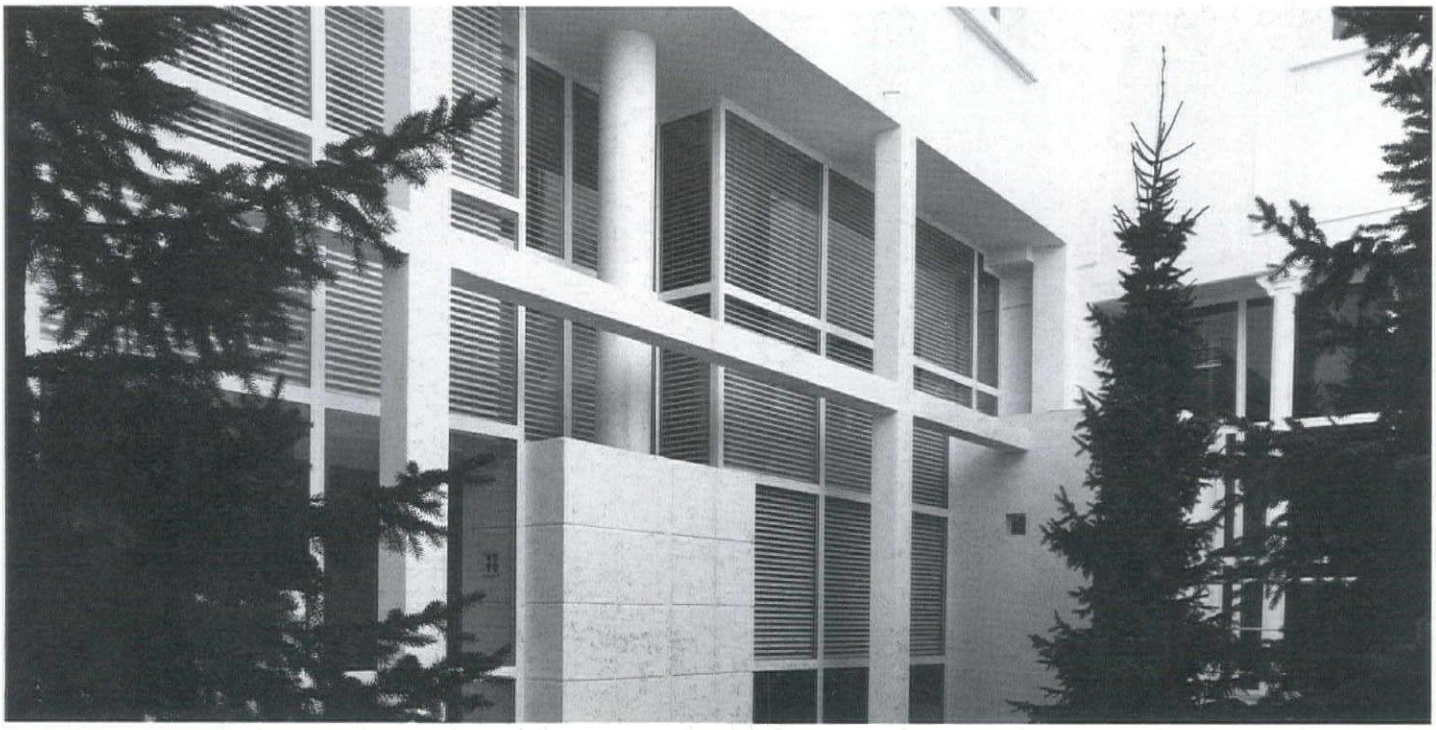
彼は1976年のPANに入賞後，フランスでは例外的な若さで独立してパリとニースに事務所をかまえ，南仏を中心に集合住宅をやつぎばやに完成させてきた。1977年の邂逅いらいファローチが熱を入れて語っていたのはいつでも〈歴史〉の重視であったが，彼がつくる建築にはフランス・ラショナリストたちのスコラスティックな姿勢もポスト・モダニストたちの表層的な古典主義的エレメントも決して見ることはできない（……なおここで断っておくと，《都市住宅》1980年9月号に掲載されている作品は，何かの手ちがいで，ファローチとは何の関係もないということです）。彼が南仏で見いだしたのはプロヴァンスの伝統的な民家であり，パリの2作品では，当然のことながら古典主義のオーダーではなく，これら建物自身の，（20世紀初めの）空間と架構が〈歴史〉として読みとられ，よみがえってくる。

P. L. ファローチは現在も数多くのプロジェクトを進行させているようだが，彼のアトリエで見た中でも最も興味をひかれたのはポルトガルの集合住宅だった。イタリア人の両親をもち，ニースという仏伊混合の文化の中で育った彼が，同じラテンの地ポルトガルにどのような〈歴史〉を見たか，間近い完成が待たれるところだ。（石上申八郎）

Office and Showroom for Issey Miyake, 1982
6 rue Compagne Premiere, Paris 14, France
Architect:P. L. Faloci
Dancing School, 1983
12-14 rue Lechevin, Paris, France
Architect:P. L. Faloci
Austerlitz Building, 1981
Architect:P. L. Faloci


❹アイソメ


❺アイソメ


❻

English texts of each work by Annik Hemery

(except Montes, Puard and Seigneur)

Yves Lion (P.26)

Housing at Rochefort

Planning for the neighbourhood next the Rochefort Station was the program maked out by the Rochefort Town. This program asks to design a place for the station and to link together the new housing and the town. Lion proposed in front of the station a square place repeating the main shape of the Colbert place of Rochefort, created a diagonal street and built up on both sides of this new street the shapes of the suburb. He tried to orerlap 2 common urban themes, the urban and suburb vocabulary.

ARCHISTUDIO (P.27)

Montmorillon Hospital, 1981

Program: 30 rooms connected to the existing hospital
The existing building is located on a hill overlooking the town. The architects strengthend this position by building an extension 99 metres long, standing on piles, with a strongly steep roof—a 9 metres change of level between ridgepole and gutter.
From down below, due to it's special dimensions, the extension shows the same aspects as a XVII' century building. From the plateau, through it's piles, a view over the town was made possible.

Housing, rue Domremy, 1983

The rue Domremy is a steep little street on the south of Paris. The architects had to build there 25 apartments between two existing buildings. They emphasized the narrowness and the building line of the street. The south faced street façade is characterized by a strictly grid pattern, made of white tiles and gray tiles lines. A lot of compartments inside the grid open on a gangway whose interior brick wall is primary blue and red color painted. The roof is a glass roof and it's upper part, following the recommended slope of the district regulations, expresses the breaking of the building.

Roland Spitz (P.30)

Tennis Club House

On an exiguous site, the architect had to add to 2 prefabricated covered tennis courts, a club house with a large room, a bar, changing rooms, toilets, office and technical services. The architect chose to cover the courts with a curved timber and a coated cloth partly translucent. The curved walls design refers to the curved structures of the courts. The masonery of the hall is painted except the curved part tiled with pine boards and battens.

Jean Pierre Watel (P.31)

Housings, Villeneuve d'Ascq New Town, 1980-82.

This experimental operation—33 housings with wood structure-brought the building cost down and allowed to save energy according to the programs habitat 88 and Energy Saving Housings 85 by the plan construction. The architects chose light wood structures and adopted a fast putting system: integration of components and craft finition. The tight financial control allowed to work out the exteriors spaces and to propose a great variety of plans: 26 different plans with 2, 3, 4, 6 rooms each. This operation is shaped with a periphery of houses with 1 to 3 floors and a center of collective flat building. Corners of this building are 3 rooms houses. Running through the building a technical galery covered by a glass roof houses electricity, gas, water meters and tubings.

Fernando Montes (P.32–33)

Cafe Video "Duchamp" or the "3-21-13-4", 1984

It is located in rue de Babylone, a vast yard behind a conventional building with a quite outstanding porte cochere however, caracterized by its double height and a same sized porch to the interior. This yard is obviously interesting. A great number of planning projects have succeeded with the passing years.
In April 1984 the Marcel Duchamp Friends Association, after hard dealings, came to an agreement with the joint owners of the building. They proposed them to build in the yard the Cafe Video Duchamp. The architect Fernando Montes was requested to be in charge of the project. Coordination will be made by the Association itself. The 14 elements set out under a glass brick flat arch are as follows:
*1-Entrance porch shared by the coffee shop and the building. The space is wholly pink painted a blue neon sign with digit numbers 3-21-13-4 is hanging on.
*2-Counterclockwise revolving doors.
*3-"Reggias" stairs tiled with a two tones ivory sandstone.
*4-Oakfloor ambulatory.
*5-Large cherckerboard shaped room tiled with black and white marble. It is intended to house as many as 64 tables and their black and ivory lacquered wood armchairs. In usual activity the room needs from 4 to 32 tables, laid out following the dictates of the book "Les Parties de ma Vie" by the international Grand Maitre Capabianca.
*6-Female cashiers having the use of electronic control-system.
*7-20 two kinds computers games: the interactive ones located on the North and East sides; the passive ones on the South and West sides. Four walls hanging big screens show a series of selected images produced by the computers or coming from the main room.
*8-Storage for chairs and tables unused by the chesslike placement of the day.
*9-Waiting bar prior to entering into the main room.
*10-Cloakrooms, computers terminals and telephones.
*11-Kitchens and restrooms
*12-Toilets
*13-Reconverted building yards.
*14-First floor used as head office for the Association of Friends of Marcel Duchamp and its future archives.

(Fernando Montes)

Bernard Paurd (P.34–35)

"Les Masques" Housing

Le projet est situé parallèlement à la sortie de Reims vers Epernay. Il est implanté en fond de vallon et sa courbe est soustendue par le tracé de l'ancien ruisseau. "L'entrecollinement" de trois kilomètres donne au site, figuré par une digue, la vaste dimension des coteaux champennois.
A grande vitesse, l'extrados de la courbe rallonge le "donné-à-voir" des automobilistes de la voie rapide.
Le passage central publique du bâtiment qui est aussi un accès au parking, permet, au moyen de sa croix de St André, de tenir le gabarit du bâtiment et de l'unifier en un thème de porte monumentale visible pour les arrivants dans Reims.
Vers l'Est, dans l'extension périphérique pavillonnaire que ce bâtiment collectif doit structurer, l'intrados de la courbe avec son acrotère arquée met en valeur six masques différents; ce qui fabrique un arrêt et un repère par rapport au foisonnement pavillonnaire. Les figures anthoropomorphes ont été etudiées par inversion du concave et du convexe en suivant la leçon des sculptures de Picasso.
Accès aux logements et figures d'identification, ces masques sont aussi habitables, ils créent à l'envers l'intime et universel rapport que l'oeil entretient avec l'arcade sourcillère et le nez, dans une distance familière.
Ici, la façade élémentaire est faite des accès aux logements et des fenêtres des chambres. Au centre, le thème central est une figure de retournement composée par un cube défini par ses diagonales.
Logements
Le projet est fait de duplex croisés latéraux possédant soit un jardin en pleine terre soit une terrasse accessible superposée au sejour, qui redonne de la lumière à celui-ci par l'arrière au moyen d'une fenêtre donnant sur la trémie en double hauteur.
Les salles de bains sont éclairées à la lumière naturelle chaque fois que cela a été possible. *(Bernard Paurd)*

Ketoff & Petit (P.36–37)

School Complex, Evry New Town, 1983

In the complexity of the new towns and the uncertainties of the urban restraints, a nursery and primary school has to be a stable building.
The building houses 10 primary classes and 6 nursery classes. The main bodies of the building are massive and symmetrical, stricly following the shape of the street. The primary classes entrance is an oversized porch, 9m high. On the other hand the nursery school opens besides through a small curved passage. In both cases the riguour of the façade overshadows them. Circulations are central. On the upper floor the corridors are vaulted and lit up by large oculus opening on the back front.

Plaster Works

These plaster works are short-life constructions which allow to instantly check the features of the volume, and to experiment with a 3 dimensional space. Better than 2-dimensional drawings, these models, in the absence of attractive details, exacerbate the line and the proportions.

Claude Vasconi (P.39)

Housing, Evry New Town, 1981–82

112 rent flats and parkings on a long and narrow site facing north and south. Vasconi proposed a block 120 metres long and 18 metres wide. All the flats are distributed on 8 levels, each of them north—south oriented. On the south side flats are disposed following a rhythm of white tiles balconies and bow-windows, and gray concrete set back terraces. The north side shows with the same rhythm alternately white tiles flat units of windows and gray concrete tall and slim cylinders for the stairs. All the parkings are located in the base of the building.

Herve Bagot (P.40–41)

House in Verzy, 1978 and Office Building of the Regional Nature Reserve, 1980-81

House in Verzy and offices building of the regional nature reserve, Reims Mountain are both bioclimatic buildings using the solar energy in countryside. Both of them have a freed structure roof, shaped like the industrialized farm buildings found in the neighbourhoods. The office building is used as an ecomuseum for the Reims areas. Together with associated sites it intends to show the traditions, the customs and also the agricultural, winegrowing and forestry environments.
Between the light metalic roof and the flat roofs of the building an open space of exhibition will be managed: exhibitions panels, showcases..... will be dispayed on the different levels of the roofs.

Brunel & Ropponen (P.42)

24 Studios for Musicians, 1984

The St Blaise district—north east of Paris—is best known as a craft old place. The architects tried to hold its character when they designed these studios.
The building will house 2 kinds of instruments users:
—wind instruments (saxophones, clarinets...)
—stringed instruments (violins, pianos...)
Different interior and exterior volumes will express the personality of these 2 musical families.
Shapes as the windows design of the street façade are clearly related to the shapes of the instruments the musicians use. The volume of each studio is designed according to the acoustic needs.

Patrick Berger (P.43)

Housing, La Gouerie district, St-Lo

The site was situated at the periphery of town of St-Lo, between urban streets and suburbs houses. The mass plan is punctuated by 3 main buildings: a building with a collonade, 3 old people's homes and a house facing a square. This last house, composed of 9 apartments and collective rooms, overlooks the Gouerie district. Its twin façade refered to a well-known old wood structure building of St-Lo which was destroyed during the Second War. The lateral façade has 2 different orders: a slate roof and a terrace roof; in between an abstract "rift" shelters loggias behind a lattice.

4 Apartments, rue Quincampoix

The rue Quincampoix is an old historic street between Pompidow Center and les Halles. The architects refered to the typology of the surrounding buildings and to the history of this district. The design of the building was clearly inspired by the book: The system of the urban architecture*.
In les Halles district, the composition of the windows is related to the width of the parcel. In rue Quincampoix, the parcel was 5.50m width. The architects used a traditional composition with 3 windows rows for the street façade. For the façade overlooking the yard they chose an "avant-garde" style. They also introduced the iconography by a sculptured head, evoking prostitutes of rue Quincampoix.
*"le système de l'architecture urbaine", A. Chastel, F. Boudon, H. Couzy, F. Hamon.

Manolo Nunez-Yanowsky (P.44)

Picasso's Amphitheater, 1980—84

The architect had to organize 540 apartments, shops and arcades, parkings, all around an hexagonal place of 38 metres side. The program imposed on the architect to distribute each side buildings with 6 or 7 floors and, to the intersections, 4 towers with 14 floors which expect to be a signal for the town, and also a circulation axis oriented east-west.
Instead of these signal shape towers the program layed down, the architect drew 2 vertical discs of 17 floors each. This disc shape came directly from Parisian architecture—Notre Dame's rose window etc....—
The curved roof of discs is covered by copper sheets traditionally used for the Parisian building roofs. Nunez decided to emphasize the façades by using widely the prefabrication. More than 5000 prefabricated Ile de France concrete pieces were drawn by architects and produced by the entreprise I.B. Morin. According to the dimensions pieces weight is 300kg or 7 ton. 80 moulds were realized, in wood for the small standart, in metal for the high standard and in polyester for the most complicated pieces.

Becheau & Bourgeois (P. 50—51)

Project for a Fountain in Perigueux

The fountain called "tetre a quoi" tells a tale of water. The water flows from a spiral, runs successively across an acqueduc and various pools, and ends with a fountain. The spiral and the fountain are supported by a reinforced concrete structure and a steel frame, covered with polyester corrugated and flat iron sheets. The acqueduc is made up of polyester trays with cuttings of news papers, saturated with polyester resin. It's supported by a portico and concrete walls of various shapes. The pools are mainly in concrete.
This fountain must be built in Perigueux. To check the strength of the polyester sheets to the water, V. Becheau built a 2m50 high prototype.

Garouste & Bonetti (P.52—53)

Matia Bonetti—Images

Bonetti's black and white photographies show a mecanolike game of handmade architectural objects. Put together they rebuild streets or places of imaginary devastated towns.
Objects are making themselves, says Bonetti, they are disapearing, coming back and destroying themselves. The important thing is the shape they are showing when coming back.
Bonetti's organisation supposes an intensive work on the scale. But it's a stratagem: the town—or the image-can be destroyed as fast as it was built.
What is appearing true is false and what is appearing false is true, said Bonetti.

Canal (P.54—55)

Claude Montana Shops, 1982, 1983

Two shops, in rue de Grenelle, Paris, 50m away each other were designed for the fashion designer Claude Montna. Montana Women Shop space, 31 rue de Grenelle, is punctuated by 8 laser carved plexiglass sheets. Montana Men Shop, 37 rue de Grenelle, is a 40 square meter long and narrow corridor. The floor is covered by stainless slabs inlaid with black granite. In the middle a thick swelled glass table.

For The International Film Festival, Cannes, 1984

Converting of the first floor of Congress Hall into an information hall. Creation of a set of furnitures: Poles, illuminated screens (venetian blinds) and clock, benchs, table, video information totem, display shelf, desk pads and bag machines and so on...

François Seigneur (P. 59)

Fast Food-Chicken Shop, 1980

The "Chicken Shop" on the rue St Denis in Paris, part of the nation-wide hamburger chain, was completed in 1980. Due to its location in the trendy quarter between the Centre Pompidou and the Forum des Halles, between culture and commercial consumption, I felt an ambivalence between derision and sublimation of the "hamburger" phenomenon. Grabbing a quick bite to eat at the counter of a bistro or cafe has long been a basic part of the Parisian scene, deeply inscribed in the architecture and the habits of every day life. The industrialized, impersonal image of the American-style fast food is now taking over, not because it offers better food but because of its trendy appeal, the big business and modern technology pushing it, and the speed and general abandon of tradition in modern society.
I intended to place a derisive accent on this impoverishment in the arts of preparing food and of dining. A cold, dematerialized space was designed evoking prison and impersonal existence white tile, galvanized or chromed metal grills, unpainted pressed-wood, gray paint, stenciled numbering systems, no vegetation, wallcoverings left partly undone, an idea of destruction.
As one advances the wall finishings decompose, a mural on wall depicting the wall exploding to expose a far-off blue sky. The ceiling of pressed-wood splits widely apart to expose a layer of milky pink plexiglass, casting a warm glow.
The sublime was expressed through a language of uncompromising modernity and rigor: a systematic introduction of grids for dimensioning and for fittings. The white tile's grid being respected in all details and an imaginary grid, indicated by chrome-headed screws, superimposed across the walls. The axial center-line of the floor plan, drawn in reality in yellow neon on the ceiling and geometric furnishings in chrome and stainless steel express abstraction.
A series of architectural elements, displaced symbols, creates a sort of hamburger temple: a ceremoniously-elevated white tile entry, the door framed in shiny gold, exterior pillars of lavendar with vibrating orange flecks, a capital drawn in blue neon to enclose the insignia, access to the counters by a stainless steel bridge over the eating space, infinite multiplications of the space by a play of mirrors, the trade-mark stenciled repetitively in gold on the ceiling and framed in a grid of pink neon.
The project's meticulous execution, the vital intervention of artists—Gary Glaser—for the sculpture and certain decorative effects, Pierre Henaut for the mural painting, and the complicity of the client, François Goulet, director of the chain, allowed for the creation of a space filled with tension and provocation.
Four years after its creation, nothing remains. The name and management have changed and a subsequent remodeling has obliterated the original design. The currents of fashion have not evolved in that direction. The hamburger business seems to have difficulty identifying with assertive architecture and art.

(François Seigneur)

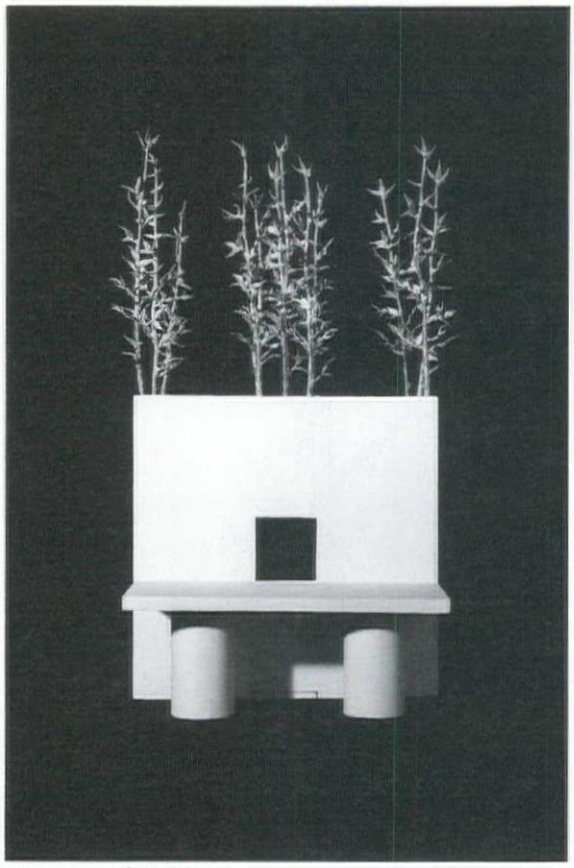
Pierre Louis Faloci (P.60—61)

Office and Showroom for Issey Miyake, 1982

Program: 14 offices and a central space
The existing building was a neglected gymnasium of 300 square metre. The architect intended to arrange a very light architecture which didn't destroy the existing building. From the 3 existing trusses he managed symmetrically the space under a glass roof. The zenithal light is altering the inside void which is coming close to exterior space. The used building material are metal, wood, glass, white breeze-blocks.

Dancing School, 1983

Program: 5 studios, cafeteria, exhibition hall, toilets, 2 changing rooms, 4 offices.
The existing building was an old 1900's industrial paper mill of 1700 square metre.
The main theme was to preserve the dramatic feeling of the place gand the restructuring was completely different from a transplant.
An inner wall with windows and venetian blinds clearly divided into compartments the private space —dancing studios— and public space —cafeteria, upper circulation—
The material used for this project are the same as for Issey Miyake showroom.
For these projects the architect worked three ways:
*Breaking down the inside of the existing building and managing on the freed space a second skin (Austerlitz Building)
*Without any contact with the existing architecture filling up a void space and giving it the quality of a public space (Issey Miyake Office)
*Putting together these 2 previous themes and creating inside the freed space a façade with street quality.
For these 3 projects the architect used the same materials: metal, wood, glass, glass blocks, white breeze-blocks.



●Plaster Work／Ketoff & Petit

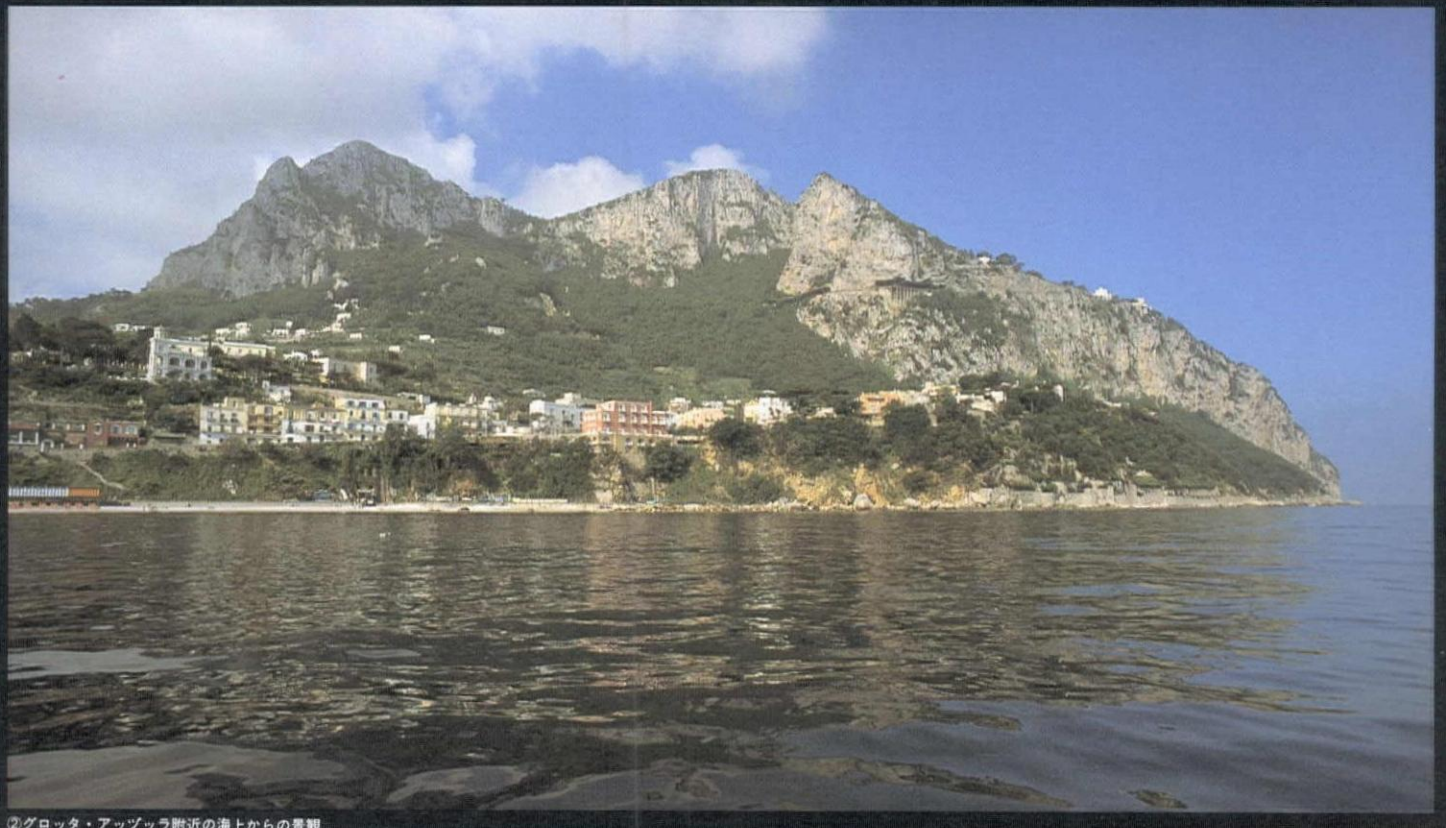
Photo Credits

a : above　b : below　m : middle　r : right　l : left

Alain Beguerie : p. 48, 50 (a.l), 51 (a.l, a.r, b.r)
Catherine Bibollet : p. 27 (m.l, m.r)
Antoine Blootz : p. 10-11
Daniel Boudinet : p. 35
Bernard Calviera : p. 20, 24 (b.m)
Richard Cerf : p. 50 (a.r, m.l, b.l, b.r), 51 (b.l)
Patrick Charpiat : p. 40 (a)
Stephane Couturier : p. 54, 56 (b), 57
S. Demailly : p. 31
Felipe Ferré : p. 16, 18, 42 (b)
GASTON : p. 59 (l, m)
H. Meister : p. 25 (b)
Deidi von Schaewen : p. 44, 52 (a.l, m.r), 53, 56 (m.r), 60 (a.r)
Dahliette Suchevre : p. 39
Guen Suzuki : p. 22, 23
Daniel Osso : p. 60 (b)
VIA : p. 52 (a.r)
Gilles Walusinski : p. 14-15, 25 (a.r)

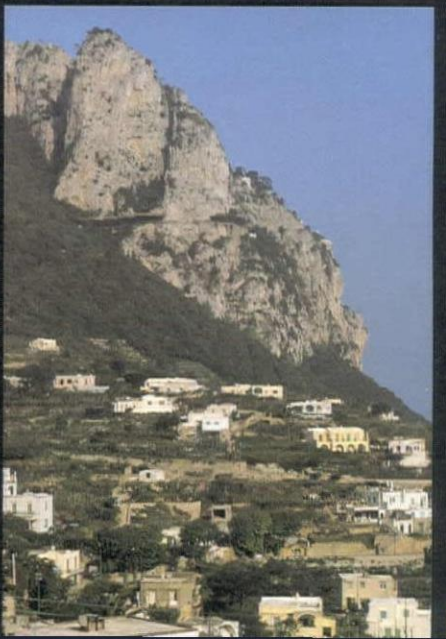
作品解説：進来玄，石上申八郎
翻訳：榎本弘之，尾崎澄子，北田京子，伏見佳子
編集協力：アニック・エメリ

続くティベリウス帝の時代にローマ皇帝直轄地となって，正しく世界史の舞台として登場し，華やかに彩られていった．　とりわけこの島を好んだティベリウスは在位期間にさえ，アウグストゥスから継承した島のヴィッラ＝宮殿にしばしば長期滞在して執政までしたといわれている．　タキトゥスの《年代記（第4巻三章67節他）》にも現われるが，この小島には古代ローマ帝国当時，大小12のヴィッラが建設された．それらの内で最大規模の建築遺構がヴィッラ・イオヴィスであり，他にも島全域に渡って，ヴィッラ・ディ・ダメクータ，パラッツォ・ア・マーレ等の多くの古代ヴィッラ遺構が散在している．　それらに具現された古代ローマ期の建築術は，残された遺構そのものと共に高水準の建築的母体として，後の時代の島の土着的建築やキリスト教建築に継承されていった．　島の風土への対応と組石技術を強く反映したヴォールト及びクロス・ヴォールトの屋根架構．　或いは壁体構成とスケールが特徴的な建築的貯水槽（チステルナ）．　簡素な幾何学的ヴォリュームを示す壁体の単位とそれらを巧みに結び合わせる外部階段の集合のヴァリエーション．　これらの〈カプリ建築〉の土着的実例は，カプリ



②グロッタ・アッズッラ附近の海上からの景観





カプリ——「島との出会い」

長谷川正允

「1787年5月16日

彼らは言った,『すでにわれわれの船はあの島の周囲をめぐっている潮流の中にはいっているんです。この潮流は奇妙な波の紆(う)りをよせながら,速度こそ遅いけれども,否応なしにあの切立った巌の方へと流れています。あの巌のところでは足をかけるべき突出もなければ,避難する入江もないのですよ。』

私たちはこの話を聞いて緊張し,自分の運命をば戦慄をもってうち眺めた。」(ゲーテ,〈イタリア紀行〉相良訳,岩波書店より)

カプリ島は地中海のイタリア半島西海岸,ナポリ湾に面して,プローチダ,イスキアと共に浮かぶ約10.4㎢の小島である。その自然は大むね周囲を巡る切り立った岩肌の絶壁と海沿いの幾多の洞窟,そしてソラーロ山(海抜589m)を筆頭とする幾つかの山とによって特徴付けられ,外へ向かっては,遙か東方へ海峡をはさんで,カンパネラ岬(旧ミネルヴァ岬)を尖端とするソレント半島へと連なる如き印象を与える。

かつて古代文明期に,ナポリ(古名ネアポリス)を中心とするカンパニア地方に古代ギリシアの植民地,所謂〈大ギリシア圏〉が形成された頃も,カプリ島はその圏内に入ってはいたもののソレントやアマルフィと共に少なからず文化的独自性を保っていたといわれている。

古フェニキア語で"Caprajim(二つの街の意)"と呼ばれていたこの島には,島の玄関ともいうべき海岸の港の集落マリーナ・グランデと共に,今日なお高台の上にカプリとアナカプリ(頂上の街の意)と呼ばれる中心的な二集落が存在する。その二つの街が形づくるカプリ島の〈島の構図〉は既に伝説の世界に登場するものである。遠く先史文明期へまで遡るこの島の地誌は,〈大ギリシア圏時代〉を経て,やがて古代ローマ帝国初期,即ちアウグストゥス帝とそれに

●
カプリ島,イタリア
Capri, Italy

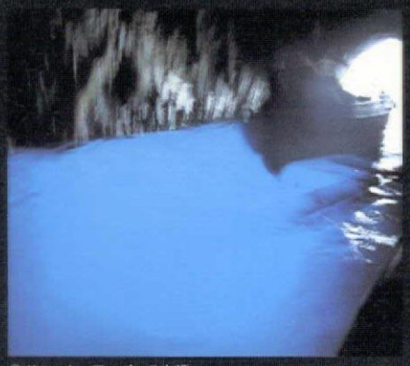


の集落の歴史的中心地区や，アナカプリのボッフェ地区等の古くからの街区，或いはトッレ・ディ・マテリータ付近に孤立して残された土着の貯水槽などに今日も尚見い出される．　またさらに，それらの原型的建築要素が大建築を構成しているヴィッラ・イオヴィス等の例には，集合の作法や敷地への配置等の内に，土着性からそのまま昇華され具現されていった〈地中海建築〉の空間術の独特な実例を多く見い出すことができるのである．

中世キリスト教時代に下って，カプリ島は再びナポリの支配下に入り，文化的にはビザンチンやシチリア＝アラブの影響を多く受けた．　今日に至るまで島中に数多くの教会が建設されたが，それらの内で最古のものといわれるサン・ミケーレ山のクローチェ教会はその地に残されていた古代ヴィッラ遺構の内の貯水槽部分の転用だった．　同様に，6世紀に既に出現していたという島最初の重要なキリスト教建築，ベネディクト会修道院も古代遺構の転用から始まったといわれ，さらにはヴィッラ・サン・ミケーレの礼拝堂，サンタンナ教会，サン・コスタンツォ教会等の幾多の小教会建築においても，個々の時代性を反映する様式的特質の対極に，島に



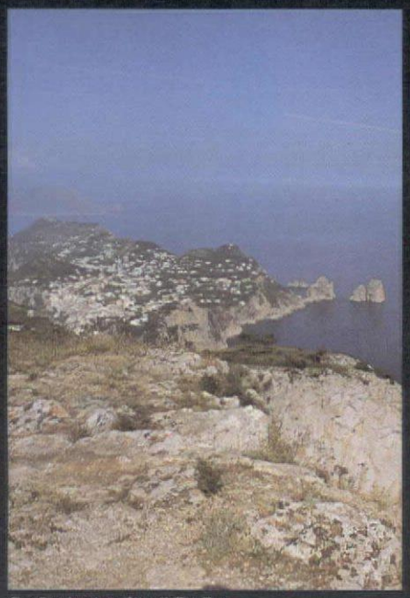
⑤マリーナ・ピッコラの海水浴場



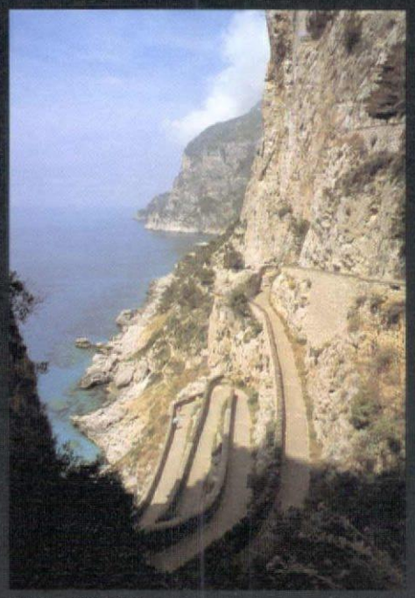
⑥グロッタ・アッズッラ内部



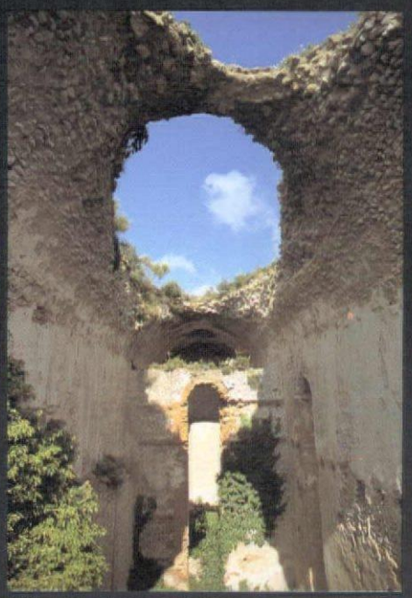
⑨ヴィッラ・イオヴィス



⑦ソラロ山からカプリの集落を見る



⑧クルップ通りの裏折



⑩ヴィッラ・イオヴィスの貯水槽室

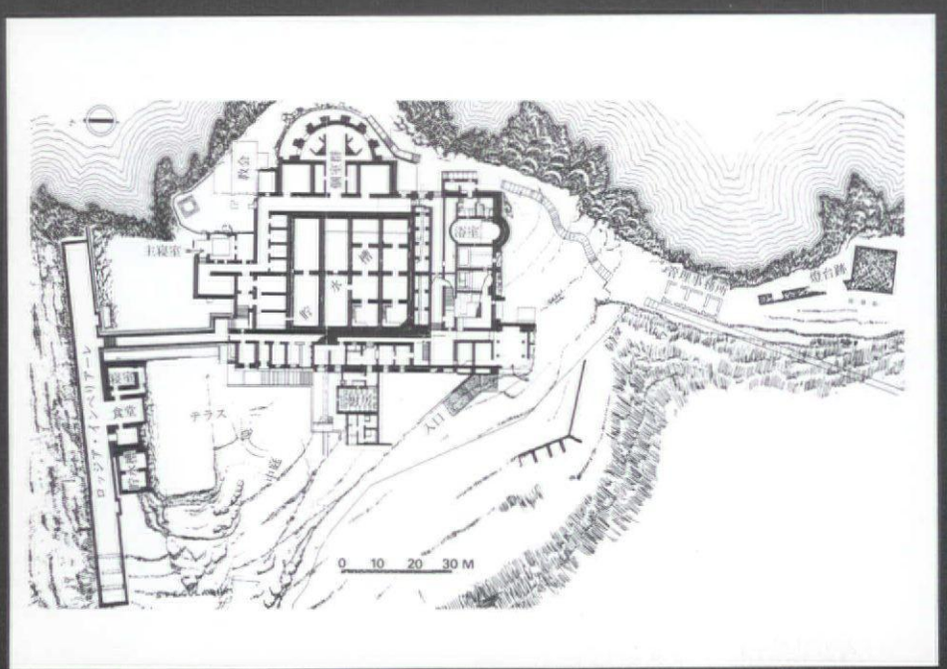
残されていた地誌的遺産（古代ギリシア時代の軍事用城壁，古代ローマのヴィッラ建築の構造体或いは床モザイク等の装飾物など）が継承され，建築の内に肉体化されているのである．
継承とは，単に形態的・材料構法的というような断片的で一義的な特質について語られるものであるというよりはむしろ，交錯した多様な軌跡をトレースし得るようなぶ厚い地誌的遺産を背景に成立しているのだということをこの島は教えてくれる．　幾多の教会建築には外部文化の残響としてゴシック的・ビザンチン的造形を認め得るのだが，むしろ簡素なヴォリュームの建築単位の構成というような島固有の風土性に対応した原型的特質に気付かねばならない．
古い書物によれば，この島にはかつて無数といっていい程の教会や礼拝堂があったという．その数は島民数からは考えられぬ程だったが，多くは簡素なチャペルやささやかな集会所だった．　それらの中で例外的建築としてカプリ島最大規模を誇ったチェルトーザ・ディ・サン・ジャコモ（シャルトル会修道院）は1371年から74年にかけてジャコモ・アルクッチ伯爵によって創設され，数百年の間カプリ島に君臨した．チェルトーザはやがて1807年にヨセフ・ボナパルテの介入で廃墟と化したが，1563年の拡張工事の際に建設された大回廊ほかが今も遺構内に残されて，当時の最勢期の余韻を今に伝えている．　チェルトーザが閉鎖される数日前，その燈台の塔は崩壊したが，それはあたかもヴィッラ・イオヴィスの燈台がティベリウスの死の直前に自ら崩れ落ちた如くであったともいう．　チェルトーザの位置に古代遺構が既に存在していたか否かは確認されてこそいないが，全体の構



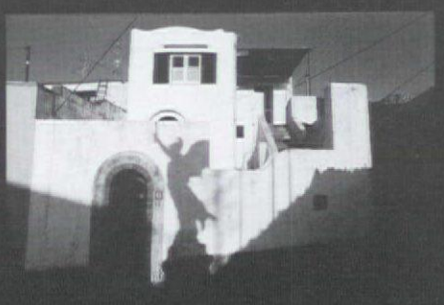
⑪ヴィッラ・イオヴィスの個室群内部



⑬トッレ・マテリータの土着の貯水槽



⑫ヴィッラ・イオヴィス平面図



⑭アナカプリの住宅建築



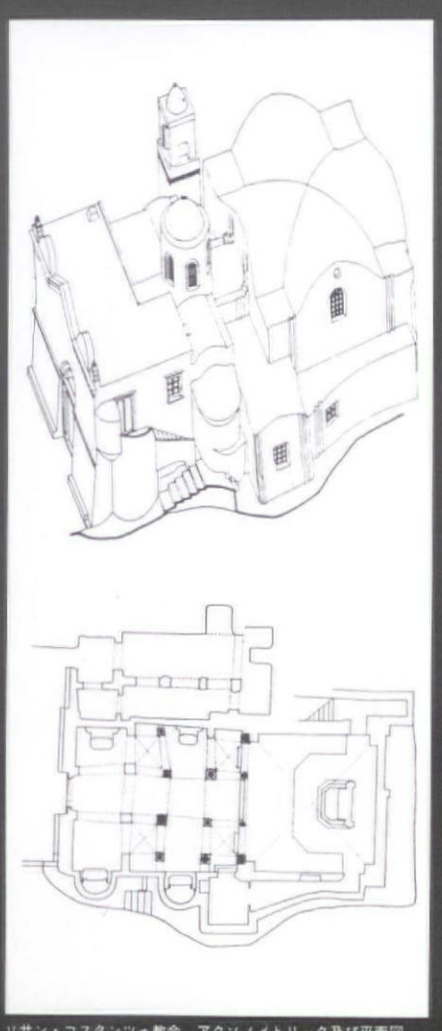
⑮アナカプリ，ポッフェ地区の街路

成，敷地・周辺との関係，海を見晴らす絶壁沿いの個室（独房）群配置等には古代ヴィッラの類型を想起させるものがある。　古代の皇帝達の隠遁生活の舞台となったヴィッラの空間とは別の意味で，チェトルーザ内部の隔離された求道的空間もまた一種の隠遁生活を成立させていた。　そして今日遺構となって落日の彼方に存在し続けるチェルトーザはカプリ島の空間イメージの典型の一つである。

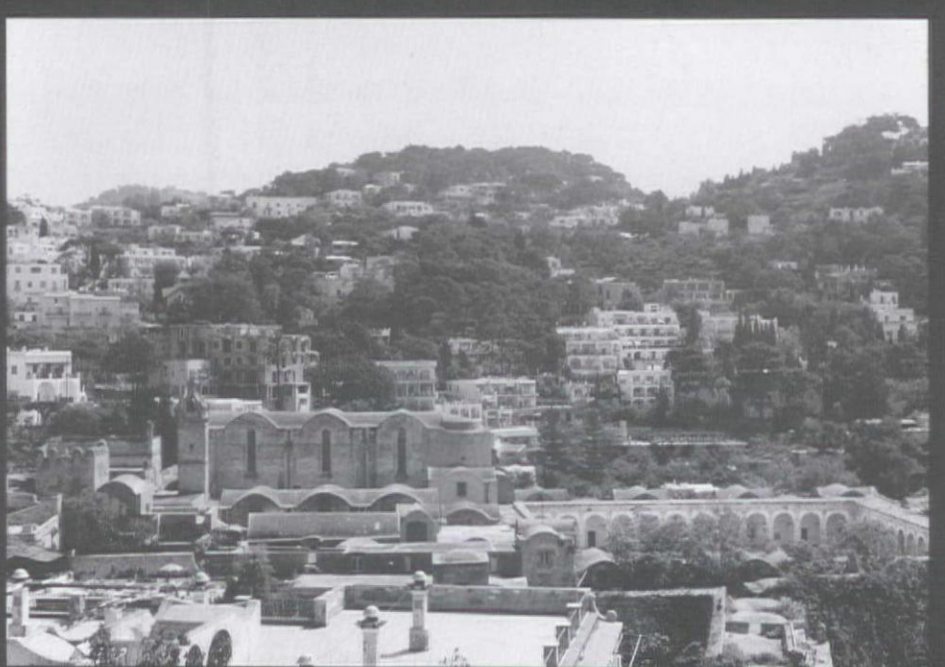
「我等は風と波とに送られて，漸くカプリの島邊に近きぬ。　水のまことの清さ，まことの明さを知らんと欲せば，この海を見ざるべからず。」（アンデルセン，《即興詩人》森鷗外訳，岩波書店より）ほぼ17―18世紀から始まった，所謂〈グラン・トゥール〉，〈イタリア紀行〉の波はカプリ島にも新しい種類の文化的特質をもたらした。　外から訪れたその主役は学術研究・紀行文・物語の著者，或いは芸術家であり，彼らにとってこの島は大かれ少なかれ〈ロマンチック〉な心情を吐露する舞台に適していた。　19世紀の〈新ベルリン〉の立役者，新古典主義建築家K．F．シンケルが，若き日のイタリア紀行の際に島を訪れたのは1804年のことであり，或いはウィーン分離派のJ．ホフマンが立ち寄ったのは1896年のことだった。　彼らは滞在中描いた幾多の風景スケッチを残しているが，ホフマンは雑誌"Der Architekt"に土着のカプリ建築に関する寄稿をしている。　ゲーテを筆頭とする北ヨーロッパの文化人達がアルプスの彼方へ地中海の〈光〉を求めて南下の旅を続けた中で，19世紀的典型の一つをアンデルセンの《即興詩人》に見い出すことができる。　古代期以来，永い間歴史から忘れ去られていたカプリ島のグロッタ・グラ



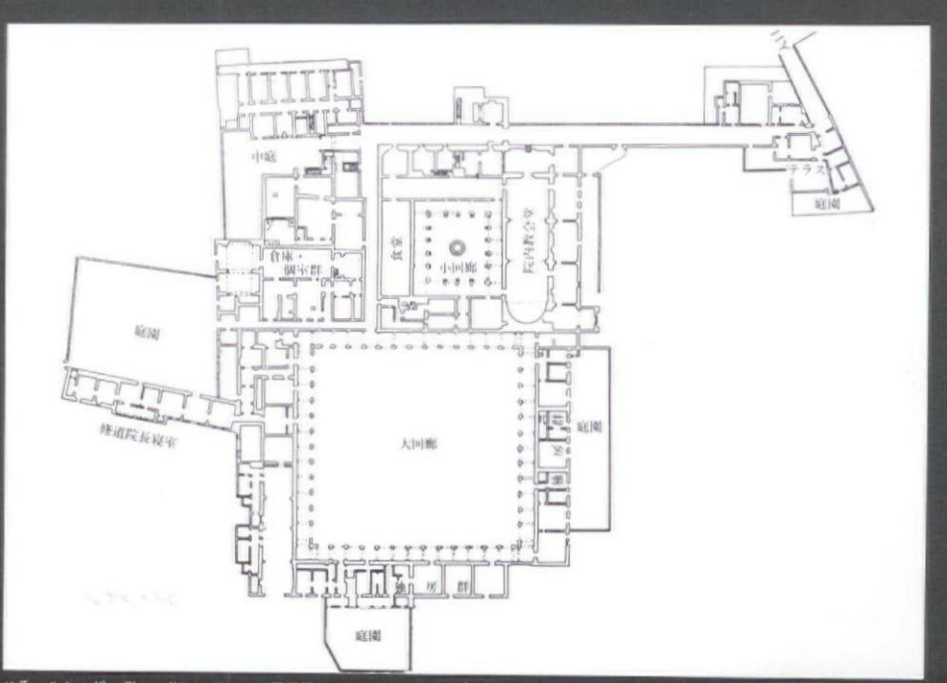
⑯サン・ミケーレ山ふもとの教会



⑰サン・コスタンツォ教会，アクソノメトリック及び平面図



⑱チェルトーザ・ディ・サン・ジャコモ遠望



⑲チェルトーザ・ディ・サン・ジャコモ平面図

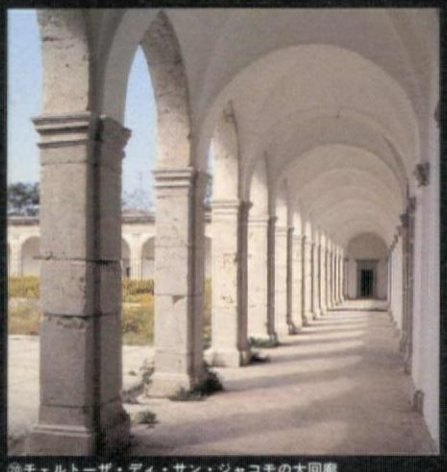
ードラ，通称「グロッタ・アッヅッラ（青の洞窟，琅玕洞）」が1825年に二人のドイツ人画家によって再発見された直後にこの島を訪れたアンデルセンは，自身の伝記小説とも言えるそのロマンチックな作品の文脈の内に，最も神秘的な地としてカプリ島を選び出し，その成功は島を一大観光地にする契機の一つになったのだった．

「古くて黄色くなったたて縞のある大理石の柱の上には，わたしの見たものの中では一番大きい玄武岩でできているホールス（エジプト神話の日の神）が立っている．　これはファラオから，あるローマ人の収集家がもって来たものだった．　あるいはティベリウス自身かもしれない．　書き物机の上には大理石のメドゥーサの首がのっかっていて，わたしをじっと見つめている．　これは紀元前４世紀のもので，わたしが海の底から見つけてきたのだ．」（アクセル・ムンテ，〈サン・ミケーレ物語〉，久保訳，紀伊国屋書店より）

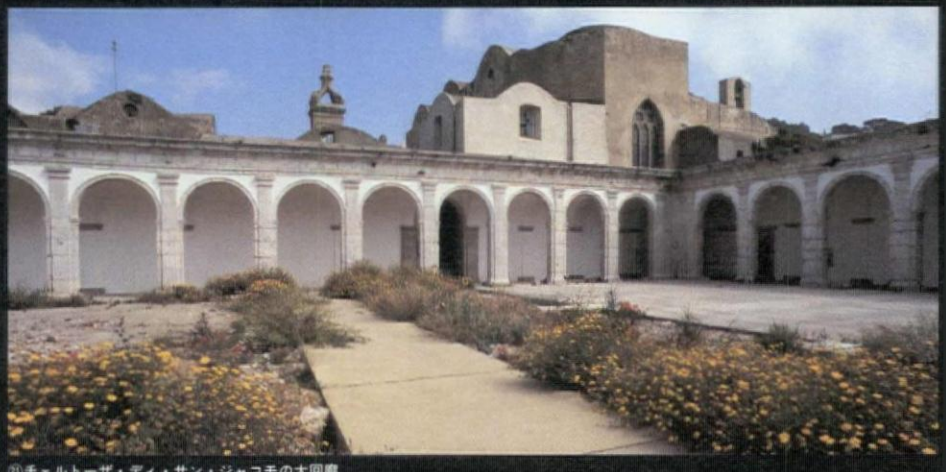
19―20世紀にかけてもう一人の北欧人が地中海にあこがれ，カプリ島のとりこになった．　スウェーデン人医師，アクセル・ムンテ（1857―1949）である．　フェニキア階段頂上，アナカプリ入口付近に位置するヴィッラ・サン・ミケーレは，若き日に療養のためこの地を訪れた彼が後の生涯をかけて建設し保持し続けた現代のヴィッラ＝記念碑であった．　かつて古代ローマのヴィッラがあった敷地を島民から譲り受け，遺構に重ね合わせる如く自身のヴィッラ建設をめざしたムンテは，主要部を1896年から５年程で自力建設し，後もしばしば拡張したが，晩年眼を患った後は最晩年の６年間を母国の国王客員として暮らした他は，自らのヴィッラでの生活を拒絶し，トッレ・ディ・マテリータにて静かに暮らしていた．　彼の〈人間への愛〉は島の生活に喚起された〈死に関わる瞑想〉と表裏のものだった．　そして彼のヴィッラは拒絶された瞬間から今一つの〈不在の空間〉を具現している．

「儀礼的な義務は果たされた．　しかし同時に魔女の望みも果たされたのだ．　こうして私は，仲間たちが豚に変えられるのを眼のあたりにしたオデュッセウスの気持ちをたっぷりと思い知らされて，階段を登って行った．」（W.ベンヤミン，〈都市の肖像〉，藤川訳，晶文社より）

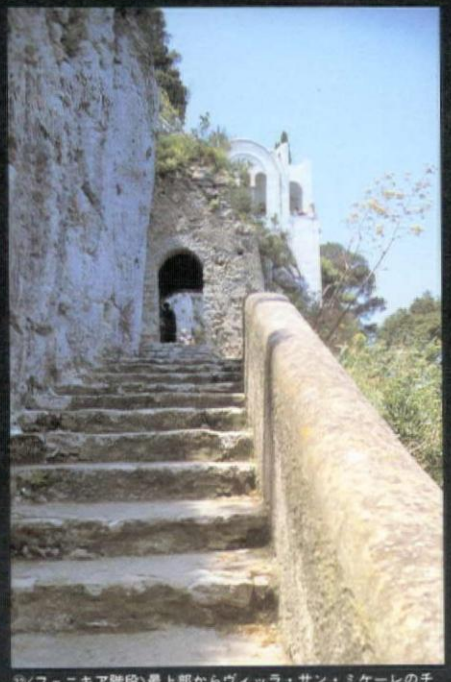
19世紀中頃からカプリ島にはイタリア人，外国人を問わず多様な人々が訪れるようになり，ムンテのように住み着く人々さえ現われるようになった．　一方で島はある種の〈裕福で怠惰な



㉒チェルトーザ・ディ・サン・ジャコモの大回廊



㉓チェルトーザ・ディ・サン・ジャコモの大回廊



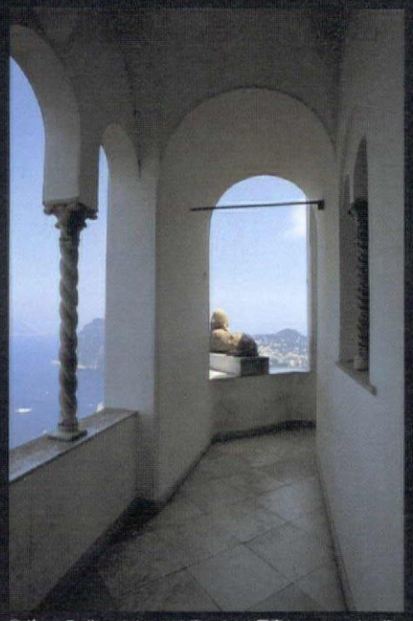
㉒〈フェニキア階段〉最上部からヴィッラ・サン・ミケーレのチャペルを見る



㉓ヴィッラ・サン・ミケーレの中庭



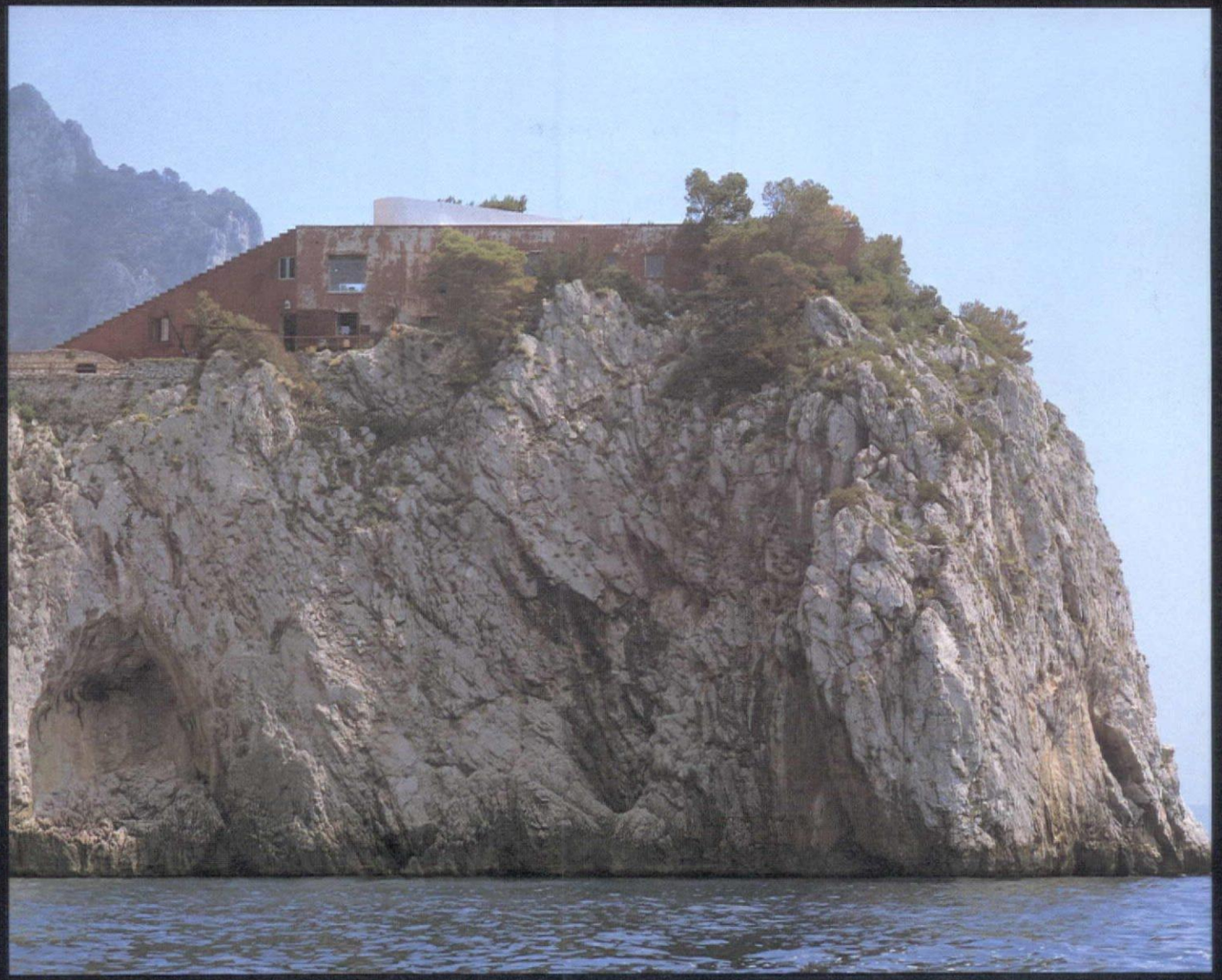
㉔ヴィッラ・サン・ミケーレの中庭



㉕ヴィッラ・サン・ミケーレのチャペルの回廊とスフィンクス像



㉖ヴィッラ・サン・ミケーレの室内



㉗ヴィッラ・マラパルテ

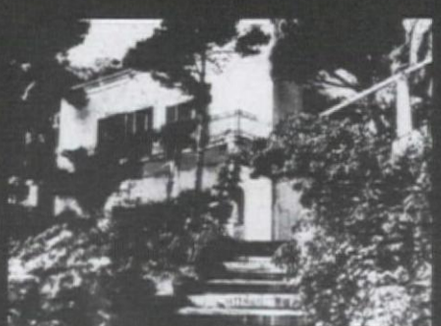
人々の無意味な挨拶〉の舞台と化したが，他方療養や政治的亡命等の理由を含めて，幾多のラディカルな文化人達の国際的〈溜り場〉でもあった．　C.レーヴィ，C.マラパルテ，未来主義者F.T.マリネッティ等の著述家．　A.サビーニオ，デ・ピシス，グットゥーゾ他の芸術家．

国外からはストラヴィンスキー，島のロシア人グループの中心だったM.ゴーリキーとその客人の一人だったN.レーニン等．　W.ベンヤミンがA.ラツィースと出会ったのは1924年のカプリだったし，余談だが若き堀口捨己がこの島を訪れたのも丁度，この頃（23—24年の渡欧の際）のことである．　外からの訪問者達にとって，カプリ島は世界から孤立した言わば〈実在するユートピア〉にほかならなかった．　それはもはや19世紀的なロマンチックなエキゾティズム謳歌の舞台ではなく，ダンディズムの隠れたメッカとなっていた．　シンケル，ホフマンと続く建築家の旅の系譜は，ホフマンによるヴォリュームへの着目がコルビュジエへ引き継がれ，一方シンケル以来の〈画家の眼〉はG.パガーノの〈土着建築〉写真へと結ばれていった．　それはルドフスキーの先駆だった．

第二次大戦末期に人知れず建設されたC.マラパルテのマスッロ岬のヴィッラ（A.リベラ設計）は，シンプルなヴォリュームも絶妙なロケーションとによって近代建築を直接地中海の瞑想へ繋ぎ止めている．　島の東端に人里離れて建てられたこのヴィッラは地中海に喚起された全く私小説のような建築であり，ムンテが放棄したヴィッラ・サン・ミケーレの回廊からナポリ湾を見すえる赤いスフィンクス像にそのまま対時しているのだ．

戦後〈ユートピア〉を求めて押し寄せる新しい人々の流れは，大衆化し高級とはいえ少なからず島全体は商業施設化した．　カプリ建築を形態的に模した〈カプリ風の白い家〉が島にも多く建設されて，美術史家R.パーネが嘆く如く，「島の環境は悪化の一途をたどった．」　多くの自動車が島中を陽気に走り廻る光景は島の現在をよく示しているが，余り悪びれた印象がないのは救いだろう．　ここには世界の縮図がある．〈島〉はそれ自体一つの小さな世界を形づくっている．　島個有の自然，そこに育まれ展開した華麗な歴史，島民のささやかな生活，そして折々の外界との接触がある．　一方外部からの訪問者にとっては，突然に目の前に拡がる独特な景観は彼の脳裏に，ある種の驚き，喜び，或いは興奮，瞑想への契機を与える．　カプリ島は係わる者に対して地中海に対峙する自意識を時折強いるのである．

●はせがわ・まさのぶ／建築家



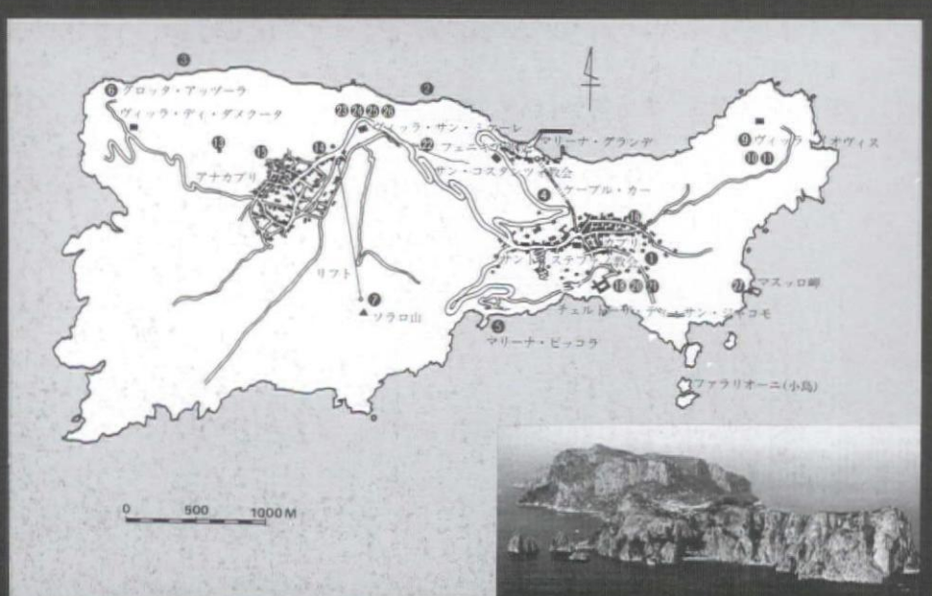
㉘レーニンが滞在したヴィッラ・スピノラ



㉙カプリ市役所にて演説する未来主義者マリネッティ，1924ca



㉚アナカプリ近くのトッレ・ディ・マテリータでの晩年のA.ムンテ，1937年



㉜カプリ島全図



㉛K. F. シンケルの〈アナカプリの風景〉スケッチ，1804年



㉝カプリ島の位置

主要参考文献　C. De Seta, "Capri", 1983, Torino／L. Vergine, "Capri, 1905/1940", 1983, Milano／R. Pane, "Capri", 1982（第3版）, Napoli／A. Maiuri, "Capri, Storia e monumenti", 1957, Rome／C. Krause, "Untersuchungen an Römischen Bauwerken, 1978-80", Antike Kunst, n. 24, 1981　写真：長谷川正允（①—㉗）

文＝草森紳一　写真＝大倉舜二

呪縛の目，呪物としての室外彫刻

1

ライトの建築は，不断に見直され，不断に見棄てられる運命にある．

それは，生命としての人間の根っこをライトはあけっぴろげなまでのしつこさで，ひっつかまえているからだ．　時代の流れに見合った新しい様式の登場で，しぶしぶライトは退場するが，すぐにまた顔をだしてくる．　新傾向が，たちまち息詰って，くたびれ，あきられてしまうからである．　ゲーテの《ファウスト》の言葉でいえば，「わたしたちが霊のことばをささやくと，あなたが来て，そのとおりのものを見せてくれる」のがライトの建築である．

コルビュジエやミースの巨匠たちも，その模倣群・模倣さえ意識していない模倣群，つまりそれらが世界の都市の顔，顔のない顔となってしまうことによって，ようやく色褪せてきた．　しかし，ライトの建築は，反感や拒否反応を抱えこんだまま，すぐに立ち現れるのである．　「建築！人間！」と呪文をとなえさえすれば，たちどころにライトの建築が念起されてくる．　人々の心の底では，ライトなど，もうコンテンポラリーでないと思っていながら，「しかし」として見直される．　人間は人間をやめるわけにいかないし，建物を作り，建物を使うのは人間にほかならないからだ．

ライトを論じた文章はずいぶん読んできたが，歴史的遺物として葬り去ったものを見たことがない．　手厳しく批判したものでも，どこか不安になるのか，「しかし」と肯定してしまう側面がでて，歯切れが悪い．　ライトを大肯定するものは，これからこそ見直さなければならぬとかならずきまり文句で結ぶが，闇雲にすぎ，どう見直していいのか，さっぱり要領がつかめない．

いや，要領は，自明なのである．　あまりにも自明すぎて，手のほどこしようもないのである．　それは，呪文通りに〈建築・人間〉ということに尽きているからである．　ライト流にいえば，〈有機建築〉だが，この彼の宣言は，不毛に等しい魔法の言葉である．

彼は，おびただしい論文を精力的に書いた．　重複をいとわぬところからも，一種の宣伝文だといってよいが，繰り返されることによって，こちらの頭の中に彼の論旨が叩きこまれるということはない．

それは，難解だからでない．　やさしすぎる位だ．　自然，単純，完一，そして自由と個性がキーワードで，それらが〈有機〉なるものによって総括される．　他に装飾にかかわるプラスシティや連続性，民主主義もキーワードにいれてもよい．　それらを理解するのに，困難はないが，問題なのは，このわかるということが，ほとんど無意味なのである．

彼の本には，平面図やドローイングが豊富に挿入される．　建築の実相を伝えぬものとして彼の嫌った写真もふんだんにはいっている．　実相を伝えぬということでは，平面図やドローイングも同じである．　彼の内部空間論からすれば，ほとんどむだにさえ感じられるし，全体の構造はくみとれたとしても，内部のディテイルが，内部そのもののようなところがライトの建築にあるため，それを指示しない平面図は意味をなさない．　写真はディテイルを開示するが，連続性を寸断するため，まさしく実相を伝えない．

それも承知で，挿入するのは，読者への参考に供するというサービスのあらわれなのか．　だとすれば，人を喰った話だ．　それは，ちょうど秘伝の剣法の虎の巻をやっとさがしだして，いざ読んでみても，当り前のことしか書いていず，腹を立てるに似たところがある．　剣の構えの図解などがあっても，それをいくら真似ても，剣が強くならなくて，癇癪を起して虎の巻を破るようなものだ．ライト流には，盗まれて困るような秘密などは，秘密のうちにはいらぬということである．

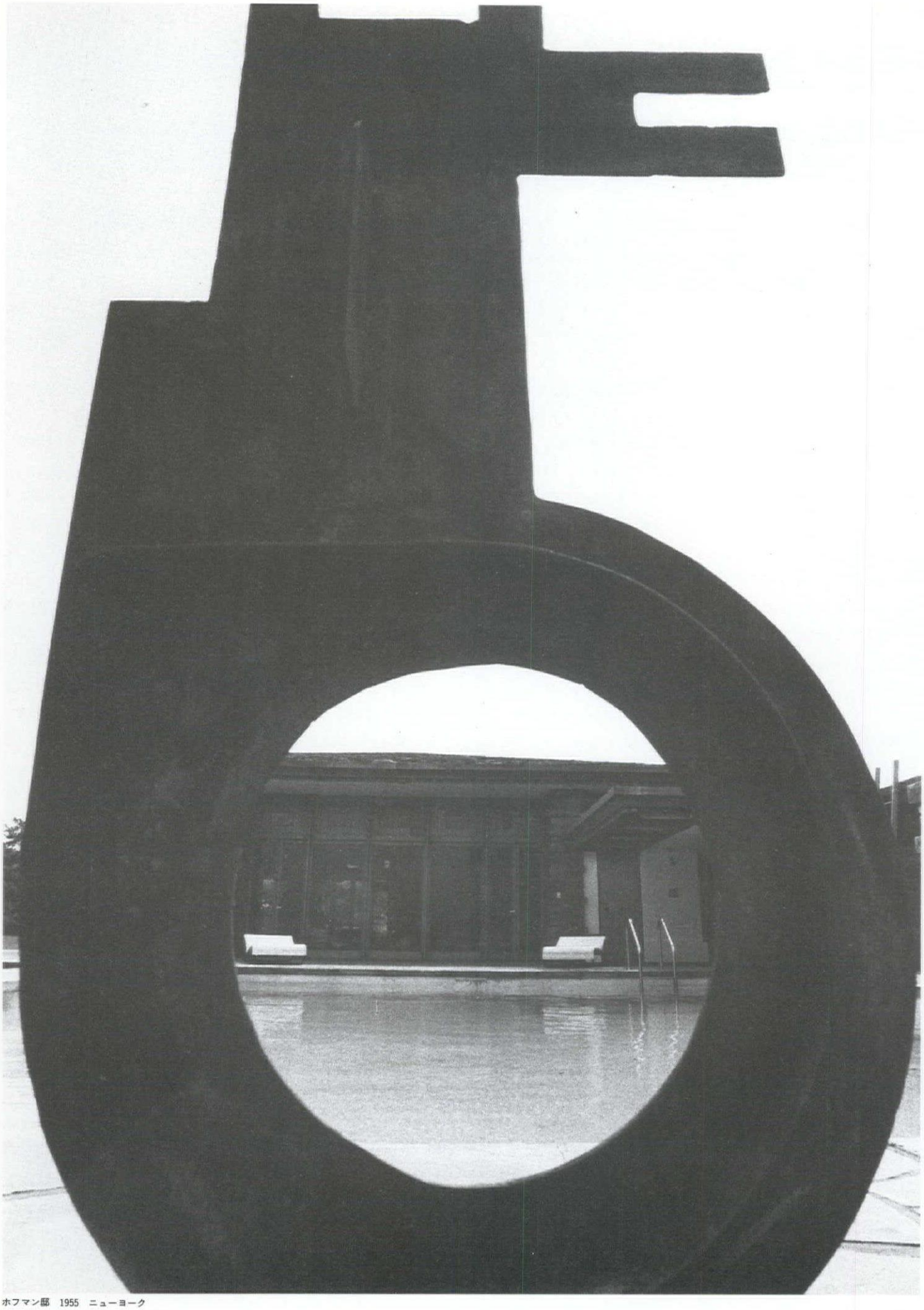
つまり，ライトの著述（平面図・写真）は，秘伝書の系列なのである．　いわば，オカルト書なのである．　隠密の書なのである．ケプラーにしろピタゴラスにしろカルダーノにしろ，これら魔術師たちは，書物を残しているが，それをいくら読んだところで，魔法がえられるわけでない．　20世紀の魔術師として，クローリ，グルジエフといるが，彼等の書を読んで，ただちに魔法を駆使できるわけでない．

さきに述べたライトのキーワード，〈自由〉にしても〈自然〉にしても，ましてや〈有機〉は魔術書の常套語であり，この言葉を理解したところで，たちどころに有機建築を地上に打ちたてるわけにいかない．　機械技術者，数学者，医師，錬金術師，詩人，音楽家，建築家が，かつてしばしば呪術師でもあったのは，〈自然〉にかかわり合うのを業としたからである．　石工組合から発したフリーメーソンの主神ともいうべきソロモンもヒラムも建築家である．

「自然の精細は，感覚および知性の精細に幾層倍もまさっている．　したがって人間のあの立派な省察や思弁や論筆も的外れなものなのである．　ただそれに気付く者が居合せないだけだ」（桂寿一訳）

これは，ベーコンの《ノヴム・オルガノム（新機関）》の中の言葉である．　ベーコンは，近代科学の父と呼ばれるが，近代フリーメーソンの創立者のひとりである．　秘密結社薔薇十字の団員だったという説もある．　〈オルガノム〉は，〈機関〉と訳されているが，論理学の意味あいで用いている．　私は，有機哲学と解いてもよいように思っている．

「宇宙の構築はその組み立ての点では考察する人間の知性にとっては迷路のごときものであり，そこにはよほどの通路の紛らわしさ，物とそのしるしの誤らせ易い類似，諸性質の斜めで入り組んだ



ホフマン邸　1955　ニューヨーク

曲折や結び目が，至るところに示される」

彼のいう〈オルガノム〉とは，有機なる自然の解明のしかたであり，従来の論理学では無理だという見地に立っている．　人々の同意を強制する力はもつが，事物を拘束する力をもたないとする．ベーコンが近代科学の父であるなら，その自然解明の術（論理学）によって，ついには人間に〈自然〉を忘れさせる誤謬に導いたといえなくもないが，同時に彼は，超自然の奥義をきわめていたとされるから，彼の〈ノヴム・オルガノム〉とは，超自然の論理学のことで，この鍵をもってしなければ，自然を解明できないと考えていたのかもしれない．　さらにベーコンはいう．

「あたかも神の本性は隠れんぼ遊びをする子供たちの，無邪気で他意のない遊戯を楽しむかのごとく，また人間への恵みと慈愛のゆえに，人間の心をこの遊びにおける仲間に選んだのかのごとくである」

ライトは，この隠れんぼ遊び（オカルティズム）をよく知っていたかのように思える．　ベーコンの著作には，暗号が秘められているともいわれるが，ライトの建築にも著述にも，その暗号が隠れんぼしていて，その鍵を発見しないかぎり，あらゆる論理による挑戦はしりぞけられるようにも思えるのである．

彼の建築だけでも，彼の著述だけでも，その両方をあわせて対いあっても，解き明かせぬなにものかがある．　ありあわせの論理の手ぶりや，限りある個人の感覚や知性のめぐらせ方では，とらえたと思ってもすり抜けているし，切ったと思っても，尻っ尾が残っているような不安がまといついてくる．　ライトの建築が，不断に見直され，不断に見棄てられるのは，そのためである．　お手あげでありながら，無視しきれないなにものかが，後ろ髪をひっぱるからだ．

2

「サリバンとライトの大地に根ざす建築に支配的な線は水平で，自然を愛する人間の形である．　もう，こうした表現があまりに神秘的だと思われるなら，サリバンとライトが共に神秘的であったことを思いだされるのがよかろう．　ライトの神秘主義は彼の基本的な原則が発展するにつれて，ますます強められていったのである」(田中正雄・奥平耕造訳)

と述べたのは，ピーター・ブレイク（The Master Builders）である．　水平線の強調が神秘主義につながるにしても，垂直線の強調も，なにも古典主義の独占でなく，神秘主義にも直結するものである．　いずれにしろ，ピーター・ブレイクは，ライトに〈神秘主義〉を見ながらも，これ以上は深入りせず，それをマスターキーとして用いることをしていない．

日本とライトのからみは深いが，日本人にとって一番にが手なのは，コルよりもミースよりも，ライトではないかと思われる．それは，ライトの教養体系が建築や美術にとどまらないからである．〈神秘主義〉をとってみても，建築にその流れを見るより，文学や宗教をよく見なければならないからだ．　建築は，造型美だが，〈神秘主義〉がからむと，これに見えない神の手も加担していると考えなければならなくなる．　一方，ミースやコルは，それぞれに伝統を背負いながらも，世界共通語的造型の〈インターナショナル・スタイル〉と俗に呼ばれる抽象体の中にまがまがしき血脈を消す魔術を施した．

ライトがよく用いる〈ロマンス〉にしても，日本流にロマンチックととらえていると，まちがってしまう．　ヨーロッパには，〈ロマンチシズム〉の伝統があり，それが〈神秘主義〉とも交叉するからだし，〈ゴシック〉とも渡り合う．　もちろん〈自然〉や〈有機〉とも濃厚に構合している．　いくらライトが古い日本の住宅から，多くのものを盗んでいて，親しみを感じたとしても，それでわかるというものでない．　日本におけるライトの弟子たちが，その秘儀を受け継いだといいきれないのも，そういった過去の伝統の中にある血脈を洞察しきれないからである．　日本の住宅が，いくら有機的だといわれても，〈有機〉などと観念化した経験がないから，戸惑ってしまう．

オクラホマにあるハロルド・プライス・ジュニアの住宅（1953）を見た時，いまなお私の記憶の中に鮮烈に残るのは，庭にあった白い球体である．　プライス・タワーのオーナーが長男のため，ライトに設計させたものだ．

私の見たライトの住宅の中では，内部が明るいことでは際立っている．　晩年のライトは，明るい体系に向っていたのだろうか．それともオクラホマの大地に巨大な青空の冠をいただく宙天が，暗さに人が隠れこむことを許さなかったのだろうか．　青空が室内空間にまで，侵入してきているのを感じた．　それとも，私が外から青空を運びこみ，それを消してしまわない空間が内に用意されていたのか．

私が，招じられた室内の中へもちこんだのは，オクラホマの青空だけでない．　玄関前の太陽に映えてつるりと輝く白い球体は，私の心の中にそのままスッポリはいりこみ，そういう身体を携えたまま，ハロルド・プライス・ジュニア邸の内部を見物させてもらったのだった．

ライトの水平住宅そのものの外観は，ピーター・ブレイクのいう〈神秘主義〉的なたたずまいをもっていない．　傲慢なまでに地味である．　地味に威張りかえっている．　内部は一転して〈神秘主義〉といいたくなる様相が展開される．

だが，ハロルド・プライス・ジュニア邸の場合，この巨大な白球に一発で決めこまれた感じがするのだ．　広大なよく手入れのいきとどいた芝生の庭を通って建物に近づいていく時，遠くに見えたぬれぬれと卵の白味のような光を帯びた白い球が，だんだんと大きくなっていく．　視線は，その白い球体からはずせず，こちらの進む足はただ近づいていくだけである．

玄関前の左に泉をたたえた花壇のようなものがあり，レンガでしきられているのだが，その中央にすこし高い台座があって，その上に白い球がのっている．　そば近くへ寄ると，まんまるの球ではなく，真ん中で二つに割れた球であったことを確認する．　だが，心は，あいかわらずまんまるの白い球を浮かばせたままそばを通過して玄関に到り，室内に導かれてしまうのである．

割れれば左右に半球が倒れるのだが，真ん中で抑えこんであるため，剣の名人が一刀両断した時のように円球のかたちは崩れてい



ホフマン邸　1955　ニューヨーク



タリアセン・イースト　1925　スプリング・グリーン，ウィスコンシン



タリアセン・イースト　1925　スプリング・グリーン，ウィスコンシン



ハナ邸　1937　スタンフォード大学，カリフォルニア



ライト自邸・スタジオ　1889　オークパーク，イリノイ

ない．　両断されることによって，かえって円球を完全にしている．

この円球は，なんだろう．　建物全体に対して装飾的役割りをしているともいえる．　それともなにか象徴的な意味あいで置かれたのだろうか．　その意味は，無限であろうか，誕生であろうか．

そのような意味さぐりは，ほとんど無意味である．　象徴の本来は，意味を孕むにしても，そのことに重要性があるわけではない．むしろ〈投企〉に近い．　スポンと置くことによって，その建て物のすべてを決定してしまっている．　だから，建て物の装飾ではなく，建て物そのものになっている．

「ありとあらゆる宗教は唯一の教義の統合のうちに要約される．それは存在の肯定，そして存在はそれ事体に等しいという主張であり，それが宗教の数値を構成する」(生田耕作訳)

これは，〈魔道中興の祖〉といわれるエリファス・レヴィの言葉である(《高等魔術の教理と祭儀》)これをいいかえれば，「一は一のなかにある，すなわち全体は全体のなかにある」ということになる．　ハロルド・プライス・ジュニア邸の場合にスライドさせれば，この白い球と背後の住宅とは，不可分なものであり，前座でもなければ，附加的なものでもないことになる．　さらにレヴィはいう．

「魔術においても教理は一つしかない．　すなわち，目に見えるものは見えないものの発現である，つまり，言いかえれば，完全な言は，感知できる目に見える事物のなかにあって，われわれの感覚で感知できない目に見えぬ事物とぴったり重なり合っている」

私は，ライトの魔術にひっかかったのだといってよい．　最初に目に飛びこんだ円球によって，一つの中に統合されていたのである．　それは，当のライトも，気にいって住んでいるプライス氏も同じく統一化され単一化されたであろう．

この魔術にかかりたくなかったなら，魂の目＝想像力を自らのうちに孕ませないようにするしかない．　しかし，置かれるべくして置かれたような白い球体から目を塞ぐことは，至難である．　レヴィは，こうも言う．

「魔術道士は片手を天に向って差し挙げ，いま一方の手を地に向けて下ろし，かく言う．　上に無限，下にも無限！　無限は無限に等しい．　目に見えぬ事物と同様，目に見える事物に於てもこれは真実なり」

天に差しあげたり地に向けておろす手，そして呪文，これらは単なる指示記号の機能をこえている．　レヴィ流にいえば，〈完全な言〉であり，〈理性に適用された想像力〉なのだろう．　白い円球は，まさにライトの放った〈完全な言〉だったのである．

3

このような白い円球のごとき存在は，ライト設計になる住宅の外景のどこかで，たえず見ていたような気がする．　彫塑，彫刻の姿で，ぽんと野ざらしに置かれている．

〈催眠術的空間〉と言ったのは，V．スカーリーだが，彼もまたブレイクと同様，賢明にもなぜ催眠術的で，どのような設計デザインによってひきおこされるかについて深入りしていない．

私は構造の様態にその秘密があるというより，ライトの光のつかいかたにあるのだろうと思っている．　ここでは語らないが，物体も光の変形であってみれば，ライトが手くばりした物そのものからも，催眠をひきおこす魔術的作因があるにちがいない．

反感は，呪縛の予感だというが，私はといえば，ライトの建物に，たえず反感を抱きつづけていた．　呪縛をおそれたからだろう．呪縛とは，愛であれ憎しみであれ，お手あげの状態だからである．私は，ライトについて，なにかを書こうとしていたから，やすやすとライトの内部空間に充満する魔に魅せられるわけにいかなかった．

ふりかえれば，私は二つの方法を無意識に使っていたように思われる．　一つは，見ないことである．　空間にからだを通過させて歩みつづけるだけで，私たちの日常生活がそうであるようにからだの目にまかせた．　そのほうが，ライトの建築が，総体的にはよく把握できると思ったからである．

もう一つは，気まぐれに部分を熟視することである．　この場合は，気まぐれから一転して真剣にやらなければならない．　そうしないと，物のほうに自分が吸収されて，なにもあとで記憶に残っていないということがあるからだ．　これは，私の建築の見方というより，仕事上からくる万物への対しかたなのだが，あながち狂っていたわけでないことは，レヴィの言葉を見るとわかる．

「私たちは〈霊光〉で充たされている，また隙間をつくって，新しいものを引き入れるために，絶えず〈霊光〉を発散している．牽引と発散のどちらにもあてられている神経組織，それはとりわけ目と手である．　手の極性は親指に宿っている．　それ故，わが国の田舎に今も残っている魔術的伝承によれば，うさんくさい連中と同席するさいには，親指を折り曲げ掌の中に隠すようにして，特定の人間だけに目を注ぐことを避ける，かといって予期せぬ流体発射と居竦ませる視線を避けるために，警戒を要する連中をこちらから先に見わけるように心掛ける必要がある」

霊光とは，いわゆるオーラのことであろうか．レヴィによれば，この中に「人間や事物の映像が保存され」ているらしいが，私たちのいうイメージ（意識）も，この光を通すのだろうか．　親指を隠していたかどうか気づかなかったが，この姿勢によって呪縛を逃れ，また魅力の秘密を知ったともいえる．

呪縛は，自らが意志した時にかかるのである．　ハロルド・プライス・ジュニア邸の白い球体は，まさに流体発射するライトの目だったかもしれないが，私の胸の中にその入りこんだ目を抱いたまま内部空間に導かれながら，呪縛されずにすんだのは，見るでもなく見ながら，いっさいの判断停止のうちに近づいていったからだろう．

ニューヨークからコネチカットの州境に近いライというところに，マクシミリアン・ホフマン邸（1955）がある．　海に面した高級住宅地に建ち，ハロルド・プライス・ジュニア邸に劣らぬ広大な敷地の中にある．　ここでも，あまり室内の暗さというものがあまり気にならなかった．

玄関の脇に巨大な甕が置かれている．　これも呪物のうちだが，物も配置も月並みで，私には，ただの置物としか見えなかった．しかし，私がぎょっとしたのは，大きな鉄製の黒い鍵をかたどった彫刻を戸外に見た時だった．

それは，海に面したプールのそばにあったのである．　この日

も，快晴で，穏やかな海も美しかった．　海を横目に芝生を踏みながら，住宅の外を微風を受けて歩いていたのだが，建物のはずれにきた時，そこに思いがけず，プールがあった．　台座つきの黒い鍵の彫刻は，海側に近いプールのはじに据えられていたのである．

プールは，リビング・ルームの右からテラス伝いに出たところにあり，裏庭からは見えない．　黒い鍵は，リビング・ルームから一泳ぎにでた場合，プールの中央に海を背にして，デーンと身構えるかたちになる．　プールに飛びこむと，その鍵と海を見ながら泳ぐことになる．　逆には海と鍵が，泳ぐ者の姿を注視しつづけるかたちとなっている．

これは，あきらかに海を従えた黒い鍵の呪縛の目であり，しっかりと見ざるをえない位置にあり，慣れ親しんでさして気もかけなくなった時は，すっかり自らの霊光の中にも住みこまれたといえる．

私は横合いからやってきて，おやまあと思いがけなかったわけだから，黒い鍵からの流体発射の視線，ライトの呪縛の目を避けることができたわけだ．　鍵の下部には，大きな穴があり，それを覗くと，ガラス戸のはいった居間が，そっくりプールの水とともに縁取りされて見える．

タリアセン・イーストでも，処々に呪物が庭におかれていた．なにげなく置かれている場合と，守護神のごとく神社の狛犬のように置かれている場合とがある．

ここは，ライトの住み家でもあったわけだ．　他の場合とちがい，呪縛する相手がいない．　彼は，中国や日本，そして東南アジアから，美術骨董を買いあつめたらしいが，名品というよりガラクタが多い．　住宅設計にあわせてクライアントに売りつけたりもしたらしいが，その売れ残りなのかよほど気にいったものなのか，イーストの室内のあちこちに座っていた．

それらは，かなりの比率で，東洋にあって呪物として使われていたものが占める．　ガラクタなのにもかかわらず，東洋の空間では冴えないものであるにもかかわらず，ライトがアメリカの空間で，立つべき場所をあたえられる時，たちまち息を吹きかえして，〈絶妙〉な位置どりをする．

ガーッと口を開いて威嚇する狛犬が，対ではなく片方だけ，庭の石積みの内壁の上に台座ごとのせられたものがあった(→P.77上)．

石の狛犬は，悪霊払いの呪物である．　神社にあっては，神前を守護する役割をしているが，神社の鳥居をくぐったものも，守護されるのである．　どうして守護されるかといえば，それを見ながら通過した人間のイメージの中に住みこむからである．　その意味で，この狛犬も，光が生みだした幻影なのである．

もとより，ライトを守護するが，これがフェローシップの面々には，威嚇の呪縛機能も働いているように思える．　他にもタリアセンの庭の一角に，首うなだれたマリア像のごとき彫刻が置かれていた．　マリアではなく，オグヴァーナ夫人の石像にも思えたが，さだかならない(→P.76下)．

慈愛の女神なのかもしれぬが，私には，全身を目にしている呪物のごとくに見えた．　このうなだれた女神は，入口近くの芝生の上に，そばを通るもののだれもがつい見てしまうような位置どりをしている．　デザインの妙をこえた配置に見えるのである．

V．スカーリーは，《近代建築》の中で，ライトは，「人間の身体や人間の行為といったイメージを探求したことはなかった」(長尾重武訳)というが，そうではあるまい．　かわりに〈自然の永久性のイメージ〉をさぐったというのだが，奇妙な論理である．　人間こそがかえがえなしの自然であってみれば，これらをよく見取ることによって，その見取ったものをそっくり外界の〈自然の永久性〉の中に投影投写したのだろう．　肉体として人体を比喩に使うだけが，能ではなく，身体とは心体であることをライトほどよく知っていたものはない．　スカーリーは，こうもいう．

「アメリカにやって来たヨーロッパ人，特にグロピウスの周辺にいた人々は，ライトを近代人として受け容れることを拒否した．……ライトは精力的に，また必ずしも賢明でないやり方で応答したために，彼はにがい孤独にとどまった」

グロピウスは，ライトの建築に，いかがわしき呪術の匂いを嗅ぎとったにちがいない．　呪術は，人間が人間となった時からはじまっている．　呪術の残滓は，マイナーイメージであり，遺物として葬り去ろうとしたのである．

たとえば近代医学は，　もともと呪術を兼ねた医術であった．だが，その近代医学が，呪術性を払拭できたかといえば，そうはいかない．　八割がたは，本人の意識はともかく呪術師として患者に接しているのであり，患者の無意識によってそう扱われている．　今はそういう呪術師としての側面の自覚と背中合せに，進んだ近代医学が呪術的なるものを解明しようとしている．　レヴィのいう〈霊光〉なるものさえ，実証する段階にきている．

このことは，建築にもいえることだろう．　建築家は，もともと呪術師だった．　コンパスを駆使し幾何学をもって設計をこころみ，クライアントを説得しなければならぬ運命をもつ以上，近代建築家とはいえ呪術の時代をのりこえたかのようでいて，そうはならず，むしろひきづりつづけている．　ヘボはヘボなりに，建築家であるかぎり，魔法を使っている．　グロピウスとて，やはり旧来の魔法を否定した新しい呪術者であったにすぎない．　今や，その魔法も破れ，人間の霊光の支配にまで届いていたにちがいない旧来の魔法を再考しなければならぬところまできているのかもしれない．その意味では，ライトは予言者でもあったわけだ．

ライトの敵は，無視である．　いかなる魔法をもっていても，無視にかなわない．

「催眠術にかけられたような徒弟や弟子たちの，ほとんど封建制度まがいの取り巻きに囲まれて，彼はパイオニアというマントにみずからを包み，相変わらず増大していく速度で，オープン・ロードを前方へとたどったのである．

これは，すべての要素をとりこんだ〈落水荘〉を完成させたあと，タリアセン・ウエストに向うライトを叙すスカーリーの言葉だが，この新天地では，無視されることなく，呪縛の目を弟子たちに注ぐことができたのである．　私が今もって憶えているのは，大西部の青空を従えたトーテム・ポールのようなゲートにあった赤いモニュメントである．

●くさもり・しんいち

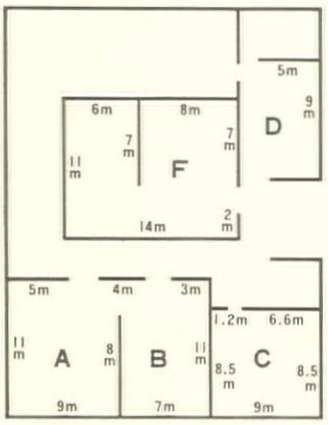
彩壺堂20周年記念

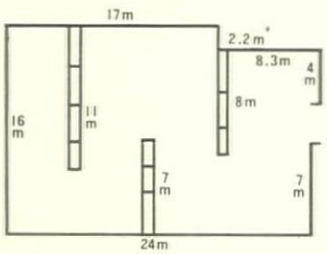
彩　壺　会

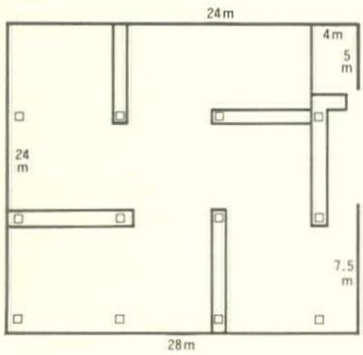
(日本画)

会 期＝1985年2月12日(火)～24日(日)
午前10時～午後6時〈無休〉
会 場＝東京セントラルアネックス

お蔭様で創業20年を迎えることが出来ました
銀座の真中で展覧会をしてみませんか







東京セントラル絵画館 8F

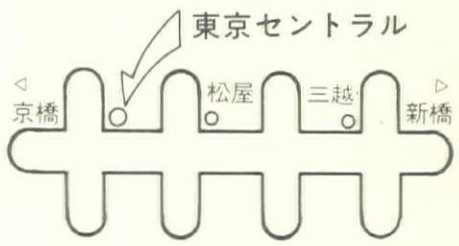
	壁面	面積	1週間使用料
A	35m	99㎡(30坪)	企画会場
B	31m	77㎡(23坪)	
C	33m	77㎡(23坪)	60万円
D	20m	45㎡(14坪)	40万円
F	62m	154㎡(47坪)	150万円

東京セントラルアネックス 7F

会場面積　376㎡(119坪)
壁面延長　130m
……壁面は展覧会に応じて移動
1週間使用料　220万円

東京セントラル美術館 5F

会場面積　672㎡(203坪)
壁面延長　180m
仮設パネル　50m
……壁面は展覧会に応じて移動
1週間使用料　330万円



東京セントラル／彩壺堂

東京都中央区銀座2－7－18　銀座貿易ビル5F・7F・8F
☎03－564－0711(代)



からだのしくみは
「骨格と筋肉」だけでは
ありません。

神経もあれば、血管もあり、あらゆるものが総合的に働いてこそ、一個の生体としての機能が発揮できるのではないでしょうか。
ビルや建造物の場合も、これと全く同じことで、鉄骨やセメント、石材、の組合せだけでは、外見上如何に立派でも、それは単なる物体の集合です。やはり神経や血管と同じく、電気、水道、ガス、空気調和などがその機能を充分発揮できてこそ、素晴しい**居住性**が生れると思います。
しかし……
それだけで終ったのでは、まだ多くの欠かんが残っております。ところがこれ等の機能を更に無駄や損失のないよう活用できたとしたら、もっと素晴しいことではありませんか。
集中管理或は**集中制御**によって……
省力、省エネルギー、省経費をはかることこそ、最も完ぺきな、からだのしくみ、つまりビル全体の機能を**フル**に発揮できるのではないでしょうか。

集中管理装置
NESCA

川崎電気株式会社

本　社　〒999-23 山形県南陽市小岩沢225番地
電話0238(49)2011大代表
営業本部　〒108 東京都港区芝浦3丁目7番4号
電話03(454)5141大代表

ユーパリーノってナンですか？ ●イタリアの新しい雑誌〈ユーパリ

《Eupalino》no.1
《Eupalino》no.2

かつて，スーザン・ステファンスは《スカイライン》誌復刊の際，"Skyline Rises Again"というエッセイの中で次のように語ったことがある．「今，建築のあらゆる次元を，大衆（パブリック）の厳しい眼に曝しだす媒体が求められている．」そこには建築を社会全体，あるいは文化の総体の中でとらえることによって，建築の新しい可能性を見い出そうとする姿勢があった．それは彼らの新しい建築の月刊誌が持つ使命のマニフェストとしてわれわれの眼に映った．〈建築の社会との関係〉をリアルタイムに伝えていこうとする意図が〈新聞〉を模したデザインの中に託されていた．

昨年，創刊された，イタリアのポスト・モダニスト，パオロ・ポルトゲージの編集による季刊雑誌《Eupalino ユーパリーノ》は建築と建築以外の文化領域との〈対話〉を通して，建築に内在する問題，矛盾を積極的にとらえ，建築を新たな次元へ導こうとする意図をもった雑誌として注目されている．

《ユーパリーノ》はフランスの詩人，ポール・ヴァレリーの著作《Eupalinos エウパリノス》に登場するギリシアの建築家　エウパリノス*にちなんで命名されたものである．　この《エウパリノス》はポルトゲージが初めて読んだ建築書であり，その後の彼の建築の理念に大きな影響を与えている．この作品はソクラテスとパイドロスの架空の対話によって構成されている建築礼賛であるが，ポルトゲージはエウパリノスの人物像よりも，この対話形式による融通性が問題の核心を徐々に明らかにしていくことに関心を示している．　通常，編集者の意志を伝えるモノローグとなっている雑誌の奥付欄を，《ユーパリーノ》ではダイアローグとしたのも偶然ではない．



ポルトゲージは創刊号の冒頭で，自らのポスト・モダンに対する考えはポスト・インダストリーの社会の考え方に深い関係があると明言している．　現在，様々な分野で新しい文化の兆しが見うけられる．　だが，それらは決して新しいイデオロギーから引き出されたものでも，社会の文化的風潮によるものでもない．　それは，「異なり，対立する事実から発生したものだ」と彼は言う．　ここに彼は，ある必然性を見出している．　表面的には多種多様な現象にも，ある強力な共通の核が存在する事を認識している．　これらの現象の中から生じた問題は，「間違った，伝統と独自性の破棄」を拒否する新しい文化によってのみ解決されるとし，時代の中に流れつつあるポスト・モダニズムのより積極的な認識の必要性を強調している．　しかし彼は，「父や祖父の財産を受け継いだら，その上に長い間座り込んで眺めているのは賢いことではない．　それを生産的な現実性に転換することが重要である．」と述べている．　すなわち彼は，モダンからポスト・モダンへの連続性を否定してはいない．　重要なことは，いかにその中から我々の助力となるものを選び出し，妨げとなるものを取り去るか，



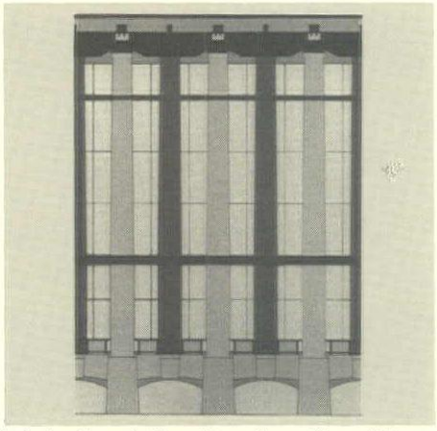
ということである。　そして，停滞している歴史のメカニズムにもう一度，活力を与え，歴史の空隙を埋めもどすことが，新しい世代の建築家の仕事であると考えている。

この雑誌は，現在の文化がもつ様々な問題との〈対話（ダイアローグ）〉を通して，建築の持つ位相の輪郭を浮きぼりにしようとしている。ポスト・モダニズムの意味，その位置付けは，その明言されている言葉の意味にも，その作品の位置にも，単純に還元できるとは言えない。　ポスト・モダニズムの持つ意味の解釈は，そこで演じているものの意志の再生産だけにとどまらず，それを近代文化の問題に再び結びつけることにもある。今日の建築の議論をより広い知的領域の中心に位置づけようとする，この雑誌の試みに，今後，注目していきたい。

■編：山下秀之＋岩下暢男

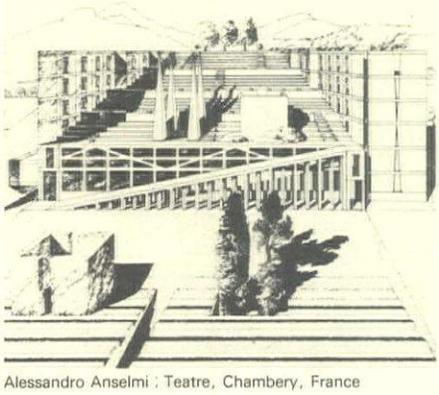
＊　エウパリノス
〈エウパリノス〉と題された，ソクラテスとパイドロスの架空の対話中に出てくる実在の建築家。　ポレアスの祭壇の近くにある，狩の女神アルテミスの神殿を建てたとされている。　彼は，詩と音楽によってすべての人間，猛獣さえも自由に操るオルペウス（オルフェ）の力を持つとされている。

「真の建築家にとって石積構造が，失なわれた楽園に通ずる道である」ことをクアローニのこのローマ・オペラハウスのプロジェクトは高らかに歌っている。　そして新しいロッジアはローマという都市のアナロジー，つまり〈アーバン・ホール〉としてローマのわずかな空隙の中に浮かんでいる。
1927年，M.ピアチェンティーニの手によって改修されたTeatro Reale dèll Operaのオーディトリウムのファサードを刷新し，劇場広場に面して新しいロッジアを造るプロジェクトの中で，クアローニはモダンを超えた全く別の建築コードをつくり出す事を意図した。　「これはポスト・モダンではなくポスト・エイシェントである」という彼の言葉が示すように，石積み・柱頭部のメタルロッドなどが〈反現代的〉立場から決定されてはいるが，決してアンチ・モダンを意図したわけではない。　意識的に新しいことから〈違犯〉すること，古代と〈差〉をつくること，詩的見地を〈排除〉すること，そして芸術を〈回復〉すること，これらはすべて3000年の歴史が堆積するローマという都市の中で〈忘れさられた楽園〉を浮かび上がらせる。



Ludovico Quaroni ; Rome Opera House, Rome, Italy

「劇場は，古今，物がいっぱいつめ込まれた都市空間におけるネガティヴなボイドである。」しかしアンセルミは劇場の建物外部に古代ギリシアの円形野外劇場のカヴェア（観覧席）をデザインすることによって，周囲のすばらしい風景をも観賞し得る劇場の新しい形式を提案している。
彼は劇場の屋上部をカヴェアに模し，周囲のアルプスのパノラマを〈舞台背景画（scene-painting）〉に転じた。　そこで人は風景と対話をし，劇場は風景の中にはめ込まれた丘として映る。カヴェア両側に立ち上がった建物のファサードにはグリッドに従がって窓が割りつけられ，一つのアーバン・スケールを創り出す。　丘状のカヴェアは，自然の遊歩道にも，都市の建築的遊歩道にも変ずるのである。
ここには，建築の計画がもつべき未来の投影が，古代の遺跡に内在する〈発生期の物の持つ未来へ向かう方向性〉から生まれるとするアンセルミの姿勢がある。



Alessandro Anselmi ; Teatre, Chambery, France

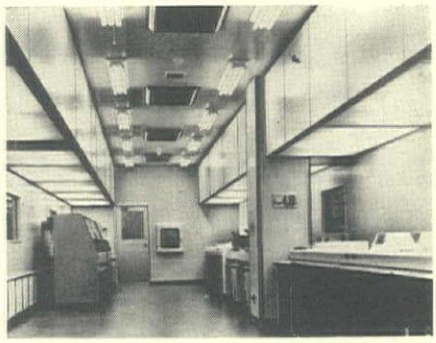
ルカ・スカチェッティは陰影やパースペクティブの〈フェイク（ごまかし）〉を用いて不思議な詩的ポテンシャルを持った家具や小空間をつくりだす。
「視覚的な錯覚が人の視線をひきつける。　結果として，それが私の空間をより深く理解することになるからだ。」
「私が世界で一番愛するのは幾何学だ」
「私は配管工の心を持った建築家だ」
「私はペンシル・アーキテクトが嫌いだ。　建てもしないで，座ったまま考え，威丈高な理論をかかげ自らを偽わっている人間だ」
彼の詩的空間を支えているのは，実務的正確さを持って幾何学的形態を扱う技術であるらしい。



Luca Scacchetti ; Small Town, Milano, Italy

FUJI ELECTRIC

トータル技術で
ミクロの世界に挑む



生産環境、研究環境など多方面にわたり、空気のクリーン化は重要な役割を果たしています。
富士電機は、クリーンルームシステムの製造をはじめ、基本計画から設計・施工・監理までの総合エンジニアリングを行なっています。豊富な実績をベースにした数々のノウハウを生かし、さまざまな用途に応じた最適なシステムで、幅広いニーズに応えています。

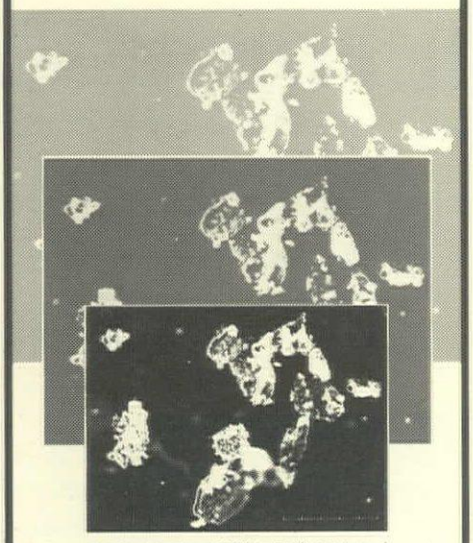
富士クリーンルームシステム

●サーマルキューブ●サーマルベンチ●クリーンベンチ●クリーンブース●クリーンユニット●バイオハザードセフティキャビネット●パスボックス●エアシャワ●メディクリーンユニットなど

富士電機

富士電機株式会社
〒100 東京都千代田区有楽町1-12-1(新有楽町ビル)
TEL (03) 211-7111

ミクロの世界へ。



●チリを400倍で撮影(1目盛10ミクロン)

「たったひとつの塵が命取りになることも…」
産業の高度化に伴い、クリーンルームへの期待が高まっています。新日空は独自の技術と豊富なノウハウを駆使し、ミクロの世界へチャレンジしています。エレクトロニクス、医療、薬品、生化学の最前線のニーズに新日空は高性能のクリーンルームでお応えします。

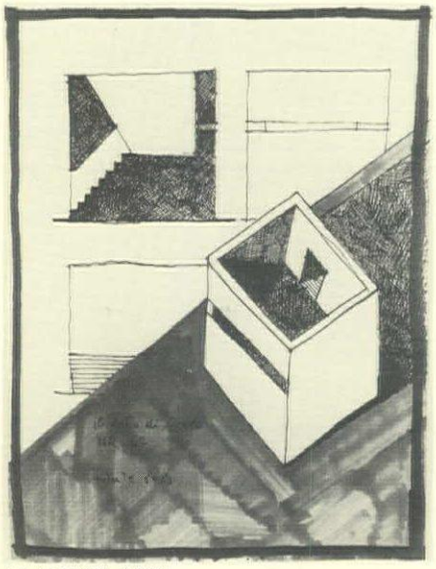
最先端技術に挑戦する
新日本空調
〒103 東京都中央区日本橋本石町4−2(三井第2別館)
☎(03)279-5671(代表)

SD選書
[アルド・ロッシ自伝]
アルド・ロッシ＝著
三宅理一＝訳
四六判 232頁
鹿島出版会 1500円

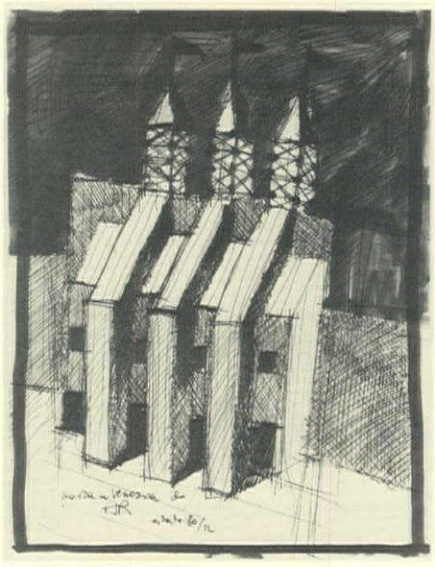
原著は，Aldo Rossi, *A Scientific Autobiography*, MIT Press, Cambridge, Mass. & London 1981. イタリア人建築家であるアルド・ロッシが英文の著書を出しているのは，もともと本書がニューヨークの建築都市研究所(IAUS)で企画され，たまたまアメリカで客員教授として教えていたロッシが直接，書きおろすことになったからである．

本書の主体は，原著の標題となった〈学としての自伝〉と題する連綿と続く長い文章である． この文章は，自伝と題してはいるものの，いわゆる伝記らしい体裁を備えてはいない． 少年期，青年期といった時期の区分もはっきりしなければ，その間に起こったさまざまな出来事も明らかではない． この自伝は，むしろロッシの作品(プロジェクト)の書であり，自己と観念とプロジェクトを繋ぐ不透明な糸のようなもの，すなわちドローイングと説明文の間をさまざまに揺れ動く彼の意識をそのまま記述していったものである． そこには，著者が接してきた，いろいろの場所や風景，さまざまな建造物，もろもろの書物などから感得したところが，どのように彼の作品に影響し，いやむしろどのように彼の作品を生んできたかが，それからそれへと，こまごまと述べられている．

この長い文章の後に，〈ドローイング1980年夏〉と題して，前の文の中に出てくる数々のプロジェクトのうち12点のドローイングが掲げられ，最後にヴィンセント・スカーリーによる〈後記 形態におけるイデオロギー〉の一文が添えられている． ロッシの文章は，多分に詩的，哲学的で，決してわかりやすくはないが，それだけに含蓄に富んでいる．



クネオの記念碑 1962年



ヴェネツィアの正門 1980年

新刊紹介 BOOK INFORMATION

[色を心で視る]
千々岩英彰＝著
B6版　248頁
福村出版　1800円

今日我々の周りは，衣類をはじめ工業製品そして建築に至るまで実に多様なカラーリングが施されている．　そんな状況の中でモノトーンの世界（白黒映画，白黒写真，水墨画，etc.）に触れると非常に新鮮な気持ちが蘇るのは，こちらの思いのままに観ることが許される点にあるのではないかと著者は語っている．　人々がポジティヴに色を考える時，色は意味を持ち，その個人を知る，時代を知る一つの手懸りになる．
著者は本書でさまざまな小説や絵画そして各種のアンケートを分析した成果をいくつか紹介しており，我々の知らなかったアプローチの仕方で，人間の，また時代の特質を捕えていることは，大変興味深いものと言えよう．

[白井晟一研究V]
塩屋宋六＝編
250×195㍉　389頁
南洋堂出版　8000円

白井晟一氏が急逝されてから1年．　別冊《石水館——建築を謳う》を含め《白井晟一研究》と題されたシリーズは，本号をもってここに完結した．
本誌は〈個人研究誌〉としては異例ながら現役の建築家と伴に歩み，奇しくもその死を乗り越えて本号へと辿り着いたのである．戦後日本の建築界でこれ程多くが語られた建築家はいないにも拘らず，氏が自らの存在全体で提出することになった様々の作品や問題についての分析や議論は，まだ漸く緒についたばかりである．　これから始まる白井晟一研究の際に理解と解釈の糸口を本誌は与えてくれるのではないだろうか．

[自由様式への道—建築家安井武雄伝]
山口廣＝著
A4版　190頁
南洋堂出版　7500円

日本に近代建築の礎石を築こうとした建築家達の努力には並々ならぬものがあったであろう．　ここに数少ない貴重な資料をもとに紹介される関西の建築家・安井武雄（1884～1955）も然りである．　山口廣氏は，東洋的とも或いは様式趣味と近代性を結合させたとも評される安井の作風の内に，〈自由様式〉と安井自らが命名するような伝統や様式に決して盲従しない個性に基づく造形創造という思想性を見い出す．　当時タブーを打破って和風住宅に取り組んだという卒業設計の図案を始め，大阪倶楽部（大13），大阪ガスビル（昭8），満鉄東京支社（昭11）等作品の解説をおりこみながら，安井の生涯を跡づけようとした伝記．

[設計論——デザインの生成と評価]
川口宗敏＝著
B6判　244頁
2000円

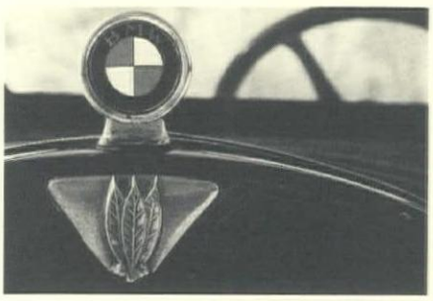
多様化した時代と言われ，またそれに伴って増々設計活動が混迷しているという．
そもそも〈設計〉という行為そのものが甚だ不分明だからであろうか．　著者は，この曖昧模糊とした〈設計〉そのものに改めて分析のメスを入れようとした．　著者は，設計のプロセスを元来非論理的・不規則的な部分を含みもつ過程として把えている．その点，菊竹清訓氏の〈か・かた・かたち〉論などの従来の設計方法論に対して批判的であり，構造主義という視角から新しい独自の設計論を切り拓こうとしている．　このような努力は，混迷の時代を乗り越えるためには是非とも必要なことではないか．
なお本書は自費出版である．

[日本の現代建築——1958—1983]
鈴木博之＝編
290×290㍉　224頁
講談社　9800円

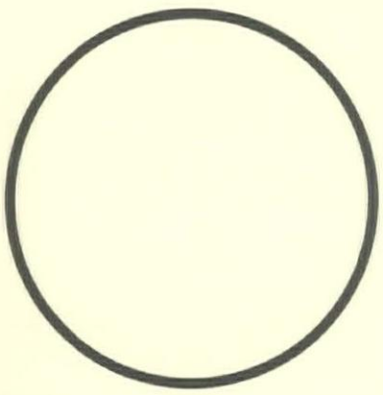
第2次世界大戦直後の混乱期から，平和国家，文化国家建設をテーマに再出発し現在に至る日本建築界の潮流を，59人の代表的建築家とその作品92点を通して解説している．　全体構成は，1950年代を〈黄金の世代〉，60年代を〈離陸の世代〉，70年代を〈表層の世代〉，そして〈80年代の表現〉という，建築家別でなく，時を追うかたちとなっている．　なお，レイナー・バンハムの論文も収録し，戦後の日本建築の一断面を垣間見せている．

[BMW——栄光の軌跡]
パウル・シムサ＝著
木村好宏＋米山義男＝監訳
A4版　202頁
ダイヤモンド社　7000円

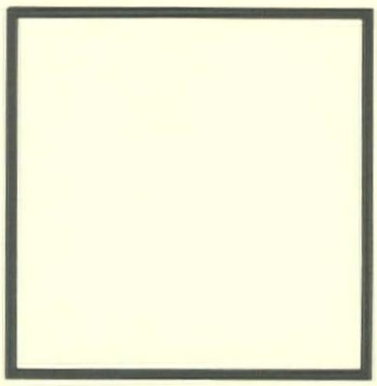
モーター・ファンならずとも知れ渡る，白と青のエンブレム．　愛車家を魅きつけてやまない〈エンブレム〉はいかにして誕生するのか，それがこの本のテーマである．
何十年間も幾多のブランド，モデルと関わってきた著者が，熱狂し，深い理解と愛と，また鋭い批評も加えてBMWの世界を紹介している．
なお，本書のデザインは書体を始めとし，かなり原著に近いものとなっているのはうれしいことである．



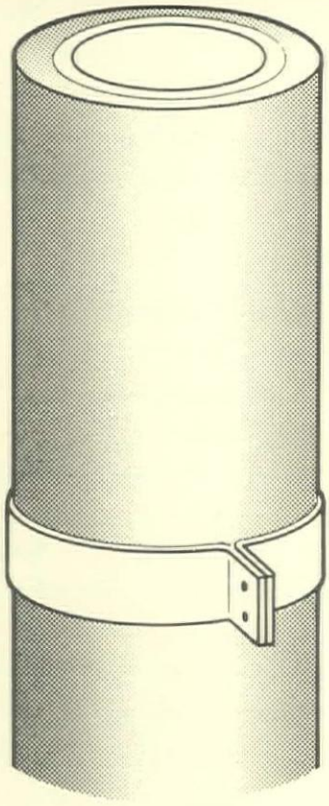
ニチアスの建築用煙突ライニング材は、



と



ニューカポスタック

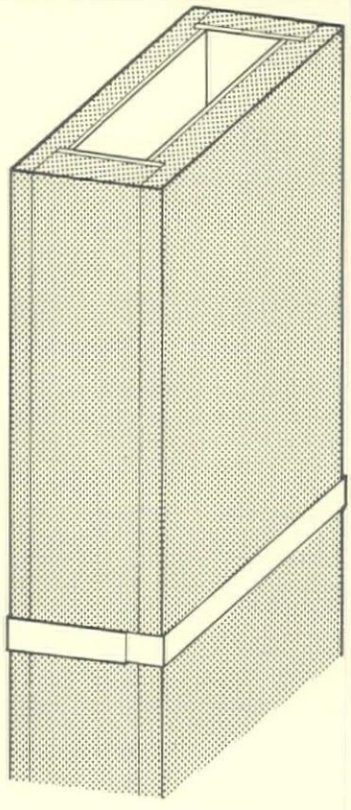


ニチアスは、煙突ライニング材「カポスタック」の発売(昭和39年)以来、長年の経験を生かし各種の建築用煙突ライニング材を開発し時代の要求に応えてまいりました。ビル・集合住宅をはじめ、学校関係のボイラ・自家発電機の煙道の煙突ライニング材として幅広く利用されています。

●**芯材不要**　ニューカポスタックの内側に特殊ライナー層を設け、コンクリート打込み時に芯材の不要な製品です。コンクリート煙突あるいは鋼製煙突のライニング材として使用されます。●**地震対策**　ニューカポスタック・は、カポ部のすぐれたコンクリート付着性・柔軟性・構造などから地震対策としてレンガ煙突の改修工事に使用されます。

●**ユニット煙突**　コンバインボードは外側をアングルで補強し、ユニット煙突として使用されます。●**角型用打込ユニット**　コンバインボードは角型筒状の打込ユニットとして、内部補強し、コンクリートを打込みます。

コンバインボード



(単位: mm)

		丸　型　用	角　型　用
商　品　名		ニューカポスタック	コンバインボード
構　　造		複合円筒	複合板
サ　イ　ズ		212φ～914φ・1014φ～1300φ	1220×2440
厚　　さ		※50・75・100　※65・75・100	50・70※
施工方法	打　　込	○	○
	鋼製煙突	○	－
	組立ユニット	－	○
備　　考		特殊ライナー＋カポスタック	高シリカ層(10t)＋ケイカル層

※印は標準品

ニチアスの建築用煙突ライニング材

ニチアス

本社／東京都港区芝大門1-1-26 〒105

☎03(433)7241 大代表

東京支社 ☎ 03(438)9731(代)
名古屋支社 ☎052(931)9217(代)
大阪支社 ☎ 06(252)1371(代)
九州支社 ☎092(531)3031(代)

資料請求券 煙突ライニング材 SD

カタログ請求は本社広報課まで

［「秋葉原」感覚で住宅を考える］
石山修武＝著
A 5判　208頁
晶文社　1800円

評者＝
中原 洋

この本を教科書にして家一軒建ててみましょう

これは1冊の痛快大活劇物語だ。　少なくとも建築界という石山修武さんと同一テリトリー内に生きる建築家のみなさんにはそう読めてしまうに違いない。〈近代建築〉家なら，石山さんのこのあたりのロジックの筋道，分っていて黙っていたんでしょう，うすうす知っていながら……いや失礼……知りつくしていていい出しっぺの名誉を石山さんに譲ってしまったのでしょう。　だからでしょうね，石山さんは「建築家諸君，君らは日本の住宅状況に対して何もやっていないじゃないか」などという非難がましさの発言は一つもしていない。　これは実に気持ちのいい，痛快な読物，我慢してたこと，まずはいってもらったと，ぼくら素人は感激してしまうのです。　手を叩いて喜んでしまうのです。　第一言葉がやさしい。　どこにも仲間内の単語が並んでいない。　ぼくなんか建築家の友人がたまたま多くて，みんなが話題に取り残されるぼくを見て，業界内単語の意味を状況ごとに解説してくれるからなんとかおつきあいしているけれど，いつも悩むあの部外者的，おいてきぼりのフィーリングも，この本では味あわなくてすむ。　とはいえ，この本を読んでいて感じるのは，日本中の建築家が付和雷同してくれていれば，日本の住宅事情，もう少し変わっていたのにと恨みがましく思ってしまうんですよね。

もう一度いえば，石山さんのこの本のロジック，実にオーソドックスだ。　それなのに例えば「この工業化社会の中で，住宅周辺の素材，建材のみが消費者へのバイパスを持っていない，ならばその方法論をつくり出そうではないか」というオーソドックスなロジックが，ひどく新鮮に見えてしまうのは何故なのだろう。　枚数少ないからセルフ・ビルドとローテックのかかわり，そこではじめて生きてくる設計図面の話まで言及はできないけれど，素人にとって正解とも思えるポイントを正確に指摘していながら，この石山さんという人がゲリラに見えてくるのは何故なのだろう。

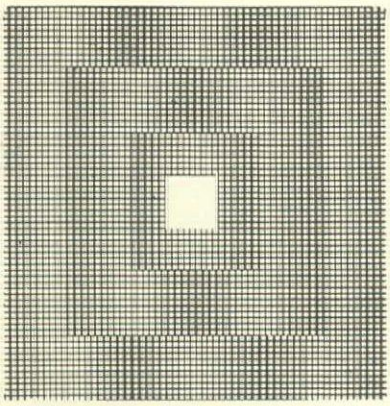
かつてル・コルビュジエなんていう人がいて，バウハウスの運動などがあってと，あちこちの本の拾い読みで学んだけれど，このあたりの人たちの試みが一種ソシャリズムへの共感を持ちながらつづられていたのに，いま，彼らについて建築家たちが語る言葉を聞いていると，誰もその辺りのことは承知の上で語るべきことでもないのか，常にデザインという形の上でのこととしてしか語られていないのはどうしてなのか，それが不思議でならなかったことを，いまこの本はぼくに思いおこさせる。

ときどき送られてくるダムダン空間工作所の建築部材供給ニュースのハガキ，およそミニコミ風でデザインも何もされていないハガキを断片的に眺めていて見えてこなかったものが，こうして本になって一連のものとして，目の前に並べられてぼくはいまようやく石山さんの思想と意志とエネルギーを読んでいるような気がする。　先日，ぼくの都合で幻庵へ石山さんを引っぱり出したとき，幻庵のほとりに建設予定の作業場用建材は「もうすでにアメリカのランバー屋から送り出しているから……」と彼が語っているのを聞いた。　「まだ頑張ってるんだな」とぼくは知った。　だけれど，この動きに何人の建築家が協力し，細くとも小さくてもいい，ある流れにすべく動いているのか……。　ゲリラとして扇動者としての石山さんに終って欲しくないんだ。

石山さんが，この本を単なるアジテーションとして出しているはずはない。　これは実践のための本のはずだ。　だけど恐いのは，この本〈思想の書〉〈哲学の本〉として読まれてしまうのではないかということ。　時間がたてばたつほど，そうなりそうだ。

●なかはら・ひろし／フリー・ライター

産業と文化生活に
クリアな空気を
供給する——
これが菱和の仕事です



超高層・地域冷暖房・原子力・クリンルームに技術の可能性を追求し、新しい未来をきづくため研究をつづけています

菱和調温工業株式會社
東京都港区南青山2丁目3番6号
〒107 Phone：東京(03)402－7231

お知らせ INFORMATION

日本火災海上保険軽井沢厚生寮 公開建築設計競技

日本火災海上保険株式会社は，A.レーモンドが昭和初期，軽井沢に設計した個人用の山荘を永らく厚生施設として利用していたが，建築後半世紀を経過し，維持・管理が限界に達しているため，この程新たに建て替えを計画，民間企業としては例のない公開設計競技を実施することになった．

計画規模：所在地—長野県北佐久郡軽井沢町南ヶ丘1052，敷地面積—2,642.3㎡，構造・階数—鉄筋コンクリート造・2階建以下，規模—528㎡，収容能力—28名前後，

日程：登録受付開始1月28日登録締切2月26日，応募設計図書締切4月中旬，審査結果発表4月末，応募要項等詳細は登録受付日頃発表予定．

応募資格：1級建築士

審査員：清家清，近江栄，増沢洵，長島孝一，品川正治

賞：総額500万円　入賞—3点　各100万円，佳作—10点　各20万円（入賞作の中から実施設計案選定）

問い合わせ先：(社)日本建築家協会関東支部
〒150 東京都渋谷区神宮前2—3—16 建築家会館
Tel.：03-408-7125　佐藤事務局長

国際デザイン・シンポジウム'85

秋に開催される第2回国際デザインフェスティバルのプレ・イベントとして，ジョージ・ネルソン，ディッター・ラムスなど世界的に著名なデザイナーを講師に迎えて，講演とパネル・ディスカッション等ユニークなデザイン・シンポジウムが開催される．

プログラム：
セッション1〈デザインの未来〉J.ネルソン
セッション2〈デザインへの期待〉松下正治（子）
セッション3〈ポストモダニズムを考える〉D.ラムス
セッション4〈交のひろがり〉パネル討論
石井幹子，出江寛，泉真也，菊池武夫
セッション5　トーク&ドリンク

日時：3月1日(金)　10：00～19：00
会場：神戸国際会議場（神戸市ポートアイランド）
参加費：18000円（協会賛助会員16000円）
募集人員：250名（定員になり次第締切）
主催：(財)国際デザイン交流協会
申込・問い合わせ先：(財)国際デザイン交流協会
国際デザイン・シンポジウム'85事務局（岡山，丸本）
〒541　大阪市東区船場中央2—2　船場センタービル4号館　Tel.：06-271-5211

林雅子氏 1985年度AIA名誉会員に

AIA（アメリカ建築家協会）は，1985年度名誉会員（Hon. FAIA）として，林雅子氏，リカルド・ボッフィル氏ら11名の外国人建築家を推挙，6月9日から12日にかけてサンフランシスコで開催される1985年度AIA大会で授与する．

梵寿綱と仲間たち展

一昨年秋，東京・早稲田に建てた前野美留の公開で話題を呼んだ梵壽綱と仲間たちが，今回，東大和市の向台老人ホームを建設，人間の老と死をテーマにした建築および工人たちの様々な技芸を紹介する．

テーマ：Art Complex, Life Tide　生命潮流

●第1会場
向台老人ホームのドローイング模型，彫刻による扉，窓，鍛造の手摺，ステンドグラス，モザイク，石材造形，照明器具など意匠の全貌をスタジオで10会期（各5～7日間）に分けて展示．

会期：2月9日(土)～5月6日(月)10：00～17：00
会場：梵寿綱スタジオ，阿童摩那ワークショップ
東京都新宿区早稲田鶴巻町517—1　ドラード早稲田

●第2会場
(社)向台老人ホームの見学．
日時：4月27日(土)～4月29日(月)11：00～16：00
場所：東京都東大和市芋窪3丁目1638
期間は工事の都合で変更の場合あり．
問い合わせ先：梵壽綱事務所　Tel.：03-204-3618

ARCHITECTURE モデル・リファレンス展

出品作家：北川原温，高松伸，彦坂裕，八束はじめ
会期：1月12日(土)～2月9日(土)11：00～19：00
会場：岡崎球子画廊　Tel.：03-470-2298
東京都渋谷区神宮前1—12—1—202

長沢秀之展

キャンバスに油彩で描かれたモダンアート7点展示．
会期：2月1日(金)～3月2日(土)
11：00～18：00（水曜～20：00）　日・祭日休展
会場：ANDO GALLERY　Tel.：03-479-6285
東京都港区北青山2—12—39　サンルックビル3F

美しさを堅持する。
信頼を保持する。



出雲造機本社工場(島根県安来市)

鉄の強さにアルミニウムの耐食性をプラスした10年保証の耐久性鋼板

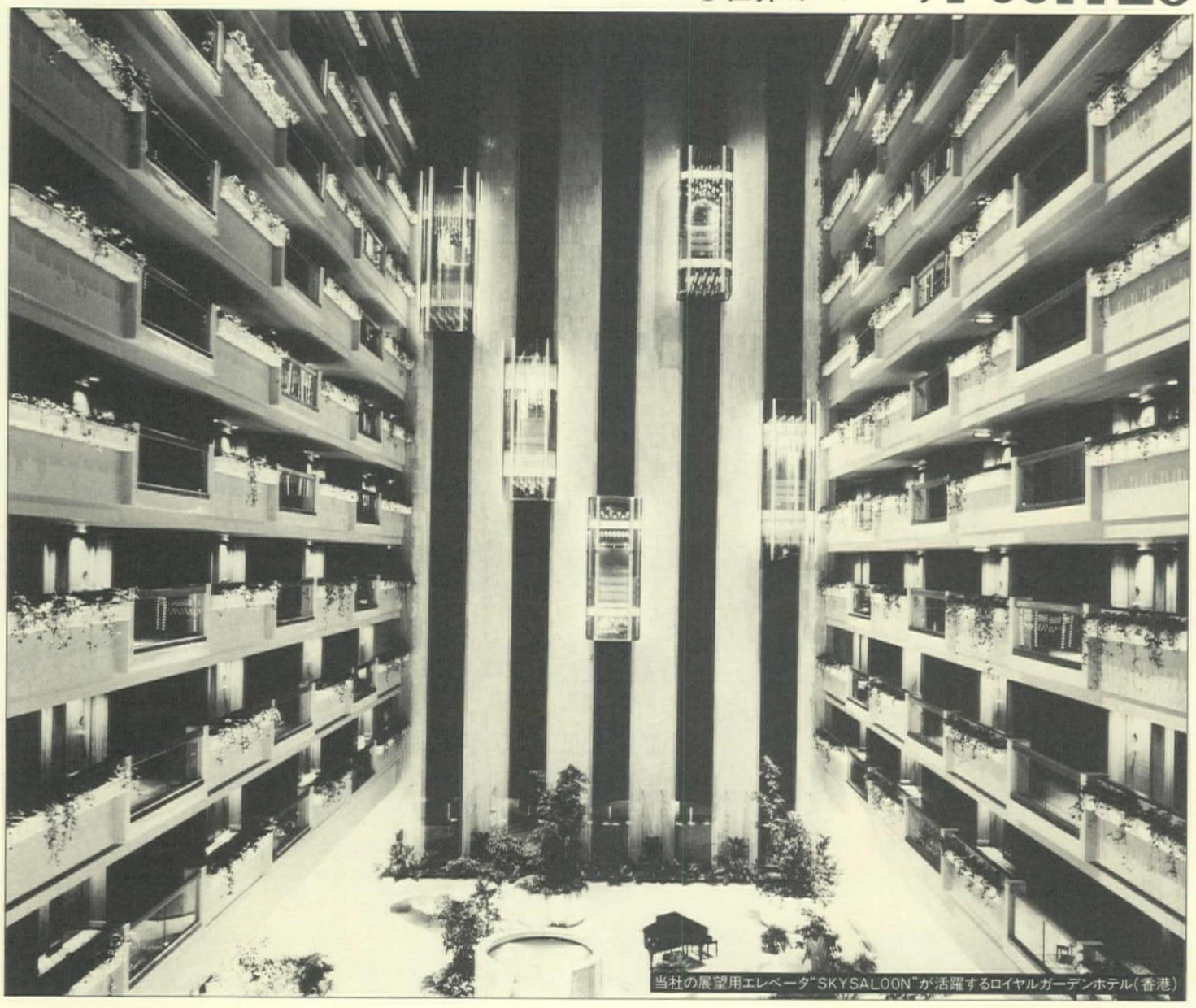
耐候用アルスター鋼板

海岸地帯や工業地帯などの厳しい環境のもとでは、屋根材や壁材が建物の寿命を大きく左右します。日新製鋼の「耐候用アルスター鋼板」は、鉄の強さにアルミニウムの長所をプラス。あらゆる環境条件のもとで、長期間にわたって耐久性と美しい外観を保つ新素材です。とくに、亜鉛鉄板などに比べて、数段高い耐食性、耐熱性を発揮。さらに熱反射性にもすぐれ、断熱性能を要求される用途にも適しています。工場や倉庫の屋根・壁材に、保温外装材に、このすぐれた特性を幅広くご活用ください。

日新製鋼

■お問合せは——●本社〒100東京都千代田区丸の内3丁目4番1号(新国際ビル)☎03(216)5511●大阪支社〒541大阪市東区大川町1番地(日土地淀屋橋ビル)☎06(202)1331●名古屋支社〒450名古屋市中村区名駅3丁目25番9号(堀内ビル)☎052(582)6061●札幌営業所☎011(241)7524●仙台営業所☎0222(22)5835●新潟営業所☎0252(43)3491●富山営業所☎0764(33)8011●岡山営業所☎0862(31)4355●広島営業所☎082(248)4611●高松営業所☎0878(51)9756●福岡営業所☎092(781)1251

●世界のエレベータ **FUJITEC**



当社の展望用エレベータ"SKYSALOON"が活躍するロイヤルガーデンホテル(香港)

エレベータは人の流れを読む。

●ビル交通需要の変化を予測して、エレベータが動く。しかも、その動きはきわめて効率的。FLEX-11はまさに先進の群管理システムと呼ぶにふさわしい装置です。中枢部には学習機能をそなえた高性能マイクロコンピュータを搭載。時々刻々変化する交通需要を逐次、分析・整理します。結果、常に最新の交通データが確保されます。乗場呼びが発生すれば、その交通データからビル内の人の動きを予測、最適なエレベータを割当てます。この予測割当てには高度なゲーム理論"ベイズ戦略"を応用。その精度の高さは驚嘆に値します。しかも待ち時間の短縮だけでなく、消費電力の節減、予報はずれの防止などからも総合評価し、割当てます。FLEX-11はサービス性でも、経済性でも一歩進んだ群管理システムです。

エレベータの動き、あざやか。FLEX-11

- ■エレベータは乗場呼びに素早く応答します。長待ち発生率は大幅に減少、平均待ち時間は約20%(当社比)短縮。
- ■高精度な即時案内。
- ■省エネ運転。乗場呼びには停止回数の少ない、走行距離の短いエレベータを割当て、消費電力を節減します。
- ■テナントの入れ替わりなどによる大幅な交通需要の変動にも自動的に対応できます。プログラムを変更する必要はありません。

●群管理システム
FLEX-11

フジテック株式会社
●本社　大阪府茨木市庄1-28-10 ☎0726-22-8151

●東京 03-443-5231　●札幌 011-742-2241　●仙台 0222-22-0271　●横浜 045-201-0869　●名古屋 052-261-6851
●大阪 06-441-8521　●金沢 0762-61-5108　●京都 075-231-7144　●神戸 078-391-4795　●広　島 082-231-6760
●高松 0878-31-0015　●福岡 092-472-1591　●鹿児島 0992-26-9555

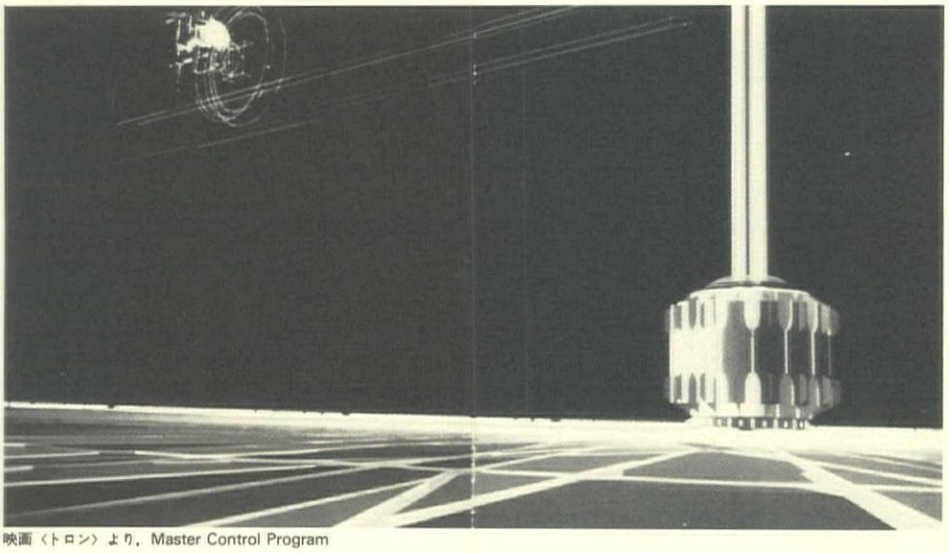
海外建築情報
8502

植野 紐＋小菅克己＋田名網雅人＋田辺正義＋
宮崎長志＋森 徹＋若松久雄

ブレーク・スルー SFスタイル

日米共同研究で進められている〈ブレーク・スルー・テクノロジー90〉プロジェクトがある。 それによると今後の産業社会を支える代表的技術は，①エキゾチック・マテリアル（新奇材料），②エネルギー，③エレクトロニクスと④ライフ・サイエンス，だという．
事実，その中でも特に注目すべきは，新素材革命と言われるほど相次ぐ，新素材の発見である。 スペースラブ（有人宇宙実験室）計画も，この新素材の革命的発展を暗示させる側面を持ち，それに対する期待は非常に大きなものであった。 しかし建築はと言えば，未だにその後追い作業の姿勢を変えようとしていない。 副産物としての技術，材料，イメージまでもが既に建築の周辺を急に取り巻き始めている．
たとえば，建築の未来イメージを語る時に常にＳＦ的イラストが想い起こされるように，後追い性の弱さと裏面性とがその根底にあった。 1920～1930年以来アメリカを中心に流行したＳＦ雑誌《サイエンス・ファンタジー》《サイエンス・フィクション》《アメイジング》などは，その象徴的意味あいを今日に濃く残している。 大衆が無意識に持つ密やかな野望，神話的世界等，その泥くささにも拘らず，超科学的に未来を語ってきたのである．
ＳＦは非日常的であり夢想的であり，また不安な終末感を与えるものである。 新しい現実の素材革命や新技術を横目で見ながら，何かしら終末的裏面性を内在させている。 予感とイメージの非日常性とから脱却できない状態である。 しかしそのＳＦの現実化が最近，大進行している。 すなわち，イメージの裏面性が削除され，未来予測から得られるデータを基礎にして，未来像を描きはじめたのである。 最近の未来予測による2051年ごろまでに起こりうる可能性の数々は，大変リアルなものである．
さらにＳＦの表面化に大きな拍車をかけるものに映画がある。 ただ数枚のイラストが語られる時代ではない。 映画の膨張するコスモロジーは次々と新しい建築の未来像までをも創造しつつある。 精緻にして強烈なる世界観。 これが建築のイメージの根底に働きかける意味は測り知れない。 ＳＦが創り出してきたイメージの源泉は常に新しいスタイルを創り出し，そして今また，新しいＳＦスタイルを生み出そうとしている。 建築が創り出す狭隘なイメージを遙かに超え，何故，今も建築がそんなに遅いのかと語りかけてくるようだ．
ここでは，表面化したＳＦの系譜に通ずる五つの作品を紹介する。 1)コスモロジーとしての宇宙ステーション。 建築の領域が拡大した新しい分野である。 2)球体の本来持つ夢とユートピア的側面と未来都市的発想の根源イメージ。 パリ，ラ・ヴィレットの中央に球体は着陸したばかりだ。 3)生命の装置化としての住居。 または巣の一単位として，自足可能な最低限システムとしての住宅．
4)UFO現象への好奇心と重力への反抗。 または飛ぶ機械としてのカプセルシステム．
5)宇宙における生存のための最低限装置としての宇宙服とロボットととの不可分な関係．
サイバネティック＝擬人機械はすでに古くなった。 そして最近ロボットはどうなって来たか．
建築に係わる将来，常にＳＦスタイルがあり，今，新たにＳＦスタイルが創られている．
表面化したＳＦスタイルを鍵に建築のブレーク・スルー（突破口）は見つかるだろうか．あるいは建築におけるブレーク・スルー・プロジェクト90はどのような解答を導き出すだろうか？ （若松久雄）

ar:The Architectural Review
d:domus
DQ:Design Quarterly
JID:Japan Interior Design
tA:techniques & ARCHITECTURE



映画〈トロン〉より，Master Control Program

［NASA宇宙ステーション］

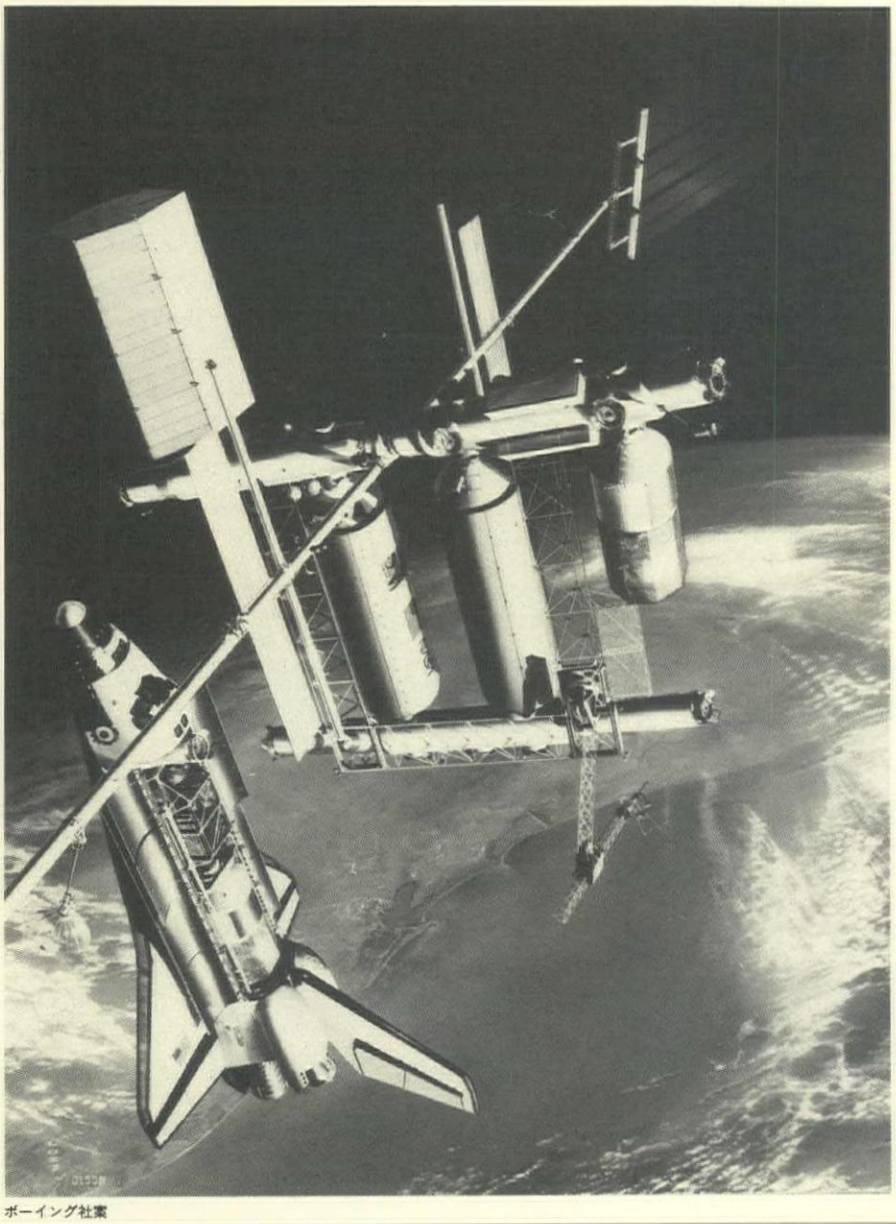
2010年のスペース・デザイン

NASA Space Station
〈ar 8407〉

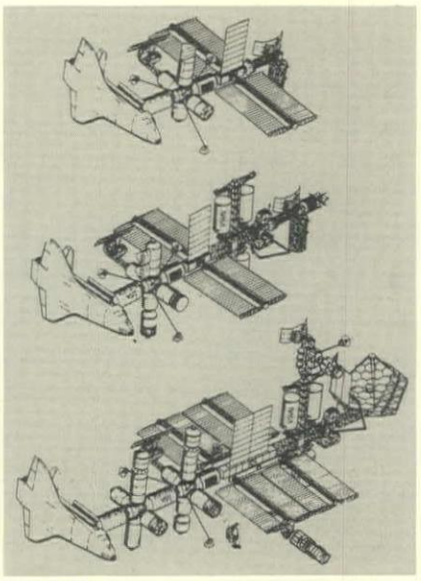
《2010年宇宙の旅》の序で，A．C．クラークが，ここでも〈自然が芸術を模倣した〉として，現実となっていく，あの1960年代末に数十人のデザイナーの英知を集めて映像化された《2001年》のイメージについて語っている．その一つは，〈ディスカバリー号〉の円型の内壁でのジョギングが，スカイラブの円筒の室内で実演されたことであった．デザイナーが描いたものが未来の夢ではなくて遠からぬ事実になってきた．現在，宇宙ステーションの設計競技が進んでいる．NASAが8社の航空宇宙会社にステーションの計画を要請したのは1982年のことだった．1985年には2案に絞られ，1986年に決定の予定である．

現時点で公開されている，ボーイング，ダグラス，ロッキード各社の案を紹介する．ボーイング社案の野菜を自給できる〈Space Greenhouse〉がユニークなものの，外観的にどれも余り差異がないのは，各社が与条件に従って設計しているためだろうが，それはとりも直さず，宇宙における設計の共通原則であると解釈することもできる．条件は7項目あるが，そのうち，空間のデザインに関わるものは3項目である．1）構造力学的には無重力であること．2）総てのパーツはスペース・シャトルによって宇宙空間まで運ばれるので，長さ18m，直径4.5m以内であること．3）乗組員の肉体的，心理的要素を考慮すること．

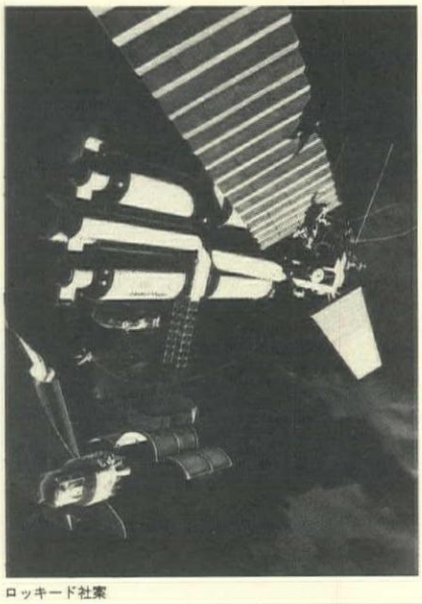
1と3から，興味深い〈Space in Space〉とでも言うべき宇宙の空間像が浮かび上がる．冒頭に引用した，床一壁一天井と連続してジョギング・コースのある3次元空間がそれだ．車の中に閉じ込められたまま数週間を過ごすことは考えただけでも恐ろしいが，宇宙飛行における肉体的トラブルに比べ心理的なそれが少ないのは，無重力状態によって生じる3次元空間の〈広さ〉のせいだという．各プロジェクト・チームでは，エンジニア，プロダクト・デザイナーに加え，建築家が重要な役割を任っているという．この先取りされた未来は，地上の建築にどのような返信を送ってくるのだろうか．（T. M.）



ボーイング社案



ダグラス社案



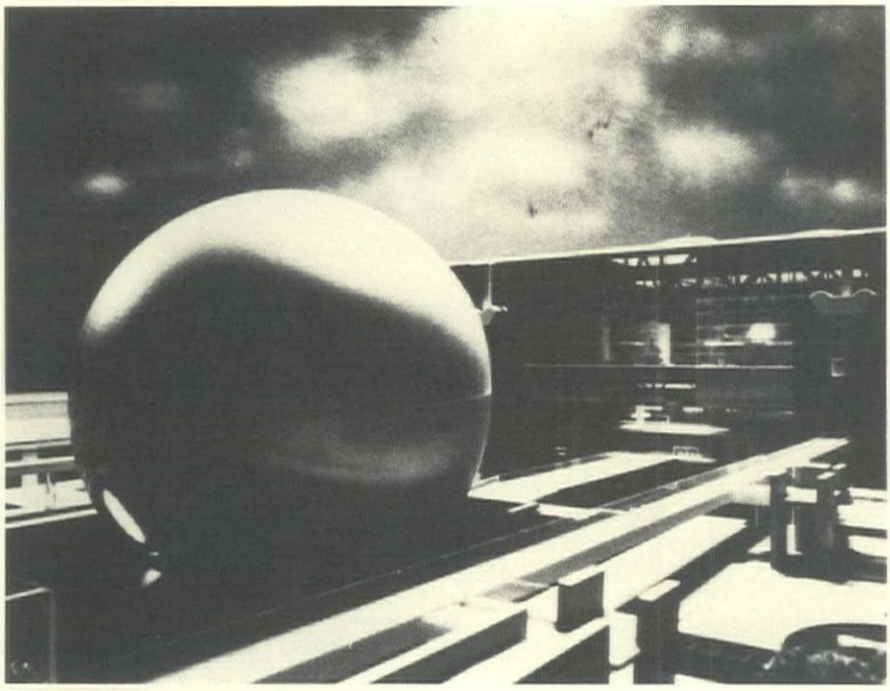
ロッキード社案

［シネマ・ヌーヴォー］

球体の詩学

Salle Hémisphérique
Musée National des Sciences, des Techiniques et des Industries
Paris, France
architects:A. Fainsilber, S. Mersier
〈tA 8404/5〉

パリ，ラ・ヴィレットの中央に球形の建造物が姿を現わしつつある．　直径36mのこの球体の内部には，半径13mの半球形のスクリーンをもつ映写室が収められている．　これは，背後にある大ホールとともに，科学技術博物館の施設として1985年3月完成をめざして建設中であり，1983年のラ・ヴィレット公園のコンペにおいては，これらは決定済として与条件に入れられていたものである．球体はともすれば未来的イメージをともなうが，その性質を知るためには過去に遡行しなければならない．　球体はまず，18世紀のフランスに現われる．　当時アカデミーの要職にあった，エチエンヌ・ルイ・ブレーは1780年ごろから幻想的なドローイングを創作しはじめる．　一連のプロジェクトは幾何学的純正さを増大させていき，やがて完全な球体に至る．　宇宙的秩序の具現者，ニュートンに奉げられたこのモニュメントにより，ブレーが創りだしたものは，「絶対的な空白，自身のみに回帰する純粋な記号」であった．　ブレーは超越性という古き象徴体系を人間自身が聖化された体系に移しかえようとして，恐るべき言語を生みだしてしまったのである．　強烈で空疎なアルファベット！（それがヒューマニズムと最も遠いところにあるものであることは言うまでもない．）大衆が強烈な情念をスパークさせる時，その流れにある種の方向性を与えようとする時，決まって球体が亡霊のように姿を現わす．　ニューヨーク，コニーアイランドのグローブタワー，F．ラング〈メトロポリス〉の大衆の暴動，そして冷戦構造下における米，ソの博覧会場に申し合わせたように現われる球体．　そしてラ・ヴィレットにも．ラ・ヴィレットのコンペにおいて，多くの入選者の中でR．クールハースはただ一人，この球体に手を加え，戯画化している．　自ら"Delirious New York"という本を著し，アール・デコのニューヨークに現われた球体言語の欲動について知悉していたクールハースにとって，ラ・ヴィレットに浮かび上がった球体は看過すべからざるものであったことは，間違いない．（M）








ニュートン記念碑／ブレー


畑番の家／ルドゥー


〈メトロポリス〉より


シカゴ・トリビューン／A．ファンバーレン


グローブタワー


ニューヨーク博　1939


ニューヨーク博　1964

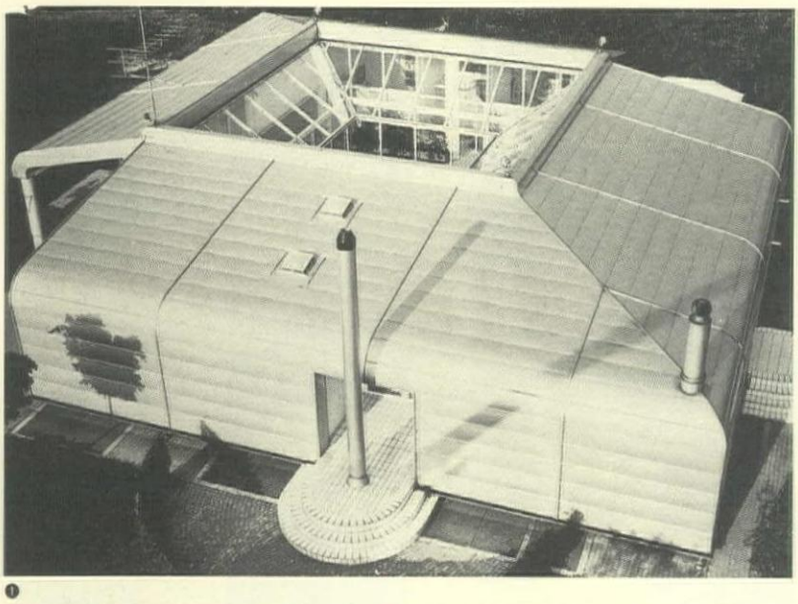

モスクワ博　1967

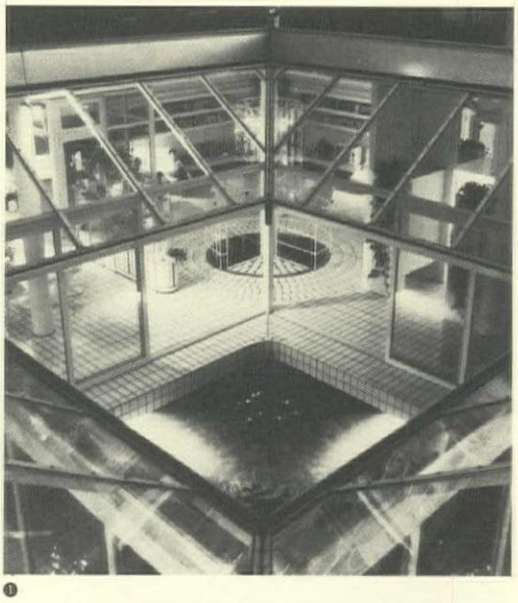
［未来の家］

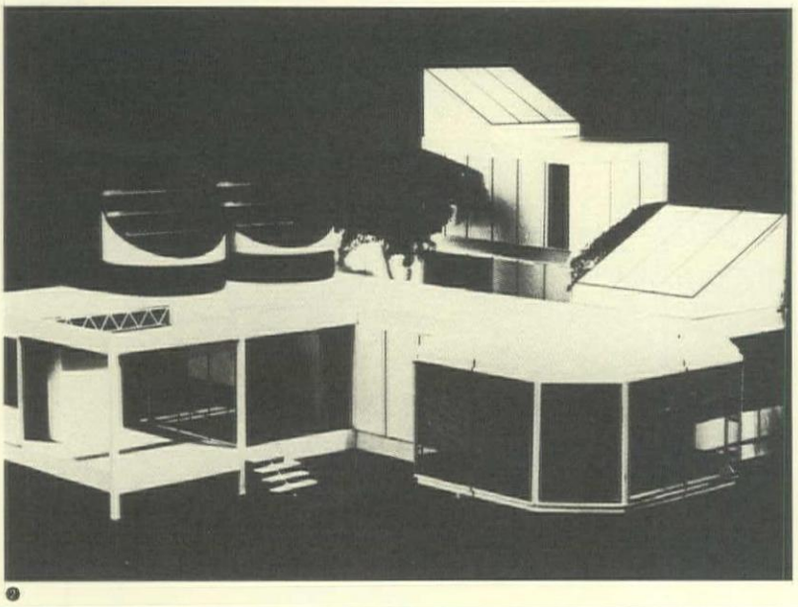
スペース・スタイル

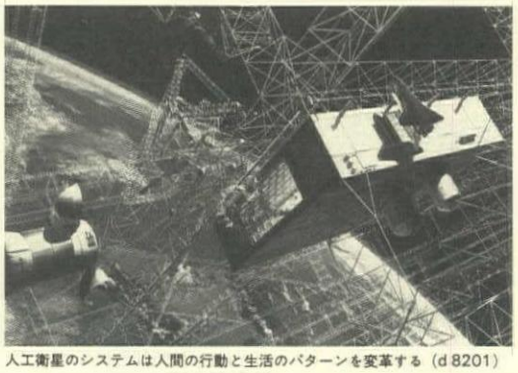
House——❶
Viersen, West Germany
architect:Horst Schmitges
〈ar 8407〉
House of the Future——❷
architects:Charles L. Owen and 28 co-producers
〈tA 8409/10〉〈JID 8403〉

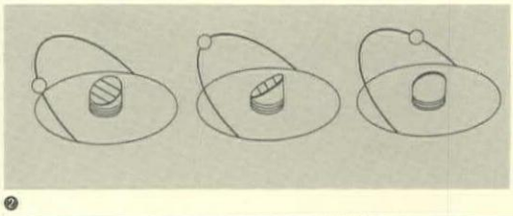
A.C.クラーク原作の〈2001年宇宙の旅〉で現出した未来の姿はまさにスペース・コロニーそのものであった。　1981年4月，スペースシャトル・コロンビア号が飛び人工衛星の反復使用が可能になった。　もはやスペース・コロニーも夢ではなく，我々の身近にSPACE(宇宙)ということばが存在するようになった．
ここで挙げる住宅はそうしたSPACE-STYLEを用いたものである。　これはホラインのメンヘングラトバッハ美術館がきっかけで，この地に眠っていたモダンな建築への憧れが目覚めたのである．
その結果ドラマティックに生まれたのが，この宇宙船のような住宅なのでである。　これはまさに内に向いた空間であり，スペース・コロニーそのものである。　外壁はあたかも宇宙船の外皮のようで窓と呼べるものはない。　それに対し内部はドアも壁もすべてガラスで構成され，その中に水やグリーンが配されている。　住宅というより宇宙ステーションの内部のようである。　そこにはもはや我々の認識し得るライフスタイルは存在しない。　ロジカルな新しい生活様式が要求されるのだ．
第1回国際デザインフェスティバルのコンペの大賞受賞作品〈未来の家〉は，程近い21世紀の家に向けて現在の先端技術であるエレクトロニクスとコンピューター技術を有効に活用し，将来のさまざまな生活ニーズに対応できる可変・適合型建築システムとして開発されたものである。　それは生活様式とライフサイクルに対して適応性と機能性を持たせる制御技術によって，生活から雑用を追放することにある。　不透明な未来において最も大切な生活の場すなわち〈家〉において人間に調和，均衡，選択権を与えるためにである。　ここでは，先進技術による機能の充足という目的がなされ，よくあるシンボル化された技術表現の道は捨てられている。　近未来のライフスタイルを二つの側面からストイックに見つめた答えが，この二つの家なのかもしれない．(人)


❶


❶


❷


人工衛星のシステムは人間の行動と生活のパターンを変革する（d 8201）

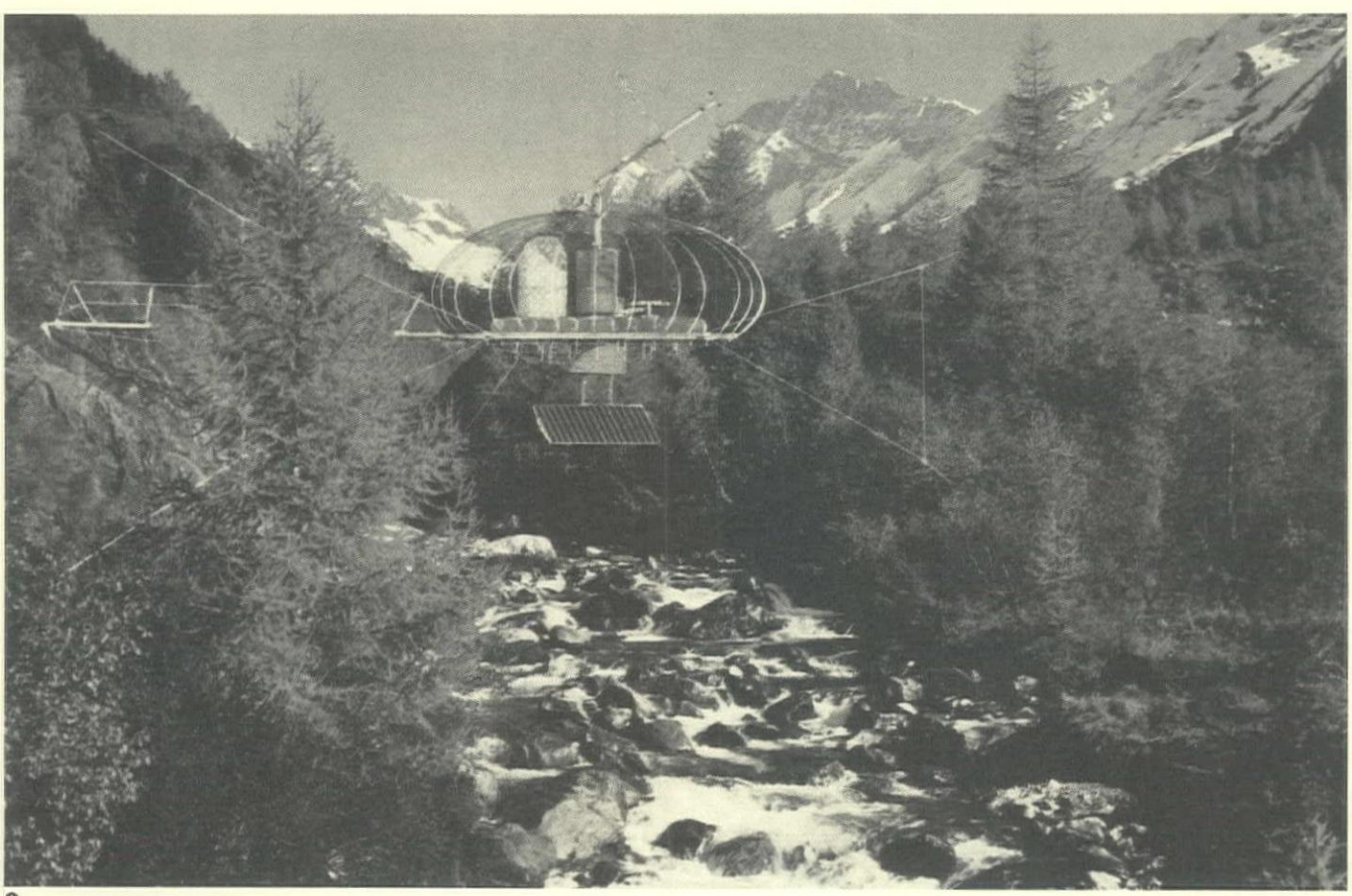

❷

[Future Systems]

浮遊するミクロコスモス

Project117 Bubble—❶
Architects:Future Systems (J. Kaplicky, D. Nixon)
〈ar 8401〉
Petit Maison Project—❷
Architects:Future Systems (J. Kaplicky, D. Nixon)
〈ar 8307〉
Kew Garden Project—❸
Architects:Future Systme (J. Kaplicky, D. Nixon)
〈ar 8307〉〈SD 8501〉

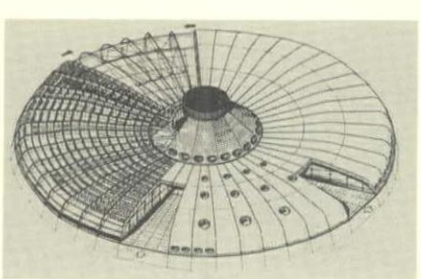
様々な映像やイラストレーションで呈示される宇宙的造形が我々に伝える感動は，その精緻な機械的あるいは技術的表現の枠を超えているような気がする．
おそらく，それは宇宙そのものの持つメタフォリカルでシンボリックな性格に由来しているのだろう．　未知なる空間としての宇宙に投企されたスペースシップは，独自の環境を形成してミクロコスモスをも包摂している．　この関係はスペースシップと人間との間にも内在してマクロコスモスとミクロコスモスの構造を浮かび上がらせてくる．実は宇宙とは自然科学の対象としてのそれではなく，我々の〈うち〉と〈そと〉のすべてを含む価値あるいは存在の総称なのだ．
地上の建築が重力と生産技術に支配されたスタイルを踏襲しているのに対し，スペースシップはモノコックな建築表現として重力から解き放たれ自由に浮遊し，内部空間は〈乾いた胎内空間〉といった様相で新たなる建築表現の可能性を開示している．
ヤン・カプリッキーとデビッド・ニクソンのフューチャー・・システムでは45°ハウス，キューガーデン・プロジェクト，プチメゾン・プロジェクト，バブル・プロジェクト等々のプロジェクトを通してこの種の建築の可能性を追求している．　空力学等々の現代技術の延長上に建築表現としてモノコックあるいはセミモノコック構造を捉え，様々なプロジェクトを未来に向けて発信している．
たとえばバブル・プロジェクト．　透明な空気膜と圧縮材＋緊張材＋環状のアルミニウムフレームの床と諸設備を支えるメインマストで構成されたスペースシップのような宿泊用ユニットが4本のケーブルで宙吊りにされ，まさに中空に浮遊している．　重力の拮抗から解き放たれた地上のスペースシップとでも呼ぶことができようか．
宇宙が精神のコスモロジーとしてマンダラやセフィロートといったイコンとして記述され建築にひき写されたように，我々の宇宙との交信はこの種の建築に託されているのかも知れない．(K_2+Q)



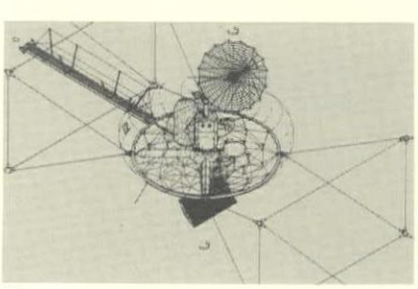
❶



❷



❸



❶

アンドロボット，ホロニック・ロボット

Robots
〈Design Quarterly no121〉

現代の先端科学は，ソフトの科学，つまりアーサー・ケストラーの造語を借用すればホロニックな科学の時代を迎えている．

実際，近代に発生した価値の体系の中にある自然科学は，これまでおおむね要素還元主義の立場をとっていたわけで，観察と実験にもとづいて自然に内在する法則を識る科学とは，いわば自然界という全体の属性が，それを構成する要素の分析で理解されると過信する，一種の一元論であった．

たとえばコンピューターの働きを調べるために，それを分解し，その働きを究極的にダイオードの性質に帰着しようとするのが，いわゆる要素還元主義の方法である．　しかしコンピューターは，ハード中心の思考だけでは理解不能で，ハードもソフトも両方が大切なのは周知といえよう．　こうしたことに全く無知な地球外生物が飛来してきて，コンピューターが何か計算しているのを見たとしたら，彼はたぶんそれを分解し，すべてのハードウェアを律儀に分析するにちがいないが，演算プログラムなる不可視のソフトウェアの存在を感知しないかぎり，コンピューターがなぜ演算を行うのか，彼らにはわかるはずがない．　要するに，何であれ，より大きな全体に従属しようとする部分の属性（ハード）と，それ自身が全体であることを主張する全体の属性（ソフト）との両面を備えている，という認識（ホロニック）が科学にも必要になる．

ロボット工学の理解についても，似たような方向を語れる．　チャペックの空想劇に端を発する類人機械としてのロボットが，単なる手足（工場・医療関係の作業ロボット）や見世物（愛玩ロボット）から脱し，アンドロボット（類人ロボット）が試作されるようになったのはかなり最近のことである．

1983年に米国で開発されたアンドロボットBOBは，熱線センサーにより人の体温，超音波センサで人の位置・形状を把握し，毎秒60cmで歩行する，家庭用のパーソナル・ロボットであり，道具でなく人類の同胞としての真価を期待されている．（mt）



アンドロボットBOB





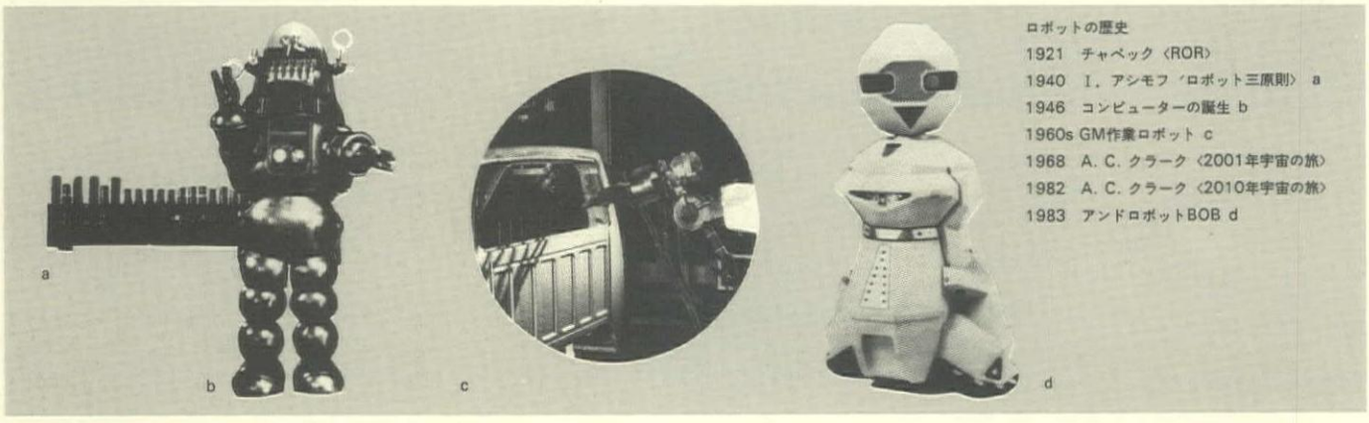
NASAの探索ロボット



歌うマリリン・モンロー



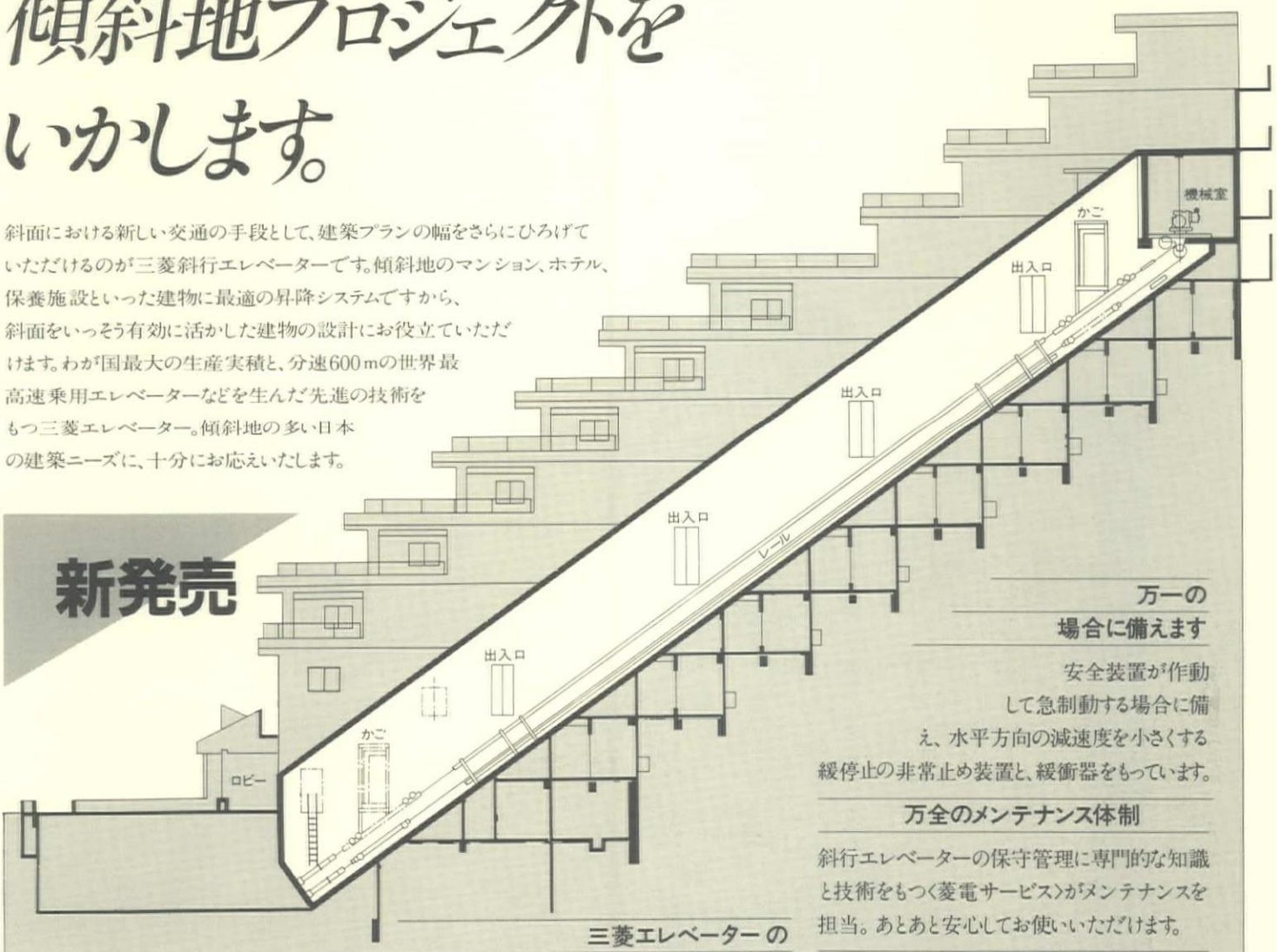
〈メトロポリス〉 1926



ロボットの歴史
1921　チャペック〈ROR〉
1940　I．アシモフ「ロボット三原則」 a
1946　コンピューターの誕生 b
1960s GM作業ロボット c
1968　A. C. クラーク〈2001年宇宙の旅〉
1982　A. C. クラーク〈2010年宇宙の旅〉
1983　アンドロボットBOB d

斜めに走って傾斜地プロジェクトをいかします。

斜面における新しい交通の手段として、建築プランの幅をさらにひろげていただけるのが三菱斜行エレベーターです。傾斜地のマンション、ホテル、保養施設といった建物に最適の昇降システムですから、斜面をいっそう有効に活かした建物の設計にお役立ていただけます。わが国最大の生産実積と、分速600mの世界最高速乗用エレベーターなどを生んだ先進の技術をもつ三菱エレベーター。傾斜地の多い日本の建築ニーズに、十分にお応えいたします。



新発売

万一の場合に備えます

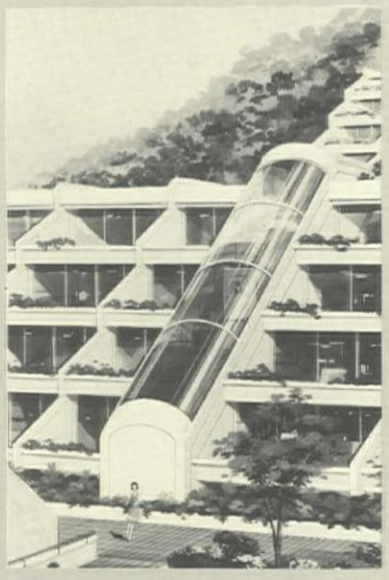
安全装置が作動して急制動する場合に備え、水平方向の減速度を小さくする緩停止の非常止め装置と、緩衝器をもっています。

万全のメンテナンス体制

斜行エレベーターの保守管理に専門的な知識と技術をもつ〈菱電サービス〉がメンテナンスを担当。あとあと安心してお使いいただけます。

豊富にそろった8タイプ

標準機種で8タイプ。用途に応じた最適の機種がお選びになれます。また昇降行程、停止数など、特別な仕様にも応じられます。オプションも豊富に用意しました。



三菱エレベーターの先進技術が生きています

乗用エレベーターとして高い評価をいただいている三菱エレベット〈アドバンス〉。その豊富なノウハウを基に、斜行エレベーターとして必要な機能を徹底的に解析して設計しました。安全性、信頼性、快適性、操作性など、〈アドバンス〉のすぐれた特長がそのまま生かされています。

スムーズ、快適、安全に走ります

マイコン制御で水平方向の加減速を低く押え、円滑に斜走します。またドアの窓から斜めに動くかごの動きを見ることができるなど、乗客が無意識に垂直の動きを想定してしまうことがないような、さまざまな安全面への配慮をしました。

▼標準機種一覧表

No.	形式	速度 (m/min)	容量 定員(人)	容量 積載荷重 (kg)	傾斜角	昇降行程 (斜辺)	停止数
1	P9-CO-45	45	9	600	20°〜45°	最大60メートル	最大15カ所
2	P9-CO-60	60					
3	P11-CO-45	45	11	750			
4	P11-CO-60	60					
5	R9-2S-45	45	9	600			
6	R9-2S-60	60					
7	R9T-2S-45	45					
8	R9T-2S-60	60					

★No.5〜8は戸袋が谷側にくるものを標準とします。
★No.7、8はトランク付きです。

★本機種の設置については、(財)日本建築センター昇降機遊戯施設等性能評定委員会の評定が必要ですので、ご計画の際は、あらかじめ当社にご相談ください。

三菱斜行エレベーター

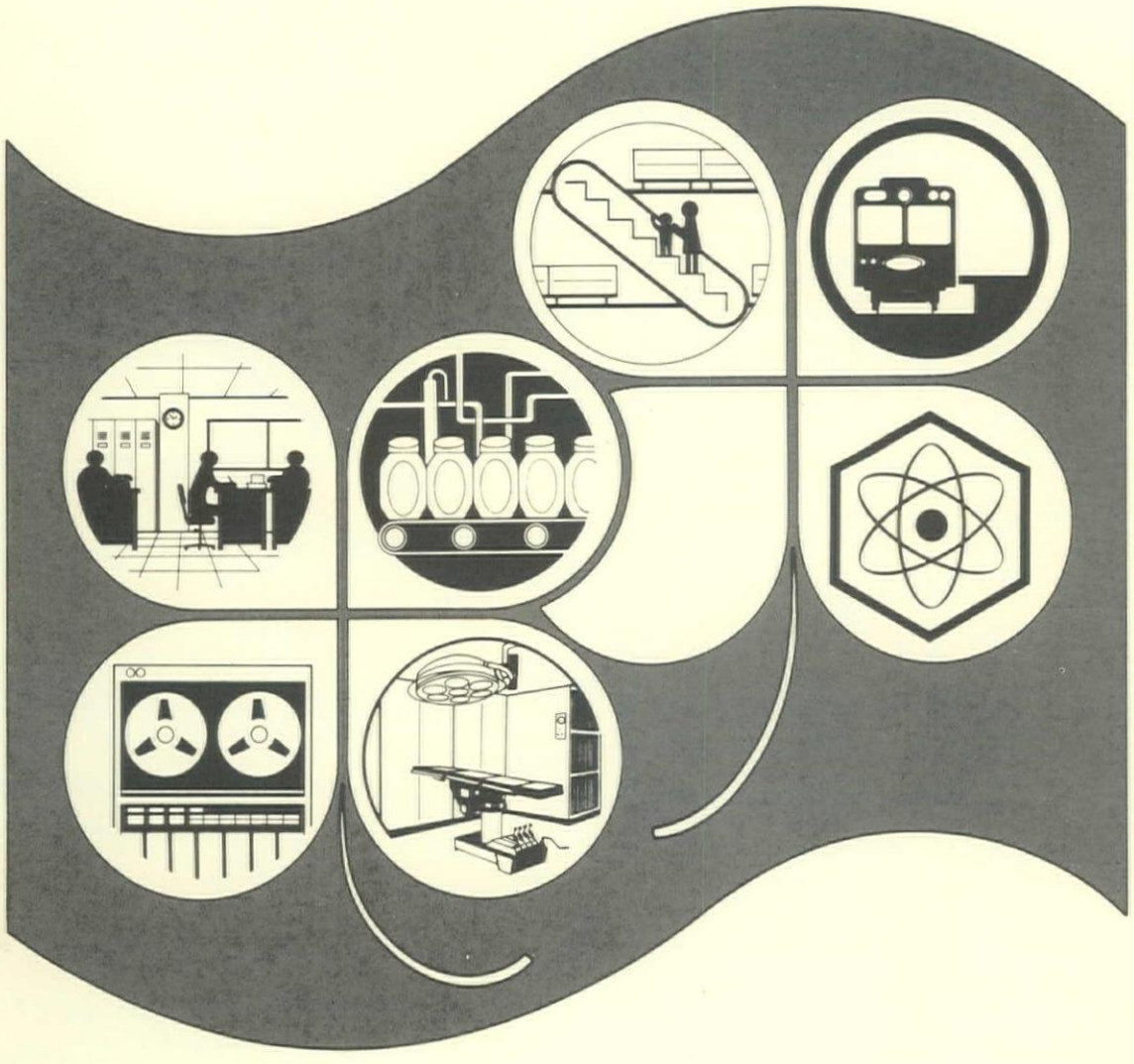
● 詳しい資料をご希望の方は資料請求券をハガキに貼って〒100東京都千代田区丸の内2-2-3(三菱電機ビル)
三菱電機株式会社昇降機事業部へどうぞ。
●お電話でのお問合わせは、お近くの三菱電機営業所へどうぞ。
札幌(011)212-3726/仙台(0222)64-5633/新潟(0252)41-7221/富山(0764)42-2324/東京(03)218-2749/
名古屋(052)565-3160/大阪(06)347-2271/広島(082)248-5278/高松(0878)51-0001/福岡(092)721-2163

資料請求券
斜行エレベーター
SD
8502
あなたの電話番号をご記入ください。

未来を開発する
三菱電機

MODAIR

あすの空気調和をになう



自然より清浄な環境づくり
それが東熱のねがいです

〔東熱〕がめざす「空気調和」とは、温湿度調整だけでなく、有毒ガスの除去、脱臭、除塵等、人間の生活環境、あるいは高度生産環境を作り出す総合技術です。

この開発された個々の技術を更に、総合的に発展させ、都市全体としての環境改善に寄与してゆくことに東熱としての使命感を持っております。

〔東熱〕によって開発された技術は●地域冷暖房●アイソレーター●サンシャイン計画●超高層ビル●病院●地下鉄等、あらゆる分野に生かされ都市環境の整備、浄化に貢献しております。

〔東熱〕は常に社会の要望に対応した、技術の開発をし、より清浄でより快適な生活環境を皆様に提供いたします。

東洋熱工業

本　社／〒104／東京都中央区京橋2－5－12
TEL 03（562）1351大代表
支　店／札幌・仙台・関東・新潟・横浜・名古屋・大阪・広島・九州
営業所／水戸・前橋・静岡・京都・神戸・岡山・高松

国内建築ノート
聖吾評
8502

ともあれ2回目の聖吾評である。　1回目に比べると応募原稿の数も徐々にではあるがふえてきていて，これはいい傾向である。　というのも，急激な成長というものはどこかで無理を蒙らざるをえぬからである。　この欄は，ブームなどという無意味無内容無節操の現象を決して生んではならない，とかように出題者は考えている。　かの浅田彰現象（そういえば，浅田彰氏の書棚には，SD誌が積まれていたのだった）などというもののおかげで，せっかく大切に育んでゆくはずの知＝savoirが，現象→ブーム→ファッション化の嵐の中で一種の非耐久消費材化されてしまったことも記憶に新しいではないか。　あれじゃ浅田彰も浮かばれまい，などと義憤したりして，ま，もうかったから，いいのかな？

今月の宿題

「正しい建築と面白い建築」

出題者＝竹山聖

宿題解説

世に正しい建築は多々あれど，なおかつ面白い，というのは滅多にない。　あるいは逆も言えて，面白い建築はあっても，しかも正しい，というのが稀だ。

今回のテーマは，正しくてかつ面白い建築はありうるか，ありうるとしたらどういった形で，ありえぬとしたら何故に，というものである。　正しいことと面白いことは両立するか，ということである。　正しい建築と面白い建築の関係を考える，ということである。

どちらかのみについて論ずるのも，無論かまわないわけですが，できればこの両者の連関，対比の妙（あるいはアホらしさ）をすくいあげて欲しい，というのが評者の願いである。

正しいというのがどういうことかわからない，などとフヤけたことは言わないで欲しい。

ンなこたァテメェで決めることだろ一が！

面白いというのも個人差があって，などとアタリメーのことをほざかんでくれたまえ。

個人差のハザマに落とし前つけるかケツまくるかが，人生ってもんでござんしょう。

ところで評者の気分で申し添えますならば，正しさだとか面白さなんぞをどういった位相でとらえるかはひたすら各人のセンスにかかっておりまして，切り口の鮮やかさこそを良しとしたい，とかようにまあ考える次第であります。　1／200で矩計をかくなんてことがないように，1000字には1000字の世界がある。こいつも忘れないでもらいたいことのひとつです。　正しさも面白さも，1000字の中にすっぽりと納めこんで下さい。　まちがっても大論文の断片のようなものを送りつけたりしないように。　それは来たるべきあなたの大論文のため，大切に取っておくことです。

ともあれテーマは自由に解釈していただいて結構，できれば正論のみならず，珍論・奇論・異論・暴論を心より待望いたします。（聖）

正しいことと面白いことという，一見何の脈絡もない言葉を対にすることで，出題者がぼんやりと考えて（謙遜ですよ，念のため）いたのはいまの風潮というようなものをめぐってつらつら，というよしなしごとであった。

つまり，正しい，なんてことを大上段に振りかぶって言うには，デモクラシー，そ，相対的価値観ね，そいつがはびこりすぎているし，じゃあ面白けりゃ何やってもいいのか，ん，いい，なあんて意見にもかなりの留保なしには肯んじえない気分であったわけね。　いまの時代の特徴であり問題でもあるのは，価値観の多様化などというありきたりの言葉じゃ言い尽くせないものなのである。　多様な価値観なんてのはどの時代にもあったので，問題は，いまが，その多様な価値観すべてを認めてやろうという構えをとっていることにあるのである。　もちろん表面的には，なのですが。　このあたりを仔細に述べると紙数が尽きるだけじゃあなく，テーマそのものが重すぎるので，この場はとりあえず見逃してもらうことにしたい。　で，一応いまという時代が，あらゆる価値観をあんたのもあたしのも誰かさんのも含めてそれなりに尊重してしまう，という構えをとっているのだ，というところまで話が進んだのであった。　これは，実を言えば大変な暴力的状況でもあって，つまるところなるほど御意見ごもっとも，でもあんたはあんた，あたしはあたし，所詮声の大きい者が勝つ，雪崩打つ情報洪水（雪も水もいっしょくたなほどだ）に逆らえぬ，どうせ玉石混淆見分ける術もない，とひたすら身勝手＋保身＋無気力の論理が築かれる怖れなきにしもあらず，だからである。

今回も，多くの応募案の内に，ムムっ何かあるかな，と読み進みながら，結局はぐらかされて気抜けした例が見受けられたのも，そうした時代の風潮と無関係ではないと思われるのである。　結論として〈自分が可愛い

■SEXとNO SEX

性と遊戯は，祭，饗宴，戦争，犯罪，芸術，宗教などと並んでエロティシズムの要素に数えられる。　が，その性と遊戯の違いとは何んだろう？

奥さんあるいは旦那さんと完全に遊びでsexをする人は居ないから，そこには何らかの相違があるはずである。　社会との関わりにおいてその性と遊戯を考えてみるとまず，性は，社会の外にも存在し得るということが言える。　性は，死を除いて，人間にとって社会からの唯一つと言っていい出口であるが，それは，いわゆるケモノになった男と女によって実現される。　つまり，性は社会の内にも外にもあるが，遊びは，社会を前提とした，社会の内での動きであり，これを社会の外に位置付けようとすると，戦争，犯罪，宗教等の別のエロティシズムになってしまう。

その意味で，性は遊戯よりも本来のエロティシズムに近い。

今日の性の問題とは，同性愛が増えて困る，倒錯的な性行為が増えて困る，というレベルの変化への対応ではなく，むしろ，性が健康に，生理の問題として取り上げられてしまうという性の衰弱を検討してみるべきだというところにある。

ところで，子どもの遊びとは，きわめて性的であり，エロスのエネルギーに満ちた世界である，という考察がある。　しかし，彼らの世界には，性は位置付かない。　これは，実際にsexできないということと，遊びの次元では性は対象化され得ないからである。

英国の小説家コリン・ウイルソンは，「性に関する限り，対象物はないのである」と述べたが，性はあくまでも，性的欲求であり，性的感覚の中にしかなく，対象は存在しない，というのは正しい。

しかし，それゆえに，性においては相手を必要とするのである。そこには触れる身体と触れられる身体が，視る身体と視られる身体が必要となる。　オナニーの時も同じである。　ところが，遊戯の場合は，マイコンで遊ぶように触れる身体，視る身体だけでよい。　つまり性は２人の空間を必要とし，遊戯は１人（あるいは多ぜい）の空間を必要とする。

正しい建築とは，sexをしたくなるような空間をもつ建築であり，面白い建築とは，sexを忘れてしまうようなそれである。　前者はモダン建築に，後者はポスト・モダン建築に近いような気がする。（金浜徹）

❶新建築8108



❶積木の家III／相田武文設計研究所



●ジョン・レノン／サマー・オブ・1980

■

拝啓　　竹山聖，隈研吾様

耳老人グル・スペにいささか目がユデタマゴになりかけた折，新進気鋭の両氏が聖吾評なる新企画を担当されるとのこと，まずはカワイイ語呂合せに御喜び申し上げます。　新企画に於きまして「正しい建築かつ面白い建築」なる宿題論文を募集中であることを聞き，お願いがあります。　実は当社（ゴジラ出版会）の発行未定の新雑誌《DS》（Dongri no Seikurabe）では，《BRUTUS》や《POPEYE》に負けじと「建築を取り巻く様々な状況」の特集を企画しております。　第一弾として「正しくなくかつ面白くないファッション」の宿題アンケートを募集することになりました。　つきましては両氏の解答を模範例として掲載したく，是非以下の問いに御回答いただければ幸いに存じます。

■問１　次の各組合せで「正しくない」と思われる方を太字の黒マジックで消して下さい。

▲問２　同様に「面白くない」と思われる方を太字の赤マジックで消して下さい。

（注意）単純に比較して必ずどちらか一方を選択して下さい。各５秒以内で解答して下さい。　マジックは油性の消えないものを使用。

♡　　♡　　♡

松尾芭蕉：糸井重里，ピラミッド：前方後円墳，触覚：視覚，ＦＯＣＵＳ：アサヒグラフ，赤坂プリンス：新高輪プリンス，プラトン：デュラン，黒澤明：角川春樹，ＴＵＲＢＯ：ＤＩＥＳＥＬ，ハイ・アート：ヴァナキュラー，排除の論理：付加の論理，㊗：㊐，黒川さん：磯崎さん，灰色：グレー，建ぺい率：容積率，ピース：マイルドセブン，チタン：ブリキ，シンタクティック：セマンティック，真空管：ＬＳＩ，若尾文子：倉田まり子，ずれ：ねじれ，工学：修辞学，アヒル：カラス，ドラフター：Ｔ定規，キッチュ：キャンプ，オリンピック：ゲートボール大会，打放し：タイル，ダボハゼ：シーラカンス，アクソノメトリック：２消点透視図，母乳：粉ミルク，入札：談合，ピップエレキバン：マグネキング，ＧＡ：モダンリビング，教科書：ビニ本，パッシブ：アクティブ，建築規準法：卒業設計，ドン・ジョバンニ：男はつらいよ，ウィトルーウィウス建築書：匠明，丸いポスト：四角いポスト，焼酎：日本酒，怪人二十面相：かいじん21面相，ハゲ：アデランス，おむすび：ハンバーグ，あこや貝：しじみ貝，象：河馬，メガネ：コンタクト，スクール：大学，凸凹：面一，ＳＤ：ＤＳ

♡　　♡　　♡

解答は《ＳＤ》誌面で，御協力に感謝します。（桂利空）

からじゃん〉とか〈やがて評論家と呼ばれる人々が解明してくれるまで置いておいたらどうでしょう〉などというふやけた言葉を散見するにつけても，そうした感を深くするのである。　その極めつけが次なる一文。　〈きっと頭のスマートで，高貴な方々が，何かしらのお考えに基づいて，建築たちを評価し，社会の評価としてメディアが皆様にお伝えするのが，今の正しくも興味をそそる建築なのでしょう。〉　こういう語り口は，たとえば林昌二氏ほどの知恵と力と勇気と地位を持った人が使って初めて生気を吹きこまれるので，名もなく力もない者が使うとただに卑屈なだけ。　反語にも皮肉にも逆説にもなっちゃないのである。　くれぐれもヒニクとヒクツをとり違えぬよう頼みたい。　卑屈な文章は読む者の体調を狂わせるからである。

話を戻す。　結局出題者のぼんやり考えていたことは，かくかくしかじかの状況認識に立って，ここらで面白いものの中に正しいことを見出す論理を築きえぬものか，ということなのであった。　時代の風潮というものが，どうも面白いもの派に傾いて，正しいこと派の旗色が悪いんじゃないかしらん，と思ったのである。　面白い，という感覚が個人に帰せられるとしたら，正しいという認識はどっちかというと社会に帰せられるんじゃないだろうか，などと思ってみたりもしたのである。　〈個人差のハザマに落とし前つける〉なんて勇ましい言葉も，そんな気分から出てきたような気がするのである。　出題者の最近の気分としては，個の主体性の確立の向こうに，共同のキッカケ，連帯のキヅナのようなものを見出したい，と感じているのである。差異性を通して同一性を語りたいって言うのかね。　個の主体性への無定見の信頼が，個性なる神話への収束をもたらし，とりもなおさずこの英雄願望がファシズム（ex.ヒトラー）を産む。　懐疑心を失った大衆の増大と，そ

■クライテリアの逆説

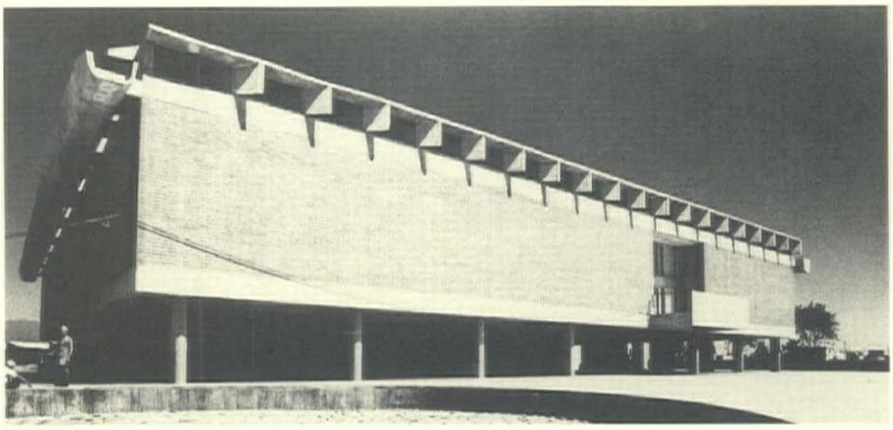
〈おもしろくて，ためになる〉という言葉がある．あまり，好きな言葉ではない．　なぜといって，どこかＰＴＡのオバさんを，思い出させるからである．　ＰＴＡのオバさん的，ヒステリカルな論理矛盾を感じさせるから，でもある．　〈おもしろい〉という感覚は，まさに感覚的なものであり，感覚の快楽である．　したがって，快楽一般が，そうであるように，この〈おもしろい〉という快楽も，とどまるところを知らない．　それは，なにかに律せられることを嫌う何者かであるはずだ．ところが，〈ためになる〉のほうは，そうではない．こちらは，明らかに，道徳律によって律せられて，いるのである．

〈面白く，かつ，正しい建築〉というものも，似たようなものではないだろうか．　おもしろい建築は，たしかに存在しうる，と思える．　〈美しい建築〉というだけではなく，人に，なにかしら，愉悦をあたえる建築．　人が，その中で，夢を夢みることのできる建築．　Corbusierの作品など，その極北に位置するものだと，思えるのだが，どうだろう．

ところで，〈正しい建築〉というのは，なんだろうか．　建築が正しいというのは，どういうことを意味するのだろうか．

〈正しい〉または，〈正しくない〉という判断を行うためには，ある現象が，それからずれているかどうか，を測定するための規範がいるはずだ．〈建築〉においては，この規範のことを，通常，様式＝styleと呼んでいたのだ，と思う．　International Styleというのも，例外ではなく，この意味での規範＝様式であった．　したがって，この規範から，逸脱したものは近代建築ではないとして，異端扱いをされたわけである．　つまり，その建築は，〈正しく〉ない，という烙印を押されたのである．しかし，いまわれわれが現に生きている，この時代について考えてみれば，このような規範はどこにあるのだろうか．　むしろ，70年代の〈解体〉運動の結果，モダニズムというstyleは，ほとんど徹底的に攻撃され，いままさに崩壊しつつある，というのが，この現代であるように，思われる．とすれば，いま〈正しい〉建築とはなにか．

もしかすると，正誤のクライテリアであるはずの規範＝様式からずれているということだけが，〈正しさ〉を保証する，という逆説こそ，現代という状況であるのだ．（之）

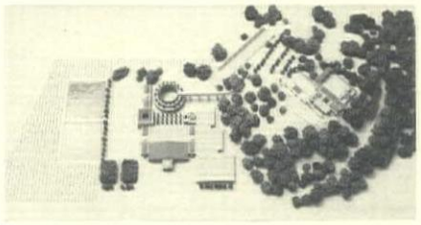


❶シャンディガール美術館／ル・コルビュジエ



❷シュトゥットガルト美術館／J.スターリング

❶Oeuvres Completes vol. 8
❷a＋u8404，SD8410
❸SD8412



❸ナバー・ヴァレーの美術館／M.グレイヴス

うした大衆の嗜好の支配的なる社会がそこに前提されるのは言うまでもない，などとムツカシメのこともぼんやり考えていたのである．面白いものしかつまらない，といって，カラオケ的状況（酔っているのは本人だけ）というものにもげっそりしているのである．　もう少し他の者への思いやりというものがあってもいいのじゃあないか，つまるところ，個人の内的な必然or偶然によって面白さが決まり，同じく個人の対他者関係によって正しさが決まる，ということであるにしても，というふうにね．　なにしろ出題者は次のごときニーチェの逆説（＝多数決への警句）をこよなく愛してもいるのであるから．　〈錯乱は個人の場合には例外であるが，団体・党派・民族・時代の場合には通例である．〉[*1]　いまが，個人の身のまわりしか見えない，せこい時代にしても，そうした局所から宇宙を狙う気構えがありうるんじゃないか，そうした局所の思想の可能性を問いたい，というけなげな志しが，正しいと面白いなどというロジカルタイプの異なった言葉を同列に並べた当企てにこめられた意図だったのである．　ま，んなこたあ，応募者にとっちゃあ知ったこっちゃない．　要は，正しいという言葉と面白いという言葉の対を手がかりにして，どんな問題にアプローチしたか，そしてそのアプローチがどれだけ新鮮であったか，ということであった．　この意味で出題者は楽しませてもらったとも言えるし，落胆させられたとも言える．　先月に比べれば，形式もバラエティーに富み（たとえばアンケート方式，たとえば対話形式），力作も多かったのだが，どーも既成の観念にとらわれている嫌いがあるのである．　そういえば，O阪のＩ江寛氏が，11月にＫ王プラザホテルで開かれたM井ホームの展覧会のオープニングパーティーでいきなり当欄のことに触れ，正しくて面白い建築とは，遠山の金さんの諸肌ぬいだ桜吹雪であ

■かなう・かなわない

〈正しい〉とは何か。　〈かなう〉ことである。種々の条件にかなうこと。　機能に。　目的に。力の流れ，材料の性質，気候風土に。　予算，周囲の環境とのつり合い，そしてまた，施主の趣味にも。

〈面白い〉とは。　〈かなわない〉と思う感覚である。　意表をつくこと。　新しい解釈，独特のかたち。　「うーん，こいつはかなわない」って，ね。

そも。　かつての大工棟梁（ものつくり）たちは皆，〈かなう〉仕事をした。　それが仕事に対して要求されることだったから。　木を使うにも1本ごとの性質（くせ）を見た。　その土地の気候風土に合う形態のくふうもした。　長い年月の〈いかにかなうか〉を集大成したものが伝統（トラディション）となった。　そして，一通りの仕事を〈かなう〉ようにこなせて初めて一人前となった。

また。　その上で〈かなわない〉面白さを競った。主として細部に見られる意匠のくふうが，日本建築には欠かせない味わいでもある。

ところが。　必ずしも〈かなう〉ことが充分でなくとも世の中に通用してしまう事態が生じた。

それはおそらく，第二次大戦後の混乱によるドサクサ，そしてその後の高度成長時代の好景気が求めた〈早くて見ばえのよい建物〉が原因である。

建築家たちは〈かなう〉安全さより〈かなわない〉意外性を重視してしまった。　雑誌がそれを，ある面では増長させた。　面白い作品のほうが地味な仕事よりも購買者数増に結びつくことは否めないけれども。

かくして。　いつしか世間では，「建築家に住宅をたのむと，高いし，希望を聞いてくれないし，へンなのをつくられてしまうし」という定評が生まれることとなった。　この建築家による自らの〈首しめ〉が，結果として伝統木造建築再評価の気運を招く原因のひとつにはなった。　それはまあよい。　しかし，先達がかつて暗中模索して積み上げた近代建築の中には良さもあるのだが，それも同時にかすんでしまったような気がする。

それにしても。　村野藤吾はがんばった。　「施主が大事に貯えた大金を，村野の鉛筆一本に賭けるのだから」という彼の覚悟。　すべてに〈かなう〉建築，そして誰にも〈かなわない〉建築を残して，彼は長いつとめを終えた。

村野さん，お疲れさまでした。　やっとゆっくりできるんですね。（おのでらひろみ）



❶桂棚
様々な名木を集め，その一つ一つに合った組み合わせをし，実用に耐え，しかも絶妙のバランス感覚を見せる。



❷パリ，メトロ入口／エクトール・ギマール
新しい材料であった鉄とガラスの大胆な使用，量産を目ざし，数々の組み合わせができる。　もちろん用途には合う。　そして美しい。

❶新建築8207臨時増刊
❷〈モダン・デザインの源泉〉美術出版社

る，という，何やようわかったようなわからんような，しかしながらまことに荒唐無稽な発想を披瀝しておられたが，そういう美しいイメージを展開した論も，ひとつも見当らなかった。　正しいよーだが面白くない。　あるいは面白っぽいけど正しくない。　マイッたタヌキなのである。　より一層の奮起を促したい。

という苦言を一応呈した上で，今月の作品である。

まず金浜徹君の作は，これはいったい何であろうという不可思議さと支離滅裂さにやや魅かれた。　ところどころに鋭い（かもしれない）と思わせる記述が，脈絡を意図的か知らずしてかはずしながら，まったく首をかしげざるをえぬ論理の飛躍によって唐突に今回の主題に至ってしまう。　湯村輝彦のヘタウマ絵に近い感性なのかしらん，と，こういう人の頭蓋骨の中味を見てみたい気にさせるところが，ひょっとすると達意の人物なのかもしれない。　それにしても公器を何と心得るか，このような意味深くもあやしい論考が上品な《SD》誌に掲載されるとでも思っているのか，という評者の反発をもカエルのツラにションベンぶりの無節操，無配慮に免じて，ここは載っけてしまうのである。　編集長ごめんなさい。　しかしながら，この論でとりあげられているテーマは，もっとちゃんと論じる必要が，本当はある。　枝葉末節の無駄話を削って，本論を深める姿勢が欲しい。でもそうすっと，つまんねえもんになったかもね。

さてここにヘンなのがある。桂利空君のである。　これを見ると，熊本市の公務員（もし応募の履書が正しければ）とゆーものが，いかにハイセンスであるかが偲ばれるというものである。　追伸には〈誤字，脱字には正誤評をつけて下さい〉という涙なしではすまされぬ気くばりもある。　評者2人でやって



1985年2月号国内建築ノート・宿題

「正しい建築と面白い建築」

なに，締切りに遅れたからだめだと！　何いってやがんだい．　冗談じゃねえよ．　お役人でもあるめいし，お堅い事を言いなさんな．　正しい事と面白い事の両面をすくいあげろと言ったのは，テメエの方じゃないのかい．　それじゃ，テメエは，正しい事だけしかすくいあげないのかよ．
そんな事をいっているようじゃ，この欄を引き受けるしろものじゃねえじゃねえか．　おう，聖吾ちゃんよ！　四の五の言わずに度胸があったら，この欄に乗せてみな．　え!!　締切りは締切りだと．　まだそんなかてえことをおっしゃるのなら，ＳＤの門前で此の原稿を百叩きの刑にでもしてゆるしてやりゃあいいんじゃねえのかい．　でもな，北町奉行の遠山の金さんなら，そんな無粋なことは，しねえだろうぜ．　聖吾ちゃんよ．　両の目開いてよく見てみな．
「お江戸八百八町にまぎれもねえ　背中に咲かせた桜吹雪の遠山桜」
こりゃ，悪人でもなきゃあ，博奕打ちでもないんだぜ．　こともあろうに，お堅いことと㊣義を守るお役人が，㊣の象徴の入墨をなさっているんだ．だからこそ面白いんだぜ．
人間の魅力てのはな，一口に言って，放蕩無頼性にあるんだ．　野郎ども，おっと，女郎どももそうなんだけどさ，この放蕩無頼性のねえ，お堅えだけの人間なんて実につまらねえもんだぜ．　ほら，いい女のことを昼は聖母の如く，夜は娼婦の如くって言うじゃねえか．　テメエの女房はどうだい，面白いかい，ちっとも面白くねえ．　そらそうだろうよ．　お堅いばっかりだからな．　それよりテメエの彼女か二号と一緒に居る方がずっと面白く楽しいだろうが，でもな，お堅い女房があってこそなんだぜ．　それがわかりゃいいんだよ．　なにそんなものいねえ，なんてフヤけたことを言いなさんな．　そんなこっちゃ，なんども言うようだが，正しい方は論じられても，面白い方は論じるしろものではねえじゃねえか．　ようは，魅力てえのは，その人間の巾，そうだな，振幅とでも言おうか，その振幅の巾が大きければ大きい程，面白く魅力があるんだぜ．
建築もおんなじこったあ．　外はお堅く，中は放蕩無頼であればあるほど面白いんだぜ．　その逆も時と場所によっちゃあらあな．　これが出来りゃさしずめ遠山の金さんてえところだろうな．
（無頼寛）

しまうにはあまりに惜しいので，ここは広く読者の方々の閲覧に供すものである．　熊本市の公務員て，ステキねえ．

いったいに今回は力作の多いわりには，さっぱりこれ，と光るものがない．　これまで紹介した２編が，いわば正攻法でなく，奇襲作戦とするなら，次の２編は，真面目にとりくんだもの，といえる．　ただ，どちらも結びが弱い．　之君のものは，結語に脆弁の香りがある．　むしろ全体を脆弁としてしまうくらいの心意気があって，この結語が生きる．　ただし，ずれというキーワードをイメージしうるためのからくりがもうひとつ必要ではあるよーだ．　おのでらひろみ君は，〈正しい，面白い〉を，自分なりに読みかえたのであって，その読みかえの素直さがある程度効を奏しているといえる．　ただ，着想のしなやかさに比べて，論の展開には少々の事実誤認と無理がある．　ことに最後に〈村野さん〉が出てくるところは，まるで無理矢理ものである．　何ゆえに村野藤吾氏がかくもいたいけな少女（と勝手に決めつけている）の心にまで忍びこんでくるのだろうか．　正しいことと面白いこととのハザマには，説明のつかぬことが多いものである．

というわけで，今月は，まことに異例ではありますが，入選作なし．　基本的には毎月必ず入選作を，と考えているので評者としてはまことに悲しい．　次回はもっと，思いきりのよいやつ，頼んます．

おーっと，言わないこっちゃない．　噂をすれば影というべきか，ここに突然，Ｏ阪から，Ｉ江，あ，いや無頼寛君の原稿が届いた．　もう入稿ギリギリなので，とにかくコメントは今後，参考作として載っけますので，よろしく．

＊1　ニーチェ〈善悪の彼岸〉

〈国内建築ノート・聖吾評〉原稿募集のお知らせ

■聖吾評のしくみ

竹山聖，隈研吾の両人が，聖吾評を名乗ってこの欄を担当します．　両名が，毎号読者に宿題(テーマ)を出します．　読者はその宿題にのっとって，どしどし投稿して下さい．

応募原稿は，両名の審査を経て，数点に厳選されたのち，掲載されます．

掲載原稿には本名を書くも可，筆名でも可，職業を書くも可，書かざるも可，年齢を書くも可，書かざるも可．　ただし応募原稿には本名・職業・年令を明記して下さい．

読者の原稿には，竹山，隈両名の講評も掲載されます．　願わくはその蛇足のページが霞むほどの，超超絶々たる原稿が，全国津々浦々より蝟集せんことを．

■聖吾評のめざすもの

懸賞論文というものが，どの世界にもあって，建築の世界もその例にもれません．　むしろそれからできる限り遠く，その対極たるをめざしています．

また，いわゆる〈投稿欄〉というものとも全く違います．　懸賞論文，投稿欄の大げさで，振りかぶったような語り口は本欄には向きません．　それらの語り口を支配している上から下へとふりかざしていくベクトルにかわる，新たなるベクトルなりテンソルを求めます．　この欄はそういった下降する矢をたばねて陳列する場所ではなく，むしろ雑然ときらめく階梯のようなもので，その階梯こそが現在を突如としてわれわれにもたらしてくれたり，また現在を超えたものをかいま見せてくれるのではないか，というわけです．

■応募規定

応募の資格　とくになし

提出物　本文（1,000字以内），本文の内容に即した写真・図・そのコメント．　本文は原稿用紙に清書のこと．　写真・図は現物またはコピーとし最大Ａ４判程度．　また，出典（掲載誌名，掲載年月）を明記のこと．

締切　1985年３月11日（当日消印有効）

送り先　〒107　東京都港区赤坂6-5-13　鹿島出版会ＳＤ編集部聖吾評係

提出物の返却　提出物はいっさい返却いたしません．

掲載　ＳＤ誌1985年５月号〈国内建築ノート〉欄．

問合わせ　宿題に関する問合わせは御遠慮下さい．

御礼　入選者にはＳＤ半年分，掲載者には２ケ月分（採用号以降）を差し上げます．

1985年５月号国内建築ノート・宿題
「村野藤吾から何を学ぶか」

世の中には，何をさしおいても，どんな事情いきさつが過去にあろうと，無条件にただ誉めあげればいいというスピーチが２つだけある．　ひとつは結婚式のスピーチ．もうひとつは故人をしのぶ追悼のスピーチ．ただし今回の宿題は追悼文を求めるのではない．　誉めれば掲載されるというほど，聖吾評は甘やさしくはない．

１月号の本欄・講評中に名文あり．　曰く〈困った時の作家論だのみ〉．　覚えておいていい言葉である．　建築についての文章を書きなれない人間は，正面から建築にぶちあたって，それを論じるという自信がない．　何となくそのまわりをうろうろとして，ちょっと建築をこづいてみては後ずさりを繰り返す．　ところが建築をやっていながら，当の建築にも体当りする自信のないものが，そのまわりをいくら廻った所で，いよいよろくな文章をものすことの出来るはずがない．　読者の方こそいい迷惑で苛立ちを倍加するのみである．　ただしここにひとつ妙案がある．　建築を論ずるのではなく，建築作家を論ずればいいのである．　建築を論ずる自信のない者でも，建築作家ならば論じられる．　たとえば，建築家Ａは何回離婚したとか，今どんな女性とつきあっているとか，建築家Ｂはこれこれの家の出身で，これこれの車をのりまわしているとか．　このたぐいの話は，たとえ頭は悪くても耳さえよければ書ける．しかも一応作家を論じているわけだから，あながち建築を論じていないことにもならない．　読者の方とて，生半可な観念の遊戯を読まされるよりは，ゴシップやパーソナル・ヒストリーの方がはるかにましだという気持がある．　これでゴシップに毛でもはえて，多少の知性の粉がふってあったり，ウィットの味つけがしてあろうものなら万々歳である．

聖吾評が村野をとりあげるのも，この所以である．　建築評論のビギナーにとって作家論はもっともとり組みやすい課題である．　評論のプロにとっては，ビギナーとの差を見せつけるチャンスである．　しかも，犬も歩けば棒にあたる．　建築雑誌をめくれば村野の追悼記事に出くわす．　その出来・不出来はまちまちであるにしても，その時こそ世に聖吾評のレベルの高さを顕示すべき時である．　世の大先生が，義理と多忙にまぎれていかに不勉強で頭を使っていないかを示す時である．　追悼文と称するいいかげんなお世辞が，その甘ったるい称賛の上っ面とは裏腹に，いかに故人の墓を穢しているかを示すべき時である．

ちなみに村野藤吾の吾は聖吾評の吾であり，さらにさかのぼれば，辰野金吾の吾である．　建築界ではまことに由緒正しい文字である．　このように聖吾評とかかわり深い村野である．　その実像に思う存分肉迫してみたらどうだろうか．　〈何を学ぶか〉とはあるが，〈学ぶところなし〉の論も大歓迎される．　〈学ぶところあり〉としたのも，学ぶところは具体的に示す方がいい．　若年寄風の，知ったような論は，聖吾評の主旨にはそぐわない．　長谷川堯の二番煎じは，即ゴミバコの餌となろう．村松貞次郎の焼き直しも，たちまちにして床上に散逸するだろう．　ただし〈ナシモト〉のそしりを恐れることなし，村野に突貫し，粉砕せんとする，心意気ぞよし．　以下に村野に突貫するためのキーワードを記す．

反近代主義，プレゼンティスト，装飾，はんなり，早稲田，関西，西武，近鉄，夫婦愛，丹下健三，茶道，一本の鉛筆，あたりはずれ，分離派，商業主義，長生き，カソリシズム，アシジのフランシスコ（村野の洗礼名）●隈研吾

SD (Space Design)
Back Issues and Price Lists
1979–1985
Price include seamail postage fee.

SD

●hardcover edition

磯崎新



Arata Isozaki **¥4500**
28 great works of Arata Isozaki with notes by himself. Writings by Hans Hollein.

磯崎新



Arata Isozaki 1976–1984 **¥5300**
23 works including Tsukuba Center Bldg. by Isozaki, with notes by the architect. Fu English texts.

槇文彦



Fumihiko Maki **¥4500**
Selected works—architecture and urban design—of Fumihiko Maki. Full English texts.

安藤忠雄



Tadao Ando **¥4500**
Selected works and drawings of T. Ando. Writings by Y.Futagawa etc. Full English texts.

丹下健三



Kenzo Tange **¥5000**
58 architecture and urban design of Tange, selected by himself. 202 pages. Full English texts.

丹下健三



Kenzo Tange 1977-83 **¥5300**
1980-83, 21 architecture and urban design of Tange. Chronological lists. Full English texts.

Overseas Subscription

Please enter my subscription to
SPace Design (SD)
Starting in _____ 1985

☐new subscription
☐12 issues ¥300000 (seamail postage included)
☐24 issues ¥50000 (seamail postage included)

The amount is being sent in advance by:
☐international money order
☐enclosed check

Name
Profession
Address
Signature

Please register my order for the following back issues of SD

The amount is being sent in advance by:
☐international money order
☐enclosed check

Name
Profession
Address
Signature

Post Card

Subscription Department

SD

Space Design

Kajima Institute Publishing, Co., Ltd.

5-13 Akasaka 6-chome, Minato-ku,

Tokyo, 107 JAPAN

stamp

Overseas Subscription

黒川紀章



Kisho Kurokawa **¥4500**

Extensive works of Japanese metabolist, with writings by C. Levi-Strauss, etc. Full English texts.

アメリカ建築のニューウェイブ



Young American Architects

The Whirlpool : **¥4500**

Post-Modernism-Young American Architects. Works and projects of 50 young American architects.

ART DECO™ NEW YORK



ART DECO™ NEW YORK

Art Deco in New York **¥5000**

About 80 Art Deco architecture. The Art Deco architectural map and list of New York City.

庭園



Gardens: **¥4700**

Wonderland of Contrivance and Illusion: All the major gardens in Europe anb U.S.A.. English text.

●Selected back issues

7901 Kazuo Shinohara **¥4000**

31 individual houses of Shinohara whose exhibition were held at Paris, New York, etc. 192 pages. Full English texts.

8406 The Artist Le Corbusier : Lithographs an Etchings **¥2500**

Columbus, Indiana : Museum of Modern American Architecture

8407 Art Nouveau: Capturing the Magic of Dim Space **¥4000**

All the major Art Nouveau architectures in Europe. Photographs by Keiichi Tahara. 116 pages including 48 color pages.

8408 Mario Botta **¥2500**

8409 Hisao Kōyama : The Three Books of Architecture **¥2500**

Hisao Kōyama's Composition Book introducing his works. English text.

8410 James Stirling : New State Gallery Stuttgart **¥2800**

Robert Venturi : Venturi Collection of Knoll International

English texts by James Stirling and Robert Venturi.

8411 Achille Castiglioni : Great Master of the Italian Design **¥2500**

World, Magic in the Exterior Skin : Recent Projects by Kohn Pederson Fox Associates.

8412 "SD Review, 1984" 18 regular entries 1 special entry. **¥2500**

"International Building Exhibition, Berlin 1987"

8501 HIGH-TECH **¥4300**

Introducing all the prominent persons and works in HIGH-TECH architecture, including C.Eames, J.Prouve, F.Otto, B.Fuller, R.Piano, N.Grimshaw, T. Farrell, R.Erskines, etc.

Post Card

Subscription Department

SD

Space Design

Kajima Institute Publishing, Co., Ltd.

5-13 Akasaka 6-chome, Minato-ku,

Tokyo, 107 JAPAN

stamp

<都市住宅>1985年1月号　定価1,200円

特集|〈仕掛け〉考・2

力とエネルギーの流れを仕掛ける

●

論：〈シェルター〉と〈マシーン〉への仕掛け——野澤正光

論：テクストとしての〈仕掛け〉・34の事例を読み解くためのコード——難波和彦

座談会：デザインとテクノロジーの相関——難波和彦＋野澤正光＋佐々木睦朗＋高間三郎

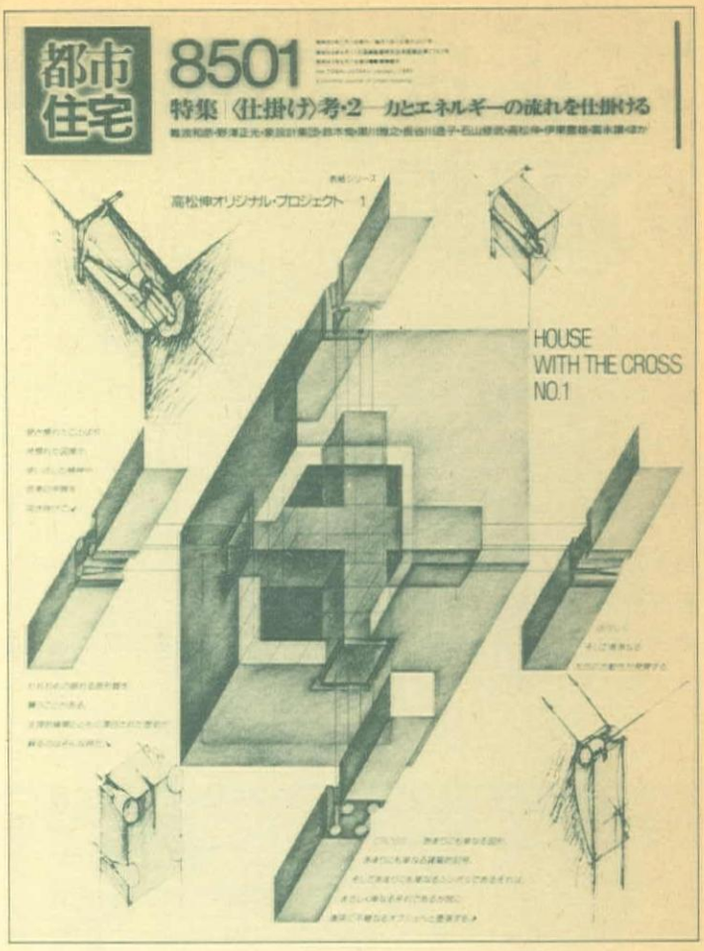
●

ケーススタディ：監修・執筆——難波和彦＋野澤正光

名護市庁舎——象設計集団　光格子の家——葉祥栄　石黒邸——六角正広　肆木の家——広瀬鎌二　生闘学舎——高須賀晋　卵形ドーム——石山修武　武蔵新城の住宅——富永譲　鴨居の家——長谷川逸子　ＬＰハウスII——小宮山昭　M邸＋H邸——中込清　ＴＯＭ——内藤廣　ATELIER——鈴木恂　Villa H——黒川雅之　ランプロワジー——斎藤裕　高橋邸——石井和紘　軽井沢の山荘——吉村順三　千ヶ滝の家——清家清　花小金井の家——伊東豊雄　ＡＲＫ——高松伸　ほか全34例

■

表紙シリーズ：高松伸オリジナル・プロジェクト1——HOUSE WITH THE CROSS NO.1



<都市住宅>1985年2月号　特別定価1,500円

特集|批評としての住宅

●

作品：Silver Hut——設計|伊東豊雄建築設計事務所

●

座談会：〈批評〉をめぐるクリティーク——藤井博巳＋富永譲＋三宅理一

論：批評的想像力の地平——越後島研一

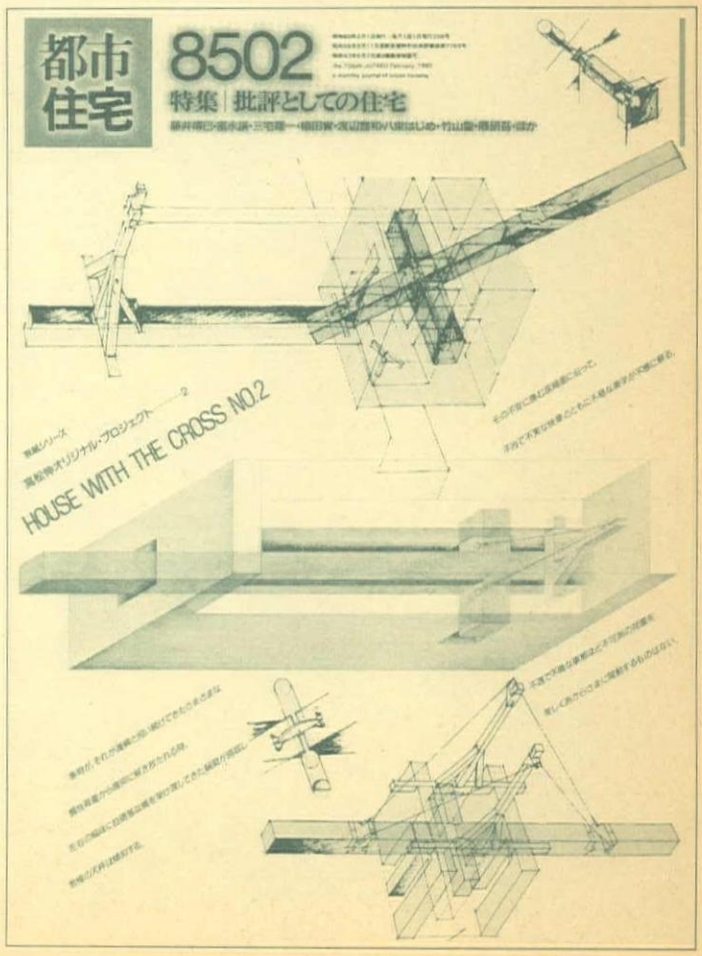
●

評論：

[シュレーダー邸]G.T.リートフェルト——藤井博巳　[ルーファー邸]A.ロース——富永譲　[ストンボロー邸]L.ヴィトゲンシュタイン——小山明　[メーリニコフ自邸]K.メーリニコフ——八束はじめ　[N邸]磯崎新——隈研吾　[母の家]R.ヴェンチューリ——竹山聖　[宮島邸]藤井博巳——植田實　[反住器]毛綱モン太——渡辺豊和　[吉岡邸]渡辺豊和——本田一勇喜　[原邸]原広司——富永譲　[谷川さんの住宅]篠原一男——富永譲　[幻庵]石山修武——三宅理一　[住吉の長屋]安藤忠雄——入江経一　[ゲーリー自邸]F.ゲーリー——菊池誠　[住宅10号]P.アイゼンマン——深川良治　[武蔵新城の住宅]富永譲——三宅理一　[伊東自邸]伊東豊雄——三宅理一

■

表紙シリーズ：高松伸オリジナル・プロジェクト2——HOUSE WITH THE CROSS NO.2



大正海上本社ビルの記録

SD

別冊No.16

大胆な中庭の彫刻，ユニークな省エネ手法など多くの話題を提供し，各界の注目を集めた大正海上本社ビル．　本書では，この高層オフィス・ビルの全貌を豊富な写真と，計画から施工までの詳細な記録で紹介する．

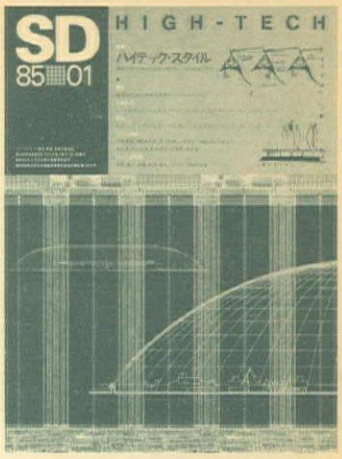
写真撮影＝村井修

●写真構成
●座談会＝林昌二＋平田秋夫＋村松貞次郎
●第一部：計画編　第二部：ディテール編　第三部：施工編
A 4 版，全160頁（予定）　予価＝4,800円

近日発売！



SD 1月特大号 絶賛発売中！



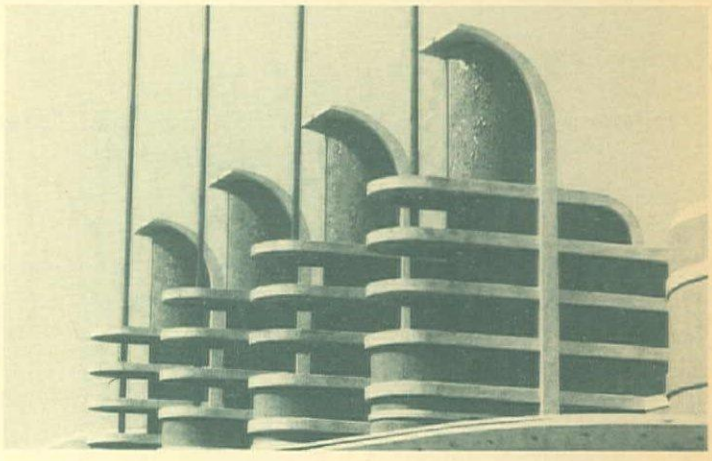
特集＝ハイテック・スタイル

HIGH-TECH

〈技術の表現〉をテーマとしたハイテック・スタイルの歴史的由来と現在の多様な現われを紹介する.

特別定価＝2800円

SD 3月号 予告



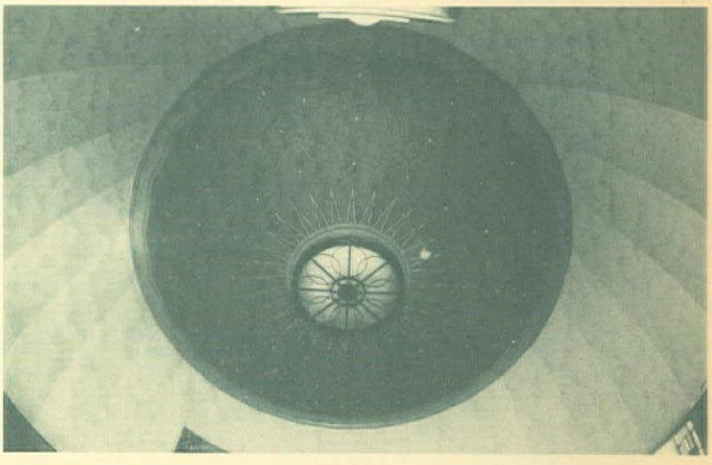
特集＝

アール・デコ Art Deco

1920―30年代に，パリ，ロンドン，モスクワ，ロスなど各地で開花したアール・デコ.

それは，人々の生活文化，都市文化そのものの表出である.

本特集は，これら現存する世界の魅惑都市＝アール・デコを探訪する.



対談＝山口昌男×松永安光

文＝

ロスアンゼルス，マイアミ：松永安光

ニース：石上申八郎

上海：村松伸

ロンドン：下村純一

モスクワ：三宅理一

パリ：柴田いづみ

東京：松山巌

アール・デコと大衆性：小林克弘

SD 4月号 予告

特集＝

長谷川逸子

デビューから最新作眉山ホール，中野の住宅まで長谷川逸子の全貌を紹介する.

明日を築く知性と技術 ●鹿島出版会 ●東京都港区赤坂6-5-13 ●電話(03)582-2251 ●振替 東京6-180883 ●SD選書：各四六判

SD 選書

■今日の造形文化に関心のあるすべての人びとにおくる，新しいタイプの選書 ■現代文明のあらゆる課題をあつかい，新鮮でダイナミックな視点を提供する選書 ■高度に細分化し，専門化した現代文明の各領域をつなぐかけ橋となる選書 ■写真・図版を豊富に入れて，ヴィジュアルに編集し，感覚と知性に富む読者のよき伴侶となる選書．

①現代デザイン入門
勝見 勝著 ¥1,500

②現代建築12章
カーン，ルドルフ他著／山本学治訳編 ¥980

③都市とデザイン
栗田 勇著 ¥980

④江戸と江戸城
内藤 昌著 ¥1,500

⑤日本デザイン論
伊藤ていじ著 ¥1,500

⑥ギリシア神話と壺絵
澤柳大五郎著 品 切

⑦フランク・ロイド・ライト
谷川正己著 ¥1,500

⑧きもの文化史
河鰭実英著 ¥1,500

⑨素材と造形の歴史
山本学治著 ¥1,500

⑩今日の装飾芸術
ル・コルビュジエ著／前川国男訳 ¥980

⑪コミュニティとプライバシイ
シャマイエフ，アレクサンダー共著
岡田新一訳 ¥1,500

⑫新桂離宮論
実藤 昌著 ¥1,200

⑬日本の工匠
伊藤ていじ著 ¥1,500

⑭現代絵画の解剖
木村重信著 品 切

⑮ユルバニスム
ル・コルビュジエ著／樋口 清訳 ¥980

⑯デザインと心理学
亀山貞登著 ¥980

⑰私と日本建築
アントニン・レーモンド著 ¥1,500

⑱現代建築を創る人々
神代雄一郎編 ¥980

⑲芸術空間の系譜
高階秀爾著 ¥1,500

⑳日本美の特質
吉村貞司著 ¥1,500

㉑建築をめざして
ル・コルビュジエ著／吉阪隆正訳 ¥1,500

㉒メガロポリス
J.ゴットマン著／木内・石水共訳 ¥1,500

㉓日本の庭園
田中正大著 ¥1,500

㉔明日の演劇空間
尾崎宏次著 品 切

㉕都市形成の歴史
アーサー・コーン著／星野芳久訳 ¥1,500

㉖近代絵画
オザンファン，E.ジャンヌレ共著
吉川逸治訳 ¥980

㉗イタリアの美術
A.ブラント著／中森義宗訳 ¥980

㉘明日の田園都市
E.ハワード著／長 素連訳 ¥1,500

㉙移動空間論
川添 登著 品 切

㉚日本の近世住宅
平井 聖著 品 切

㉛新しい都市交通
B.リチャーズ著／曾根・森岡共訳 ¥980

㉜人間環境の未来像
W.イーウォルド編／磯村・星野共訳 ¥980

㉝輝く都市
ル・コルビュジエ著／坂倉準三訳 ¥1,500

㉞アルヴァ・アアルト
武藤 章著 ¥1,500

㉟幻想の建築
坂崎乙郎著 ¥1,500

㊱カテドラルを建てた人々
J.ジャンベル著／飯田喜四郎訳 ¥1,500

㊲日本建築の空間
井上充夫著 ¥1,500

㊳環境開発論
浅田 孝著 ¥980

㊴都市と娯楽
加藤秀俊著 ¥980

㊵郊外都市論
H.カーヴァー著／志水英樹訳 品 切

㊶都市文明の源流と系譜
藤岡謙二郎著 品 切

㊷道具考
栄久庵憲司著 ¥1,500

㊸ヨーロッパの造園
岡崎文彬著 ¥1,500

㊹未来の交通
ハル・ヘルマン著／岡 寿麿訳 品 切

㊺古代技術
H.ディールス著／平田 寛訳 品 切

㊻キュビスムへの道
D.H.カーンワイラー著／千足伸行訳 ¥1,500

㊼近代建築再考
藤井正一郎著 ¥980

㊽古代科学
J.L.ハイベルク著／平田 寛訳 ¥690

㊾住宅論
篠原一男著 ¥1,500

㊿ヨーロッパの住宅建築
S.カンタクシーノ著／山下和正訳 ¥980

(51)都市の魅力
清水馨八郎・服部銈二郎共著 ¥980

(52)東照宮
大河内直躬著 ¥690

(53)茶匠と建築
中村昌生著 ¥1,500

(54)住居空間の人類学
石毛直道著 ¥1,500

(55)空間の生命―人間と建築
坂崎乙郎著 ¥980

(56)環境とデザイン
ガレット・エクボ著／久保 貞訳 ¥980

(57)日本美の意匠
水尾比呂志著 ¥1,500

(58)新しい都市の人間像
イールズ，ワルトン共編
木内信蔵監訳 ¥780

(59)京の町家
島村 昇他著 ¥1,500

(60)都市問題とは何か
レイモンド・バーノン著／片桐達夫訳 ¥980

(61)住まいの原型(I)
泉 靖一編 ¥980

(62)コミュニティ計画の系譜
佐々木 宏著 ¥1,500

(63)近代建築
V.スカーリー著／長尾重武訳 ¥1,500

(64)SD海外建築情報(I)
岡田新一編 ¥980

(65)SD海外建築情報(II)
岡田新一編 ¥980

(66)天上の館
J.サマーソン著／鈴木博之訳 ¥780

(67)木の文化
小原二郎著 ¥1,500

(68)SD海外建築情報(III)
岡田新一編 ¥980

(69)地域・環境・計画
水谷穎介著 ¥980

(70)都市虚構論
池田亮二著 ¥780

(71)現代建築事典
ウォルフガング・ペーント編
浜口隆一・神代雄一郎監訳 ¥1,900

(72)ヴィラール・ド・オヌクールの画帖
藤木康雄著 ¥780

(73)タウンスケープ
T.シャープ著／長 素連・もも子共訳 ¥780

(74)現代建築の源流と動向
L.ヒルベルザイマー著／渡辺明次訳 ¥980

(75)部落社会の芸術家
マリアン・W.スミス編／木村重信他訳 ¥780

(76)キモノ・マインド
B.ルドフスキー著／新庄哲夫訳 ¥1,500

(77)住まいの原型(II)
吉阪隆正・他共著 ¥980

(78)実存・空間・建築
シュルツ著／加藤邦男訳 ¥1,500

(79)SD海外建築情報(IV)
岡田新一編 ¥780

(80)都市の開発と保存
上田 篤・鳴海邦碩共編 ¥980

(81)爆発するメトロポリス
W.H.ホワイト・他著／小島将志訳 ¥980

(82)アメリカの建築とアーバニズム(上)
V.スカーリー著／香山寿夫訳 ¥980

(83)アメリカの建築とアーバニズム(下)
V.スカーリー著／香山寿夫訳 ¥980

(84)海上都市
菊竹清訓著 品 切

(85)アーバン・ゲーム
M.ケンツレン著／北原理雄訳 ¥980

(86)建築二〇〇〇
C.ジェンクス著／工藤国雄訳 ¥980

(87)日本の公園
田中正大著 ¥1,500

(88)現代芸術の冒険
オト・ビハリ＝メリン著
坂崎乙郎・宝木範義共訳 ¥980

(89)江戸建築と本途帳
西 和夫著 ¥980

(90)大きな都市小さな部屋
渡辺武信著 ¥980

(91)イギリス建築の新傾向
R.ランダウ著／鈴木博之訳 ¥980

(92)SD海外建築情報(V)
岡田新一編 ¥980

(93)IDの世界
豊口 協著 ¥980

(94)交通圏の発見
有末武夫著 ¥980

(95)建築とは何か
B.タウト著／篠田英雄訳 ¥1,500

(96)続住宅論
篠原一男著 ¥1,200

(97)建築の現在
長谷川 堯著 ¥980

(98)都市の景観
G.カレン著／北原理雄訳 ¥1,500

(99)SD海外建築情報(VI)
岡田新一編 ¥980

(100)都市空間と建築
U.コンラーツ著／伊藤哲夫訳 ¥1,500

明日を築く知性と技術 ●鹿島出版会 ●東京都港区赤坂6-5-13 ●電話(03)582-2251 ●振替 東京6-180883 ●SD選書：各四六判

⑲① アルド・ロッシ自伝

アルド・ロッシ著／三宅理一訳

四六判 200頁 ¥1,500

ロッシのプロジェクト，建築作品を生み出す際の思索の過程をまとめた書。「類推的都市」以後，ロッシの発展させた建築の存在論的問題についても深く省察している。

---

⑩① 環境ゲーム
T.クロスビィ著／松平 誠訳 ¥980

⑩② アテネ憲章
ル・コルビュジエ著／吉阪隆正編訳 ¥980

⑩③ プライド・オブ・プレイス
シヴィック・トラスト著
井手久登・正子共訳 ¥980

⑩④ 構造と空間の感覚
F.ウィルソン著／山本・稲葉共訳 ¥1,500

⑩⑤ 現代民家と住環境体
大野勝彦著 ¥980

⑩⑥ 光の死
H.ゼーデルマイヤ著／森 洋子訳 ¥980

⑩⑦ アメリカ建築の新方向
R.スターン著／鈴木 一訳 ¥980

⑩⑧ 近代都市計画の起源
L.ベネヴォロ著／横山 正訳 ¥980

⑩⑨ 中国の住宅
劉敦楨著／田中 淡・沢谷昭次共訳 ¥980

⑪⓪ 現代のコートハウス
D.マッキントッシュ著／北原理雄訳 ¥980

⑪① モデュロールⅠ
ル・コルビュジェ著／吉阪隆正訳 ¥1,500

⑪② モデュロールⅡ
ル・コルビュジエ著／吉阪隆生訳 ¥1,200

⑪③ 建築の史的原型を探る
B.ゼーヴィ著／鈴木義治訳 ¥980

⑪④ 西欧の芸術1 ロマネスク(上)
H.フォション著／神沢栄三・他訳 ¥1,500

⑪⑤ 西欧の芸術1 ロマネスク(下)
H.フォション著／神沢栄三・他訳 ¥1,200

⑪⑥ 西欧の芸術2 ゴシック(上)
H.フォション著／神沢栄三・他訳 ¥1,200

⑪⑦ 西欧の芸術2 ゴシック(下)
H.フォション著／神沢栄三・他訳 ¥1,200

⑪⑧ アメリカ大都市の死と生
J.ジェコブス著／黒川紀章訳 ¥980

⑪⑨ 遊び場の計画
R.ダットナー著／神谷五男・他共訳 ¥1,500

⑫⓪ 人間の家
ル・コルビュジエ他著／西沢信秀訳 ¥1,200

⑫① 街路の意味
竹山 実著 ¥1,500

⑫② パルテノンの建築家たち
R.カーペンター著／松島道也訳 ¥980

⑫③ ライトと日本
谷川正己著 ¥980

⑫④ 空間としての建築(上)
ブルーノ・ゼーヴィ著／栗田 勇訳 ¥1,500

⑫⑤ 空間としての建築(下)
ブルーノ・ゼーヴィ著／栗田 勇訳 ¥980

⑫⑥ かいわい〔日本の都心空間〕
村野博司著 ¥1,500

⑫⑦ 歩行者革命
ブライネス，ディーン共著
岡 並木監訳 ¥980

⑫⑧ オレゴン大学の実験
C.アレグザンダー著／宮本雅明訳 ¥980

⑫⑨ 都市は「ふるさと」か
ローマイス著／武 基雄・他共訳 ¥980

⑬⓪ 建築空間「尺度について」
P.ブドン著／中村貴志訳 ¥980

⑬① アメリカ住宅論
V.スカーリーJr.著／長尾重武訳 ¥980

⑬② タリアセンへの道
谷川正己著 ¥680

⑬③ 建築 vs. ハウジング
M.ポーリー著／山下和正訳 ¥980

⑬④ 思想としての建築
栗田 勇著 ¥980

⑬⑤ 人間のための都市
P.ベーターズ著／河合正一訳 ¥980

⑬⑥ 都市憲章
磯村英一著 ¥980

⑬⑦ 巨匠たちの時代
R.P.バンハム著／山下 泉訳 ¥980

⑬⑧ 三つの人間機構
ル・コルビュジエ著／山口知之訳 ¥980

⑬⑨ インターナショナル・スタイル
ヒッチコック・他著／武澤秀一訳 ¥980

⑭⓪ 北欧の建築
S.E.ラスムッセン著／吉田鉄郎訳 ¥980

⑭① 続建築とは何か
ブルーノ・タウト著／篠田英雄訳 ¥980

⑭② 四つの交通路
ル・コルビュジエ著／井田安弘訳 ¥980

⑭③ ラスベガス―忘れられたシンボリズム
ヴェンチューリ他著／石井・伊藤共訳 ¥1,500

⑭④ ル・コルビュジエ
C.ジェンクス著／佐々木宏訳 ¥1,500

⑭⑤ デザインの認識
R.ソマー著／加藤常雄訳 ¥980

⑭⑥ 鏡―虚構の空間―
由木常雄著 ¥980

⑭⑦ イタリア都市再生の論理
陣内秀信著 ¥980

⑭⑧ 東方への旅
ル・コルビュジエ著／石井 勉・他共訳 ¥980

⑭⑨ 建築鑑賞入門
コーディル，ケノン共著／六鹿正治訳 ¥1,500

⑮⓪ 近代建築の失敗
P.ブレイク著／星野郁美訳 ¥1,500

⑮① 文化財と建築史
関野 克著 ¥1,200

⑮② 日本の近代建築(上)
その成立過程――稲垣栄三著 ¥1,200

⑮③ 日本の近代建築(下)
その成立過程――稲垣栄三著 ¥1,200

⑮④ 住宅と宮殿
ル・コルビュジエ著／井田安弘訳 ¥1,200

⑮⑤ イタリアの現代建築
V.グレゴッティ著／松井宏方訳 ¥1,200

⑮⑥ バウハウス――その建築造形理念
杉本俊多著 ¥1,500

⑮⑦ エスプリ・ヌーヴォー
〈近代建築名鑑〉
ル・コルビュジエ著／山口知之訳 ¥1,200

⑮⑧ 建築について(上)
F.L.ライト著／谷川睦子・正己共訳 ¥1,200

⑮⑨ 建築について(下)
F.L.ライト著／谷川睦子・正己共訳 ¥1,200

⑯⓪ 建築形態のダイナミクス(上)
R.ルドルフ著／乾 正雄訳 ¥1,200

⑯① 建築形態のダイナミクス(下)
R.アルンハイム著／乾 正雄訳 ¥1,200

⑯② 見えがくれする都市
槇 文彦・他共著 ¥1,500

⑯③ 街の景観
J.パーク著／長 素連・もも子共訳 ¥1,200

⑯④ 環境計画論
田村 明著 ¥1,500

⑯⑤ アドルフ・ロース
伊藤哲夫著 ¥1,200

⑯⑥ 空間と情緒
稲崎総一著 ¥1,200

⑯⑦ 水空間の演出
鈴木信宏著 ¥1,500

⑯⑧ モラリティと建築
D.ワトキン著／榎本弘之訳 ¥1,200

⑯⑨ ペルシア建築
A.U.ポープ著／石井 昭訳 ¥1,500

⑰⓪ ブルネッレスキ
G.C.アルガン著／浅井朋子訳 ¥1,500

⑰① 装置としての都市
月尾嘉男著 ¥1,500

⑰② 建築家の発想―私の師匠たち
石井和紘著 ¥1,500

⑰③ 日本の空間構造
吉村貞司著 ¥1,500

⑰④ 建築の多様性と対立性
R.ヴェンチューリ著／伊藤公文訳 ¥1,500

⑰⑤ 広場の造形
カミロ・ジッテ著／大石敏雄訳 ¥1,500

⑰⑥ 西洋建築様式史(上)
H.バウムガルト著／杉本俊多訳 ¥1,500

⑰⑦ 西洋建築様式史(下)
H.バウムガルト著／杉本俊多訳 ¥1,500

⑰⑧ 木のこころ―木匠回想記―
J.ナカシマ著／神代・佐藤共訳 ¥1,500

⑰⑨ 風土に生きる建築
若山 滋著 ¥1,500

⑱⓪ 金沢の町家
島村 昇著 ¥1,500

⑱① ジュゼッペ・テッラーニ
ブルーノ・ゼーヴィ編／鵜沢 隆訳 ¥1,500

⑱② 水のデザイン
D.ベーミングハウス著／鈴木信宏訳 ¥1,500

⑱③ ゴシック建築の構造
R.マーク著／飯田喜四郎訳 ¥1,500

⑱④ 建築家なしの建築
B.ルドフスキー著／渡辺武信訳 ¥1,500

⑱⑤ プレシジョン(上)
ル・コルビュジエ著／井田・芝共訳 ¥1,500

⑱⑥ プレシジョン(下)
ル・コルビュジエ著／井田・芝共訳 ¥1,500

⑱⑦ オットー・ワーグナー
〈ウィーン世紀末から近代へ〉
ゲレーツェッガー著／伊藤・衛藤訳 ¥1,500

⑱⑧ 環境照明のデザイン
石井幹子著 ¥1,500

⑱⑨ ルイス・マンフォード
木原武一著 ¥1,500

⑲⓪ 「いえ」と「まち」―住居集合の論理
鈴木成文・他共著 ¥1,500

明日を築く知性と技術 ●鹿島出版会 ●東京都港区赤坂6-5-13 ●電話(03)582-2251 ●振替 東京6-180883 ●図書目録呈

ポスト・モダンの時代と建築

磯崎 新 対談 A5判 280頁 ¥2,300

ポスト・モダニズムに関しても最大の話題の主である磯崎新の，最近10年間(1975～84)の対談集。
内外の批評家17人と，日本も含めた世界の文化の具体的な状況，〈ポスト・モダン〉という時代の兆候について語っている。

建築の七つの力

鈴木博之著 四六判 184頁 ¥1,800

連想の力，数の力，ゴシックの力，細部の力，模倣の力，地霊の力，過去の力——建築を成立させている，あるいは建築を読解する上でのこれらの七つの契機，領域を論究した，気鋭の歴史家による建築論。

西洋館漫歩——建築スケッチの旅



田中 薫著 四六判 248頁 ¥1,900

数年にわたってスケッチして歩いた北海道から台湾に至る西洋館を，印象記とともに紹介するもの．夫々の土地に息づく建物が長い年月を経て生きつづけている様を捉えた作品．

近代建築ガイドブック〈北海道 東北編〉

越野 武・坂田 泉編著 四六判 ¥2,800

北海道——函館・元町・山ノ手，青柳公園，上磯，室蘭・いぶり日高，追分ソーラン，小樽・手宮・色内・運河，ウォール街，札幌・円山，琴似，旭川…他 東北——信夫・伊達路，安積，会津，岩手路，最上川，庄内…

近代建築ガイドブック〈西日本編〉

●好評発売中！

松葉一清・宮本雅明・土田充義・木島安史・伊藤行・杉本俊多・小野木重勝・山本忠司…他共著 四六判 276頁 ¥2,800

洞海湾，関門，筑豊石炭遺跡，博多天神，九大，有田・唐津，熊本，日豊本線，鹿児島，南山手・東山手，長崎，市街地，軍艦島，五島教会堂，香川，愛媛，徳島，高知，岡山市，倉敷・児島，津山，広島市，呉・江田島，山陰，山口・宇部・萩，岩国・柳井…，計25コース，作品数約500．

近代建築ガイドブック〈関西編〉

福田晴虔・石田潤一郎・沢田清・柴田正巳・中川理・山形政昭共著

四六判 310頁 ¥2,800 ●好評発売中！

近代建築ガイドブック〈関東編〉

東京建築探偵団著・顧問：村松貞次郎著 四六判 276頁 ¥2,300

●好評発売中！

パタン・ランゲージ——環境設計の手引

C・アレグザンダー他著／平田翰那訳

A5判六五六頁 九、八〇〇円

アレグザンダーの三部作のうち，最も重要な著書。都市計画と建築についての新しい理論を示すものであり，有機的な環境づくりのプロセスを集大成した，いわばバイブル的な大著である。
本文二五三章と八〇〇余の挿絵を収めている。

現代建築を担う海外の建築家101人

三宅理一＋榎本弘之＋森島清太編 A5判 244頁 ¥2,800

今日の建築思想は，近代主義の見直しという大きなうねりのなかで，ハイテック，レイトモダン，歴史主義，バナキュラー等，多彩な様相をみせている。本書はこういった状況の中で，90年代の建築デザインの動向を予測する代表的建築家，批評家，並びに周辺分野の人々を，ヨーロッパ，アメリカを中心に101人を選び，彼らの理念，作品，行動を紹介。現代建築の動向を俯瞰するうえで，学生・建築家のみならず，デザイナー等周辺の読者にとっても便利な一冊といえよう。



■リカルド・ボフィル(スペイン)……マルヌ＝ラ＝ヴェレの集合作品〈パリ郊外〉



略歴 一九三九年バルセロナ生まれ。バルセロナ建築学校，ジュネーブ建築大学にて学ぶ。六〇年タリエール・デ・アルキテクトゥラを結成。以後，バルセロナおよびパリを中心として設計活動を繰り広げる。作品＝パリオ・ガウディ(一九八四―七三)，(以下略)

人気急上昇

予約申込殺到!!

年間予約購読、郵送制

書店ではお求めになれません

月刊 ダルトンレポート

DALTON REPORT

「建設業のいま」を満載したニューリトルマガジン

8501号 目次



新年特別寄稿 これからの建設産業ビジョン作成

●プロジェクト・現地ルポ● 因島大橋・大鳴門橋の部分開通を追う

いよいよ"本番"キャプテン情報

接近取材「海外建設事情」＊シンガポールを取材する

連載 建設業の生いたち＊プロローグ

●わいどあんぐる●環七地下に巨大な貯水池と放水路！／数々の秀作残し村野藤吾氏逝く
●霞が関ホットライン●2000年まで住宅建設は年130万戸／政府投資は民間資金を圧迫せず
●タウンパトロール●箱根の大震災被害写真見つかる／キャプテン、タダ情報だけで開始
●情報るうむ●東レ建設、グループ情報で受注急増／自走式知能ロボット、床仕上げ作業を自動化
●ハウジング●RC構造アパート「ソワサント」発売／企画型輸入住宅、首都圏で販売へ
●地域レーダー●前橋市街地の再開発へ準備組合／沖縄の副都心目指し、比屋根団地
●ローカルスポット●三陸・広田半島に国際文化村

DALTON EYE／らんきんぐ／海外トピックス／サイエンス／GUIDE
GOODS & GOODS／語録／用語／他

建設マンのための気楽に読めるユニークな建設情報誌です。

●忙しいあなたに代って必要な情報を収集・整理してお届けします。
●これさえ読んでいれば高度情報化社会で遅れをとることはありません。

購読のお申し込みは今すぐに！
大変割安な定期購読料金です。

ただいま定期購読のお申込みを受付けています。
申込書用紙をきりとり、もれなくご記入のうえ、ハガキに全面のり付け貼付し、下記までお送りください。
※お申込みは個人名でおねがいします。

購読申込書の送り先
〒107 東京都港区赤坂6-5-13
㈱鹿島出版会 情報システム事業部
ダルトンレポート読者係 ☎03(583)6050

●定期購読料 1年購読(12冊) 4,800円(1冊当り400円)
（送料共） 3年購読(36冊) 9,600円(1冊当り266円)

※購読料金のお支払いは、ダルトンレポート本誌に添付の郵便振替用紙でお近くの郵便局からお払込みください。

DALTON REPORT 定期購読申込書

□新規購読申込 SD

フリガナ
お名前

ご自宅 〒 ☎
住所

お勤め先	該当のものに○印を	ご専門	建築 土木 機械 電気 事務 ほか
（職種）		ご担当	設計 施工 管理 営業 経理 ほか

購読期間(☑印をつけてください) □1年 □3年

明日を築く知性と技術 ●鹿島出版会 ●東京都港区赤坂6-5-13 ●電話(03)582-2251 ●振替 東京6-180883 (SS) シルバーシリーズ

〈シルバーシリーズ〉 SS

■幅広い視野から建築，デザイン，都市，さらに文化全般にわたる諸問題を解明する新しいシリーズ．
■学生諸君におくるSD選書の姉妹シリーズ．

庭のたのしみ

―西洋の庭園二千年―

アンヌ・スコット=ジェイムズ著／オズバート・ランカスター絵

横山　正，増田能子共訳　四六判　180頁　¥1,600

イギリスを中心とするヨーロッパ庭園史の概説書．ローマ時代のブリタニアにはじまって，現代のパティオに至るまで，18章にわたって各時代の庭園の様式を要領よく説明している．

鎮守の森

上田　篤編　四六判　250頁　¥1,800

鎮守の森は，生活環境，文化遺産として最近その価値が見直されている．本書は，阪大の鎮守の森保存修景研究会が主として滋賀県で行った現況調査をまとめたもの．内容，調査方法とも興味深い．

建築のことば

竹山　実著　四六判　244頁　¥1,800

現代建築をどのように捉えたらよいか？　ことばから建築へ，建築からことばへと視点を換えながら，160コマの絵で話を展開する．

建築とポップ・カルチュア

レイナー・バンハム著／岸　和郎訳　四六・320頁　¥2,300

建築デザイン史家バンハムは，ヒューマニズムに満ちた眼差しで多方面にわたる時評を行っている．本書は氏のエッセイ25編．

ガス灯からオーブンまで―ガスの文化史
中根君郎・江面嗣人・山口昌伴共著　356頁　¥2,500

これからの美術館
長谷川　栄著　220頁　¥1,800

シルクロードの夢と現実―正倉院随想
李家正文著　260頁　¥1,600

進化する都市
パドリック・ゲテス／西村一郎・他訳　360頁　¥2,800

建物はどのように働いているか
E.アレン著／安藤正雄・他共訳　280頁　¥2,500

多様化する人びとの欲求=図でみる個人パタン
鵜山貞登著　176頁　¥1,500

半過去の建築から
木島安史著　192頁　¥1,500

建築美の世界=鑑賞・分析・比較
井上充夫著　252頁　¥1,900

絵で見る住宅様式史
M.M.フォーレ著／八木幸二・他共訳　356頁　¥2,800

水道の文化史=江戸の水道・東京の水道
堀越正雄著　320頁　¥2,200

盛り場=人間欲望の原点
服部銈二郎著　196頁　¥1,500

口紅から機関車まで=インダストリアル・デザイナーの個人的記録
レイモンド・ローウイ著／藤山愛一郎訳　432頁　¥2,800

創造するこころ
《山本学治建築論集・全3巻》第3巻　250頁　¥1,800

造型と構造と
《山本学治建築論集・全3巻》第2巻　220頁　¥1,600

歴史と風土の中で
《山本学治建築論集・全3巻》第1巻　230頁　¥1,600

新しい街路のデザイン
デザイン委員会+イギリス都市計画協会共編／中津原努・他共訳　224頁　¥1,800

建物はどうして建っているか〈構造―重力とのたたかい〉
M.サルバドリー著／望月重訳　180頁　¥1,600

建築を教えるものと学ぶもの
大江　宏・近江　栄・太田邦夫・他共著　224頁　¥1,600

建築の心理学
クリフォード・モーラー著／扇谷弘一訳　180頁　¥2,100

個性ある都市=横浜の都市デザイン
岩崎駿介著　216頁　¥1,600

建築は兵士ではない
鈴木博之著　256頁　¥1,600

タウンハウス=町家の再生
上田　篤編　220頁　¥1,800

実現されたユートピア
月尾嘉男・北原理雄共著　252頁　¥1,800

フランス建築事情　付・パリ建築案内図
三宅理一著220頁　¥1,800

絵で見る建築様式史
O.ランカスター著／白石和也訳　216頁　¥1,600

日本のすまい・内と外
E.S.モース著／上田　篤・加藤晃規・柳美代子訳　350頁　¥2,900

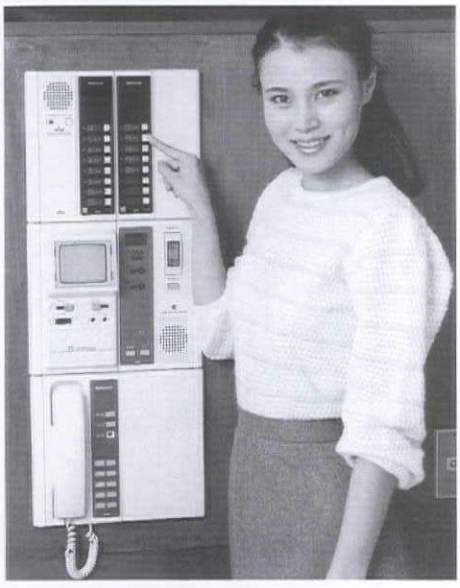
オフィス空間=サラリーマンの場所と生理
草森紳一著　224頁　¥1,600

HAシステム

電灯線HALS

HAシステム

松下電器産業株式会社



松下電器産業㈱では，今度ホームコントローラとアダプタの組み合わせによって，最少1対1から最大64対64まで，自由にシステムアップして家庭内の各種設備機器や電化製品の集中コントロールなどができる，電灯線HALS HAシステムを新発売した．

特長

①電灯線を利用するので，配線工事が簡単で，特別な配線のスペースもいらない．

②電灯線にはほとんどの住宅設備機器や電化製品がつながれているので，ハウスコントロールを中心としたHAが簡単にシステムアップできる．

③ホームコントローラは，必要なところから必要なものを，集中コントロールにも分散コントロールにも，自由に配置しておこなえる．

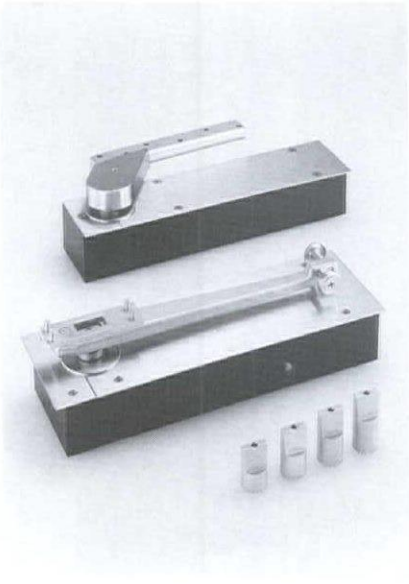
④双方向通信なので，端末の様子を的確に監視・制御することができる．

⑤ポータブルタイプのコントローラやプラグタイプのアダプタを使えば，電源コンセントのあるところならどこからでもコントロールできる．

丁番・ヒンジ

レグノ フロアヒンジ

リヨービ株式会社



リヨービ㈱では，今度建築金物の世界的なトップメーカーである，西独ゲーツェ社との技術提携で商品化した，レグノ フロアヒンジを新発売した．

特長

①耐久性は，開閉試験で50万回に及ぶ信頼性の高い設計になっている．

②ドアのサイズ，重量に適した閉じ力が得られるトルク調整装置つきで，重さ250kg，ドアサイズ1,200×2,450㎜までの広範囲なドアに取付けが可能である．

③ドアの開く方向に風などの外力が加わっても，急激にドアが開くのを制御する装置が付いており，壁の損傷や，けがの事故を未然に防ぐよう配慮されている．

④主軸の交換が可能であり，あらゆる床面仕上げに対応できる．

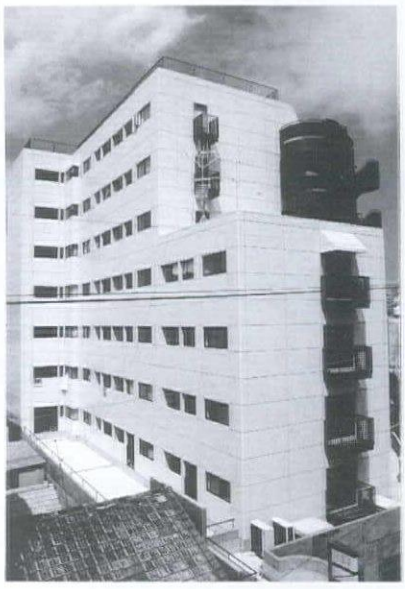
⑤ディレイドアクション装置を持ち，ドア開き角度が約100°～70°の間をゆっくりと閉めることができる．

⑥幅102，長さ328，高さ57㎜のコンパクトな本体なので，床面の仕上がりがスマートである．

金属製外内装材

タイヨーウォールパネル

大洋製鋼株式会社



大洋製鋼㈱では，今度プレコート鋼板を使った業界初の外装パネルシステム，タイヨーウォールパネルを新発売した．

特長

①素材はサンフロンなので，フッ素樹脂の働きで，耐候性，耐食性はもとより，耐汚染性，耐摩耗性にも優れている．

②プレス成形での量産によりコストの低減がはかれ，また長時間にわたる汚れ，変色，錆などがないため，メンテナンス費用も節約できる．

③パネルの取付金具もプレス成形，しかも統一された取付システムなので，施工が簡単でスピーディにできる．

④パネルの模様には，フラットタイプ，ヨコピートタイプがあり，ドロー型を取換えることでデザインには自由性を持たせている．

⑤厳選した色調が揃っているので，建築物をシックに仕上げることができる．

松下電器産業株式会社　電化本部
大阪府豊中市日出町2丁目2番8号
〒561　Tel　06-332-1331

リヨービ株式会社
東京都千代田区外神田3丁目15番1号
〒101　Tel　03-257-1331

大洋製鋼株式会社
東京都中央区日本橋本町1丁目6番地
〒103　Tel　03-241-4131

●

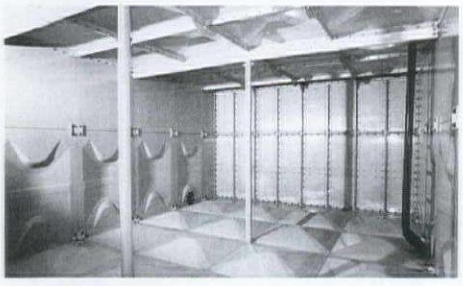
水槽

スーパーウォータータンク

E型

●

株式会社ブリヂストン



㈱ブリヂストンでは，水槽内部の補強をなくしたＦＲＰ製パネル水槽，スーパーウォータータンクＥ型を昨年より発売しているが，今度従来の水槽高さ１m，1.5m，２mに加え2.5m高さのスーパーウォータータンクＥ型を新発売した．

特長

①外補強方式を採用し，内部補強をなくしたため水槽内部の清掃，保守点検が簡単にできる．

②気相部（水槽内天井と水面との間にある空気層）に樹脂被覆ボルトが使われており，かつ内部に金属露出がないため防錆的に優れ衛生的である．

③外補強方式により，耐震性に優れている．

仕様・価格

寸法　高さ2.5×幅１～５×長さ１～５m

容量　2.5～62.5ｔ

耐震　2/3G，1.0G

標準設計価格　1,580,000円

●

電話交換機

ホームテレホンプロセッサ

HOT-A1

●

株式会社日立製作所



㈱日立製作所では，今度電話機のインテリア・パーソナル志向に加えて，今年春に予定されている日本電信電話公社の本電話機開放に対応するため，好みの電話機を接続して，ホームテレホンシステムとして使えるホームテレホンプロセッサＨＯＴ-Ａ１を新発売した．これは外線１回線に本電話機のほかに，子電話機２台まで好みの電話機が収容でき，どの電話機からも回線に対して，発信，着信，応答，転送，内線相互通話の機能を付加することができる．　デザインはどんな部屋にも合うように配慮されており，ドアホン（別売）も接続できる．

特長

①好みの電話機が接続できる．

②部屋どうしの通話ができる．

③外からかかった電話を，他の部屋の電話へ転送できる．

④外からの電話と話し中のとき，もう一方の電話機が受話機を取っても通話は聞こえない．

●

ビデオ編集システム

簡易編集システム3500

●

松下通信工業株式会社



松下通信工業㈱では，今度ビデオソフトの制作に威力を発揮する低価格で手軽な操作性の簡易編集システム3500を新発売した．　このシステムは，プロダクション，ブライダル市場をはじめ学校や企業におけるビデオソフトの制作を手軽な操作でき，システムカメラ・ＷＶ-3500とシステムスイッチャ・ＷＪ-3500とで構成されている．　システムカメラでとらえた映像をシステムスイッチャによりオリジナリティに富んだ演出効果，編集ができる．　外部同期のかからない一般のビデオカメラと外部同期のかかるシステムカメラなどとのワイプ（テレビ画面を片隅からふきとるように画面転換する方法），ミックスができるほかキーイング，ネガ，ポジ反転スーパーインポーズなど多彩な特殊効果が手軽な操作でできる．

価格

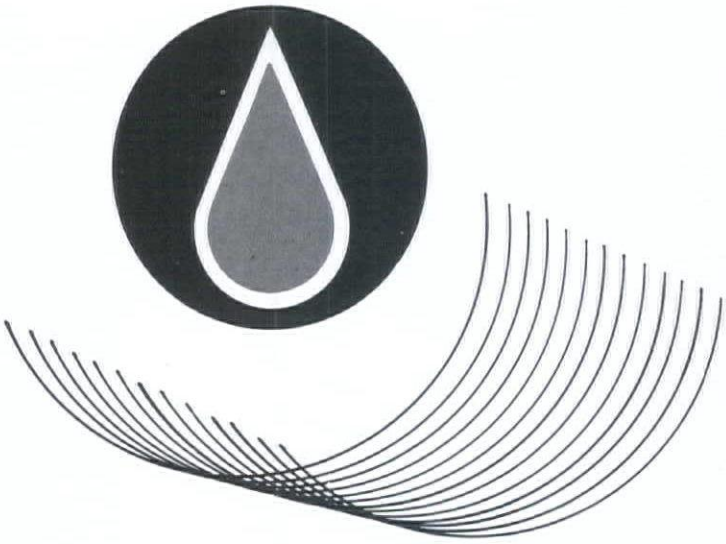
システムカメラ　350,000円

システムスイッチャ　240,000円

株式会社ブリヂストン
東京都中央区京橋１丁目10番１号
〒104　Tel　03-567-0111(大代)

株式会社日立製作所　情報通信システム事業部
東京都品川区南大井６丁目27番18号
〒104　Tel　03-763-2411

松下通信工業株式会社　ビデオカメラ事業部
横浜市緑区佐江戸町600番地
〒226　Tel　045-932-1231㈹



誠意と情熱

◎総合設備工事

ビル設備
空調・給排水衛生

工場設備
各種配管・公害防除

住宅設備
給排水衛生・給湯・暖冷房

ガス設備

◎環境整備工事

一般土木
上下水道・舗装・宅造

◎ガス機器関連販売

東横工業株式会社

取締役社長　根本　豊

横浜本店／横浜市西区平沼二丁目11番11号　TEL(045)323-2531

東京本社／東京都千代田区内幸町二丁目1番1号(飯野ビル)　TEL(03)593-0671

〈支　店〉　大阪・東北

〈営業所〉　北海道・岩手・福島・群馬・栃木・多摩・千葉
川崎・厚木・横須賀・湘南・静岡・福岡

良心的な
電気工事

●ゆたかな経験
●すぐれた技術



大正海上火災本社ビル　設計㈱日建設計

東光電気工事株式会社

取締役会長　松本福男　　取締役社長　菅保之

東京都千代田区西神田1－4－5　〒101　電話292－2111　大代表

豊かな生活環境を築く

量から質的な豊かさへの転換がせまられている'80年代
人間がほんとうの人間らしさをとりもどすための環境づくりをめざして
私達は技術開発に新たな意欲をもやしております。
人間生活に真に価値ある革新をおしすすめてゆく企業
太陽工藤工事にご注文ください。

- 電気工事
  ビル電気設備／工場電気設備／防爆電気設備
  外線・発・変電設備／架空送配電線／通信線
  地中送配電線
  鉄塔工事
- アンテナ工事
- プラント工事
- 計装工事
- 空調工事
- 給排水・衛生・特殊配管工事
- 土木工事
- 損保代理店業務・右記に付帯する一切の事業



総合設備工事のパイオニア

太陽工藤工事株式会社

取締役社長　代谷正元
本社／〒553大阪市福島区福島7丁目22番8号
☎06(452)1151(大代)
東京／〒105東京都港区芝2～2～17
☎03(454)7311(大代)



HOUTOKU

街は、機能的であればいい。
という時代から、一歩進化して、都市空間にも
ゆとりが欲しいな。と、私たちは思い始めています。
人が、豊かな気分で過ごせる街。そのポイントは、
パブリックスペースの充実ではないでしょうか。
ストリートファニチュアは、人が、ほっとひと息つく瞬間を、
最高に演出する、街のツールです。
ファニチュアの世界に、いつも新しい風を送り続けているホウトクは、
街路で、広場で、公園で、ショッピングスペースで、
新しい都市のゆとり、ファニチュア・コミュニケーションを、いま提案します。

ホウトク 販売株式会社

本社/東京都千代田区神田和泉町1番地277 (秋葉原協銀ビル) TEL〈03〉866-7291 〒101 FAX〈03〉851-5208
東京支社/TEL〈03〉866-7291 中部支社/TEL〈052〉201-3531 関西支社/TEL〈06〉252-5771
東北支店/TEL〈0222〉23-3690 中国支店/TEL〈082〉293-1337 九州支店/TEL〈092〉291-3601

街は、新たなオープンスペースへ

ソワーニュ

新工法！プレノテクト吹付工法

陸屋根防水には
奥山式 特許 絶縁工法

カッパー防水帯

コーパータイト

OKUYAMA KAKOGYO WATER・PROOF OAM

❖オクロン防水帯

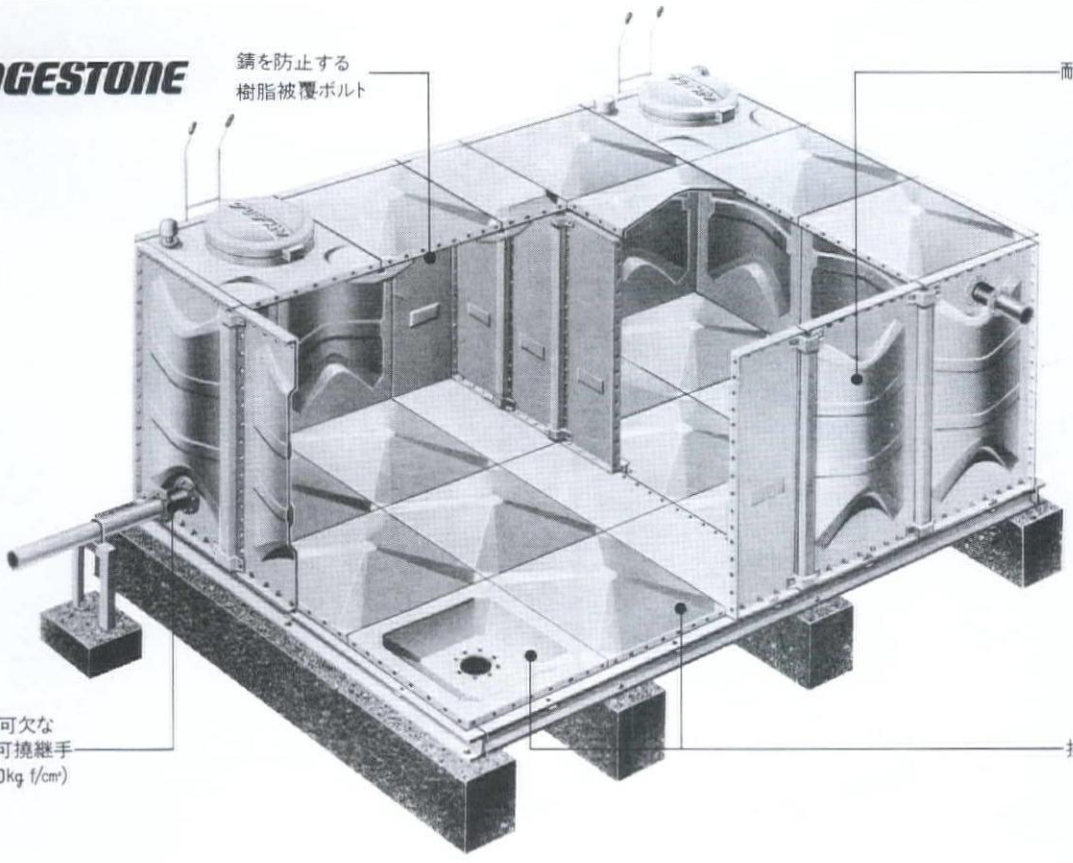
特許 奥山式熱工法・冷工法綜合防水層

奥山化工業株式會社

本社	東京都中央区銀座8－4－9	電話 03 (571)2703
厚木出張所	厚木市金田字宮畑259	電話 0462(21)6092
大阪出張所	大阪市都島区都島中通り2－3－1	電話 06 (921)2497
名古屋出張所	名古屋市南区若草町3-3	電話 052(811)3660
九州出張所	佐賀県諸富町	電話 0952(47)2945

●お申込次第カタログ進呈

BRIDGESTONE



内部補強を不要にした耐震型FRPパネル水槽"スーパーウォータータンクE型"誕生。最新のコンピューター技術から生まれた大型パネル(1㍍×2㍍)の採用で、耐震性を確保し、清掃・保守点検が一段とラクな構造になりました。

■飲料水槽にかかわる法規制をすべてクリアー。

毎日の生活に欠かすことのできない水。この水をきれいなまま定安してお届けしているのが、ビルやマンションの飲料水槽です。この重要な役割を担っている水槽には、さまざまな法規制が課せられています。なかでも最も重要なことは、貯めた水を衛生的に皆様にお届けすること。1983年4月1日から施行された厚生省告示194号(定期的に貯水槽を点検し維持管理に努めなければならない)は、まさにこの衛生性の向上を目的としたものです。また、すでに施行されている建築基準法129条(地震に対し安全上支障のない構造とすること)や建設省告示1674号(給水タンク内部の保守点検を容易に行うことができる構造とすること)も水槽の安全性を重視した構造面からの規制となっています。

"スーパーウォータータンクE型"は、これらの法規制をすべてクリアー。ブリヂストンがまたひとつ、パネル水槽を理想のカタチに近づけました。

■水槽の衛生性を徹底的に追求。内部補強を不要にすると共に、水槽内部の防錆処理にも十分に配慮しました。

従来のパネル水槽は、内部補強により強度を確保していたため、衛生性の維持管理に必要な保守点検がしにくい構造となっていました。このため、衛生性をより容易に確保するためには、内部補強を取り除くと同時に水槽としての強度も保持するという相反する命題を克服しなければなりません。ブリヂストンは、有限要素法によるコンピューター技術を駆使して大型パネルを開発し、この問題を解決しました。また同時に、水質確保のため気相部には樹脂被覆ボルトを全面的に採用。水槽内部の他の金属部品もすべてコーティングするなど、金属の錆からくる水の汚れを防止し、いっそう衛生性を向上させました。従来の耐震型パネル水槽"スーパーウォータータンク"にも備わっている排水性の良い底壁構造に加え、さらに揺るぎない衛生性を実現した"スーパーウォータータンクE型"。"ブリヂストンだから"可能になったパネル水槽です。

"スーパーウォータータンクE型"製品仕様		
標準サイズ	高さ	1m、1.5m、2m
	縦×横	1m×1m～5m×5m
耐震仕様	水平震度	⅔G、1.0G、1.5G
保温仕様	単板型、保温型	
用途	飲料水槽、海水槽	

耐震タンクは、衛生性で選ぶ時代。

ブリヂストンは、皆様の健康保持や地震時の飲料水を確保するためにも、古い貯水槽を"スーパーウォータータンクE型"にお取替えすることをおすすめします。

FRP CON-EX'84
建設大臣賞受賞
(社)強化プラスチック協会 1984年10月

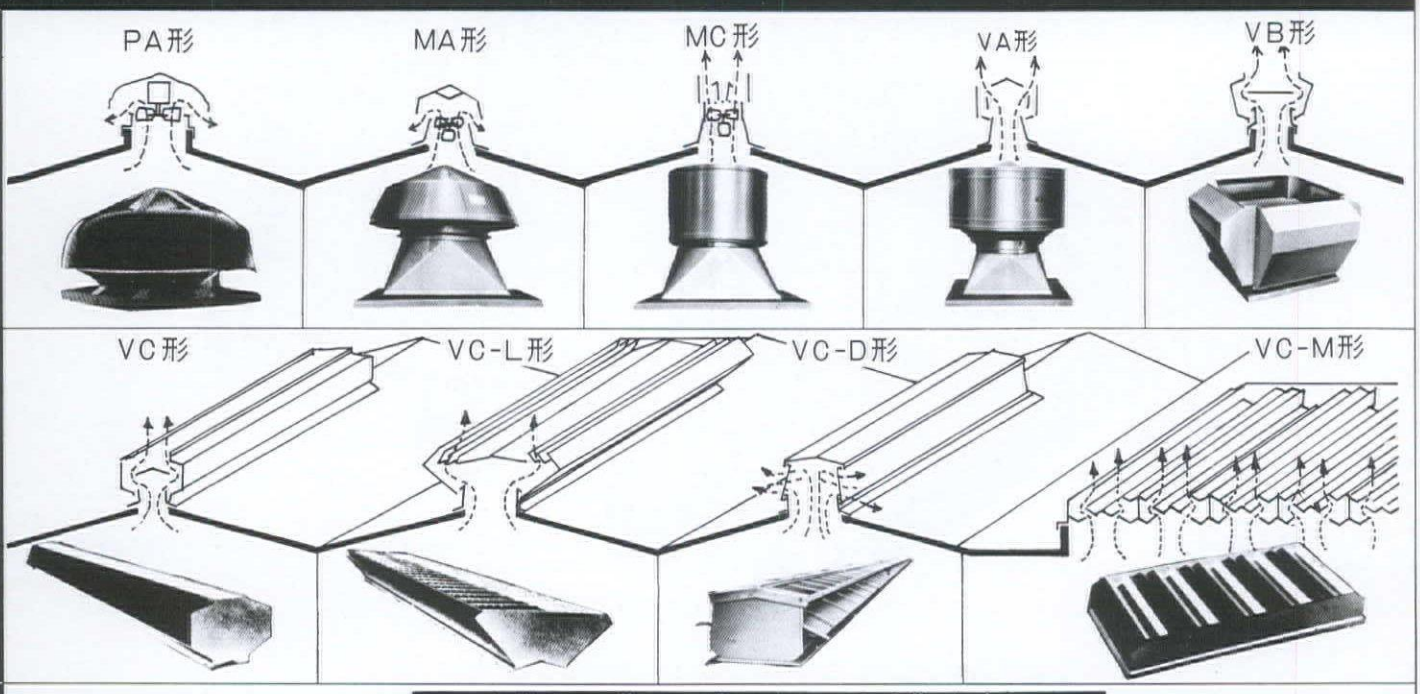
スーパーウォータータンクE型

お問い合わせは――株式会社 ブリヂストン 建築用品販売第2課 東京都中央区京橋1-10-1 〒104 TEL.03-567-0111(大代)

坂本商会は創業68年 換気・排煙・採光の専門メーカーです

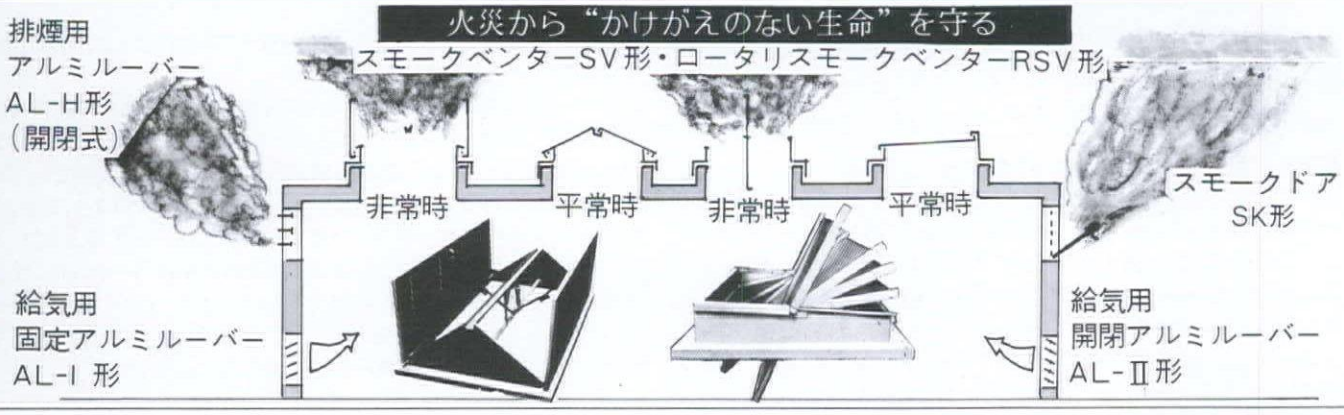
強制換気・自然換気装置

“自然の風”を効率よく招く坂本式ルーフベンチレータ群



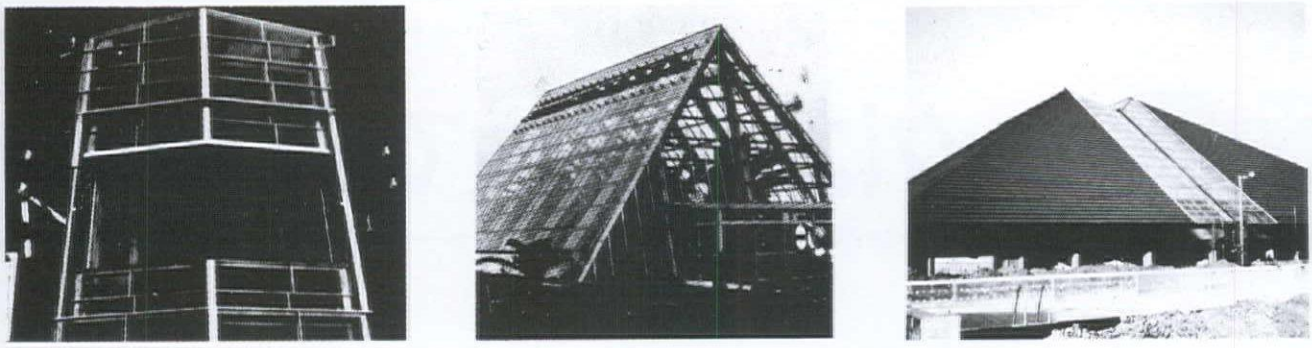
排煙・ルーバー装置

火災から“かけがえのない生命”を守る



採光装置

“太陽の恩恵”を全身でウケとめる坂本式スカイライト



株式会社 坂本商会

本　　社	東京都中央区日本橋2－16－12(江戸二ビル)	〒103	電話 東京 (03) 271－5591(代)
松戸工場	千葉県松戸市松飛台420番地	〒270	電話 松戸 (0473) 87－6595(代)
技術研究所	千葉県松戸市松飛台217番地	〒270	電話 松戸 (0473) 87－3148
施工部	東京都墨田区東向島2丁目15番11号	〒131	電話 東京 (03) 619－2221(代)

広告についてのお問合せの際は≪SDを見て≫と御明記願います

広告目次

SD誌に広告をお申し込みの際は

下記広告代理店にご用命下さい（五十音順）

●共栄通信社

東京——東京都中央区銀座8-2-1
ニッタビル（572）3381
FAX（572）3590

大阪——大阪市北区西天満3-6-8
笹屋ビル（362）6515
FAX（365）6052

●建報社

東京——東京都中央区銀座1-16-5
篠原ビル（563）2576

大阪——大阪市東区淡路町1-12
昭栄ビル（231）4548

●新建社

東京都中央区日本橋3-5-12
守尾ビル（271）3271

●中外広業社

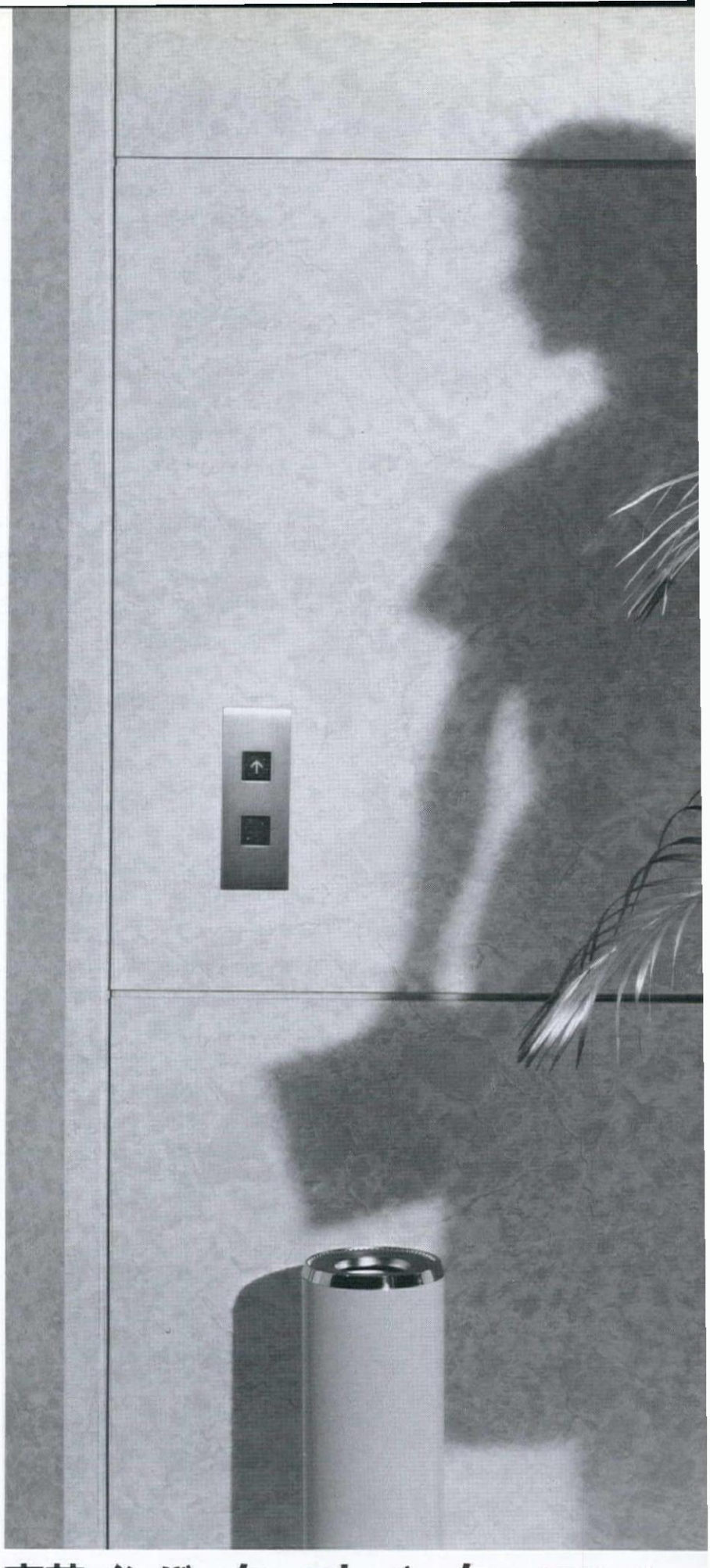
大阪——大阪市北区浪花町14-25
日本生命天六ビル（376）1791

東京——東京都千代田区内神田1-11-1
酒井ビル（293）0621

名古屋——名古屋市中区錦1-13-19
北辰名古屋ビル（221）7641（代）

イ　岩城造園㈱——015
オ　大崎電気工業㈱——001
　　奥山化工業㈱——022
カ　軽井沢ホテル鹿島ノ森——008
　　鹿島建設㈱——006
　　㈱鎌倉製作所——003
　　川崎電気㈱——82
キ　近畿電気工事㈱——013
コ　五建工業㈱——012
サ　㈱坂本商会——024
シ　新日本空調㈱——84
ス　住友金属工業㈱——002
タ　ギャルリーためなが——表2
　　高砂熱学工業㈱——表3
　　太陽工藤工事㈱——021
　　大興物産㈱——009
ト　㈱東芝——表4・026
　　東武産業㈱——012
　　東海電気工事㈱——014
　　東邦アート㈱——表2
　　東京セントラル絵画館——81
　　東横工業㈱——019
　　東光電気工事㈱——020
　　東洋熱工業㈱——98
ナ　中立電気㈱——007
ニ　日本バルカー工業㈱——014
　　日新工業㈱——010
　　日新製鋼㈱——89
　　ニチアス㈱——86
ヒ　㈱日立製作所——004
フ　古河電気工業㈱——011
　　フジテック㈱——90
　　富士電機㈱——83
ホ　ホウトク販売㈱——022
マ　松下電器産業㈱——005
ミ　三菱電機㈱——97
ヤ　矢崎総業㈱——016
リ　菱和調温工業㈱——88

TOSHIBA



「インバーター」が来た。

先端技術でなめらか走行。
規格形エレベーターも
インバーターの時代です。

かろやかに、なめらかに、新登場。
東芝インバーターエレベーター・セレブラムⅣ。
VVVFインバーターと
ベクトル制御の採用で
走行のすべてを緻密にコントロール。
かつてない、すばらしい乗り心地を実現しました。
それればかりか
省エネルギーでも飛躍的に前進。
エレベーター用電源設備容量が
従来の50%ですむうえ
消費電力も大幅に節減できます(当社ACVV方式比)。
制御マイコンの高級化
群管理情報の光ファイバー伝送など
すみずみまで東芝ならではの先端技術を駆使。
超音波ドアセーフティー、音声合成案内はじめ
オプションも多彩に用意。
充実の機能と装備で
エレベーターの新しい時代を拓きます。

東芝インバーターエレベーター(規格形)

●お問い合わせは
株式会社東芝 昇降機事業部 〒105 東京都港区芝浦1-1-1(東芝ビルディング) TEL(03)457-4619

先端技術をくらしの中に…E&E(エネルギーとエレクトロニクス)の東芝